

挿絵／80000

あろまー15

聖光
剣姫

スターティア

女幹部にふたなり調教される変身ヒロイン

18
未 満

二次元ドリームノベルズ

●小説 aromara

あろまーら

まさかの書籍化に作者が一番驚いております。
淫獣ヒロインがドスケベ汁を噴きまくるハートフルチン
ポストーリー、ぜひ皆さん自身がふたなり美少女に
なったつもりで読んでください！

●挿絵 8000

8000

イベントごとで東京に行く際、よく銭湯に行くよう
になりました。大きい湯船にゆっくり浸かると気持ち
いいですね。漢方湯とか好きです。



小説 あろまーら
挿絵 8000

聖光 剣姫 フターティア

☆ 女幹部にふたなり調教される変身ヒロイン

第1話	光燐! 正義の美少女ヒロイン、聖光剣姫スターティア!	006
第2話	恥辱の敗北! 屈辱のフタナリちんぽ皮フェラおしゃぶり奉仕!	017
第3話	汚辱の洗礼! ラブホで強制手コキ&玉舐め、大量顔射!	035
第4話	屈辱の精通! ふたなり美少女戦姫、初めてのおちんぽ恥射精!	053
第5話	学園の剣姫! 淫らに染まりゆく優姫の日常!	070
第6話	オプシディア、その淫靡なる日常	087
第7話	羞恥の収録! お嬢様セズリ告白実演ショー!	094
第8話	アメと鞭! エロ衣装で奪われる少女のオナホ童貞!	105
第9話	リアルオナホ味比べ! 優姫、絶望の快楽射精!	117
第10話	女幹部の罠! 少女を襲う悪のパイズリ乳地獄!	129
第11話	禁断の教室! タブーを犯す白昼堂々のJKスヘルマ乱舞!	143
第12話	狂い出す歯車! 聖光の剣姫と白銀の魔剣士、禁じられた契約!	154
第13話	白濁の魔剣士! 美少女転校生は淫獣優姫のフェラ玩具!	161
第14話	乳辱の淫戯! クールなライバルと、おうちでイチャラブパイズリ特訓!	174
第15話	白銀の剣士散華! 襲い来る女幹部の極悪チンポ!	189
第16話	女怪人乱舞! 早漏チンポに叩き込まれるドスケベ快楽責め!	205
第17話	屈辱の種付け! 亡国の美剣姫、女怪人逆レイプ!	225
第18話	チンポに負けゆく理性! 淫獣ヒロイン、昼休みの教室内で恥知らずオナホセズリ!	244
第19話	玩弄の魔剣士! 駄肉オナホに改造されゆく気高き戦乙女の肉体!	256
第20話	覚醒する淫才! シコ猿と化したヒロイン、通学電車内セズリ天国!	278
第21話	宿命の時! 重なる体と貫くチンポ、剣姫の新たなる誓い!	292
外伝	二人の美少女戦士、正義の電車内ダブルチンポバトル!	313

登場人物紹介

Characters



ほしがおかゆうき
星ヶ丘優姫

聖なる宝石スタージュエルに選ばれ、
悪の組織シャドーマテリアルと戦う正義の
変身ヒロイン。



聖光剣姫スターティア



しろがね
城鐘アリア

シャドーマテリアル幹部にして、
最強と謳われるスターティアの
好敵手。

“白銀の”シルヴァリア



銀髪美女の姿をしたシャドー
マテリアル幹部の一人。妖
艶かつ変態でドS。

“黒曜の”オブンディア

第1話 光燐！ 正義の美少女ヒロイン、聖光劍姫スターティア！

「ぶしゅるるるうう……！ 許さんツツ、許さんぞオオオツツツ!! ブ・ツ・リイイイツツツ!!」

その日、私立聖碩女学院^{せいせき}は、放課後の校舎に突如出現した「怪人」によってパニック状態に陥っていた。

「怪人」——それは異次元より襲来した悪の組織・シャドーマテリアルが送り込む侵略の尖兵だ。

組織の大幹部「七冥塊」^{しちめいかい}たちが持つ邪宝石の放つ波動、すなわち負のエネルギーによってマイナス感情を増幅された人間が変貌^{へんぼう}する存在。

彼らは身も心も、みずからの欲望にただ邁進するだけの怪物と成り果てる。

怪人が引き起こす破壊と悲劇は、新たな負のエネルギーの増大を生む。そうして収集したエネルギーが、彼らシャドーマテリアルの糧となるのである。

「俺をおおおツツ、馬鹿にいいいいツツ!! しやがってええええツツツ!! このツ、クソ女どもおおおツツツ!! ブツリイイイツツツ!!」

今回出現した怪人は、戯画化されたボディビルダーのように上半身が膨れあがり、紫色の体色と金剛力士像のような怒りの仮面を備えた半裸の巨漢だ。唯一、首元のカラーとネクタイだけが人間時と同じで、恐ろしくも滑稽な印象を与える。

ハンマーのごとき太い腕を振り回し、物理的破壊力でコンクリートの柱をやすやすと打ち砕くと、周囲から逃げ遅れた女生徒たちの悲鳴があがった。

「お前もッ、お前もッ、お前もオオッッ!! 俺を馬鹿にしていたらッッ、陰で貶^{さげす}んでいたろうッッ!!」

ひつ——と、転んで腰が抜けてしまった一人の女生徒が、ずんずんと床を踏み砕きながら迫ってくる怪人になすすべなく絶望の表情を向けた。

と、そこに……!

「おいやめろっ! お前、物理の曾根崎^{そねざき}先生だろ! なんでセンサーが怪人なんかになっちゃまって生徒を襲うんだよ!」

後ろからコンクリートの破片と共にそんな声が飛んできて、怪人がゆつくりと振り返る。

先の女生徒を助けるため勇敢にも怪人の注意を引いたのは、染めた金髪に着崩したギャル系ファッションがお嬢様校では浮いた印象を与える名物生徒、御陵^{みささぎ}涼子^{りょうこ}だった。

「ちよ、ちよつと涼子ちゃん何やってんのさ、早く逃げないと! どー見てももう話とか

通じないよ、アレは！」

柱の陰から慌てて手招きする小柄な友人、牧野^{まきの}しずくの制止も聞かず、涼子は怪人と化した教師めがけて言葉を続ける。

「聞いたよ、先生が結婚詐欺にあつたって話……でも、だからって世界中の女に手当たり次第復讐するだなんて、そんなのどう考えても違うだろ！　いつもの優しい先生に戻ってくれよ、なあ!？」

「う、うう……うつつ……!」

生徒の真摯な訴えに、巨大な両手のひらで怒りの面をかぶった頭を抱え、一瞬迷いを見せる怪人——だが。

「ううう……うがあああつつつ!!　ブツリイイイッツ!!」

再び、抑えようのない怒りの咆吼をあげると、教師怪人は涼子の両腕を片手でまとめてひっ掴み、その体を軽々と宙に持ち上げてしまった。

「りよ、涼子ちゃんっ!？」

「あ、あぐううっ……!」

苦痛に苦しむ涼子。と、怪人の股間部分がグニグニと不気味に蠕動^{ぜんどう}し、そこからずろんっ——と30cmはゆうにあるドス黒い肉の槍が盛り上がった。

「女あ……女は、許さんっ……!! みんなみんな串刺しにして、物理的に犯し殺してやるうっ……!! まずは貴様からだああ、御陵いい……!!」

「ひっ……!!」

これから自分を襲う最悪の運命を知り、気丈な涼子の顔もさすがに恐怖に歪んだ。遠巻きに立ちすくむしずくも、当然ながらどうすることもできない。

まさに絶望かと思われた、その時——！

「ティアセイバー……ブーメラッッ!!」

凜とした声と共に、半月状の光が回転しつつ飛来し、涼子を抱え上げている巨腕を瞬時に切り裂いて彼女を解放した。

苦悶の叫びをあげ、振り向いた教師怪人の視線の先には……！

「聖なる刃を携えて、正義の光が悪を討つ！ 聖光剣姫スターティア、輝きまとしてここに光燐ッ！」

銀の軽装騎士甲冑に、アイドルの舞台衣装めいたフリルと翠緑色の清楚なスカートが複合したかのような特徴的コスチューム。

風もないのになびく黄金のロングヘア、その頂で輝く宝石のはまったティアラ。やや控えめな胸を包むアーマーを、大きなリボンが彩っている。

純白シルクの長手袋が、回転して戻ってきた光の刀身をキャッチし構えた——その姿、その口上は、どこからともなく現れて怪人を撃退して去っていくという噂の美少女戦士に間違いなかった。

「あ、あれってスターティア!? ほ、ほんとにいたんだ……!」

「いいから早く逃げなさい! この怪人は、あたしが倒して——ううん、浄化してみせるわ!」

こくこくと頷き、涼子が慌てて離れたのを確認すると、スターティアは廊下の床を蹴つてふわりと宙に舞い、一直線に間合いを詰めた。

「がっ……うぐぐつつ、女めえええつつ、よくも俺の腕をおおつつ!! ブ・ツ・リイ イイツツ!!」

怒り狂った物理教師怪人が、無事な腕をがむしゃらに振り回し、床や窓ガラスを碎き散らかすものの、少女剣姫にはかすりもしない。直前で壁や天井を蹴り、反動で的確に位置を変えてすべてを見切っているのだ。

そして、大振りで隙だらけになった背中に回り込んだスターティアが、光の剣——輝光刃^{じん}ティアセイバーをくるくると風車のように高速回転させ始める。

「輝刃瞬間^{きじんしゆんせん}ツ! ティアセイバー……ハリケエエエエツツツ!!」

回転により光のドリルのような残光を形作った輝光剣を突き出し、目にも止まらぬ速度で踏み込んだスターティアと、教師怪人のシルエットが交錯した。

一瞬の静止と静寂。

ピタリと停止した光刃が、無数の粒子となって散り、一拍を置いて——どう、と怪人が床に倒れ伏す。

「や、やったっ！ す、すげえ……！」

「本物のスターティアだあ！ あ、あとで天音ちゃんや優姫ちゃんに自慢しないとっ……！」

柱の陰で手を取り合って、驚嘆と感動の声をあげる涼子としずく。

スターティアが動かなくなった怪人に歩み寄り、両手をかざす——と、額のティアラから優しい輝きを帯びたオーロラ光が放たれ、それを浴びた怪人が気弱そうな中年教師の気絶した姿へと変わっていく。

同時に、周囲の破壊痕も時間を巻き戻したように塞がっていった。負のエネルギーが浄化反転される時に発生する、余剰エネルギーのなせるわざだ。

「うわあ……本当に怪人を、元の人間に戻しちゃったよ」

「生きてるんだな先生、よかった……！ ——あ、あのっ！」

すべてを終えたスターティアに、おそろおそろ声をかける涼子。

「た、助けてくれてありがとう！ その……こ、これからも頑張って！ お、応援してますから！」

「ふふ、ありがとう涼子……さん。それじゃあね！」

につこりと微笑んで、タンツと軽快に床を蹴った謎の美少女戦士は、たちまち女生徒たちの視界から消えてしまった。

「うわっかつこよかったねえ、いかにもスーパーヒロインって感じ……ん、涼子ちゃん？ おい？」

「名前……名前呼んでくれた……ああつ、スターティア……様♥」

「あゝ、目がハートになってる。こりや重症だ」

* * *

「また腕をあげたようだな、スターティア。単体の怪人程度、もはや歯牙にもかけんか……ふ、それでこそ我が好敵手」

漆黒の美しいロングヘアをなびかせ、旧校舎の屋上にたたずむ細身の人影。

銀甲冑に身を包み、顔の上半分を仮面で隠した魔剣士——七冥塊^{はくぎん}が一人、白銀のシルヴァリア。

同じ組織の怪人が打ち倒されているというのに、その様子はどこか満足げであった。

教師怪人を瞬時に打ち倒した必殺剣、ティアセイバーハリケーンは、かつて彼女との死闘を経て開眼したものだ。

『どうしたスターティア……お前の聖なる剣技とやらは、その程度のものなのか。そんな体たらくでは、我らシャドーマテリアルを壊滅させるなど夢物語だぞ』

『くっ……！ 言ってくれるじゃない、シルヴァリア！ あたしは必ず超えてみせるわ、あなたを！ その剣技に絶対、追いついてみせるッ！』

七冥塊最初の刺客、翠玉すいぎよくのヴェリルをついに撃退し、自身の強さに慢心しつつあったスターティアの前に現れ、格の違う強さで完膚無きまでの敗北を味わせたのがシルヴァリアだった。

その惨敗を見事糧にし、特訓により新たな奥義に開眼した聖光剣姫を素直に賞賛してみた彼女の姿は、七冥塊たちの中にあつてどこか異質な存在だった。

「だが、私は見定めなくてはならない……お前が真に、スタージュエルの力を使いこなす戦士となれるか否かを」

静かに独白する、謎多き仮面の七冥塊。

「そう、私の『目的』のためにも——輝きを増しつつある聖光は、我が長き雌伏の日々を

照らす輝きとなるか……それとも」

誰にも聞こえぬ言葉を、白銀の女剣士は低い声音で紡いた。

仮面の奥に、秘められた強い意志を宿して。

* * *

「ええいつ、またしても邪魔を！ 本当に忌々しい小娘だわ……っ！」

闇色の光に照らされた、シャドーマテリアル要塞。

滞空する水晶球を通して戦いの一部始終を見ていた長身美女が、ビキニ状レザーに包まれたグラマラスな褐色ボディで苛^{いら}立たしげに地団駄を踏んだ。

銀髪から生える悪魔じみた角と長く尖った耳が、異世界人であることを示している。はち切れんばかりの爆乳にむっちりした腰——額にはその名の通り菱形の黒曜石がはまっており、漆黒の輝きを放っていた。

もう一人の七冥塊、^{こくよう}黒曜の^グオブシディア。指揮を執る先ほどの怪人を送り込んだ張本人である。

「スターティア……！ あの小娘ときたら、いつもいつもこの私の計画を妨害しに現れて……ッ！」

映像記録の中の剣姫を睨み、妖艶な女幹部は齒がみする。以前の戦いであの必殺剣に吹



き飛ばされ、つい最近再生手術を終えたばかりの左腕が、ズキズキと屈辱にうずくようだ。怪人を利用した負のエネルギー増大計画は、今回もまた憎き神出鬼没の変身美少女剣姫によつて阻まれてしまった。

かつてシャドーマテリアルが荒廃させた異次元界から失われた、伝説の宝石スタージュエル。

それは負のエネルギーを対消滅させる光のエネルギーの源となる、シャドーマテリアルにとつてはもつとも警戒すべき存在だった。

よもやそれが、侵攻先の世界に流れ着いて新たな戦士を生み出しているようとは……！

「それにしても——妙ね。今回は、ヤツの出現がいつもに比べて妙に早かった……」
いつまでも激情に流されているようでは、七冥塊は務まらない。

オブシディアの冷徹な頭脳が、少ない情報を吟味し分析する。
考えられる可能性は一つ。

「ひよつとして——スターティアの正体は、あの学院の関係者……？」
にやりと、黒いルージュの口元が酷薄に歪んだ。

「調べてみる価値は、ありそうね……ふふっ、待ってなさいスターティア。あなたの正体に、弱みに、必ず迫ってみせるわ、この『黒曜の』オブシディアが——そして、んんっ……」

…あんっ♥」

女幹部のむっちりした下腹部を覆う黒レザーのビキニショーツから、粘液にまみれたオスの肉器官が、にゅずるるるっ……と出現した。

美少女戦士への復讐の念をたぎらせつつ改造を重ねた、醜悪なふたなりバイオペニス。

「その時はこのチンポで、みっちり汚しつくしてブザマに屈服させてやるわ……ああっ、本当に楽しみよスターティア、その瞬間が……あはははははっっ！」

* * *

一夜明け、翌朝。

栗色のセミロングが制服によく似合う一人の可愛らしい少女が、自宅前の道路を進みながら何やらぶつぶつと呟いていた。

「『急に家から呼び出しが』……これは前回使ったよね。『怪人が暴れてる所に巻き込まれて』……余計心配させちゃうなあ、これじゃ。いつそ『重い女の子の日が始まっちゃって』……うーん、さすがにあんまり、かなあ」

ああでもない、こうでもないと言いつつ、のりハーサルを試行錯誤している彼女の名は、星ヶ丘優姫。聖碩学院に通う二年生だ。

彼女は昨日、親友の鳥羽裕美香と放課後に待ち合わせをしていた。

だが向かおうとする直前、校内に出現した怪人の存在を感知し、慌てて戦いに向かうはめになったのだ。

メールで「急用！ あとで事情話すからゴメン！」とだけ打診したものの、さて今回はどうやって言い訳したものか……。

（友達にウソをつくのは心苦しいけど、でも絶対内緒だもんね……あたしが、スターティアだってことは）

そう——彼女こそが、聖光剣姫の正体。偶然、学校帰りに見つけたスタージュエルに選ばれ、力と使命とを受け継いだ正義感いっぱい優しい少女である。

「おはよう、優姫」

「ひゃっ!? お、おはよう裕美香！」

栗色の毛先をいじりつつ首をひねっていた最中に、その当人からいきなり声をかけられて飛び上がる優姫。

隣に並んで歩く裕美香は、いつもの清楚な制服姿に包まれた穏やかな笑顔。

おとなしそうだか芯の強そうな、やや大人びた瞳。肩まで伸びたつややかな黒髪が、フレームなしの眼鏡とよく似合っている。

「あ……その、昨日のことなだけどさ」

「あのね、優姫」

軽く首を傾けて、裕美香が人差し指をすつと親友の唇にかざした。

すべすべしてて綺麗な指だなあ……と、優姫はぼんやり考えてしまう。

「話しにくいことなら、話さなくていいよ。優姫が話したい時で——その時まで、無理に聞いたりはしないから」

「あ……………」

「だから、その話はおしまい。きっと私のために思ってくれてのことなんだろうけど……それでも優姫に嘘つかれるのは、ちよつとイヤだし」

ほんの少しだけ寂しそうに笑って、裕美香は指を引いた。

自分が抱えたただならぬ事情を察して、親友は極力踏み込まずに、だが優しく温かく見守ってくれている。

優姫は反射的に、涙がこみ上げてしまいそうになった。

（ごめん、ごめんね裕美香……！）

本当のことを話せば——自分が聖光剣姫スターティアのだと、裕美香に告げてしまえばどんなに気が楽か。

だが、そうするわけにはいかない。

命すら危険な戦いに、大切な親友を巻き込むわけにはいかないのだ。

「わかった……いつか、ちゃんと裕美香には話すわ。話す、から」

「ん」

短く頷き、今度はにつこりと嬉しそうに笑う裕美香。

同じ年とは思えないくらい落ち着いた、優姫にもっとも安心をくれるその笑顔。

（守ってみせる……裕美香を、涼子やしずく、天音たちを絶対に……！　それが、きっとあたしがスターティアとして選ばれた意味なんだ……！）

かけがえのない日常、その象徴たる友人たちに優姫はあらためてそう誓った。

「あ、ところで涼子からのメッセージ見た？　すっかりスターティアの大ファンになっちゃったみたいね、あの子ったら……ファンクラブ入るんだって息巻いてたわよ」

「あ、あはは……」

行く手のバス停に並んでいた涼子が、こちらに気付いて元気よく手を振ってくる。

この分だと、自分にとって微妙な話題を車内でたっぷり聞かされることになりそうだと、苦笑する優姫であった。

* * *

今思えば——この頃の日常の、裕美香がいてくれた日々の、なんとかかけがえのなかった

ことか。

その日より、一週間後。

スターティアこと星ヶ丘優姫は、悪辣極まる淫らな罫によって、終わりのなき陵辱劇のただ中へと転がり落ちていくことになるのだ――！

第2話 恥辱の敗北！ 屈辱のフタナリちんぽ皮フェラおしゃぶり奉仕！

「追いつめたわよ、シャドーマテリアル七冥塊の一人——黒曜の〃オブシディア！ 聖光剣姫スターティア、輝きまとしてここに光燐ッ！」

よく通る凜とした声が、薄暗い廃工場の中に響き渡った。

そこに降り立ったのは、凜々しい軽装の騎士甲冑のようにも、可憐な舞台衣装のようにも見える金属と布の複合したコスチュームに身を包み、光の刀身を持つレイピアを構えた美少女剣姫。

「追いつめた？ フフッ、とんだ勘違いね。あなたはまんまと誘い出されたのよ、ここに」彼女と対峙するのは、扇情的なボディを露出過多のビキニレザーに包む妖艶な美女。美しくも禍々しい印象をまとう悪の妖女、黒曜の〃オブシディアである。

「懲りないわね、オブシディア！ どんな悪辣な罠だろうと、この輝光剣ティアセイバーがすべて断ち斬ってみせるまでよ！」

スターティアは侵略の陣頭指揮を執るオブシディアと何度も戦い、そして幾度となく打ち破ってきた。今度もそうするまでだと、正義の瞳が燃えている。

「ふん、相変わらず威勢のいいことね。だけど、これを見てもまだ同じことが言えるかしら？」

光の刃を構え、今にも斬りかからんとするスターティアを制し、オブシディアが右手を差し伸べる——と、手の甲についた宝石状パーツから半透明の立体映像が浮かび上がった。そこに映ったありえないものを見て、美少女戦士は驚愕^{きょうがく}に目を見開く。

「そっそんな!? ど、どうして裕美香がっ……!?!」

氣を失い、柱に拘束されたクラスメートの姿。その周囲を、手にナイフを持ったシャドーマテリアルの下級戦闘員たちが取り囲んでいる。

オブシディアたちの組織に、自分の正体——地元のお嬢様学校に通う学生としての姿——はバレておらず、従って彼女が友人であることも知らないはず。なのに、なぜ……!?!とスターティアの動揺が加速する。

「私の情報収集能力をナメないでほしいわあ。ふふっ、名前まで口に出して反応したということは、やはり大切な存在だったようねえ？」

しまった——と思った時にはもう遅かった。正義のヒロインはここに、決定的な弱みを握られてしまったのだ。

「立場を理解できたかしら？ 私の命令一つであなたの大切なお友達は死ぬことになるわ。

わかったら武器を捨てて跪ひざまずきなさい——脅おどしなんかじゃないわよ、これは」

「……くっ！ ひ、卑怯者……っ！」

「ええ、そうよ。生憎あいにく、勝ち方を選んでいるほどオトナは暇じゃないの……さあ！」

ぎり、と唇を噛むスターティア。眼前にいるなら戦闘員を蹴散らし救い出すチャンスもあっただろうが、映像越しでは場所すらわからず手の出しようもない。

ティアセイバーの切っ先が震え——やがて光の刃が音もなく消失して、剣の柄がカラんと廃工場の床に転がった。次いで両手をあげ、屈辱の表情で膝をつく美少女戦士。

「そうそう、なかなか聞き分けがいいじゃない。じゃあ、これからあなたをシャドーマテリアル要塞にお招きしたいのだけれど……その前に、個人的な〴〵用〴〵を足させてもらうわね」

爆乳を誇示するように揺らしながら、嗜虐的な笑みを浮かべたオブシディアがゆっくりと積年の怨敵に近付く。襲い来る暴力を予期し、歯を食いしばるスターティア……が、しかし。

「んんっ——おあ、んあんっ♥ 待ってなさいね、すぐ出てくるから……ああっ♥」

「……え!? な、何をつ……きゃああっ、うっ嘘っ——!?」

オブシディアがV字カットの股間部分に手をかざしたかと思うと、見る間にそこが内側

からムリムリと盛り上がり——ずろんっ、と異様な物体が外に露出した。

赤黒い皮に包まれゴツゴツと太い肉の幹、その表面に幾筋も走るミミズ腫れのような血管。長大に反り返った先の一回り太く膨らんだ先端部は、すっぽりと皮に覆われ、まるで小さめのゆで卵が丸ごと包まれているかのようだ——それは特大サイズの、包茎男性器だった。

「うそ、これっておちん——っ、な、なんで女のあなたにこんなモノがつ……!?」

驚きのあまり反射的に、清楚な外見に似合わぬ言葉を口にしそうになって、慌てて目をそらしながら困惑するスターティア。オブシディアは対照的に悠然とした態度で、見せつけるように太肉棒を揺らしながら解説する。

「シャドーマテリアルの生体改造技術をもつてすれば簡単なことよ。私はあなたに苦渋を舐めさせられるたび、このおチンポをより大きく、太く、スケベに改造してきたわあ——いつかこうやって、抵抗できないあなたの鼻先に突きつける日を夢みて……ね♥」

「くっ、ううっ……こ、この恥知らずの変態女幹部ッ……!」

「あんっ、もっと言ってちょうだい♥ おチンポ反応しちゃうわあ……うふふっ、なんでわざわざ皮がたっぷり余ったホーケーおチンポにしたか、あなたにわかるかしら？」

憎悪と軽蔑の視線に睨まれ、ビクビクのたうつつ巨チンポの先——巾着のようにだだ余り

になった皮に黒レザーの指を二本にゆっぷり差し入れ、くぱっと開いてみせるオブシディアン。

むああ……♡ と、たちまちイカ臭いニオイが湯気と共に立ち上り、ひっ——とスターティアが生理的嫌悪の声を漏らす。

「そうよお、あなたの可愛いベロで、この中をたっぷりホジホジ♡ ぬぷぬぷ♡ 屈辱舐めしやぶり奉仕させてやるのが私の夢だったのよっ……ああんっ、こっこれからとうとうその時が来るって考えただけでカウパー漏れちゃうっ♡」

ぴゅっ♡ ぴゅぴっ♡ と広げられた皮ホルルの奥から、半透明の粘液が水鉄砲のように勢いよく発射され、慌てて顔をそむけたスターティアの肩口付近に飛び散った。

トロツとねばつくそれは、すでに普通の成人男子が放つ精液にも匹敵する粘度と臭気を備えており、未体験のおぞましさにさすがの変身美少女剣士も凜とした容貌を青ざめさせる。

「じよ、冗談じゃないわ……っ！ し、舌でそんな気持ち悪いのを……な、舐めるなんて死んでもゴメンよっ——！」

「あらあら、あなたって記憶力ないの？ 私の指示一つで、大事なお友達が犯されて殺されてさらに犯されるって状況、ちゃんと覚えてる？」

「そ、それはっ……！ お、お願い、彼女にだけは手を出さないで……！」

あらためて絶望的な力関係を宣告され、血の気が引いた顔で懇願するスターティア。彼女にとって裕美香はかけがえのない親友であり、守るべき美しい日常の象徴であり——何としても守り抜かなければならない存在だった。そう、たとえどんな屈辱にまみれようと……！

「だったら、とるべき態度つてものがあるんじゃないかしら、聖光剣姫さん？」

「わ……わかった、わ。……やる、なんでも言う通りにやるから……だから約束して、裕美香を傷付けないって……！ 家に返してあげて……！」

「だ・か・らあ、その約束が果たされるかどうかはあなたの態度次第、でしょう？ そこを理解したら、まずは——やる、なんて無味乾燥で曖昧な表現じゃなくて、これから何を私のおチンポにしてくれるのか、ちゃあんと具体的にマゴコロこめて言ってご覧なさいな♡」

「な、なっ——!?」

「そうそう、気持ちが入ってない適当なこと言ったら、その時点でお友達の指くらい飛ぶかもしれないから。そのつもりで慎重に言葉を選んで……ね♡」

みずからの口で、屈服宣言に等しい淫らな言葉を紡げと——その残酷な余興の宣告に、

スターティアの美貌はみるみる、かあつと朱に染まり、羞恥と絶望の涙が浮かぶ。

だが、断るといふ選択肢は存在しない……親友の命と尊厳がかかっているのだ。

美少女剣士は意を決し、眼前でこれ見よがしにブラブラ左右するおぞましい肉筒凶器へと視線を移し、ごくんと唾を飲み込んで……嗜虐的に笑うオブシディアを見上げ、口を開いた。

「あ……あたしに、オブシディアの皮余りほーけーおちんちんを、し……舌で、ねぶらせてください……！ か、皮の中にべロ突っ込んで、ねろねろ舐めさせて、ください……っ！」
何度もつかえながら吐き出される、少女が今まで考えたことすらない卑猥な表現の羅列。言葉にするだけで自分がコスチュームごと汚れるような錯覚に、スターティアは襲われていた。

「うふふ、思ったより上出来じゃない。一つ注文をつけるなら今度からは、おちんちんじゃなくて、チンポとか、おチンポ様」って言ってちょうだいね♥ あなたの声で下品な言葉、できるだけ聞きたいの……まあいいわ、じゃあ——ほらあ、は、はやくうう……♥」

可憐な唇めがけて狙いをつけ、淫語でギンギンにフル勃起したフタナリちんぽを仇敵に突きつけるオブシディア。興奮と期待からか、立ち上る淫臭がむわっ♥ とさつきより増

している。

スターティアは顔をしかめながら目をつぶり、精一杯突き出されたピンクの舌が、だらしなく余った皮袋の裂け目へとゆっくりゆっくり近付いて——そして、ついに触れた。

つぷつ……つぷふうつ♡ にゆるるんっ……♡

「おっ、おおっ……♡ あ、あの生意気な聖光剣姫スターティアが、私の皮余りおチンポにベロ差し込んでるうう……こ、これ最高にキクわあっ♡ これだけでイケちゃいそお……♡」

（う、ううう……く、臭い……うええ、変な味するうう……！）

仁王立ちで赤黒いチンポを突き出した魔乳美女幹部に、凜と美しいバトルコスチュームのまま跪き、恥皮に舌を差し込みおずおずと内部をねぶり回す変身美少女戦士……本来あつてはならない構図が、オブシディアの興奮を、スターティアの屈辱を加速させていく。

「て、手は使っちゃダメよお……♡ はしたなく顔ごとおチンポ追っかけて、ベロだけで中をじっくりネロネロ、ラブ愛撫しなさい……♡」

命令されるがまま、キスもしたことの無い処女舌がムレた肉ポケットの中をくすぐる。

頭が痺れるようなえげつないエグ味を必死で我慢しつつ、フタナリチンポの敏感ゾーンにたどたどしく分け入っていく剣姫の生舌感触に、オブシディアは快感と興奮でよだれを

垂らさんばかりだ。

「おっほ♡ つ、ついに亀頭に到達したわねっ、んおお……っ♡」

ふにゆふにゆと妙な舌触りの余り皮をかきわけた先には、ツルツルの舌触りと火傷やけどを錯覚しそうなほどの熱さを持つ、熱した硬いゴムのような弾力性の塊が待ち受けていた。

そこと皮の内側は、さっき肩口に飛んだ先走りを煮詰めて凝縮したような、こつてりとオス臭い味に一面覆われており、舐めても舐めても苦み混じりのヌメつく嫌味が舌を襲う。
「んぷ、はぷっ……れろ、りゅろろっ……ううっ……！　ぷあ、れりゅるりゅっ……れろ
う」

「おほっ、んほおお♡　皮フェラすごいわああ、こっこれ皮で♡　皮で押さえられて亀頭と舌がぴったり密着してええっ……♡　見た目もエロすぎてカウパー濃くなっちゃううう♡」

外からでも、亀頭を包む皮の下に浮いたスターティアの可愛いペロの形がぷつくりと判別できる。それはおずおずと左右に、前後にネチユリユチョ動き、本来憎むべき敵の下品なフタナリ汚チンポを気持ちよくさせる禁断のお掃除運動を繰り返してしまっているのだ。
「うふふっ♡　どんな気分かしら、大嫌いな私にペロ肉奉仕するのは……あなた、この前なんか私の左腕を必殺剣でそっくり吹き飛ばしてくれたわよねえ……再生手術が済むまで

とつても痛かったのよ？ 反省の口上言いながらもつと愛情ねぶりしなさいっ、ほらほら

あっ♡」

「う、くうっ——！ お、オブシディアに痛い思いさせて、申し訳ありませんでした……
っ、お詫びにお……おチンポを真心こめてスターティアが、なっナメナメお綺麗にします
……ピカピカになるまでゴシゴシ舌磨きいたしましゅ……んりゅっ、りゅろれろおっ……
……！」

「はっおお♡ な、なかなか媚びセリフが上達したわねっ♡ それじゃあいよいよ一番奥
っ、おチンポのくびれ段差の部分まで舌を思いっきりネジこんでレロりなさいっ♡ ほら
っ♡」

（お、奥の段差ってこのタマゴみたいなのの後ろ側のお……!? こ、こんなところ思いつき
り舌伸ばさないと届かなっ……こ、こうなったら、ううっ、こうするしかっ……!）

あーんと思いつきり形のよい口を開き、ぱっくり包茎亀頭をくわえ込むように唇をかぶ
せるスターティア。口腔こうこうに熱いペニ先を迎え入れることで、舌を最大限に皮奥まで伸ばす
試みだ。

だがその姿は傍目はためには、唇をひよつとこのように無様に変形させて下品に太チンポをパ
ックリ口全体でくわえ込む、凛々しい正義の少女剣姫にあるまじき媚び痴態に他ならない。

「んほっ おおお♥ なっ何してるのよスターティアっ、愛と正義の美少女戦士がしちやいけないエロ顔になつてゐるわよおっ♥ お、奥までそんな顔で舌入れるなんてっ、へほおっ♥」

「んっ、んりゆりゆうう……っ、んぶ、れろりゆろろっ……♥ れっろ、れろりゆっろ♥」
親友を救うため——その一念で羞恥心をマヒさせ、悪の女幹部にすら貶まれる痴態さえも、恥をかなぐり捨て淫らな水音を立てて演じるスターティア。

淫らな努力のかいあってその舌は包茎皮地獄の奥、カリ首に繋がるエグい段差部分までついに到達し、力を込めた舌先で敏感部位をりゆろりゆる愛撫される鋭い快楽に、さすがのオブシディアもむっちりした尻肉を揺らして品のない嬌声きようせいを漏らす。

「へほあ♥ んおお……♥ いっイイわあ、そこそこそこキクううっ♥ す、スターティア、それしながら私の目しっかり見てっ、あっあと両手でピースしなさいっ♥」

「ん、んうう……♥ んりゆううう……? (こ、これでいいの……?)」

羞恥に上気した上目遣いの潤んだ瞳が、ぶるぶる揺れる巨乳越しにオブシディアの発情した顔を媚びるように見上げる。震える指が、弱々しいピースサインをWで形作った——その口にずっぽりと赤黒く長大な太チンポを刺し、鼻の下を伸ばして亀頭に吸い付いたまままで。

女騎士のアーマーにアイドルめいたフリル布、いずれも淫らさとは無縁のはずのモチーフのコスチュームに全身を包みながらにしてのフタナリ奉仕淫行は、もはや彼女のファンの一般市民が見たら卒倒するような光景だ。しかも……んりゅうりゅうつ、にゅぽんつ♡
りゅにゅんつ♡ とはしたない包茎しゃぶり音を立て続け、鼻からすびすび呼吸をしながら、である。

「おほお、さっ最高よあなたっ♡ 正義の戦士なんかよりピンサロがお似合いのエロ媚びメス顔だわっ♡ おおおんおっ♡ たったまらないわあつ、アレが、アレがきちやう、スターティアの美少女台無し包茎フェラ顔でっ、ミルクタンクがお外に出ちゃうわああ♡」

「……っ、んうううっ!? (な、何これええっ!?)」

突如、だぶんっ——♡ と黒レザーのビキニパンツから左右にハミ出るように、皮に包まれた二つの球体がオブシディアのむっちりした太ももの隣にまろび出た……それはチンポ同様のバイオ改造手術で付与された本来メスにありえない器官——巨大なキンタマだった。

「うふふっ、ココで何作ってるか分かるわよねえ……そう精液よ、私の繁殖欲と怒りの詰まった鬼ザーメン♡ 先走り汁なんかとは比べものにならない濃さ、クサさ、量、ネバっ

こさ……♥ 私は恨み重なるあなたにしこたまブチ喰らわせるために、わざわざ全部を最高にエグいレベルに調整してもらったのよおっ♥」

（さ、最悪っ、最低いいっ……！ な、何考えてるのよこの変態いい……っ！）

鈴口の割れ目からヌルヌル漏れ出すカウパーすら、十分以上に量が多くどんどん湧き出てくるため、スターティアは嫌でも口内に流れ込んでくるそれを唾液と混ぜて定期的に嫌々飲み込まねばならない状態だった。それを遥かに越える暴力的な液体が、出てくるなんて……！

「おっ♥ おっおううつ♥ わかるわよお、お精子がどんどんタマん中でギュンギュン生産されてる感覚がたまらないわああ……♥ 念願のあなたを前にどれだけヒリ出るか、私にもわからないわよおお……ちなみにこの前あなたの映像オカズにしながら女戦闘員にしゃぶらせた時は、危うく窒息させそうになっちゃった……っ♥」

（う、嘘っ……ど、どれだけ出すつもりなのよ、そんなの出されたらあたしっ——！）

黒レザーに鈍く光る左手で、クルミでも弄ぶよう^{もてあそ}に自慢の巨タマ二つをグニグニ揉み弄ぶオブシディア。右手はスターティアの蜂蜜色がかった金髪を優しく撫でているのが余計に恐ろしい。

それでも愛撫奉仕を止めて許されるはずもなく、せめて一刻も早く終われとばかりに、



変身美少女戦士はがむしやらに包皮内で舌を踊り狂わせて亀頭を責めシゴく。

「んれろっ、れろっ♡ れっろ、れりよ……るりよ♡ ぬるるんっ、るりよにゅぷっ！」

「おっほおお♡ おおおおおお♡ い、いよいよキそうよっ、射精秒読み段階い

っ♡ ねっねえスターティア、あなた必殺技のティアセイバーハリケーンあるでしょっ、
剣ぐるぐる回すやつ♡ あれみたいにくでぐりぐりぐりやっ、私にトドメ刺しなさ
いっ♡」

決死の特訓で身に付けた、誇り高き得意技までもこんな形で汚される屈辱……だが、こ
れも親友を救うためなんだ……と、スターティアはもはやすべてを驚くほど従順に受け入
れてもいた。あるいはそれは、口内にハマりっぱなしの巨マラから立ち上る淫臭を呼吸の
たびに吸い、それが漏らす濃厚カウパーをすすり続けたせいで起きた淫らな変質だったか
もしれない。

「ひ……ひあふえいばー、ふあ……ふありへえーんっ……♡ ——れろっ、れろんっれろ
ろんっ♡ れろりゅろりゅるるんっ♡」

「んおっ!! ……おっっほおおおっ♡♡♡ へっへえええひいっ♡ おおダメ駄目
ダメこれほんと必殺うっ♡ ちっチンポ殺されるっ♡ とどめっトドメきたあ♡
♡」

美少女剣姫の上品な舌が、扇風機のように下品極まる肉ビラ回転でパンパンに張り詰め
た亀頭の全周囲にトドメの激烈快楽を送り込む……オブシディアの背筋がのけぞり、銀髪
と肉幹が同時に波打って、獣めいた声をあげながら——ついに濃厚爆発射精の瞬間が訪れ
た。

「だっ♡ 射精すわよっ♡ イッイクわよおおっ♡ グツグツ煮えたぎった怒りの怨念ザ
ーメン、恨み重なる憎ったらしいあなたに思いつきり爆噴してやるわああっ♡ ほら媚
び顔Wピースちゃんとしなさいっ!! おっほおおおおおおおおっ♡♡」

「んんぷっ♡ んふうううううううっ♡ んっふうううううっツツ!!」

——ボビョッ♡ どぼびゅぽおおおっ♡

ぼびゅるるるるるっ、どぶっどばばああっ♡ びちゅううううっ♡ んびっ♡
「ああああおッ♡ あおっ♡ んおっほおおおっ♡ おっひいいいいっ、出る出る
出りゅううううううっ♡ たったまらないわあああっ、ついにクソ生意気な小娘に制裁
チンポ汁ブチ喰らわせてるのよおおっこの私があっ♡ オブシディア様の完全勝利大噴射
よおおっ♡♡」

「はぶっ、んぽほおおおっ!! んぶあ♡ んひっ、んおっんぐうううほおおおっ♡」
発射というより、それはもう爆発、炸裂だった。口に含んだ亀頭の割れ目から、蛇のよ

うにのたうち暴れるゲル状粘液の束が……ほぼひと繋がりになって猛烈な勢いで、びゅつくんびゅつくん撃ち出され続けるのだからたまらない。

ものすごい異臭を放つ半固形の粘塊が、スターティアの口の中に折り重なるようにしてどんどんスペースを奪い、のどちんこに勢いよく当たった何発かが反射的な嘔吐おうと感すら誘発する。

（だ、だめへえええつ、これもう無理いいいつつ！ は、吐き出すしか——つ）

「あつは♥ ひ、一と言い忘れてたけどつ——あゝ出る出るまだ出るうつ——ほんの一滴でもこぼしたりしたら、おっお友達の体に、ヒドいことしちゃうわよお……つつ♥」

「——!? な、なあつ……!?」

一瞬で断たれた退路。なら残された手段は一つ……これを飲み込まなければならぬ！
「んっ、んぐつ……んぷうつ♥ んぷあ、ぐぷつ……ぐきゅんっ♥ るきゅんっ♥」
包茎余り皮を下品なストローにして、宿敵のグロちんぽから直搾り精液をちゅーちゅー吸引し続けるフタナリミルク飲み女剣士と化してしまうスターティア。律儀にもまだ両手でピースのポーズを続けているのが滑稽だ。

オブシディアも強烈きょうれつすぎる射精感に今やすっかり妖艶さの仮面も剥がれ、ガニ股ポーズではしたなく自分の巨乳をぐにぐに揉み、ブラブラと巨大なキンタマを揺らし、眼前に跪

く変身美少女剣姫の口にへコへコと股間を叩き付けながら快楽を貪ることに余念がない。

「おほお♡ ああああ楽しいわあああ♡ あのスターティアにつ、おチンポは乳瓶から直ミルク授乳させる圧倒的勝利感っ、征服感っ達成感っ♡ ま、まだまだ簡単には終わらないわよお、がつつりこつてりフル稼働キンタマに気合入れてしこたま出しまくるわよ おおっ♡」

どつくん♡ どつぷんっ……♡ どくんっ♡ どぷぷん……っ♡

（んぶっ、んぶうううっ♡ ど、ドロドロ濃いのがああ、ノドにからんでええ……っ♡）
びゅっぷん♡ びびゅんっ♡ ごぷっ……どびよぽおおっ♡

（は、鼻の内側からくっさいニオイ抜けてくるう……か、体の中からクサくなるううっ……）

…♡ お、オブシディアのちんぽ汁で体造り替えられりゅう……！ んお……♡）

「おっへ♡ おへええ……っ♡ で、出続けるううう……っ♡ 金玉ポンプのドスケベドピュリ運動が止まんないいつ♡ し、幸せえええっへええ……っ♡」
たっぷり一分間……あるいはもつと長い時間だろうか？

もはや、圧倒的な量と粘度とスperlマ臭の暴力、目の前で脈打ち続ける肉サオと巨タマの偉容、そして耳に口の内側から響く下品極まる射精音——味覚嗅覚触覚聴覚視覚、五感すべてを犯されているといっても過言ではない状態のスターティア。

（お、お腹のなかああ、もうたふたふになってええ……の、飲み込めなひい……！）

「ッあ♥ つほ♥ んああ、出た出たあ……♥ じ、人生最高の射精だったかも……♥ ふふっ、スターティアだったらそろそろ限界のようねえ、精液で口ぱんぱん、リスみたいでみつともないお顔お……♥ じゃあ一回、名残惜しいけどちんぽ抜きましようか……♥」
ぢゅりゅりゅるううっ……♥ と、ようやく射精を終えた太ちんぽが引き抜かれる。

口腔内の空気が薄くなっているため、自然とスターティアの唇は強い吸引力でなかなかチンポを離さず、びろおーんと伸びた余り皮がひよつとこ口から伸びているという下品な絵ヅラを演出する。そして、限界まで伸びきったそれがいいよチュポんと離れる瞬間

――！

ちゅぽんっ――ぴゅぷうつっ♥

うどん状に芯を持つて半分固まりかけたザーメンヒモが、唇の隙間から飛び出しかけた。
（だ、だめえっ……こ、これをこぼしたら裕美香が……っ！）

慌ててそれを吸い取るスターティア……ちゅるっっ♥ とそれこそ麺類のように、美少女剣姫の可憐なお口に、イカ臭い精子の詰まったフタナリ白濁ヒモがすすり込まれた。

「あはっ、上手ね♥ 一滴残さずよくできました、さすが聖光剣姫スターティアだわ。ご褒美に、今口の中に残ってるぶんは一度吐き出してもいいわよ……ただし、両手の上に、

ね♥」

（ううっ、もうなんでもいい……一息つけるなら……っ！）

言いつけ通り、両手のひらをお行儀よく揃えて器を作り、そこに口を寄せるスターティ
ア。

んっ……♥ とせつなそうな声をあげ、その桃色の唇を白く汚し、唾液に混じってもな
お濃厚な白濁汚ザーメンが、むりゅむりゅうっ——と吐き出されてこんもり積み重なっ
た。

「すごいわ、我ながらたんまりとヒリ出したものねえ……これと同じものが今あなたのお
腹にたっぷり入ってて、あとで栄養に変わると思うと、なんだかドキドキしちゃうわね：
…♥」

「へ、変なこと言わないで……！ んぷっ、うええ……！ えうう……」

今にも溢れこぼれそうなほどの量——指の第二関節までを包むシルクめいた手袋は、す
っかり精液が染みてジツトリと薄汚れている。先ほどの肩口への飛沫しぶきとはレベルを異にす
る、バトルコスチュームをはっきりと汚染する卑猥な汚れた。

だがスターティア自身はそんなことを気にする余裕もなく、ようやく侵入者が退去した
口腔内に新鮮な空気を吸い込み、はあはあと荒い息をつくばかりだ。

（う、ううっ……は、吐く息も吸う息もぜんぶおチンポのにおいがするよおお……！）

くらくらと酸欠寸前の脳を焦がす淫らな口腔粘膜セックスの余韻。今や心の中ですら、言いつけ通りに、おチンポ呼びしていることに彼女は気付いていかなかった。

そして、無意識に再び、白濁汚液の占拠する手のひらへと、上気した顔を近付け――。

「あらあら♥ 命令する前から、ちゃあんと残さず飲んでくれるだなんて……♥ てつきり、それはもう捨ててもいいと勘違いしたあなたを叱る流れになると思ってたわあ」

「え……えっ？ だ、だって飲まなきゃいけないでしょう……？ これ……っ」

命じられるまでもなく、自分から再び残りの発射液へと処理奉仕をしようとしていた……その事実にはワテンポ遅れて思考が追い付き、かあぁとスターティアの頬に血が上る。

「そうよお、その通り♥ さあほら、私の排泄した生搾りスケベ汁を残さずゴックン、あなたの可憐なおクチで残らず精飲キメときましようか♥」

にやつきながら半勃ちのチンポをぶらつかせ、自分があらためて残りザーメンを飲み込む所をじっと見つめるオブシディアの視線を否応なく意識しながら、彼女はまるですべてを頭から振り払おうとするかのように……喉を波打たせてソレを飲み下し始めた。

ずっ、ずずっ――ちゅずっ、ずじゅううっ――♥ んずっ、んずくちゅっ――♥

「うふふ、従順で可愛いわよ、今のあなた……♥ 私のふたなりザーメンミルクは美味し

いかしら？」

「ごきゅん、ごくっ……♡ ふあ、わ、わからないわよ……へ、変な味しかないっ……！」
「んふっ、そのうち美味しくなるかもしれないわね……ああつ、あ、あらためて意識すると興奮するわねっ……あなたにこんなコトできちゃうなんて……これからも、まだまだ……！」

これからも……？ まだまだ——？

その言葉の意味を理解したスターティアは、血の気の引いた顔を——口の端に白濁をこびりつかせたそれを、頭上の陵辱者へと向けた。

「こ、これで終わりじゃないの……？ ま、まだ何かさせるつもりなの……っ!?」

「あらあら、何寝ぼけたこと言ってるのかしら。たった一回おクチで又かせただけじゃない、まだ……私のコレは全然、満足も疲れもしてないわよお……♡」

無慈悲な言葉通り、先端から長細い残り汁を垂らしたフタナリチンポは、再びむくむくと鎌首をもたげ、太さ硬さを取り戻しつつあった。水着に似たレザーからはみ出したままの巨タマ二つも、不気味にぐにゅぐにゅと蠕動している……人間以上の速度で精子を増産中なのだ。

「ひ、ひっ——!?」

「言ったでしょう、シャドーマテリアルの生体改造技術はスゴいって♥ 私の自慢のおチンポは、回復量も連射回数も人間のオスなんかとは比べものにならないんだから……♥」
濃厚な精臭を放つ極太剛直をにゅこにゅこシコシコシゴきたてながら、涙目で後ずさる獲物めがけゆっくり間合いを詰めていくオブシディアの口の端には、サデイスティックな笑みが浮かんでいた。

「あなたに作戦を阻止された回数が確か全部で12回、ならあと最低11発はここでみっちり喰らわせてあげないとねえ……♥ そのコスチュームのあらゆる部分がドッロドロのぎとぎとになって、私の遺伝子のニオイがとれなくなるまで終わらないわよお……♥」

「い、嫌っ、そっそんな……！ い、嫌あああつつつつつ!!」

かくして聖光剣姫スターティアに再び迫る、黒曜の♀ 女幹部の淫虐フタナリチンポ。

だが、我々は信じている。愛と正義の美少女戦士が、必ずやその卑猥な攻撃のすべてを受け止め、いつか反撃の糸口を掴むことを――！

戦え、負けるな！ 光燐せよ、聖光剣姫スターティア！

第3話 汚辱の洗礼！ ラブホで強制手コキ&玉舐め、大量顔射！

「さて、いつまでもこの薄汚れた場所でやるってのも芸がないわねえ……姿勢とかも限られちゃうし。——ああ、そうだ♥ いいことを思いついたわ♥」

目を細めて笑うオブシディアに、怪訝けげんな不審顔のスターティア。この変態女幹部の発想だから、どうせろくなものじゃない……という負の信頼がある。

「場所を変えましょう、スターティア。おあつらえ向きに、ここにやってくる途中でイイ場所が目に入ったのよお……♥」

「ば、場所を変える……って、まさか——っ!？」

まさか人前で……自分を徹底的に辱めようとしているこの仇敵がそのような発想に至るのではと、性知識の乏しいスターティアでもさすがに連想した。

だが、その心中を見透かしたようにオブシディアは首を振る。

「ああ、安心なさいな。それはまだよ、少なくとも今は、ね……それどころか、ここよりも人目につかない場所にしてあげるから、むしろ喜んでいいわ」

そう言って、額の宝玉から黒いオーロラのような光を放ち、自分とスターティアを包む

オブシディア。シャドーマテリアルの構成員が隠密行動に使う認識歪曲フィールド……これを展開していれば一般人の目からはありふれた外見としか認識されず、バトルコスチュームだろうと騒ぎになる心配はない。

（ど、どういうこと……？　——でも、状況が変わるのはチャンスかもしれない。反撃のきっかけ、裕美香を助け出す糸口が見つかるかも……っ！）

依然として状況は絶望的、それでも決して希望を捨てないのが正義の剣姫たる所以。

スターティアは凜とした瞳に静かな闘志を宿し、廃工場の床からゆっくり立ち上がった。余裕の表情で自分を手招きするオブシディアの勝ち誇った笑みを、必ず崩してみせると再び心に誓って――。

* * *

「えっ!?　こ、ここって……っ!?」

廃工場の裏手から歩いてすぐ、夕暮れの薄暗さに包まれた、寂れた繁華街の裏路地……辿り着いたその建物を見て、スターティアは息を吞んだ。

外から見えにくい造りの入り口、紫色のネオン看板。『ご休憩』『ご宿泊』の文字と価格が書かれた看板——それは紛れもない、ラブホテルだった。

「そうよ、人間がスケベなことするホ・テ・ル♥　一度入ってみたったのよねえ♥　ああ、

それともスターティアちゃんは誰かと来たことあるのかしらあ？」

「な……ないわよ！ あるわけないでしょっ！」

ぼつと顔を赤らめ、反射的に否定するスターティア。育ちのいいウブなお嬢様である彼女は、このような施設をただいかわしくて自分には無縁な場所として認識してきた。みずから利用するなんて、もつてのほかだ。

「じゃあ、私とが初めてってことになるのね……♥ お互い初めて同士でホテルイン、憎ったらしいあなた相手なのになんだかドキドキしちゃうわあ♥」

（う、嘘っ……て、敵と、しかも女同士でこんな所に入っちゃうの……!!）

それは先のように屋外で辱められるより、よほど屈辱的な行為に思えた。

そして女同士とはいえ、オブシディアの股間には男のモノがまだ生えたまま——いくらフィールドで認識されないとはいえ、長く太いチンポを露出させぶらぶら揺らす彼女と共に歩くだけで、顔から火が出そうな恥ずかしさだった。

しかもつまり、ここに入るということは、またアレを……！

「ほらほら、早く入りましょうよお♥ あなたと今からたっぷりエロいことできるって想像したら、も……もうガマンがきかなくなってきたやいそう……っ♥ おっ♥ お外でおっ勃っうう♥」

「ひ、ひっ——!？」

恥知らずにも、半勃ちのペニスがビクビクと震えてその鎌首を再びもたげつつある。とろおつとした先走りが、アスファルトにボタボタ染みまで作っていた。

早くも息を荒らげる敵の女幹部に手を掴まれ、ラブホの入り口に連れ込まれるという悪夢的状况に、スターティアはそれでも諾々と従うしかなかった。

* * *

「ふうん、案外普通なのねえ？ もつといかがわしい場所かと思ってたわ」

「……そう、ね」

スターティアももっと悪い想像で警戒していたが、部屋は想像より意外と清潔で、普通のホテルとさほど変わらない。ただし中央に鎮座する、巨大なダブルベッドの存在感は大きく、何をする場所なのかイヤでも意識してしまう。

「……さあて、こっちいらつしやいスターティア♥」

ビキニ状の薄い衣服と威圧的なコスチュームをまとったグラマラスな銀髪美女が、ラブホのピンク色シートに腰かける様子は、傍目にはコスプレAVか何かにしか見えない光景だ。もつとも彼女はたやすく人間をくびり殺せる〴〵本物〴〵なのだが。

「あなたと私、密室に二人つきり……時間はたあつぷりあるからあ、めちやくちやに恥ず

かしいドスケベプレイでこの金玉の中身をコキコキヌキヌキしてもらおうわよお……♡」

「い、いちいち言わないでよっ、そういうことを……っ！」

予想はしていたが、隣のシャワー室を使うつもりなどオブシディアには毛頭ないらしい。まだヌルつく粘液をまとった極太肉棒が、すっかり勃起して天を突き、ベッドの上でだらしなく開かれた太ももの間でぷるぷる小刻みに震えている。

おずおずとそこに近寄って座るスターティアの鼻先を、早くも皮の隙間から漏れ出る先走り臭がむっ……♡ と刺激し、美少女剣姫は嫌悪に顔をしかめた。

「あらあら、経験皆無のお嬢様にエッチなお勉強させてあげてるんだから、むしろ感謝されてもいいくらいなのに。それじゃあらためておチンポいじりレッスン……かぶったお皮を剥くにはどうすればいいか、からスタートね♡」

「か……皮を、むく……？」

知識外の概念に困惑するスターティア。そういえば、皮が余っている包茎だとかさつき言っていたが……つまりこの余り皮を剥がすのだろうか？ ……誰が？

「ま、まさかあたしにこれを剥けって言あの……？」

「他に誰がいるのよ？ せつかくそれを楽しみにわざわざ余り皮にしたんだもの」
「り、理解できないわ……！ そんなことさせて何が楽しいのよ!!」

「ふふっ、私は楽しいわぁ。楽しすぎてもう期待でビンビン、フル勃起♥　じゃあまずは……この先余り皮を両手の指で引っ張って開きなさい……っ♥」

憎い敵のグロイ男根に触れるのは嫌で仕方がないが、親友を人質に取られた彼女に拒否権はない。おっかなびっくり伸ばされる、バトルコスチュームの白いシルクめいた生地に包まれた細く可憐な美少女戦姫の指。

（そういえば指で触るのは初めてだわ……うう、ぐにゅってしてキモチ悪い）

ぷに、と真っ白な指先が、巾着のようにシワのよった余り皮に触れる。それだけでビクッ！　と振り返った肉棒が脈打ち、一瞬手を離しかけるスターティア。

「そ、そのまま引っ張って広げなさいっ……♥　ゆっくり優しく、ね？」

（うあ……思ったより伸びるのね、これって……それに生暖かい……っ）

くによおお……っ♥　と、変身戦姫の清楚な白手袋でホールドされた赤黒い柔軟な皮が左右に広げられ、開けた隙間からより強い精臭と湯気が立ち上った。そこだけ空気が揺らいでいるかのような錯覚。

「ううっ、くっ臭い……っ！」

「あら失礼ねえ。顔逃がしちゃダメよ、次はそこにあなたのヨダレをたあっぷり、垂らしてもらうんだから……♥」

むあっ……♥ と鼻をつく恥穴から顔をそむけそうになるスターティアに、無慈悲に次の奉仕指示を出すオブシディア。

「よ、ヨダレ……!？」

「そうよ、おクチのなかにくちゅくちゅタメて、上からタラしなさい♥」

「またも意味不明の命令だが、従うほかない。目を閉じ、しばらく口をもごもごさせて、唾液を溜め込むスターティア……卑猥な目的に使われるとも知らず。

「んっ——！（う、うわ、あたし今すごい恥ずかしいことしてない……?）」

期待にビンビン震えるふたなり巨チンポめがけて、真上20cm程度から現役女子高生にして正義のヒロインの透き通った唾液が……たらありと糸を引いた。

指で広げられた卑猥な余り皮の器に、大さじ二杯分ほどの量が注がれていく。

「来た来た、おっふお♥ ちょっと冷たいわね♥ じゃあ指先で外から皮をくちゅくちゅイジって、中に唾液を馴染ませて、かぶった部分をユルませなさい♥」

「ううっ……こ、これでいいの……?（ぐ、ぐにゅって、変な手触り……っ!）」

ちゅく……♥ ぬくちゅっ……♥ ぬっちゅ、りゅっちゅ……♥

いやらしい水音を立てて、たっぷり余った包茎フタナリ皮を可憐な白手袋がおずおずといじくり、現役JKの唾液を潤滑油にして亀頭とやわやわ摩擦させる。

「んおお……♡ し、浸透してきたわあ、そこらのオヤジが何万円も払いそうなスターティアの唾液が、私の包茎チンポ皮にゆるゆる馴染んできたわあ♡」

「こ、こんなもののお金出して欲しがる人いるわけないじゃない……!」

「あらあ、そんなことないわよお？ 人間どもの欲望はよく理解してるもの……あなたとこんな場所でエッチなことができるなら、魂を売っても惜しくないって連中は腐るほどいるわあ……んは♡ そっそこ、カリ首周りは優しくイジってね♡」

自分が命をかけ守って戦う対象。いつも戦いを応援してくれるし、ちよつと恥ずかしいけど学校にはスターティアのファンクラブがあるくらいだ（コスチュームの作用で、知り合いに顔を見られても同一人物と認識される心配はない）。

彼女にとって街の人々とはそういう存在であり……まさか自分が人々の欲望の対象になっているなどとは、純真な聖光剣姫には想像もしないことだった。

「……街のみんなを愚弄ぐろうしないでっ！ あなたたちの作戦で負の精神エナジーを増幅されて怪人になることもあるけど、それはあくまで一時的なものよ!」

「ふふっ、純粹ね……♡ まあいいわ、今は私のおチンポ剥き行為に集中なさい、んっ♡ そろそろいいわよお♡」

ふやけるほどに送り込まれた唾液を隙間までまぶされ、ホカホカとHなおいの湯気を

漏らす赤黒い勃起巨根の先余り皮。

だいたいその構造を理解したスターティアが、羞恥に赤くなった上目遣いで睨みつけながら、それを掴んで一気に引き下ろそうとする——が、そこに制止が飛ぶ。

「違う、違うわよ！ 手なんかでムいちゃだめ……この包茎ボッキちゃんぽのお皮を優しいく、剥き♡ 剥き♡ むきむき♡ してもらうのはあ、あなたのそのカワイイ——く・ち・び・る♡」

「なっ……!!」

いちいち屈辱的な手段を提示するオブシディアに、赤みを増した頬でキツと一瞬、殺意の視線を向ける少女剣姫——それが陵辱者をなおさら興奮させるとも知らず。

「ところであなた、キスの経験あるかしら？ フフツ、ないわよねえお嬢様……さ、そのキスもしたことない処女唇を、あらためて私のチンポに捧げなさいな♡」

「こ、この……！ ちょ、調子に乗って……ッ！」

スターティアはどんなに嫌でも、オブシディアの指示に従うほかない。アイドルがマイクを捧げ持つようにビキビキ血管の浮いた極太肉棒を両手の指先でそつと支え、震えるピンの唇を異臭放つ包茎先端にゆっくり近付け——。

「おっほ♡ むちゅって粘膜密着キタわあ♡ そ、そのまま唇に力入れて皮ごと下ろしな

さいっ……んああチンポキッスで剥けっ♡ 包茎ムケるううう♡♡♡」

ぬくっ、ぬくくっ——ずろんっ♡

一番太く膨らんだ肉冠のキワの部分を越えようと、押し出された皮は一気に唾液で滑り落ち……みゆきつつ！ と勢いよく、巨大なテカテカ亀頭のすべてが露わになった。

「う、うええええ……き、キモチ悪いよおお……！ す、すごいカタチしてるう……っ!？」

奇妙な口触りに思わず顔を引いたスターティアが、その偉容に驚いて目を丸くする。

黒色寄りの幹と違い、暗いルビーのように赤くツルツルに光ったその先端部は、棒の先についた鶏卵を連想させる丸っこさだが、尻のような先端の割れ目からダラダラと先走りを垂らしてまるで猛獣のように威嚇してくる。

あれほど余っていた皮はシワになってカリ首根元に寄せ集まっていた。ほぼ全周囲にキノコじみて張り出した高段差の肉カサが、戻るのを防ぐストッパーになっているのだ。

さあこれから目の前の生意気なクソガキを犯してやるぞとばかりに——嬉しそうにドクン、ドクンと上下に揺れて痙攣するオトナのオス肉凶器がそこに完成し、性をろくに知らない少女を圧倒していた。

「うふふっ、どう？ 立派でしょう私のズル剥けおちんぽは……♡ じゃあまずはそうね

え、せっかくだからその清楚な白手袋のままであ……ぎゅってナマおちんぽ握って、すこすこヌキヌキ♥ 手コキしてもらいましょうかしら♥」

「手……手で握ってシゴけて言うの、今度はこれをつ……」

「あら、口でするより断然楽でしょう？ もっとヒドいことしてもいいんだけど？」

拒否権など元より存在しない。仕方なく、そつとその太幹の中ほどを剣の柄でも握るように、躊躇^{ためら}いがちに右手で包み持つスターティア。

（くッ、あ、熱い……っ！ なにこれっ、どくんどくん脈打って、手袋越しなのに火傷しそう……！）

指と手のひらがチンポに密着するのは初めてだ。不気味な血管の脈動が、伝わってくる熱が、固めたゴムのような弾力が、美少女戦士の処女指を侵略する。

「んんっ、シルクの感触いいわあ♥ もっと力を入れていいのよ、握手かちよつと強いくらい感覚でギュッ♥ っておちんぽをニギリなさいな……♥」

時間経過によってバトルコスチュームの自浄作用が働き、さつき廃工場で精液を受け止めた汚れたスターティアの両手袋は、すでに清潔に戻り乾燥もしている。

それゆえなおさら、汚れ一つない少女戦姫の白シルク指が、醜悪なフタナリチンポをそつと握って媚び奉仕する姿はそれだけで犯罪的な光景だった。

「う……こ、これくらいでいいの……？」

「お、おとお……♡ そっそうよ、そのまま手首のスナップきかせて手全体を上下にスコスコ動かしシゴきなさいっ……お、おっほふ♡ い、いいわあああっ♡」

ぬっ……ぬこっ……♡ しゅ……っこ、ぬっこ♡ しゅこっ、りゅここっ♡

最初はおっかなびっくり、だんだんと速度をあげて、すべらかな生地に包まれた少女戦姫の指が、宿敵のズル剥けペニスに初手コキ奉仕する。

（うう……皮ごとヌコヌコ動いて気色悪い……それに動かすたびにグイグイって硬くなつて反り返ってるし……！ さ、先からまた何か漏れてるよお……）

「し、シルク越しの肌触りがチンポにビンビンくるうう……もつと強くニギニギしてっ、シコリまくってええっ♡ 手袋コキコキしてええ♡ ひ、左手で先っぽもサワサワしてちようだああい♡」

勝手な命令のまま、左手をパンパンに膨らんだ亀頭に近付け——割れ目から漏れる先走りに触りたくないの、上からかぶせるように五本の指先だけをギリギリ接触させて 赤く広大な表面上で広げたり狭めたりしてコチョコチョする。

「んおおっっ!! な、なかなかイイわその亀頭くすぐりっ♡ やるわねスターティアったら、そのままもつと強めに幹もゴシゴシ、海綿体への刺激とタイミングを合わせてスケベ

奉仕なさいっっ♥」

「こ、これは汚れるのが嫌だからやってるだけで……っ！　うう、またさつきより硬くな
つてきてるよ……っ！　に、ニオイも強くなつてえ……」

敏感亀頭をシルクの指先に優しくくすぐられ、ギチギチに太くなつた肉幹をこっしゅん
ごしゅん強くシゴかれる複合攻撃に、オブシディアが腰を浮かしてあえぎ悦ぶ。

先端からタラタラと嬉しそうに漏れ続けるトロみのついたカウパーが、いつの間にか手
袋に染みて……ぐっちゅりゅっちゅ　♥　ずちゅぬちゅぐちゅっ　♥　と音に卑猥さが増す。

「さ、先っぽを犬の頭でも撫でるみたいにぐりゅぐりゅナデナデしてちようだああい……
っ♥　おおっそれよそれええっ　♥　へえあ　♥　上手よスターティアっ、初めてなのに手コ
キの才能あるわあ……♥」

「そ、そんなこと褒められても嬉しくもなんともないわよっ！　ううっ……は、はやく終
わってよおお……っ！」

羞恥と嫌悪から逃げるように、普通なら痛いほどの速度で握りシゴきの強さと速度をあ
げるスターティア。スナッパをきかせて根元から上へ走らせた指は、張ったエラに当たっ
てニュチュンッ　♥　と止まり、その刺激すらオブシディアを楽しませる。

「しっ♥　心配しなくてもそのままコかれたらガマンなんかできないわああ　♥　ほらほら

出てきたでしよ、さっきみたいにおキンタマがあ……っ♡ おほっ♡」

「ま、またコレっ……!! うええ……っ」

だぶうん、と目の前にレーザービキニから飛び出す、ずっしり巨大なフタナリ両玉。それが大量射精の前兆だとすでに知る美少女剣姫は、おぞましさに顔をそむける。

「ねえスターティア♡ 左手でここを、タマタマをさわさわもみもみしなさい、ただしビンカンな部分だから優しくね……♡」

（うう、くっ……ど、どれだけ恥ずかしいことをさせれば気が済むのよお……!）

さわっ♡ さわわっ♡ と、おっかなびつくりふたなりデカ玉をくすぐる手袋越しの刺激が加わり、さらに女幹部の射精欲はグツグツと加速していく。

「ん、おお……そうそれっ♡ い、いいわあ……♡ せ、精子すごい勢いで増えるうう……♡」
正義の玉揉みマッサージで悪のミルクタンク元氣になっちゃうわああ……っ

「な、何よそれっ!? うああ、これ生暖かくてヘンな手触りでキモチ悪い……っ!」

ビン勃ちチンポをりゅこぬこシゴきつつ、だらしなく湯気をたてるシワだらけの巨タマを嫌々撫で揉みさすらせられるスターティアの白手袋。皮越しに硬い手触りが返り、グツグツと中で煮えたぎりながら生産されるマグマのような精液が幻視されるかのようだ。

「イイわよイイわよお、もつとブザマにタマ奉仕なさいっ♡ お次はあなたの可愛いおクチにキンタマ含んで、こころ舐め転がすのよおッ♡」

「く、口ですって!?! こ……これをお口に入れろって言うのッ……!?!」

それはなまじチンポをしやぶるよりよほど、屈辱的な行為に思えた。だが、裕美香への暴行をちらつかせるオブシディアの命令は、今の彼女にとって絶対だ。

涙をこらえて顔を寄せ、でっぷりしたシワ袋に唇をつけ……ティアラに彩られた清楚な金髪を揺らし、聖光剣姫のキスさえ未経験のJK処女リップが、悪の女幹部のふぐりに押し当てられ——少しの躊躇を経て、ぬろんっ♥と口に含んだ。

[illegible]

（くううッ、こ、これを思いつきり噛み千切つてやれたらどんなに……！　で、でもそれじゃ裕美香を救えない……つ、今は耐えなきや……うええ……！）

小さな口腔をたつぷり占拠するおぞましい生暖かさの屈辱。憎い敵が急所を自由にさせているのに攻撃できない焦燥感。美少女戦姫は身もだえながら、その理不尽にこぼれそうになる涙を必死でこらえる。

「ほら止まってるんじゃないわよ、気合入れてちんぽシゴきながらねっとり玉しゃぶ愛撫なさいなっ♡ つほ♡ ほふうう……そ、そうよおお……♡」

（う、うううっ……おえええ、こっこれ舌触り最悪うう……!）

オブシディアに乱暴に頭を押さえつけられ、嫌々口内のタマをしゃぶりつつ、右手でぐっちよずちよとシゴく動きを再び早めるスターティア。ラブホのベッド上で展開する本来ありえない奉仕の構図に、女幹部の嗜虐的興奮も超加速する。

「ああゝゝっ♡ あなたのタマフェラで精液グツグツ煮えたぎってきたわああ♡ 来そうよもうすぐ来そうよおお♡ いよいよ、スターティアに念願のアレを——が、顔射を喰らわせる時が来たようねええ……っ♡」

（え……？ が……がん、しゃ——?）

聞き慣れない単語に、巨タマを口に含みながら困惑の視線で見上げる少女剣姫に、オブシディアはにやにやとイヤらしい勝者の笑みを浮かべて解説する。

「あら、ネンネのスターティアちゃんは知らないのかしら？ チンポから勢いよく発射される精液を、女の子の顔面めがけてどぴゅどぴゅブツかけてドロドロに汚す、とおっても征服感バツグンのドスケベお下品フィニッシュ……それが顔射、よ♡」

（か……顔に、あ……アレをかける、ですって……っ!）

これからの運命を知り、困惑と恐怖の色を浮かべるスターティアの顔を、オブシディアは髪を軽く掴んで一旦タマシヤぶりから引き離れた。

——るっぽんっ♡ と、その口からよだれまみれのキンタマが勢いよく外れて揺れる。

「……つぶはあ！ な、何よそれ、しっ信じられない、最低ッ……！ お、女の子の顔をなんだと思ってるのよ!？」

「なにつて、もちろんお便器よ、に・く・べ・ん・き♡ か、覚悟なさい……♡ あなたの恨み重なる生意気な顔に、人間の男の何十倍もの死ぬほどくっさい大量ナマ精液、思いつきどびゆるどびゆる排泄してやるから……っ♡」

「ひっ……そ、そんなのイヤああっ……!？」

律儀にチンポを右手でシゴきながら抗議するスターティアに、はあはあと息も荒く、銀髪を振り乱して欲望まみれの宣告をするオブシディア。限界までビキビキに張ったズル剥けちんぽが、ビクンッ!♡ と何かのタガが外れたように跳ねた。

「んおっほおッ♡ おおおううつツツ♡ キたきたきたわああ、ごんぶと精液尿道昇ってきたわもう手遅れよおおおっ♡ 泣いてもわめいても誰も助けてくれないわスターティアああっ♡♡」

女幹部は右手でがっしりと美少女戦姫の後頭部を掴み、左手はチンポから思わず手を離

そうとした白手袋の上からかぶせるように重ねて、強制的にごしゅごしゅごしゅツツツ!!
♥ とラストスパートの猛烈なシゴきをかける。

「やつやめてええええつつつつつ!!? やだやだやだ先っぽくって膨らんできてるううう
っ!!?」

「いいいいクイクイクイクううう~~~~ツツ♥ すっスターティアの泣き顔に
いいいつ♥ ラブホで悲願の顔面強姦ぶっかけレイプ炸裂三秒前っへええええつつつ♥♥
お顔の処女にお別れを言いなさいっひほおおんほおおつつつつツツ♥♥♥」

くぱっ♥ ——と、爆発寸前の爆弾のように小刻みに震え熱を放つ亀頭先の、おぞまし
い割れ目……精液射出口が、無慈悲に開いた次の刹那。^{せつな}

ばびゅっ……るうううううつつつ——!!!

破裂音めいた発射の音。コスチュームの力で増幅されたスターティアの動体視力は、チ
ューブ状歯磨きほども太い白濁ザーメンロープが空飛ぶ毒蛇のように空中をのたうち、自
分の顔面へと迫り来る光景を絶望と共に見つめていた。

そして——!

「おおっひいいい♥ おおおああおおおつつつ♥♥ つつついについに世紀の瞬間よ
おおんほおうううつつ♥♥ 聖光剣姫のお澄ましっツラに悪のフタナリちんぽミルクこつ

てりみっちり大爆噴どばどばぶっかけ中うううつつつつ♡♡♡」

「つぶあ!? あぶっ……つきやあああああつつ!!! つひいいつつ、うえええつつ
っ!!」

びゅちゅんつつ♡♡♡ びゅばちゅつつ!! どばぶびゅううつつ♡♡♡

びゅちちっ……ばちゅううつつ!! ぷぶっ♡ どばぶつつ♡ びゅるるどぷううう

ツツ!!♡♡

まずは正面から小鼻の右脇に着弾炸裂し、続いて形のいい左の眉から前髪にかけて縦断する太ザーメン帯！ 勢い余って後ろの壁にまで臭い飛沫を散らしつつ、狙いを調整された次弾が、右耳から柔らかいほっぺたにかけてを野太く横断し、すべすべした綺麗な肌を容赦なくねっちより白濁汚染する！

どっぷんどっくん脈打つ極太肉ホースから、さらにヒリ出され続けるゲル状粘液鉄砲水が、白い額を、すっきり通った鼻筋を、ふんわりした金髪を、スタージュエルのはまったティアラを、それでも敵をキッと睨む目尻付近を——どびゅる、んどびゅるるツツと遠慮の欠片もなく汚し犯し抜いていく。

「オラッがつつり浴びなさい小娘えッ!!♡♡ 私偉大なスケベスペルマを処女顔面で従順に受け止めて敗北猛省するのよおおお~~~~♡♡ こっこの瞬間のためならあなたの



今までのクソ無礼ウザさも全部許せるわあああつつ♡♡ によっ尿道ばびゅばびゅ精液通る痛痒いくらいの征服射精快感んんつつ♡ さっ最高の愉悦大爆噴よおおんおお♡♡」

（あ、あああああつつつ!!! か、顔も鼻も耳もおでこもあごも目の上もおおつつつ…!! ぜ、ぜんぶ汚されて、熱くてクサいので塗られてるうううつつ!!!）

ごびゅっ…どびゅぷううつつ♡ びゅぽっ、ぶちゆるるるつつ♡♡

びゅぷくっ♡ びゅこんっ、びゅここ…ぬろおお…どろおお…つつ!!

跳ね返ったり狙いをそれたりした爆濃精液弾が、清楚なミニスカートや甲冑とフリルの複合した肩から胸にかけてのラインなど…バトルコスチュームのあちこちにまで、しつこくランダムにぶちまけられる。

オブシディアの悪意に満ちた大放出は、顔を――すなわち人格そのものを辱め陵辱するのはもちろん、スターティアという正義の美少女戦士の気高い戦い自体を、その象徴たるコスチュームごと嘲り、汚し抜き、地に墮とすかのようだった。

「んあああ♡♡♡ こ、こんなにたらふくブピュリ続けるの初めてよおお♡♡ あなたの可愛いおかたに何十億匹も精子ひっかけてると思うと、死ぬほどザーメン噴射はかどつちゃうう♡♡ んおおお…つつ♡」

「えほっ、げほっ……うえええ、あううう……！(目、目が開けられない……顔が精液で重いい、鼻から入ってくる臭いもクサすぎりゅうう……あ、頭がヘンになるうう……♡)」

むわわっ——♡ぬろおおおっ……ぷううん……っ♡

しこたま排泄された白濁濃厚ザーメンを、紅潮した顔や髪に乗せた卑猥で無様な姿を晒す美少女剣姫。高い粘度を保ったそれはプルプル震えながらもなかなか流れ落ちず、射精された時の軌道をそのまま描いて貼り付いているのが余計卑猥だ。

「すっごいニオイ、今のあなたの顔面チンポクサさでひどいわよスターティア♡しかも湯気までむわむわ立てて、本当にお便所顔になっちゃったわねえ♡」

「じっ、自分でぶちまけておいて何をっ……うえええっ、えぶっ……!!」

口を開いた途端に唇の上の精液が流れ込み、むせて苦しむ美少女剣姫。顔からぼたたと滴り落ちた粘液が、首筋や腕、腹部などに垂れ散って、戦衣の清楚な白に欲望の醜い白を加え、新たな精液ダマリを作っていく。

「ああ、射精^だした射精^だした、ぶっ放しまくっちゃったわあ♡こんなにたあっぷり……あらためて見ると恥ずかしいわねえ♡ そうだ、こうやって記念に馴染ませてあ・げ・る

♡」

「な、やあッ……か、顔にアレがつ、ち、チンポが乗っ——!!」

べちよんッ——とやや硬さを低下させた太チンポを、顔射陵辱にあえぐ少女の顔面にだしぬけに乗せるオブシディア。

そのまま筆で絵の具でもかき混ぜるかのように、スターティアの髪を掴んだまま、ズル剥け亀頭で顔面にこつてり乗った精液をぬりゅんぬりゅん塗り伸ばす。

「くううお、おほオ♥ あなたの顔マンコで発射直後のチンポこするのキクううう♥」

「やああっ嫌あああッ……!! やめッ、ほッホントにクサいのが取れなくなるうう……!!」

むっちり褐色尻に力を入れて腰ごと下品にカクカクと動かし、スターティアの顔面をザー汁チンポ拭きティッシュにまで貶めるオブシディア。

「んあ、あへあ♥ んおおッ……こ、この刺激だけで甘イキしちゃううッ♥ つ、追加ザーメンひっかけるうううッ!♥」

「う、ウソおつまだ来るのおッ!! も、もうぶっかけられるの嫌あああ!!」

どぴ♥ ぶぴッ♥ びよぶ♥ んべちよお……ッ♥

必死に顔を振って逃げようとする弱々しい抵抗もむなしく、ゼロ距離でさらに放たれるスペルマ追撃。さっきの大噴射に比べれば可愛らしい勢いとはいえ、普通の男の射精と遜

色ないほどのエグい濃さと量だ。

「うふふっ、一生ニオイとれないくらい、私のを毛穴の隅々までヌリ込んであげるわねえ♥ まあ、そんな心配しなくてもこれからまだまだ上塗りするんだけれど……うふふ♥」
（うええっ……あたしのカオ、こんな奴のものにされちゃったよお……ゆ、裕美香ああ……！）

じつとり淫らな空気に満ちたラブホテルの一室、ベッドに腰かけ顔面支配射精の余韻に浸るオブシディアの脇で力なく床に跪きながら……果たして本当にこの状況を逆転できるのかという一抹の恐怖が胸によぎるのを、おぞましい大量精液とフタナリチンポの質量を顔全体でイヤというほど感じながら震える聖光剣姫であった――。

第4話 屈辱の精通！ ふたなり美少女戦姫、初めてのおちんぽ恥射精！

「んほっ、んおッほおおうつつ♥ こっ今度は頭からひっかけてあげるわスターティアっ、精液シャンプー浴びなさいつつ♥ んああつつ、おおお出る出るううつつ♥」

「つつつ!! うあうツツ!? いっ嫌ああッ、かつ髪につ……さ、最低、最悪うう……!」
血管がビキビキに浮いた太いフタナリ魔巨根から再び、びゅちびゅちと空中をのたくつて放たれる精液は、量も濃度も臭気もまるで衰える気配を見せず、聖光剣姫の黄金の髪めがけて降りかかり、ティアラごと新たな陵辱の汚染痕を付け加えた。

すでにスターティアは、萎えることを知らない宿敵の絶倫魔チンポによる大量射精を執拗なまでに、可憐なコスチュームの至る所に計10発近くも喰らわされている。

そのふんわりした黄金色の髪をチンポシゴき道具にされ、輝くロングヘアの中にぶちまけられた精液を無理矢理塗り込められ――。

コスチュームからのぞく、無駄な毛の一つもないすべらかな脇の下でも……そして十代の肉体だけが持つハリとなめらかさを誇る、柔らかだが健康的に引き締まった白い太ももの間でも――。

いずれの処女地にもオブシディアのグロテスクなフタナリ巨根を挟まされ、コスらされ、言われるがままに精液を搾り出すじめな肉玩具として扱われた。

今や、その騎士鎧とアイドルの舞台衣装を合成したような凛々しくも愛らしい戦姫の装束は、シルクやサテンに似た生地といい、金属質のアーマー部分といい、それらを彩るフリルといい——あらゆる部位をねつとりと濃厚な悪の汚精液で征服マーキングされ、ネバついた糸を引くヌメリと異臭に汚染しつくされているのだ。

——だが、それでも。

「ムダよ、オブシディア……！　どんなに汚されても、あなたはあたしの心を折ることはできないッ！」

それでもなお正義の聖光剣姫は、精液にまみれた顔をあげて陵辱者をキツと睨みつける。その不屈の魂は、どんなに汚されようと気高さと闘志をいささかも失ってはいなかった。「なるほど、ね……確かに嫌悪感や苦痛をただ与え続けても、戦いの中と同じようにあなたはそれに耐え、簡単には屈しないでしようねえ……」

ラブホテルのベッドに腰を下ろし、あれほど連続射精したにもかかわらずまだ萎える気配を見せないバイオ改造巨根をびくびくふるわせながら思案するオブシディア。だがその声音にもまた、敗北感や落胆は一切混じっていない——むしろそうでなくては面白くない

とばかりに、宿敵の気丈な頑張りを楽しんでいるかのようだ。

「でもねスターティア……まだまだ本格的な行為が始まってすらいらないことくらい、あなたにもわかるでしょう？ あなたは本当にそれにも耐えられて？」

スターティアの細い腰を抱え上げ、座った自分のチンポの真上にそのスカートの中を……いまだ手をつけていないもつとも大切な場所を、ググツ——とゆっくり近付けていくオブリディア。

「——っ!!」

女性器の場所めがけ、迫る宿敵のペニス——いよいよ貫かれ、処女を奪われるのではないか……性知識のさほど豊富でないお嬢様でも、当然予想されうる最悪の展開。

しかしそれゆえにスターティアは、一連の陵辱劇が始まってからというもの、その運命に対する覚悟を固めていなかったわけではなかった。

「好きに……するといいわ！ でも、たとえあたしの体をあなたの醜い凶器が貫いたとしても……！ それでもあたしは、絶対に負けたりなんかしないッ！」

気丈な反抗の言葉。さすがに声は震えているものの、そこに絶望の色はない。その表情をしばらくじっと見つめていたオブリディアは、にやりと黒いルージュの唇を歪め——美少女剣姫の秘所に迫りつつあった肉の筒先をピタリと止めた。

「フフッ、確かにね。今、あなたの処女を無理矢理奪っても、それはただの暴力行為の一種……面白くも何ともないわ。それに一生に一度しかないハイライトなもの、もつと劇的なシチュエーションを用意してあげないとねえ……♡」

不穏なセリフでほくそ笑みつつ、おもむろにオブシディアは一旦引いたチンポの代わりに、水色と白のミニスカートの上から、スターティアの下腹部に手のひらを近付けた。

「そう、嫌悪感や苦痛は我慢できる……でもまったく逆のもの——快楽ならどうかしらあ？ それも……あなたのまるで知らない快楽、よ♡」

「なっ……何、を……ッ、あううッ!？」

キィイイン——と、女幹部の額の黒曜石が怪しげな音と暗い光を放ち始めた次の瞬間、ドクン……と体の内側から不気味な鼓動が響き、みずからに起きた異変に狼狽するスターティア。

「そうそう、言ってなかったわねえ……あなたにさつきたつぷり飲ませた私の精液には、無数の微小なバイオ改造ナノマシンが混入されててねえ？ こうやって外から指令を与えてやれば——すぐに完成するわよ、愉快的なモノが……ね♡」

「そっ、そんなものをあたしのカラダにッ……!! い、一体何をするつもり……んううっ、あぐうううッツ!？」

今まさに、シャドーマテリアルの異次元科学によって自分の肉体が造り替えられている——そのおぞましい事実と、どんどん強くなる体内からの熱い鼓動に、スターティアは青ざめた顔で震えながらホテルの床にうずくまる。

そして……少女のカラダに、信じがたい淫らな変化が訪れた。

「えッ、なっ……何これっ、内側から膨らんで、なっ何かが……で、出てきちゃ……ううううッッッ!!」

にゅずっ——ずずっ、ずむるんっ……♡ ずろんッッ!!

「い、嫌あああッッッ!!? あたしの体にお……おちんちんが……ッ!」

そう、飾り気のない純白無地の清楚なショーツからたちまちハミ出し、衝撃でめくられて花びらのように広がったスカートの中央に、文字通りおしべのようにびよこんと突き出したモノは——まぎれもない男性の生殖器、ふたなりの象徴だった。

「あらあら、これはまた結構ぶつといのが生えたわねえ♡ おチンチンなんて可愛いもんじゃないでしょう？ おチンポだわ、下品なオスちんぽ♡」

クリトリスのある位置のすぐ上から生えたそれは、同い年の男子学生の平均より、長さも太さもやや大きめだろうか？ 生えたばかりなせいか肉幹の色はまだ白っぽく、仮性包茎の先端からピンクの龟头がのぞいている。そして心臓の鼓動に合わせ、びくん……びく

んとかすかに脈打ち、熱を帯びて震えていた。

できの悪いコラージュ画像のような、清楚で凜とした美少女戦姫の体にまるで似つかわしくないグロテスクな部位——だが両者は紛れもなく、直接肉で繋がってしまっているのだ。

「はあい、女の子なのにキモいの生やしたふたなりおチンポ剣姫ちゃんのできあがり♡
そうよお、あなたはこれからメスの快感よりも先にオスの快楽を知るあさましいド変態になっちゃうの……♡」

「そっそんなッ、やだやだあああッ!? 取って、取ってよこれええッ!! う、嘘よこんなッ……んああううッ!!!」

混乱と羞恥と屈辱と恐怖が一緒に襲いかかり、さすがにパニックになりかかったスターティアを、文字通り未知の感覚が襲った。オブシディアの黒いレザー手袋に包まれた長い指が、だしぬけに正面から生えたてのフタナリペニスをキュッと握ったのだ。

「ばっ、ああうッ!? は、離しッ……ひうッッ!!」

「うふふっ、さすがに生えてすぐは痛痒さの方が先にくるみたいねえ?」

神経の束を直接掴まれるようなダイレクトな感覚に、スターティアは腰を引いて逃げることもできずかすれた声をもらす。彼女にはまだ、それを快感と認識するだけの余裕はな

い——それに気付いたオブシディアは、新たなカードを切った。

「さて……一つ賭けをしましょうか、スターティア」

「賭、け、ですって……っ!!」

「そう。これからそのおチンポからの射精……精液のお漏らしを、三分間ガマンできたらあなたの勝ち——シャドーマテリアル七冥塊の誇りにかけて、人質にとったあなたのお友達は解放すると約束するわ」

『七冥塊の誇りにかけて』それは彼女らシャドーマテリアル幹部が、誓いを口にする時の言い回しだ。卑怯、卑劣を地でいくオブシディアですら、この言葉に続けて嘘を言ったことだけは一度もなかったのだ。

「本気で……言ってるのね……!!」

「ええ、そうよ。せっかくの余興だもの、本気で面白くしてあげるの。しかもハンデとして、私は手——この十本の指でしかソレに触れないわ、どう？ ……ああそれとも、せっかくこんなチャンスをぶら下げられても挑む自信すらないのかしら？」

チャンス。確かにこれは裕美香を救う千載一遇の機会に違いない。オブシディアは優位に溺れるあまり、愚かな提案をしてきたのだ……それはこの状況下で、初めて見えた突破口に思えた。

ありえない異形のモノを生やされ淫らで滑稽な姿に貶められた美少女は、それでも再び戦士の瞳となつて陵辱者を見上げ、まっすぐに決意を口にする。

「後悔するわよ、オブシディア！ たった三分間くらい、絶対に耐えてみせるっ……そして裕美香を救つてみせるわ、必ず！」

未知の器官と未知の感覚……とはいえそれが生理的なものにすぎないなら、意志の力で耐え抜くことはできるはず、ましてや手の刺激のみ——そうスターティアは結論付けた。事実、さつきその器官から伝わってきたのは痛痒さと不快さだけ。

第一、友を救うためなら自分はこれまでどんな困難も乗り越えて来れた……その自信が、生やされた醜い魔根のおぞましさをすら一瞬忘れさせ、正義の美少女戦姫の闘志を炎と燃やしたのである。

「フフッ、それでこそ私たちの宿敵、正義の聖光剣姫さまね♥　じゃあ逆に、あなたがこの勝負に負けた場合のことだけど……そうね、その内容はこの紙に書いて伏せておくとしたらいいよ。あとのお楽しみよ」

「……なんでも構わないわ。どうせ裕美香がそっちにいる限りあなたの命令を聞くしかないんだし、第一負ける気なんてこれっぽっちもないもの」

それは頼もしいわね……と笑みを浮かべつつ、ベッド脇のメモ用紙に手をかざしてそ

の裏側に何事かを書き込むオブシディア。

そう、すべては計算通り——今にも大声で笑い出したくなる胸の内を押し隠しながら、悪の女幹部はヒロインの陵辱劇を新たなステージへと進めるのだった……。

* * *

（ううつ……こ、今度はまたこんな恥ずかしい格好を……ッ！）

ピンクのベッドに腰かけさせられ、はしたなく股を開いて、その間に片膝をついたオブシディアの眼前にショーツからハミ出たままの男性器を突きつけているという倒錯的な状況に、スターティアの頬がうつすら羞恥に染まる。

さつきと逆、悪の幹部が正義のヒロインにまるで奉仕するかのような構図だ。

「さて、と♥　じゃあはじめましょうか、スターティア。これからきっかり三分以内になたを射精させられれば私の勝ち、我慢できればあなたの勝ちよ」

ベッド脇のデジタル時計がちょうど18:00に変わったのを合図に、淫らなゲームは始まった。まずオブシディアは銀髪を揺らし唇を寄せて、力なく萎えている生えたとペニスに……ふつ、と息を吹きかけた。

「……っ、あ……うつ……!!」

ぞわっ——と背筋を這い上る奇妙な感覚。予想外の襲撃に、少女の金髪と肉茎が同時に

ぶるつと震えた。蠱惑的な黒いルージュがペニスから数cmの距離でぐるりと位置を変えながら、なおもその全周囲に長い息を吹きかけ続ける。

（な、なにこの感覚ッ……!! カユいような変な……っそ、それに皮に包まれてない先の部分が、特に刺激が強くなってるっ……で、でもこのくらいなら耐えられ——）

ぴくっ……ぴくんっ♥ と、女幹部の熱い吐息に反応してわずかに膨張しつつある童貞男性器の異感覚を、まだ何が起こりつつあるか把握できないスターティア。その見通しは、あまりにも甘かった。

「ふふっ、ちゃあんと感じられるようになってるみたいね。じゃあいよいよ愛撫のはじまり……よ♥」

「え——っ、つつんおツツ!!」

しゅこっ……とひとシゴき。ほんのひとシゴきオブシディアが少女の男根を黒レザーの指で握りコすりあげた。ただそれだけで妙な声が勝手に漏れ、背筋がぴんと反り、ぐぐっ……♥ と掴まれたモノは硬さ太さ長さを一度に増したのだ。

（え、な、何これっ……なんで、いま勝手に声が漏れッ……!!）

——しゅこっ、にゅこっ……しゅりゅっ、りゅここっ……♥

「んあッ、おんあううつつ!! え、なッ……やだ、これッ……んっあ♥」

たおやかな指に皮と肉を摩擦され、シゴきたてられる——ただ単純なその動きが、脳の快楽神経を直接驚掴みにされているような暴力的快感となつて、ウブなお嬢様の全身を甘く揺さぶった。しかも1ストロークごとにどんどん血が流れ込み張り詰めていく海綿体は、その肥大化に比例して快感伝達度を何倍にも増していくのだ。

「うふふ、腰逃げたりなんかしちゃダメよお……ほおら、ビンビンにフル勃起してきたわよスターティアの仮性包茎おチンポ♥ 憎い敵の手でコキコキされて簡単に快楽貪っちゃう節操なしフタナリちんぽにすぎなかったわねえ、あゝあ♥」

一直線に伸びた裏スジを、早くも女泣かせのエラを形成しつつあるカリ首を、巨木の幹にも似た根元を、皮越しでも突っ張っていることがわかる亀頭を……時に痛みに変わる寸前の強さでシゴき、時に優しく撫でさすり、なだめてあやす千変万化の黒い指技。

それはさつきスターティアがやらされた稚拙な奉仕とは比較にならない、百戦錬磨の男でもうめきを漏らす魔性のテクニクだった。オスの快感自体を初めて味わう彼女に抗えるはずもなく、オモチャのように性感を昂らされていくがままだ。

（なっ何これえッ……さ、さつきはキモチ悪いだけだったのにつ、全然違つ……!）

慌てて時計を見る——なんと18:00のまま、まだ一分も経ってない！ 天井知らずに高まり続けるおぞましい快感、スターティアの脳裏に恐怖にも似た予感が走る。

「いきなり結構イイキモチになっちゃってるみたいだけど、ここからが本番よお？ さあ
どんどん刻んであげるわ、あなたの生えたて弱々おチンポに、容赦ない未体験快樂の味を
ねっ♡」

今や痛いくらい反り返り、亀頭を半分ほど包んだ皮の上からでもうつすらエラの段差が
わかるほどになった童貞ちんぽ……それを握ったオブシディアのコスチュームについた黒
曜石が光を放つと、手袋からにじみ出るように透明の高粘度液——ローションに似た液体
が出現し、その冷たい違和感に少女剣姫は細い悲鳴をあげる。

——にゅちっ、にゅるこっ♡ にゅるるっ、ちゅここっ♡

「ッひううっ!! んお、あおっ♡ ちよ、ちよっと待つ……はおおっ♡」

潤滑液を用いてのヌルヌル摩擦……格段に直接的で強烈な快感の到来。『もうこれ以上
は気持ちよくなならないだろう』というラインが、ひとコキごとにあっさり更新してどこま
でも上昇していく事実には恐怖すら覚え、スターティアは今や犬のように無様に舌を突き出
し、唾液を滴らせて情けない声を漏らしていた。

「あらあら、もう泣き言を口にしちゃうのおく？ ちよっとお、まだようやく一分つてと
ころよお？ さっきの大口はどうしたのよチンポ剣姫ちゃん、ほらほらほらあ♡」

ただ単純なシゴき運動ではなく、はずみをつけてしならせ、左右や上下、あるいは斜め

に振り回すように童貞美少女肉棒を弄ぶオブシディア。指で作った狭いヌメヌメ輪っかにスコスコと密着ちんぽを潜らせ、根元から皮に包まれたカリ首までを甘くキュッキュと締め付けながらの愛撫コキ連打に、未精通の童貞処女が耐えられるはずもない。

「ひっひひひっ ♡ んぎっ、んおお ♡ うそうそ嘘うそおおっつ、こっこんなの知らないいっつ ♡ こんなおつて、こんなおつてえええっつ!! ♡」

「ビン勃ちおちんぽガンシコされるのつてたまらなくキモチイイでしょう？ おっぱいやおまんこやクリトリスの快感より先に、あなたはおチンポでのオス快楽を覚えちゃってるのよ今まさに ♡ あゝあ、もう普通の女の子には戻れなくなっちゃうわねえ……？」

苦痛でも嫌悪でもなく、背骨が溶けて脳に極甘シロップが広がっていくような多幸感、フワフワした浮遊快感。それはお嬢様育ちのヒロインが生まれて初めて体験する、一発で人格そのものをダメにするような麻薬的洗礼だった。

つるつるピンクの亀頭先端にじわあっ…… ♡ と、涙のような先走りがにじむ。

「あら、あらあらあ？ そんなに腰を突き出して……あなたひよっとして自分からチンポ動かしてないかしら？ スターティアったらエロいわねえ ♡」

「そっ……そんなわけないでしょ、ううっ ♡ あっあなたが動かしてっ、るんだわッ、んおお…… ♡ あっあたしはただ耐えてっ……んへあっ ♡」

と、その瞬間。オブシディアの手がピタリと急停止した。

そしてスターティアは見てしまう——両手をシーツに突いて支えにし、ベッドの縁から突き出した腰を浮かせた自分が、一拍遅れてみずから指オナホールにチンポを突き込むのを……ぬちゅっ♥　と言いつのしようがない音を鳴らしながら。

「え——う、ウソッ……こ、これは違ッ……♥」

「アッハハハッハ、ち・が・わ・ないでしょおおっ!!」

ずちゅっ、ぬちゅちゅっ♥　にゅこちゅこっ、りゅっくりゅっぷっ♥

「おっ♥　ひいいいっつ、おひやいいいいッツ!!!♥♥」

「ダメだの耐えるだの清純そうにほざいておきながら自分から腰振って敵の手でチンポ快感貪ってちゃ世話ないわよ、このお猿さん♥　ほらほらエラを指がぬるンッて抜ける時の刺激が大好きみたいねえっ、これが欲しかったのかしらあ!!」

「違っんおおひいいいっつ♥　ふっふえあ、こんなの欲しくなんかッ……キモチよくなんかっ♥　あんあああッツ!!♥」

もうとつくにさっきから、肉幹の根元のさらに奥からこみ上げてくる「波」があった。それに身を任せてしまったらどうなるかは想像に難くない……シーツに爪を立て、全身に脂汗をじっとり浮かせて、トイレを我慢する時のようにひたすら決定的決壊を先延ばしに



するのが、童貞少女に唯一できる抵抗だった。

時計表示は18・01、いまだ半分もすぎていないかもしれないのに！

（さあて……このまま本気でやれば十秒以内に発射つてとこだけど……せつかくだからもつと恥ずかしいイキ方で心をバキバキに折ってあげないとねえ……♥　そのためにまずは、ニセの希望を鼻先にニンジンみたくぶら下げてあげるわあ♥）

オブシディアのコスチュームから黒曜石が離れて宙に浮き、再びあの立体映像……囚われた裕美香の姿を投影した。おとなしそうな印象の少女は気を失っているようで、縛られた柱に制服姿でもたれ、白く形のよいあごに黒髪が一房はらりとかがっている。

「ゆっ……裕美、香あっ……！」

「そうよ、愛しのユミカちゃんよ♥　あなたがこのまま精液お漏らししちゃったら、大切なお友達を助けるせつかくのチャンスがパアになっちゃうの、わかってるわよねえ？」

守るべきものの姿をはっきり見せられたことが、いつも戦いの中でそうだったように、悪の猛攻に負けかけていたスターティアに理性と希望の灯火を再燃させる——それすらも女幹部の計算のうちと知るはずもなく。

「つく、くうッ……！　そ、そうよ……あたしは裕美香を助けるッ、そう誓った……っ！　だからこんなモノに、絶対に負けたりはしないのよッ……！」

その苦しそうな声からは、さつきまでの甘い響きが消えている。汗のじっとり浮いた顔をオブシディアに向け、全身にグッと力を入れて、クチュクチュと弱点をシゴかれながらもなお、反抗の闘志を取り戻した顔をキッと向ける少女戦姫。

（そうだ時計！ ……18・02になってる、いける……わ！ このままあと60秒未満、耐えられないはずなんて……ないッ！）

「そう……敵ながら見事な闘志ね、それでこそスターティア。じゃあ私も遠慮なく——手加減せずに思いきりシコッちゃっても、ぜんぜん大丈夫よねえ？」

「……………え？」

——手加減？

そう言ったのか？ 何が？ ……今までのが？ じゃあこれからののは……？

その意味を理解するより早く、スターティアの隣に腰かける位置に移動したオブシディアが、ローションに濡れた若肉茎を逆手できゅっ♥ とニギリ直し——！

……にゅぢゅッッ♥ ズっちゅぬっちゅッ、ちゅここっくにゅこじゅこッッ!!

「おッッ……♥ おっほッッ!! え♥ やっやッッうっウソ嘘嘘うそおッッ!!!」

これまでとは次元を異にする密着圧力とスピード、先端から根元までをひといきにぬちゅちゅちゅッ♥ と往復する変幻自在のストローク。そして左手の五指を亀頭にかぶ

せ、すりこぎでも使うようにコネ回す連携攻撃……それは今までの愛撫など兎戯に等しい、精液を無理矢理搾り取るための無慈悲な搾精運動。

「ひゃんああッッ!? がっ♥ ガマンしなきゃいけないのにいいッッ♥ とっ止めてえええッッ♥ これ無理無理むりむりいいイッッ♥ おひっいひいっつ♥♥」

「あっはははッ!! 案の定ちよつと本気出ただけで泣き言吐いたわね聖光剣姫サマ♥ なあにが『絶対に負けたりはしないのよ! (キリッ)』よ、なあんにも知らない処女で童貞のクセに笑わせるわクソエロガキ! さあ死ぬほど下品な精通させてやるから覚悟しなさいっ、ほらほらほらほらアッ♥」

もはや全神経を射精我慢に集約させなければ0.1秒ともたないスターティアの肢体を、オブシディアは額の黒曜石から放つ念動波——普段なら抵抗できるはずの力によって操り、下品なガニ股開き中腰ポーズを無理矢理とらせる。むろん両手は頭の後ろで組ませ、ヘコヘコと腰を前後に振らせるヒロインにあるまじき屈辱姿勢だ。

だが、少女の初射精を貶めるための悪魔的発想はそれだけでは終わらなかった。

宙に浮かぶ宝石から投影されたままの裕美香の映像に、突如として奇妙な物体が出現したのだ——それはまるで、空中から生える男性器の先端のような……!!

「うッ嘘っ……あれって、あれってまさかああッッ♥」

「そうよ、お友達が気になるみたいだから部分空間転移でおチンポ先だけあつちに行かせてあげたわ♥ さあ、優しい言葉でも——カケてあげなさいなッ!!」

絶望的な宣告と共に、闇色の空間にその先を突っ込んだようになった射精寸前ふたなりチンポを根元から上へ、にゅこにゅこりゅこりゅこおおつつ♥ とラストの追い込みをかける悪魔の指。

「いッイヤあああつつ!? こつこのままじゃっ♥ ゆっ裕美香にかかつちやううツツ、起きて裕美香逃げてお願い逃げてえっ、あひいいいつつ!?♥」

「泣いても叫んでも聞こえないわよムダムダ♥ 親友に初搾り臭ザーメンブツかけるのがイヤならあんたが射精ガマンすりゃいいだけでしょうがっ♥ あとたった十秒程度なんだから根性見せなさいよおッ!♥」

親友のため、正義の勝利のため、そして少女としての尊厳のため、全身全霊をかけて射精を押さえ込もうとする少女剣姫——だが、いつものような奇跡の逆転劇は起こらなかった。オスの生理現象と下賤な衝動の前に、ついに彼女の肉体はその高潔な精神を裏切ったのだ。

「あふっ、んほっ♥ んおお……んほおおおおツツ♥ のっ昇って♥ 何か昇ってくるううつつ♥ おチンポからッ……ばいつつ♥ んひっほおおおおおおおツツ♥♥」

「あらいクのね？ 憎い敵の女の手で、大切な親友めがけてくっさい童貞精通液びゅばびゅばブチまけ初どっぴゅん♥ しちゃうのね!! いいわよ出しなさいッ♥ しっかり見てあげるからッ、正義の美少女戦士のプライドも女の子の尊厳もぜんぶぜんぶなくして死ぬほど情けなくて恥ずかしくて気持ちいい射精しちゃいなさいスターティアッ!!」

「……びゅちぴッッ!! ばびゅちいいつつつ♥♥♥」

精通の瞬間、もはや声も音もスターティアには聞こえていなかった。絶望的状况も裕美香の安否さえ脳裏から消し飛び、形成されたばかりの尿道内を熱いゼリーが通り抜ける痛いほどの快感と、絶対的解放感だけが少女のすべてを支配していた。

びゅぶぶつ、びよびびいいっ♥ どびよるううつ、どくつぴゅ……ぷびいいっ♥

「おっおひいッ♥ んおおっほ、ほへええッ♥ ひっひゃほっ♥ ああおお……んお、おおお……ッ♥」

「あっはっはっはっは!! 何よその声、発情期のネコみたいっ! 射精ぶちまけ音もすっごい下品よあなた、私の宝石の機能でしっかり録画録音してあげてるから安心しなさいな♥ ほらほらヒリ出しながらしっかり見なさい、あなたの排泄してるスケベ汁でお友達がどんな目に遭ってるかをねえ!!」

強烈極まる初めての射精感覚につま先をピンと突っ張らせ、全身を総毛立たせガクピク震わせながらも、見開かれた少女の瞳は立体映像に吸い寄せられていた。

破裂しそうなほど張った筒先から、びゅるんびゅるんと放たれ続ける白いマヨネーズのようなオスの汚液が、眠る裕美香のつややかな黒髪や形のよい眉、ぷにと柔らかそうな頬、眼鏡、紺色のブレザーや白いブラウス、校章やリボンにまで次々と襲い掛かり、穢しつくす光景を——その陵辱者が他ならぬ自分であるという絶望を。

「あゝらあら、えぐいブツカケられ方されちゃってかわいそお♡ まるで変質者に襲われた被害者ねえ♡ わかってると思うけど私たちは指一本陵辱の手を触れてないわよ、スターティア……あの娘を、罪のない一般人を、大切な親友を——今ぐつちよぐちよに初ぶっかけキメて汚してるのは他でもないあ・な・た♡ なのよ♡」

「んおお、お……♡ ゆっ……裕美、香ああ……♡ ごめ……んっ、ごめんなさいい……がまん、できにやくてえ……せーえき、出しちゃってごめんによさひい……っ♡」

悲痛な謝罪の言葉と裏腹に、正義の美少女戦姫は上体をのけぞらせヨダレまで垂らして、ガニ股腰をカクカクと前後に振りたてるお下品ダンスに無意識に酔いしれ続ける。

宿敵の指をオナホ代わりに搾り出される元気いっぱいぷりぷりのフタナリ濃厚初搾りミルク……ようやく勢いをやや減じたそれは、親友の着る学校指定のブラウンチェックのプ

リーツスカートにパタパタとひっかけられ湯気と異臭をたてていた。

「初めてにしては豪快な噴射っぷりだったわよお、チンポ剣姫ちゃん♥ さて、勝敗は決まったみたいだから、紙の指示に従ってもらおうとしましょうかしら……ふふっ、その処女ボディにすっかり教え込んであげるわよお、まだまだこんなもんじゃないフタナリ快樂地獄で、どんどんダメになっていく気持ちよさをねえ……♥」

あまりにも甘美な敗北の余韻に、びゅるうつ♥ と最後のひとしほりを力なく噴き出し、ぜえはあと荒い呼吸を吐きながら、スターティアはその呪縛のような宣告をただ受け止めていた。

そう、あの最後の瞬間——生まれて初めての精液を吐き出した直後に、無情にも時計が一拍遅れて18…03を指す光景だけは、しっかりと瞳に焼き付いていたのだから……。

第5話 学園の剣姫！ 淫らに染まりゆく優姫の日常！

床も壁も半透明の黒いクリスタルで造られ、天井の代わりに渦巻く闇色の空間がたゆたう、不気味な冷たい空気に満ちた大広間。

ここシャドーマテリアル要塞の作戦会議場に今、最高幹部「七冥塊」のうち四人までが集結していた。残りのうち一人はすでにスターティアの手で倒され、二人は今この場所にはいない。

「ガゴゴゴアッ！ せっかくスターティアを抵抗できない状態にしたつてのによォ、なんでひと思いにブツ壊しちゃわねェんだア、オブシディアよォ!!」

ごつごつした岩の塊じみた腕でクリスタルの欠片をたやすく握り碎きながら、不満そうなうなり声をあげる巨漢——「金剛の『ダイアーモ』」。

「お黙りなさいな、脳筋。人質がこつちの手にある限り、あの娘は戦えないわ……戦士としては死んだも同然よ。なら、もっと有効な使い道ってものがあるでしょう？」

「ンだとお……!!」

犬猿の仲の同僚を一瞥し、黒いルーージュに邪悪な笑みを浮かべる「黒曜の『オブシディ

ア。

「ほほう……オブシディアおぬし、かの剣姫めを同志に引き入れる算段か？　しかしの、あの娘なかなか強情よ……わしらにたやすく膝を折るとは思えぬぞ」

水晶柱の上に腰かけ、細い足をけだるげに揺らす小柄なゴスロリ風ドレスの少女――
紅玉のルヴィス。幼い外見に似合わぬ老成した口調、瞳に宿す光は残酷そのもの。

「フフッ、そこが私の腕の見せ所よ。スターティアの体は今、淫らなオスの器官を抱えている……その快楽に、彼女の気高い心はじきに溺れどんどん堕ちていくわ。その結果生み出される負の精神エナジーがどれほどのものになると思う？」

「ふむ……確かにスタージュエルに選ばれし伝説の戦士から放たれる負のエナジーならば、怪人化させた人間ゆうに数百人分……いや、遥かに上じやろうて。それが実現すれば我らの侵略計画も一気に進展しよう」

「ガゲゲウウ……！　けッ、いつもいつもまわりくどいマネしやがるぜッ！」

興味を惹かれた様子のルヴィス、ダイアーモも氣にくわなそうな顔をしつつも表立っては反対しない。確かにそれは試す価値の大きいプランといえた。

「だからしばらくは、あの娘やあの街に余計な手を出さずに私の『仕込み』を見守ってなさいな。いくら抵抗できないからって、目の前で街の連中を襲えばヤケになって人質を諦

めっちゃうかもしれないしねえ……皆、いいわね？」

「ちッ、まあイイ……お手並み拝見といくぜエ、オブシディアさんよオ」

「よかろう。確かにおぬしがあの気高き剣姫を、陽根の魔快楽を貪るあさましい雌犬に墮とすことができれば、それはさぞ見ものじゃろうて」

少し離れた位置で、じつと腕組みをして水晶柱にもたれかかっていた四人目……流麗な銀甲冑にすらりとした長身を包むクールな印象の女性が、そこで初めて口を開いた。

「……話が終わりなら、私は下がらせてもらう」

七冥塊一とも言われる魔剣技の使い手、^グ白銀の^グシルヴァリア。

あまり感情のこもらない声に、表情もまた顔の上半分を覆うゴーグル状の仮面で隠されており、年齢なども一見しただけでは判別しがたい。

「あらそう、ご自由に。ご執心のライバルとの決着が不完全燃焼に終わって、さぞかし残念無念ってところかしら？ それとも——」

オブシディアの目が、スッと何かを探るように細められた。

「他に何か、私たちに秘密の思惑でもあるのかしらねえ？ なにしろあなたは以前から妙に、あの小娘にご執心だったようだし……？」

大幹部たちの視線が、白銀の魔剣士に集まった。

シルヴァリアはある日突然シャドーマテリアルに現れ、先代の七冥塊を決闘で瞬殺してその座を奪い取った新参者だ。

その実力はオブシディアすら洩々認めているが、仮面で素顔を隠し単独行動を重ねる彼女に不審の目を向ける者は少くない。

「ふん……何を馬鹿馬鹿しい。確かに聖光剣姫とは、剣士同士として戦場で雌雄を決したかった。だが、もし快楽の罨程度で誇りを失うならしよせんそこまでの奴ということ……興味も失せる」

黒く輝くストレートロングをひるがえし悠然と去って行くシルヴァリアの背中を、オブシディアは敵意に満ちた視線で見送る。

「……フン、澄ましちゃってまあ。なにが快楽の罨程度——よ。あんたこそもし同じ目に遭ってもそのクールぶった態度を貫けるかどうか、よほど見物みものだわあ……！」

* * *

「あの、星ヶ丘さん。鳥羽さんのことなのですが……」

私立聖碩女学院、昼休みの教室。

隣席の友人、光善寺こうぜんじ天音からその名前を出された星ヶ丘優姫は、行動的な明るさと凛とした気丈さが同居するいつもの快活な表情を、ふんわりした栗色のセミロングの下でかす

かに曇らせた。

「え……裕美香の？」

「ええ。もう一週間以上になりますよね、鳥羽さんが病気でお休みするようになってから……さすがに心配ですね」

今どき珍しいロングの姫カットがおっとり丁寧な物腰によく似合う、まさに大和撫子といった風情の天音もまた、物憂げな面持ちを友人に向けている。

彼女はこのお嬢様学校でも有数の、ハイランクの家庭に育った令嬢だが、それを鼻にかけるような所は微塵^{みじん}もなく、優姫や裕美香とは仲のよい共通の友人の一人だ。欠点と言えば、やや世間知らずで天然ボケ気味な所だろうか。

「……そ、そうね。早く元気になるといいわね……」

「伝染性の高い病気らしく、面会もできないようですし……重篤ではないのが不幸中の幸いですが、会えない時間がこうも続くのは寂しいですね」

オブシディアの認識操作により、周囲の一般人は裕美香の不在を急病による入院と思い込んでいる……その家族すらも。

彼女がシャドーマテリアル要塞に人質として囚われているという恐るべき事実を唯一知る優姫ことスターティアは、内心で気が気ではなかった。

危害は加えないとオブシディアは言ったが、果たして信じられたものか――。

「むゝゝ……ていつ！」

「きゃっ!?　ちよ、ちよつと何っ!？」

「あらまあ、牧野さん」

細いツインテールを赤いリボンで留めた小柄な少女が突然、自分の椅子に座っていた優姫の背中から勢いよく抱きついてきた。

彼女の名は牧野しずく。同学年でもとりわけ小柄で童顔の愛くるしい少女で、マスコットのようにはクラスメートたちに可愛がられている。特に仲のよい優姫たちにまるで妹のようにじゃれつく姿は、この教室ではよくある光景だ。

「なんか元気ないぞ、優姫ちゃんまで！　大親友が心配なのはわかるけどさ、優姫ちゃんには元気が取り柄のキャラでしょ？」

「そ、そう？　……そんなに元気なかったかな、あたし」

「うん、かなり？　そんなんだと裕美香ちゃんも草葉の陰で泣いておるぞよ」

「あの、その言い方はさすがに縁起でもないと思うのですけれど……」

むろん自分を励まそうとしての友人の行為だとわかり、しずくに抱きつかれた優姫は苦笑を漏らしつつも、それを振りほどこうとはしない。

「何やってんだ、お前ら。んな真っ昼間からいちやつくなよな」

呆れ声の主は、この学院の生徒にはあまり似つかわしくないメッシュの入った派手な金髪に、色とりどりのアクセサリを体の各所に光らせた、モデル体型の長身美少女。着崩した制服の胸元で、健康的な小麦色の巨乳がたゆんと揺れている。

「いいじゃん涼子ちゃん、本妻のいない今こそ愛人としちゃ勝負ドコだもん」

「なるほど、優姫を裕美香から寝取るチャンスか。一理あるな、よし頑張れ」

「な、なによそれ、もうっ……」

御陵涼子はその外見から誤解されやすいが、学年トップクラスの成績をキープする文武両道の優等生だ。ギャル系ファッションは純然たる趣味で、校則はマジメに遵守し（生徒の自主性を尊重する校風のため服装に問題はない）生徒会役員も務め、面倒見のいい性格から下級生を中心にファンが多い。

ここにいない裕美香をあわせて五人、入学以来親しく付き合ってきた友人同士。いずれも優姫にとってはかけがえのない日常を象徴する、正義の化身ヒロインとして守るべき存在でもある。

「……そういやさ、生徒会で聞いたんだけど。校内に変質者が出たってあの噂、どうも本当らしいぜ」

「変質……者？」

新たな話題に登場した不吉な単語に、優姫の表情が怪訝そうに曇った。

「あゝそれ知ってる！ あれでしょ、三階のトイレになんか変なものがぶちまけられてたつて噂っしょ？ キモチ悪いよね」

「そう、それぞれ。生徒のイタズラにしちゃ不自然だし、来週から見回りとか厳しくするつて話だ。しかし、結構うちのガッコー警備嚴重なのに、どうやって入り込んだのかねえ」

「あ、あのあの……お二人とも、そういうお話を大きな声でなさるのはちよつと……」
かしましく話を続ける女生徒三人——ただ一人優姫がじつと押し黙り、やや下を向いてうつむいていることに彼女らはまだ気付かない。

「でも少々怖いですね、校内にそんな輩がうろついているかもしれないなんて……」

「や、きっと大丈夫だよ。なんたつてうちの学校はスターティアが守ってくれてるんだもん、この前みたいに変質者も退治してくれるつて！ ねっ優姫ちゃん」

「——え!? う、うん……そ、そうね」

突然、自分とスターティアの名前を並べられ、びくつと顔をあげる優姫。むろん友人たちは、二人が同一人物であることなど知る由もない。

一見、髪と瞳だけの变化（変身前は栗色のセミロングに黒い瞳だが、変身後は黄金のロングと碧の瞳に変わる）に過ぎないが、コスチュームの帯びる認識歪曲作用によって、両者の顔立ちが同じだと気付くことは一般人には不可能だ。

「ばっかおめー、怪人どもと戦うのに忙しいスターティア様が、んな軽犯罪にかかずらわってるヒマなんかあるわけないだろ。せいぜい警察とかで十分だ」

「御陵さんは、本当にスターティアさんのことが好きなのですね」

「学校で怪人が出た時に助けられてから、ますます大ファンだもんね」

「ふっ、ファンクラブ会員一ケタナンバーは伊達じゃないぜ。ああでも、スターティア様ともう一度会えるなら変質者退治でもいいから来てほしいかも……♡」

「うーん、すっかり恋する乙女モードだ涼子ちゃん」

うつとりした瞳で虚空を見上げる涼子、また始まったという面持ちの天音とせずく。

人々を襲う謎の怪人に唯一対抗できる正体不明の美少女戦士スターティアの存在は、多くの街の住人たちと同様、ここ聖碩女学院でも絶大な支持を集めていた。校内に出現した怪人を撃退し、多くの生徒を直接救ってからはなおさらだ。

「そういえば……ここ最近、怪人の方々が出たという話を聞かなくなりましたね」

「全員やつつけられちゃったとかじゃないの？ あ、それとも悪の組織が社員旅行にでも

行つてるとか」

「んなアホな……どした優姫、さつきから口数少ないな？　なんか顔も赤いし」

「え、そ、そうかな……？」

熱でもあるんじゃないやね？　と、涼子が付け爪に彩られた指を伸ばして優姫の額にそつと触れた、その瞬間――。

「やつ……やめてっ!!」

ガタツと椅子を鳴らし、急に優姫が逃げるように体を後ろに退いた。その肩に手をのせてもたれかかっていたしずくが、後ろに転びそうになって慌ててわたわたとバランスをとる。

「あ――」

思わぬ反応に目を丸くする友人三人に、ワテンポ遅れてハッと自分の行動に気付く優姫。

次の刹那、弾かれるように席を立ったその顔は、友人の言う通り熱でも帯びたかのようにうつすら上気していた。

「ご、ごめん……！　た、確かにちよつと熱あるかもしれないからつ、急いで保健室行つてくるね！　ほ、ほんとごめんっ！」

「お、おい、付き添った方がいいか？」

ううん大丈夫だから——とその申し出を早口で断り、うつむき加減のどこか不自然な姿勢で足早に教室を出ていく優姫に、とりつく島もなく残される三人。

「うーむ、ありや重症だ。やっぱ裕美香のことがよっぽど心配なんだろうな……」

「励まし方、ちよつと不自然だったかなあ、優姫ちゃん気を悪くしちゃったかなあ」

「大丈夫、そんなことはないと思いますよ。鳥羽さんが戻られるまで、わたくしたちで支えてあげましょう、星ヶ丘さんを——」

* * *

（ううっ……！ な、なんで自分のカラダなのに言うことときかないのよ、これえっ……！）

教室棟二階端にあるあまり使われないトイレ、その一番奥の個室。

可愛らしい紺のブレザーと清楚な白ブラウスに身を包んだ少女が、すらりとした脚をはしたなく八の字に開き、清潔な壁にもたれかかるように立って、ウォシユレット一体型の便器めがけて股間を突き出すポーズをとっている。

プリーツスカートを押し上げ、によつきりと突き出されたモノ——それは本来少女にありえざるオスの器官、すっかり勃起したグロテスクなチンポ肉だ。

（や、やっぱり全然小さくならない……！ ま……また「処理」しなきゃ……こんなまま

じゃ午後の授業、出られないよおっ……！)

そう——さっきの空間、楽しいはずの友人との他愛ないふれあい、今の優姫のカラダにとつては一種の拷問だった。

天音から漂う、高級シャンプーとみずみずしい体臭の入り交じったいいにおい。

しずくに抱きつかれ、後頭部や背中に感じる女の子の体の柔らかな感触。

涼子の胸元からこぼれ見える、窮屈そうなボリユームの健康的な巨乳。

少女たちの若々しい肉体が放つ無防備な色香のすべてが、優姫の五感を、そしてふたなりチンポをトロ火であぶるように刺激し、意志に反してドクドクと昂らせていたのだ。

(あ、あたし最低だ……！ と、友達のカラダに反応して、おちんちん大きくしてるなんて……っ！ うう、んううっ……♡)

涙ぐみながらも、可憐な白い指で赤黒い肉棒を握りしめ、おそろおそろシユコシユコとシゴきオナニーするいつもの動きを始めてしまう制服女学生。

オブシディアに無理矢理刻み込まれたあの快樂が、ラブホテル内での淫靡いんびなひと時が、無垢な少女の心と体にこれまでにない認識を——衝動のまま快感を貪りたいという欲求と、女の体に反応し欲情する心理を強く植え付けていた。

(っん、んああ……♡ 本当はこんなのダメなのに……！ 学校でっ、まだ授業あるのに

トイレでっ……へ、変質者扱いまでされてるのにつ……！)

友人の話題に出た変質者騒ぎ——あれは間違いなく、優姫自身のことだ。

数日前、今と同じようにどうしようもない性衝動に支配された優姫は、別のトイレでみずからの肉棒を無我夢中でシゴきたてた結果、コントロールがうまくいかず便器の周辺や壁にまで大量の精液をぶちまけてしまった。

だが、我に返ってショックのあまり逃げるようにその場を飛び出し、後始末の必要性に気付いて戻ろうとした時には、すでにその痕跡が発見され騒ぎになっていたのだった。

(あ、あたしどんどんガマンがきかなくなってる……っ！ でも、だ……射精^ださなきゃ、処理しなきゃすぐ膨らんで、みんなにバレちゃう……♡)

オブシディアによつてこの醜い男根を生やされ、すでに十日近く。

射精欲求をガマンできたのは、最初の二日間が精一杯だった。それから毎朝毎晩、自宅のお風呂場やトイレで精液を又かなければ、すぐ痛いほどに大きく勃起するペニスを下着の中に隠すことすら困難で、日常生活もままならない。

(あつさり日常に帰すことが一番の罰ゲームだなんて、あの時は意図がわからなかったけど……！ くっ、こうやってあたしを苦しめることがあいつの狙いだったのね……！)

しかも女子校という環境は、男子高校生そのもののチンポを持つ若い肉体にとっては猛

毒だった。常にメスののにおいに包まれ、女の園ならではの直接的なスキンシップ、ちらちら無防備に見え隠れする肌や下着——以前は何とも思わなかったはずのそれらがいちいち、ダイレクトな欲望電流となって下半身を直撃するのだから。

（んっはああ……♥ そ、それにこれっ、どんどん大きくなって、色も変わってきてるよ、なっ……な、なんかあいつのみたいになってきてない……!!）

そう、生えてすぐの頃はなまっ白くサイズも平均よりやや大きい程度だった優姫の男根は、いじるとび射精するたびにその太さや大きさ、カサの張り出し具合、色の濃さなどを増し、どんどん醜くグロテスクに姿を変えていくようだった。

——いや、ようだ、ではない。

（き、昨日計った時が16・3cm……確か二日前が15・7cmだったから……ううっ、ここ最近、一日に平均3mmくらいも大きくなってるよお……!）

「罰ゲーム」の一環として、優姫は毎日みずからの勃起ペニスのサイズを計り、記録すること強いられていた。その嗜虐的な命令のせいで、嫌でも具体的なサイズ変化を、一日たりとも忘れることができず自覚させられてしまうのだ。

仮性包茎の先端からハミ出る亀頭の面積もまた、以前より広がっている——少しずつあいつ、オブシディアのズル剥け状態の巨根へと近付いているのではというおぞましい

予感が、少女の心を怯えさせた。

まだ、あの袋——キンタマは表に出現していないが、それもこの先どうなるか。

（オブシディア……ぜ、絶対許さない……！ あたしにこんなモノ無理矢理つけて、死ぬほど恥ずかしいみじめな目につ……う、ううつ♥ くううつ……♥）

憎むべき女幹部のことを思い出すと、彼女に無理矢理性処理玩具としてカラダのあちこちを使われた忌まわしい記憶が嫌でもよみがえる。

だが、それは今の優姫にとっては違う意味も持っていた。隆々とそり立つ勃起肉杭を一心不乱にシゴく瞬間、快楽に焼けただれた脳内に……本来考えてはいけなはずの、禁断の思考が明滅するのだ。

（じ、自分でしても……あの時ほどには、キモチよくなならない……な、なんでえ……っ!!）

オブシディアの指先で、生えたてのペニスを時に優しくあやすように、時に容赦なくシゴきたてられ、否応なく追い込まれた先の初射精。

あの、魂が精液となってひり出されるような絶望的快感は、自慰では遠く及びもつかないものだった。

（ちゃ、ちゃんと処理するには、ちゃんとキモチよくななきゃ……♥ ど、どうすれば

……こ、この段差のことか、よかったようなっ……おう、おふっ♡

オブシディアの握り方やシゴき方をできるだけ思い出して真似るという行為を、屈辱感と罪悪感に襲われつつも仕方のない措置だとみずからを納得させる優姫。

女子高生の指が、自分の肉棒のあちこちをためつすがめつイジくり、より快感の強くなる場所をおっかなびっくり開拓して、少しずつオナリ方を覚えていく。

（そっそれとも……っ、あいつにさせられたみたいに、く……口とかでされたら、お、おしゃぶりされたらっ……♡ も、もっとキモチいいのかなあ……っ♡）

真っ赤な先端に口づけ、舌で皮の中をほじくり、唇で肉幹をシゴき、さまざまな場所の柔らかい肉で挟んでシゴき、服や髪にこすりつけ、精液を搾り出す……オブシディアがあらんなに愉しそうに、獣じみた快楽の声をあげていた変態的行為の数々。

自分のチンポも、あんなことができたらどんなにキモチイイだろう——と、快楽を追い求めることにいつしか必死になった少女はつい思考してしまっていた。

（なっ、何考えてるのよあたしいい……っ!! でっでも、昼休みもうあんまり時間ないしっ……は、早くイクためにエッチなこと、考えなきゃいけないからっ……!! そっそうよ、仕方ないのよお……んううッ、んおおッ♡）

理性とは裏腹に、少女の熱に浮かされた頭の中で勝手に膨れあがる妄想。

それは、大切な友人たちがまるであの時の自分のように、オブシディアのフタナリ巨根によって辱められ、汚される光景だった。

（天音もしずくもっ、すっごい可愛いから狙われてもおかしくない……っ！ あたしにしたみたいいきつと、いやらしくしつこくアレを舐めさせられるんだわッ……♡）

妄想の中、天音がサラサラの髪の毛を乱暴に掴まれ、反り返る肉棒を目に涙を浮かべながら舐めしゃぶらされている。

嫌がるしずくもそこに無理矢理参加させられ、ハーモニカのように二人の唇が両サイドから悪のチンポを挟み、血管の浮いた肉幹の表面を互い違いに上下してシゴき奉仕させられ——そして盛大に放たれた大量のネバドロ精液が、二人の顔と制服に降りかかる。

（り、涼子はムネがおつきいからっ……♡ ぜ、ぜったいあいつに、おっぱい狙われて色々されちゃうよおお……♡）

制服を着たまま、ブラウスの隙間から巨乳の間にねじ込まれた肉棒凶器を、小麦色のむっちり柔らかな双丘でこね回し愛撫することを強要される涼子。

たばったばつと双乳を上下させつつも、陵辱者を気丈に睨みつけるその顔に、ブルブルツと震え膨らんだ亀頭から噴射されたドロドロの白濁粘液が、こつてりとぶちまけられる……。

（だッだめえっ♥ そんなのダメええッ♥ あ、あたしがみんなを守らないとっ♥ 汚させたりなんかしないんだからああっ……んへあ、ふええあ♥）

正義のヒロインとしての立派な決意とは裏腹に、明らかに彼女は今、友人たちを交えた淫らな妄想をオカズにしてオスチンポを必死にシゴいていた。

前回のよう周囲に精液を飛び散らせないよう、便座に座った状態から腰を浮かし上体を柔軟運動のように床近くにまで曲げて、肉槍の筒先が上から便器の中心へと向くような姿勢——合理的だが破廉恥極まる格好で、お嬢様はゴッシュゴッシュと激しくチンポコキをラストスパートへと高めてゆく。

（はへっ、ふほええっ♥ んああああつ、あつあッッ♥ くっ、くるきちやうっ……も、もうすぐイキそう、イケそうっ……！ ほ、ほんとはダメなのにつ、学校のトイレでっ、いッ♥）

だが、まさにその時——。

「早くしないと授業、もう始まっちゃうよー？」

「うん、すぐ済ませるからちよつとだけ待っててね」

唐突に二人の女生徒がトイレの中に入ってきて、優姫は心臓が口から飛び出すほどに驚いた。

使用頻度の低い場所とはいえ十分予想できたはずの可能性だが、まさか射精が秒読み段階に入ったこの瞬間に来るだなんて——！

「ここ、例の変質者出たトイレじゃなかったっけ？」

「あれは三階だよ。ていうか今そんなこと言わないでよ……」

「あつ、ごめんごめん」

一番入り口近くに一人が入り、もう一人はおそらく洗面台の前で待っている……優姫がいる奥の個室までは距離があるため、音はろくに届かないはず……それに第一、いることが気付かれても普通に用を足してるとしか思われないはず……！

瞬時に去来したその思考が、そして何よりチンポを中心にすべてを考えるオスの本能が、この状況下で射精するという本来あるまじき行為にゴーサインを出してしまう。

（んひいいもつもうガマンできなっ……♡ いっイクイクいくううつつ♡ ひっ、人がいるのにせーえき出りゅっ♡ 学校の中なのにつ、女子トイレなのにつ出つつ……でるうううんおおうつつ♡♡）

——びゅぱつつ!! ぶぴゅぶりゅっ、たぱぱつつ♡ びゅくんっ、びゅちっ……♡ びゅちやああつつ♡

はしたないズリコキ噴射のまさにその瞬間、優姫の脳内にはさっきの陵辱妄想がリアル

に映し出され……そして三人の友人に舌をはしたなく突き出させ、そこめがけ大量の精液ゲルをしこたまぶっかけているのはオブシディアではなく、スターティアに変身した自分のふたなりチンポへと置き変わっていた。

しかも、それをいつの間にか裕美香が冷たい目で見ているのだ——！

（ひぐうッ、んんうううつつ♡ おおおお、おふううつつ……♡ ごッごめんみんなああ♡ みんなのエッチなところ考えながらッしゃっ射精いいつつ♡ いッ、いつもより勢いが……は、跳ね返っちゃう♡ んひいッ♡）

前屈姿勢で思いっきり握りしめ便器の中にググッと向けられたチンポから、びゅぽっびゅぽっ♡ と放たれ続ける太い白濁弾。優姫はねっちやりドロつくブツとい欲望ザーメンを、溜まった水やその周辺に次々とスケベ音をあげて大量投下していく。

女子校で、女子学生が、女子学生たちのすぐ近くで、こつてりとクサイ思春期の濃厚オス精液をシコリ抜き排泄するという異常事態が、人知れず展開してしまっているのだ。

「……あれ？」

「どうしたの？」

（——つつ!!!）

「いや、奥の方から変な音が聞こえたような……」

（ひいいつつ♥ きつ聞かれつつ♥ そ、そうだ水ッ、水流せばあつ……♥）
慌てて水洗ボタンを押し、響き渡る水音が、下品な射精音にかぶせり包み隠した。

「あ……人、いたんだ……」

「こら、失礼だよ……！ 黙ってはやく済ませなさいっ……！」

はしたないポーズでぶるぶると震えながら、名も知らぬ女生徒たちが慌ててトイレを済ませ立ち去るのを、優姫はチンポに残った精液の残滓^{ざんし}をぴゅくぴゅくと水流の中に吐き出しながら聞いていた。

まさか彼女たちも「変質者」が今まさにここで汚い欲望をぶちまけているとは夢にも思わないだろう……ましてやその正体が同級生で、そして憧れの聖光剣姫スターティアその人などとは。

「はう……♥ う、ううっ……！ えうう……ぐすっ、ひっく……」

興奮が射精の達成感と共に去って行き、代わりにどうしようもないみじめさと自己嫌悪が優姫の全身をドツと襲う。涙ぐみながらのろのろと立ち上がり、そして萎えかけたペニスに到来した「もう一つの衝動」を処理すべく、便座に向き直る。

ちよろっ……ちよろろ、じよろろっ……！

垂れ下がり、少し精液に濡れた鈴口からほとばしる別の液体——そう、いかなる仕組み

か、彼女の「尿道」はあれからこのチンポの方でのみ機能していた。

（う、うああ……！ あたし今っ、男の子みたいなおしっこしちゃってるよおお……！
な、情けなすぎるうう……っ！）

男子のように立って小便を排泄する……それはある意味で射精よりも屈辱的な時間として優姫の乙女心を苛み、可憐な目尻に新たな涙の玉を浮かせるのだった――。

* * *

ふらふらと力なくトイレを出た優姫は、重い足取りを教室へと向けていた。

急いで戻らなければ、次の授業に間に合わない……でも、泣いて赤くなった目をごまかす時間もなく、このままでは友達にまた心配をかけるかもしれない。

（友達……あたし、友達であんな……あんな妄想を……！ 最低、最低最低ッ……！ ほんと最低だよ、天音やしずくや涼子に、会わせる顔がないっ……！）

羞恥と屈辱と後悔に思考がぐるぐる渦巻き、ままならない肉体の衝動に引きずられた精神が疲労の極地を迎え、本当に熱まで出てきたように視界がぐらりと揺れ――。

「――大丈夫？」

ふらつき、無人の廊下に倒れそうになったその瞬間、細い腕が……だが力強い頼もしさで優姫の肩を掴み、支えて立ち直らせた。

「あ……城鐘^{しろがね}、さん……？」

城鐘アリア。

この春から優姫たちのクラスにやってきた転入生で、常にクールな雰囲気をもった人を寄せ付けないところのある、怖いほどの美貌を持つ大人びた少女だ。

「顔色、よくないわ。次の授業は諦めて、少し保健室でも休みなさい」

長い黒髪をかきあげながら、無表情ともとれる怜悯な顔でそう宣告される。母親が欧州のどこかの国出身のハーフだという話だが、アリアがまとう独特の冷えた空気は、日本人離れどころかどこか人間離れしているとすら思わせた。

「あ……あり、がとう……」

ほとんど話したこともない（もともと彼女は誰とでもそうで、あのしずくすら食事や遊びに誘うのをついに諦めたほどだ）孤高のクラスメートとの思いがけない会話に、しどろもどろになりつつ感謝を告げる優姫。

「礼を言われるほどのことでもないわ……それより自己管理くらい、ちゃんとしなさい。それで迷惑するのは周りの方なのよ。本当に付き添わなくても大丈夫なのかしら？」

「う、うん……気をつける、わ。あ、ええ、一人で行けると思う……から」

どこか不機嫌そうな表情、やや低いトーンの美声。この転校生が感情を表に出すのを見

るのも、こんなに長いセリフを話すのを聞いたのも自分が初めてなのではないか……と、優姫はふとそんな感想を抱いた。

「そう。じゃあ、私は授業があるからこれで」

だが不機嫌さの影はすぐに消え、いつもの美しくも硬質な表情に戻って、ただ短く告げてその場を去ろうとするアリア——その背中に、

「あのっ、本当にありがとう！ 助かったわ、城鐘さん！」

「……………」

あらためてぺこりと一礼すると、少し元気を取り戻したふうな足取りで一階の保健室へと向かう優姫。

「まったく——世話の焼ける」

その背中に向けて、聞こえないようにそう一人ごちると、城鐘アリアは黒く輝くストリートロングをひるがえし、悠然と去って行くのだった……。

第6話 オブシディア、その淫靡なる日常

シャドーマテリアル要塞、黒曜のオブシディアの私室。

弾力と柔らかさを併せ持つ、巨大なウォーターベッドのような不思議な材質をした寢床に悠然と横たわる女幹部——そのむっちりした太ももの間から天を突く赤黒い巨根に、汗に光るいくつもの女体が群がって卑猥な水音をたてている。

「ああん……♡ オブ様のおチンポさまったら、すっごいギンギンですう、ちゅぷっ♡ んぬぷっ♡」

「んちゅっ、れろおっ♡ ほ、本当にたくましいですっ……♡ こうやってナメナメさせていただいているだけで舌がヤケドしそお……♡」

「れりゅ、るりよろっ♡ あん……いつもよりおつきい気がします、皮もすっかりおムケになって……はううつ♡」

心の底から幸せそうな、トロけた声音の三重奏。オブシディアのグロテスクなフタナリ巨チンポ幹の左右とその亀頭先に、三組の唇と舌がチロチロねろねろと踊る。

猫のような耳と尻尾、羊に似た硬質の角、尖った耳に第三の瞳など、それぞれ非人間的

特徴を持つ彼女らの体は、肌の色も髪の色もまちまちだが、いずれも人間換算で十代後半のみずみずしさを備えつつ、発情したメスの色気をむんむんと発散している。

全員、オブシディア好みに生体改造された愛玩用の……つまりスケベ行為用の女怪人だ。その〴〵おクチの性能〴〵もフェラチオ好きな主人の趣味に合わせ、柔らかな肉厚の唇と長い舌、かすかにザラザラした刺激の強いベロ、ローションのようなトロみの強い唾液を出す高吸引力の口腔と、三者三様のイヤらしい特質を備えていた。

「ふふっ、そうかしら？ きつとそれは、こうしている今も進んでるスターティアのチンポしつけ仕込みが、楽しくて愉しくて仕方がないからだわ♥」

ベッドの脇に滞空する水晶球に女幹部が手をかざすと、そこから立体映像が映し出された——聖碩女学院の屋内温水プールで行われている、水泳の授業の風景だ。

紺色のスポーティな水着に若い肢体を包んだ女子高生たちが、和気あいあいと濡れたカラダで動き回り、水中に踊る……地元の男ども垂涎の輝かしい光景がそこにあった。

そんな中、ぽつりとプールサイドに座って見学している女生徒——星ヶ丘優姫だけが、奇妙に思い詰めたような表情でうつむき押し黙っている。

「あらあら、優姫ちゃんったらきつと生理だとかウソついて水泳休んだのね、悪い子ねえ♥ ま、今もスカートの中で恥勃起してる童貞チンポには、この眺めは刺激が強すぎて到

底水着姿になんかなれないでしょうけど……♡」

よくよく見れば抱えた膝をもじもじとすり合わせたり、親しい友人たちの水着姿（特に御陵涼子の巨乳）をちらちら見ては視線を戻し……ぶんぶんと首を振ったり、その頬がかあつと朱に染まったりしている——彼女が今、どんな衝動に苛まれているかは明らかだった。

「はぷっ♡　なんで人間は気持ちイイことをガマンなんかするんでしょうね？　せつかくオブ様におチンポつけてもらったんだから、好き放題楽しめばいいのになあ♡」

肉マラ幹に浮き出た太い血管をなぞるように、りゅろんりゅろん♡　と舐めながら、心底不思議そうな態度で愛玩怪人の一人が口にする。

「ふふっ、楽しんでるわよ、あいつはちゃあんと……私の見立てでは、あのお嬢様はねえ、潜在的にもっとタチの悪い生き物だわ」

どういふことですか？　と不思議がる愛奴たちに、オブシディアはどくどく脈打つ巨根でその柔らかい頬をにゆりにゆりコスるハーレム頬ズリを楽しみながら解説する。

「表面的には快楽に溺れることをよしとせず、必死でガマンしてるつもりでも……羞恥や屈辱、してはいけないことをしている自分。それらがどんどん背徳のスパイスに変わって、恥辱快感を繰り返し味わうのが深層心理でやみつきになっていく——裏表なく快楽に正

直なあなたたちより、よっぽど業が深いドスケベなのよ♥」

「へえ……よくわからないけど、ムツツリスケベさんなんですね♥」

「あんたオブ様の説明ちゃんと聞いてたのお？ まあ間違ってるケド」

「でも、オブシディア様ったらホントに楽しそう……ちよつと悔しいかも……」

オブシディアの興味と欲望を一身に注がれている聖光剣姫スターティアに対し、わずかに嫉妬の色をにじませる愛玩怪人たち——その時、オブシディアの黒いルーージュに酷薄な笑みが浮いた。

「あら……私のやり方に不満でもあるのかしら？ 嫌々やってるのなら、もう止めて二度と顔を見せなくていいわ。代わりの肉玩具はいくらでもいるんだもの」

唾液にまみれテラテラと光る勃起チンポが、冷たい宣告と共に引き上げられると、改造愛奴隷たちは大切な宝物を取り上げられた子供のような絶望的表情を浮かべた。

「め、滅相もございませんっ!! 七冥塊いち強くお美しいオブシディア様の、ご立派なおチンポ様にお仕えできる幸せっ……身に余る光栄ですうっ♥」

「はっはい、出過ぎたことを申しましたあっ! どうか、どうかお慈悲をお……♥」

「わ、私どもの卑しい体はどこかしこも偉大なるオブシディア様専用のチンポヌキ用お道具ですうう……お好きにお使い倒しくださいませええっ♥」

一転、哀れげな懇願でチンポめがけ土下座する裸体の美少女たち。オブシディアはその反応に、嗜虐的で満足げな笑みを浮かべ、再び赤黒い巨根を突き出した。

「フフッ、それでいいわ、私の可愛い子たち……なら、このおチンポにタマった濃縮スperlマをコキ出す大事な性処理の役目、気合入れて存分に務めなさいな」

はっはいっ！ とハモる歓喜の声。まるで世界一神々しく尊いものに触れるような陶醉の表情で、より一層激しく舌と唇によるトリプルしゃぶり肉棒奉仕が再開された。

「ではオブさまあ、私のとろとろ唾液でヌルヌルにしてからの、吸盤のように吸い付く柔唇亀頭シゴきをご堪能くださあい……んろろっ♡ ちゅむ、じゅむるんつつ♡ じゅぶぱっ♡」

「じゃあカリ首の返しの段差や裏スジを♡ ざらざらのベロで強めにコスりますねえ、感触の違いをお楽しみください♡ れろ、れぞぞっ♡ りゅぞぞぞっ……ぞるんっ♡」

「わたくしはオブ様にいただいたこの長い舌で、尿道の中を優しくホジホジさせていただきます♡ んちゅるるっ……ちゅろろんっ、るりゅるるっ……♡」

チンポのあらゆる欲望を刺激し、精液を搾り抜くためだけに調整された人外のボディが見せる愛情のこもったチームワークに、さすがのオブシディアも魔乳を波打たせて快楽のうめきをあげ、張り詰めたキンタマがぶるんぶるんと脈打つ。

「お、おおうっ♥ いいいいわあ、スターティアの不様なチンポ生活見て溜まりまくった濃厚ガマン白濁ザーメン、あなたたちにとっぷり排泄してあげるわあっ♥ ……ちようどあの娘の映像も、ヌキどころに来たみたいだしねえっ♥」

いつしか、立体映像には授業の終わりを待てずトイレに駆け込んだ優姫が、ぺろんとめくりあげたスカートの裾を口で噛み、その下に屹立露出した真っ赤なフタナリ乙女チンポをゴシゴシと両手で必死にシゴくセンズリ風景が大写しにされていた。

「くくくっ、ご覧なさいあのブザマな童貞チンポメスガキの姿を……！ この前まではトイレの一番奥でこっそりコイてたのに、いつの間にか入り口近くの個室に飛び込んでさっさとオナりだす始末よお♥ シコり方も音が出るほど派手だし、チンポ快楽で頭いっぱい、自制心が少しずつ削れていってるのが目に見えるようだわあ♥」

やだあ♥ほんとブザマですねえ♥ といったクスクス声で主人に追従しながら、もちろん肉棒奉仕の手を止めない怪人三人娘の熱心なハーレムフェラ音がちゅぶちゅぶと鳴り響く。

「おおおっ♥ トリプルチンポ磨きたまんなああい♥ こ、こみ上げて来たわ来たわあっ♥ 舌と顔面で受け取りなさいお前たちっ、ほら早くその発情お便所顔を捧げて顔射乞いするのよおおっっ♥♥♥」

発射寸前の嬌声を聞き、目にハートを浮かべんばかりの勢いで我先にと上気した顔を突き出し舌を伸ばして、ミチミチと大量射精爆発の前兆に震える極悪肉凶器の筒先へと、すべてを無防備に晒す愛玩怪人美少女たち。

「はっはいいいっつつっ♥♥ 私などの発情顔面に偉大なオブシディア様の生おザーメンぶっ放していただけるなんて幸せの極みですううつ♥」

「ぜ、ぜひ一射目はわたくしめにっ♥ この卑しい便器フェイスに『オラッ♥』という勢いでおドピュりくださいませっ♥ 伸ばした舌レロレロおっつて媚び顔作ってお待ちしますからああっ♥」

「あっズッズルいっ♥ わ、私にも濃ゆいお情けミルクを何とぞおつつ♥ スペルマ征服シャワーで頬をぶっ叩いてオブ様のニオイをつ、所有物の証を刻み込んでくださいましいいっ♥」

恥の欠片もない媚びまくり痴態で、れろれろれろおんっ♥ と絡み合い空中に踊る、異形の美少女三人の発情ベロ。その非現実的な光景めがけ――

「んほおアアアアアッ♥♥ じよっ上出来よ私のメスどもおっ♥ お待ちかねのグツグツ煮立った濃厚支配者ザーメンをブチ喰らわせ恵んでやるわあつつ♥ お、おお、おっ…
…おおおおおうおんつつツツ♥♥」

どびゆるりゆるつつつ!! どぼふううツツ♥ どびゆふんツツ♥♥

ぼびよぼおつ、びよりゆるんつつ♥ びちゅちやああつつ♥

「「ん ああんっ!? んはあツツ、あつ♥ ありがとうございましゅううつ♥♥♥」」

オブシディアと立体映像の中の優姫——二人のフタナリチンポが、はからずも同時にぶつとい白濁ザーメンロープを吐き出した。

一人は、それぞれがアイドル並みの美貌を持つ怪人美少女たちに熱烈奉仕され、顔射待ち発情顔三人分にまとめてブツかけるといふ王侯貴族でもなしえない勝者の愉悦に満ちた大噴射。

そしてもう一人は、学校の便器にむなしくドポドポと寂しい子種を吐き捨てる、みじめな自慰射精。

「ふーっ♥ ふーう……おふううつ♥ あゝあ、スターティアったら便器の外に跳ねた精液を涙目になってティッシュで拭いてるわあ、かわいそお♥」

「あは、みじめですねえ♥ もちろんオブ様の大事なザーメンさまは、私たちが愛情こめて一滴残らず舐め取らせていただきますう……♥」

首から上をこつてりと汚す超濃厚精液の余韻に打ち震えていた三人の愛玩怪人奴隸たちは、ほとんど目を開けられないほどの白濁でネッチャリと湯気をたてる顔を、吸い寄せら

れるように主人の巨根へと寄せ舌掃除を始める。

それと対照的に、飛び散った精液を拭き終えた優姫は、射精したてで敏感な亀頭の先端をトイレットペーパーでぬぐう刺激にガニ股で脚をかくくさせている。

「ちゅるっ、ちゅるるう……♡ あへああ、オブ様の遺伝子をかけられた瞬間につ、あ、あまりに嬉しくて軽くイッてしまいましたあ……お、お許しをおお♡」

「あ、あのっ、僭越せんえつながらあつ……もしオブシディア様がまだご満足でなければ、こっ今度は……わ、私たちのおマンコにもおチンポ様のお情けをお……♡」

ふるふると尻を震わせ媚び顔で見上げる愛奴たちの哀願に、オブシディアはぺろりと唇に赤い舌を這わせてペニスを再び反り返らせる。むろんこの性の絶対強者たる妖女が、一発や数発の射精で満足などするはずもなかった。

「ふふっ、いいわよお♡ スターティアの不様な泣きべそ顔がいいオカズになって、今日のはしこたまヒリ出したい気分だわあ♡ さあ、まずは全員バックから鬼ピストンで泣かせまくってあげるから、そこに尻並べてスケベマンコ広げてハメ乞いしなさい♡」

はっはいっ♡♡♡ とハモる、心底幸せそうな声。

いそいそと愛奴怪人たちが、真っ先にハメてもらえるような下品媚びポーズを見せつけようと争う中——オブシディアの視線は、立体映像の中のフタナリ少女がまだ縮んでく

れないチンポを持てあまし、恥知らずにもおそろおそろ二回目のセンサーを始めようとする光景へと向けられていた。

（うふふ、そろそろいい仕上がりみたいねえ……♡ 次に会う時がほんと楽しみだわ、オナニー中毒のおチンポ剣姫ちゃん——♡）

第7話 羞恥の収録！ お嬢様センズリ告白実演ショー！

（映像が、薄ぼんやりした照明の室内を映す）

（ピンクのシーツがかかったキングサイズのベッドの前に、紺のブレザーと白のブラウスに赤いリボン、栗色のふわっとした髪にも同色のリボンをつけた美少女が立っている。長いまつげを恥ずかしそうに伏せ、撮られていることを意識しつつ、彼女の手はブラウンのチェックスカートの上でもじもじと落ち着かなさげに震えている）

（画面にテロップ状の質問が映る）

【お名前を教えてください】

「……ほ、星ヶ丘優姫、です。聖碩女学院の二年生です……こ、これが学生証です……ううっ……」

【名門お嬢様校ですね、それはすごい。ではプロフィールを聞かせてください】

「誕生日は二月二十三日、血液型O型……水泳部と茶道部に所属、得意教科は日本史……苦手なのは化学と数学かな……。好きな食べ物はバジルチキンとガトーショコラ、コーヒーより紅茶派です……。得意料理は、料理ってほどじゃないけどクッキーを焼くこと……。」

ば、バストサイズ……!! う……は、81cmのCカップ、です……! ……え? こ、恋人は、いませんっ……!」

【ファーストキスの相手は?】

「あうっ……ま、まだ……んああッ!? ご、ごめんなさい、ウソですッ……! お、おちんち……いいえ、おチンポとしましたっ……! 二週間前にここで、おっきなおチンポ様の先っぽに唇を捧げましたあっ……!」

【今、誰と何をしていますか?】

「今……今はっ、ら、ラブホテルにいます……入るのは、二回目です……お、おんなのひとと、来てます……でっでも、女の人だけどっ……お、おちんぽが生えている人です……っ! 前にもその人と来て、エッチなことをたくさん、しましたっ……せ、精液を、飲んだり……あうっ、か、顔にかけられたりも、しちゃいました……っ!」

【その、スカートからちよつと出ているものは何ですか?】

「お……おちんぽ、ですっ……! あ、あたしにもおちんぽを、生やしてもらいました……この前初めての、しゃ……射精、セイツウを、今いるのと同じ部屋で経験したところで……っ、はっはい、気持ち、よかったですッ……!」

【どういうふうに気持ちよかったですか?】

「……え？ う……で、出る時に……頭がふわーって真っ白になって、おしっこみたいなにおしっこじゃないような……その、お漏らしみたいで違うよう、な……うううっ！ よ、よくわかりませんッ……！」

【そういえばプロフィールで聞き忘れたのですが、趣味はなんですか？】

「え？ しゅ、趣味は……ウインタースポーツ全般と、乗馬と読書……です」

【他にも趣味があるのでは？ 最近、毎日のようにハマっていることとか——】

「!! そ、それはっ……は、はい、ありますっ……!! お、オナ……いいえ、せ……センズリ、ですッ！ ほ、星ヶ丘優姫は、まっ毎日おちんぽでセンズリをしています……！ すっかり趣味になっちゃってますう……っ！」

【センズリとはなんですか？ スポーツか何かの一種でしょうか？】

「う、ううっ……ち、違います。この、おチンポを手で握って……しゅこっ、しゅこっでシゴいて、精液をドクドクッって出して気持ちよくなること、です……！」

【ドクドクッ？ そんな音じゃなかったはずですが……ちよつと再生してみましょう】

『びゅぶぶっ、びよびびいいっ♥ どびよるるううっ、どくっぴゅ……ぷびいいっ♥』

「やつやめて、止めてお願いいっ!! そ、そうです！ 優姫のセンズリ射精はもつと下品な音が鳴りますっ！ ビュルビュルびゅぶびゅぶっものすごい量のざーめんを撒き散ら

して死ぬほど気持ちよくなるのがあたしのセンサーなんですっ!!」

【なるほど、ではここ一週間のセンサーの回数を報告してもらいましょう】

「なっ……!!? う、ううっ……わ、わかりました……今週はっ、ま、毎日……あ、朝晩二回のセンサーを……あひううッッ!! ご、ごめんなさいっ、ウソです嘘つきましたあっ! 三回っ、一日三回してますうッ! すっ水曜日からは四回に増えましたああっ! 学校で二回は欠かさずシコるようになったちゃってますうう!!」

【優姫ちゃんは、学校のどんな場所でそのチンポをシコっているんですか?】

「と……トイレ、です……おトイレで休み時間や昼休みにこっそり……」

【トイレ以外の場所でもコいてるんじゃないですか?】

「ッ!! ……は、はい。ほ……保健室で、したことがあります……っ! 仮病使って、シートかぶって中でこっそりおちんぽを握って……じゅ、授業中なのに……」

【精液の後始末が大変だったのでは?】

「こ、コンビニのビニール袋をポケットに入れて持ってきて、それに……その中に射精してあとで見つからないように公園のゴミ箱に捨てましたあ……ひ、人に見つからないか、出す時も捨てる時もすぐドキドキ、しましたっ……!」

【お家のお風呂でもセンサーをしているという話ですが、どんなふうに?】

「う……ぽ、ボディソープ、で。あ……泡をおチンポにまぶして、ヌルヌルにしてするのが、お気に入り、です……っ。そ、それにあたしは精……液を出したあとに、おし……おしっこを、したくなることが、その、多くて……お風呂だと、そのままできるから……」

【おチンポの方からジョロジョロとするんですか？】

「そ……そう、です。排水溝におチンポの先っぽを向けて、します……してる途中でどうしてかすっごくドキドキして、またおチンポがすぐに……お、大きくなっちゃったりすることも、あります……っ」

【あれ？ 優姫ちゃん、今もだんだんおチンポが大きくなってきてませんか？】

「えっ!? こ、これはっ……あっあの、ヘンなことばかり聞かれるから、その、ヘンな気分になって……ううっ、そ、それだけですっ……!」

【でもせっかくでするので、勃起したおチンポのサイズを計ってみましょう】

「はっ、はい……え、完全に大きくしてから？ ……わ、わかりました、限界まで勃起させます……さ、触ります。……ん、んうっ ♡ か、軽くシゴきますっ……んああっ……は、はふ……っ ♡」

【立派にフル勃起したみたいですっね】

「はい……♡ そ、それでは計ります……んっ……えっと、じゅ……じゅうなてん、

きゅう……17.9 cm、です……！ 太さは……一番太い所で5.7 cm……っ♡」

【だいぶ大きく育ちましたね。皮もムケて、色もすっかり赤黒くなっていますね】

「え……ええ、言いつけ通り毎日、おちん……ぽの、せ、成長記録をつけてます……♡
最近は少し、成長のペースが落ち着いてきましたが、一番育った時で一日、3 mm以上も長くなってましたあ……♡」

【それでは、せっかくですのでセンズリを実演してもらいましょうか】

「えっ、い、今から……!? ……。わ、わかりました……!!」

【その前にまず、これを着けてください】

「え？ こ、このピンク色のって……コン、ドーム……？」

【性教育で習いましたよね？ 言う通りに先をつまんで、亀頭に当てて——】

「こ、こうですか……んっ、うっ♡ あ、ああっ……クルクルって、だんだん根元の方まで包まれてっ……ちよ、ちよっと締め付けられるような感じが……っ」

【Lサイズですが、それでもキツイですか。今度からXLサイズにしましょう】

「っ、着けおわりました……な、なにこれっ♡ ピッチリ締まる感じ、がっ♡ お、おおう……♡ くあ……っ♡」

【着けただけでチンポ気持ちいいみたいです。では、制服のスカートをたくし上げて、

コンドームチンポがしつかり映るように腰を突き出して見せてください」

「わ、わかりましたあ……あ、あたしは聖碩の生徒なのに、ドギツイピンク色のエッチ用スケベゴムをおチンポにかぶせて、ラブホテルでビンビンにおっ勃ててるところを撮影、されてますう……♡ スカート完全にめくりあがって、コンドームおチンポにひっかかってぺろんってなって……は、はい、こんな女子生徒あたしだけです……！」

【では、優姫ちゃんにはそのままおチンポダンスを踊っていただきますよう】

「お……おチンポ、ダンス？」

【腰を振ってチンポを左右に揺らしたり、円を描くように大きく下半身を動かして、その勢いで扇風機のようにチンポをぶんぶん回転させるようなダンスです】

「そっ!? そんなこと……ッ！ あ、あうう……し、します、しますから……っ！ ううつはっ恥ずかしいよお……♡ んっ……んうっ……！ こ、こうです、かあっ……!! ああつ、振る勢いでチンポに感覚が返ってっ……はあう♡」

【なかなか上手ですね。頭の後ろで両手を組んで、ガニ股でもっと派手にどうぞ】

「はっはいい……♡ んおっ、おっおおっ……♡ ああつ、せっ制服のお腹につ、振って揺れたおチンポがぺちぺちって当たってっ……ね、根元も遠心力でグングンッて強い力がかかってるう……♡ ふーっ、はっ、はっ♡ ふーっ♡」

でっジーンってシビれますぅぐぐう……ッ♥ おっほおお♥」

【いつもはどんなオカズでセンズリしてますか？】

「んうう♥ お、オカズ、つてえ……？」

【センズリの時にするスケベな妄想や、エッチな絵や映像などのことです】

「そ、それはああ……♥ ううづっ……ほ、ほかの女のひとの、裸とか……あ」

【具体的には？ 友達の裸やエッチな姿を想像したりしないんですか？】

「つつっ!!! し、しませんつつ!! してないッ、そんなのしてな……ばっ♥」

【では、代わりに何を〴〵使ってるんですか？ 答えられますよね】

「う、ううう……ね、ネット、でっ……と、トイレやお風呂でっ、こっそりスマホで見えます……え、エッチな画像とかを、検索っ、してっ……あっ、なっ何を!! す、スマホ返してッ!」

【いいから優姫ちゃんはマッサージ器でおチンポダンス続けててください】

「は、ばいばい……お、おおうっ♥ はーっふーっ♥ だ、ダンスダンスうう♥ ビンビンおチンポ振り振りダンスっ……ほおおううづつつ……♥」

【検索履歴……ふむふむ〴〵おっぱい 巨乳〴〵大きいおっぱい好きなんですか？】

「……は、はいい♥ さっ最近っ、気に、なっ……あっあの本当に返してっ……んうう

♡

「まだ履歴ありますね。ええと……ッフェラ フェラチオ 女子学生」

「あああ、み、見ないでええ……♡ お願い、だからああ……♡」

「お気に入りページにも、JKの制服ぶっかけ画像や無修正フェラを集めた掲示板のスレッドが登録されていますね。同じ女子学生なのにこういうマニアックなのが好きなんですか、優姫ちゃんは？」

「た、たまたま、たまたま見つけただけですっ!! そんな好きとかじゃっ……おづうんッ♡♡ ひっひいいやめてへえっ♡ ちっチンポ振動強つくっしないでへえっ、はへえええええっ♡ はっはいい!! そうです好きです本当はああっ、チンポおしやぶりしてる可愛い子とか制服がザー汁でぬるぐちよになってるのを見ると興奮してセンズリはかどるんですうっ♡」

「では、ちょうどこの部屋のモニターでAVが観られるので、優姫ちゃんの好きそうな制服モノを映してオカズにしてあげましょう」

「あ、ああ……♡ す、すごい……あんな、あんなことしてるうう……っ♡ ああ、そんな奥までおくちでっ……!! おっ、おっおっ♡ はああーっ、ほああ♡ んはあああ、あ……♡」

【食い入るように見てますね。おチンポ腰フリダンスの動きも派手になってきました】

「ふーっ♥ んふうーっ♥ とっ止まらないい、腰止まらないよおお……♥ こ、これっ

……このまま、じゃっ……んお♥ ホントはこんなのいけないことなのにいいっ、おチンポダンス止まらないのおお♥」

【コンドームの中が先走り汁でくちゅくちゅみたいです。もうイキそうですか？】

「うあぁッ、はっはいいつつ♥ え、エロAVオカズにマッサージ振動でえっ♥ ゆっ優

姫はコンドームの中につ、どっぴゅんしちゃいそうですう……♥ あぁダメっ、ダメなのになっ制服のままでこんなホテルでこんなっ、ひぁぁんあ!？」

【はい優姫ちゃん、イク時はカメラ目線で両手ピースしながら、もう一度自己紹介を】

「たっ誕生日は二月にじゅうざんっ♥ け、けちゅえきがた、おおお♥ 型っ……す、

水泳部と茶道部で……と、得意教科は日本史いいっ♥ 化学とすうがくが、ダメええ……♥ んおおあぁあぁっほんとにダメへえええ♥」

【もう少しですよ、頑張つて。ほらピース、ピース】

「はひいいピースぴーしゅう♥ しゅ、好きな食べ物はバジルチキンとガトーショコラ
あぁ、紅茶とガトーショコラあぁ♥ くっクッキーも焼くのおお……♥ あっあひいい
っ、バスト83センチいい♥ こっ恋人とかいなくて、趣味は、趣味はっ♥ ……せ、セン

ズリでしゅううつつつ!!♡♡♡ おおおにゃああ♡♡♡♡♡」

【おっと射精しちゃってますね、優姫ちゃん。どんどん膨らんでるコンドームに注目】

「おっおうグッツ♡♡♡ ほんおおお♡♡♡ しっシゴかにやくても射精^でてりゅうううう♡♡♡

♡♡♡ びゅーって、びゅーってあああんあああ♡♡♡♡♡ 見られて撮られてっるっつ♡♡♡ ごっ
ゴムぷくーってなつてええ♡♡♡ は、恥ずかしいよおお……っ♡♡♡」

【マッサージ器にしっかりコスりつけて気持ちよく出し切りましょうね】

「しっ♡♡♡ 振動でえっ、のっ残り汁搾られるうう、あひいい……♡♡♡ ほへああ、おチン
ポきゅんきゅんするよおお……♡♡♡ 甘い痺れでびゅっぴゅしちやううっ♡♡♡ あああっまだ
射精^でてるのおお……先っぽ重いい♡♡♡」

【おチンポの先に水風船ついてるみたいです。出し切ったら落とさないように、外して
キュッて縛りましょう】

「は、はうう……♡♡♡ と、とれたあ……♡♡♡ や、やだあたし、いつもこんなにだっぷり
射精^だしてるのお……!! たっぷんたっぷん、ずっしりしてるうう……♡♡♡」

【そのコンドームは、パンツに挟んでぶら下げてくださいね。では最後に、画面の前の皆
さんにご挨拶を】

「は、はいい……み、皆さん……今日は優姫のはしたないセンサー射精をつ、見ていただ



いて、あ、ありがとうございます……♡ きよ、今日はこれから……パンツのまわりがコンドームでいっぱいになるまで……く、くっさいメス精液っ、ヌキヌキどっぴゅんこ♡ き……キメまくっちゃいますっ……♡ ど、どうかこんなドスケベちゃんぽつきJKの優姫を、キライにならないくださいね……っ♡」

（スカートを震える手でつまみあげ、中身がパンパンに詰まったコンドームの重みでやや片側にズレたパンツと、そこからぴよっこり突き出した半勃起チンポが興奮で再び膨らんでいくのをカメラに見せつけながら、涙目で微笑む優姫）

（映像がフェードアウトする）

「……ふふっ、半分くらいは台本のセリフとはいえどんどん気分入っちゃって、ずいぶん気持ちよさそおだったわねえ、ドスケベおチンポせんずりマニアJKの優姫ちゃん♡ バストサイズ、やっぱりごまかしてたし……でも性懲りもなくオカズのことですぐバレるウソついたのはいただけないわあ、あとでおしおきが必要ね♡ ともあれ本職のAV女優でもやってけそうよお、あなた……♡ この映像は名前とか音、顔をバレないように加工した上でちゃんネットにバラまいてあげるから、みんなのオカズとしての反響を楽しみにねえ……アハハハハッ♡」

第8話 アメと鞭！ エロ衣装で奪われる少女のオナホ童貞！

ラブホテル室内、先の羞恥撮影の直後。

ねちよ、りゅろろっ、ぴちゃっ……と卑猥な水音が響き、仁王立ちになったオブシディアの股間に、リボンのついた栗色の柔らかそうなセミロングが揺れている。

「あゝいいわぁ♥ 制服姿の『優姫ちゃん』に生フェラさせるのも、コスチュームとはまたひと味違った征服感があるわねえ……♥ ほらほら、カワイイ唇で余り皮びろおーんって引っ張りながら上目遣いでこっち見てちょうだい、そうそれぞれイイわよお♥」

「くっ……ううっ……！」

そんきよ
蹲踞の姿勢ではしたなく足を割り広げ、仇敵のグロチンポをねっとり舌と唇をフル稼働してしゃぶらされるという状況はもう何度か経験したものだだったが、だからといってもちろんその屈辱に慣れたりはできなかった。

むろんそのスカートの中に隠れた清楚な白いショーツからは、先ほどたっぷりとヒリ出した精液が詰まったコンドームがぶら下がったままだ。

「ゴメンなさいねえ、あなたの名AV女優っぷりがあんまりエロいから、すっかりおチン

ポもよおしちゃって♥ こういう時いつでも素直にしゃぶってくれる従順なJKがいるなんて、私ったらとっても幸せ者だわあ♥ おチンポのヌキしゃぶり方も処女のくせに仕込めば仕込むだけどんどんうまくなってくし……お、おほっ♥」

（だ、誰が素直なのよ……！ 裕美香の安全さえ握られてなきや、誰が敵のチンポなんかにこんなことを……は、早く終わってほしいから頑張ってるだけだし！）

ぬつぶ♥ ぬつぶ♥ と可憐なJK処女リップが悪の極太スケベ棒を甘く締め付けながら、卑猥なヌコヌコ音を立てつつ睨み顔が上下運動を繰り返す……オブシディアにとって視覚的にもたまらない光景だ。

「ああ、でもねえ優姫ちゃん——♥」

よだれと先走りにまみれテラテラ光る赤黒い肉巨筒が湯気をたてつつ唇から『ぶっぽん♥』とヌけ、ビスクドールのようにすべらかで白い頬をぺちぺち叩く。

「さっきの収録中、性懲りもなくいくつかウソついたわよねえ？ そういうことすると『アレ』でおしおきしちゃうわよってちゃんと言ったはずなのに……♥」

「っ!! や、やめてアレだけはッ……んああっ!! ひっ、ひぐうっ!!」

オブシディアが空中で指を回すと、突然優姫の体がビクンと電流でも通されたように跳ねた。先の撮影中も何度か起きていた異変だ。

「ふふっ、キくでしょう？ 外に出てきたばっかりの〴〵それを刺激されるのは♥」

「やつやめッ、お願いだからあっ……あぐううっ!!」

終わらない刺激にこらえかねて上体を床に倒し、お尻を上突き出して悶える優姫のめくれあがったスカートの中、ショーツのクロッチ部分から……左右に異様なものがボロンと二つ、こぼれ出た。

赤ん坊の皮膚のようになつるつるの表面を持つ、ピンポン玉大の肉球体……それは紛れもない、男の――。

「うふふ、可愛いのがこぼれちゃってるわよ、優姫ちゃんのキ・ン・タ・マ♥」

「う、うううっ……こ、こんなおぞましいものを……よ、よくもお……っ!」

少女に本来ありえない、異様で滑稽な精液生産器官。それはこの水曜日の朝から優姫のチンポ根元に出現した。同時にザーメン増産速度は明らかにブーストされて、センズリの回数がそれを境に増えてしまったほどだ……もちろん、油断するとすぐ下着からぼろりとまろび出るそれを、人目を恐れて隠す苦労もまた倍増している。

「すっごい勢いで元気なお精子を四六時中作りっぱなしになるからあ、もうセンズリがはかどってはかどって仕方がないでしょ？ ザーメンの量もネットリ具合もクサさも溜まる速度も、これからどんどん強化されてくと思うから楽しみにしててね♥ フフッ、超濃厚

スペルマが尿道びゆるびゆる通って出続ける感触はクセになるわよお……♡」

（そ、そんなあ……!! 今以上だなんて、ぜったい頭バカになるっ……いつもいつも射精することしか考えられなくなっちゃうよお、あたしいっ……!）

しかもよく見ればその左右のタマには、おはじきほどのサイズの黒い半透明のぷるぷるした物体が貼り付き、女幹部の指の動きに合わせて振動している。

「ほおくらほら♡ 端末からタマタマに振動波流し込まれるのって、脳みそ直接シェイクされてるみたいでしょ？ 大の男でもそれ続けると泣き出すから、まあ無理もないけど♡」

「わ、わかったッ、わかったわよおっ!! もうウソつかないからこッこれっ、止めてええっ!!」

ラブホの床に這いつくばって情けなく突き上げた尻を振り乱し、ショーツから吊り下がったままの精液入りゴムをぷらぷら揺らしながら懇願するキンタマつき美少女。

敏感すぎるオス神経に打ち込まれる、マッサージ器の振動を数十倍したかのような逃げ場のない刺激は、生まれたての「弱点」には到底耐えられたものではなかった。

「ブブブー。ごめんなさいオブシディアさま、的な誠意ある謝り方じゃなきやダ・メ♡」
「うっ……あはううづづッッッ!! ごっつ……ごめんなさいいつ、もうウソつきませんか

らあっ！ は、反省してますっつ！ だ、だからこれ止めてくだっさいっつ、きつキンタマつらいんですうっ!!」

「へええ？ まったく最近のガキは、泣き言の時だけ必死になっちゃって本当に反省してるのかしら？ まあいいわ♥ 止めてあげるから感謝することね」

ようやくキンタマにへばりついた振動玩具が停止し、優姫はびっしりと全身を冷や汗に濡らしてハアハアと荒い息を吐く。

その柔らかな尻肉をピタピタとしつけるように叩く、オブシディアの勃起肉棒。

「さあて、反省できたなら笑顔で媚び媚びちんぽねぶりフェラ再開してちょうだい♥ もちろんフィニッシュは久々の顔面ぶちまけこつてりマーキング、超ド濃厚スぺルマお下品シャワーの刑よ♥ 少しでもイヤそうな顔したら即キンタマにドギツイ振動叩き込むからそのつもりで、ね……うふふふっ——♥」

* * *

「こ……これをまさかあたしに着ろつていうの!? じよ、冗談でしょ……ッ!」

突きつけられた立体映像に映る衣装を見て、優姫の顔が紅潮する。

その形のよいあごからは、さつきオブシディアに喰らわされた大量顔射のザーメン痕が、生臭いにおいを放ちながらまだネットリと糸を引いたままだ。

「あら、冗談なワケないことくらいもうわかるでしょう？ それに、あなたのスタージュエルが持つ機能を使えば着るのなんて一瞬、すぐすむじゃない」

「そ、そういう問題じゃ……っ！」

優姫がまとうスターティアのコスチュームは、着用者がその目で認識した服や衣装の外見をコピーするという便利な機能も備えている。

これと認識歪曲能力を組み合わせ、本来女子学生が入りにくい場所へ——たとえば女性タレントに化けてローカルTV局に潜入するなどして、そこで進行するシャドーマテリアルの作戦を阻止したことも今までに何度かあった。

「これもおしおきの一環だもの、拒否は許さないわ。それともまだキンタマイじめが足りないのかしらあ？」

「くっ……！ わ、わかった……わよ……！ スタージュエル……セイバー・インッ！」

すつくと背筋を伸ばし、両手を体の前で複雑に振ってキーワードを唱える優姫。刹那、全身がまばゆい黄金の閃光に包まれ——その額に、彼女の魂と一体化した伝説の宝石スタージュエルのはまった銀のティアラが出現したかと思うと、全身を包む制服が光の中に消えて、まったく違う装束がきらめく裸身にまとわれていく。

久々の変身……だがここは戦場ではなくラブホテルの一室、そして倒すべき悪を悦ばせ

るための行為というあつてはならない現実に、美少女戦士は唇を噛む。

そして、その身を包む新たなコスチュームの姿は――。

[illegible]

（ううつ、な、なんて悪趣味なのよこれえ……は、恥ずかしいよお……つ！）

波打つ黄金のロングヘアをなびかせるそれは確かに「スターティア」の姿だった。

だが、いくつかの箇所が決定的に違う。

まず上半身前面を覆っていたはずのアーマーコスチュームは、コルセットのようにお腹の周辺だけに面積を減じ、乳房の部分を持ち上げて強調するようなデザインに変わっている。そして胸を隠すものは——ほとんど何もない。

メイド服のエプロンドレスにも似た白いフリルが肩口や首筋を可愛く飾り、胸元は可愛らしいリボンで彩られているが、肝心の丸みを帯びた膨らみとその頂点でふるえる桜色の突起は完全に露出している——こうなると周囲の装飾は丸見えの乳房をことさら無防備に強調するようで、デザインの可憐さに反し逆に卑猥だ。

一方下半身では、本来のミニスカートが腰骨を境に腰回りの両サイドから後ろにかけてのみを覆うように途切れ、前面はそっくり開放されている——スカート自体の長さも超ミ

二に変えられ、丸いお尻がほぼ丸見えだ。

そして露わになった下着のデザインたるや、とんでもないシロモノだった。

布というよりヒモと表現した方がふさわしい、黒くて細い弾力性のある材質が、余計な脂肪一つない若々しい股間部にT字状に張り渡されている。まるでサイズの合わないビキニを無理矢理穿かせられているかのようだ。さっきの射精済みコンドームは、ご丁寧なそこに挟まる形で吊り下がっている。

フタナリちんぽの周囲では、T字ビキニの縦棒に当たる部分がO型に変形して、肉幹の根元を取り巻くようにぴったり密着している。つまり、スターティアのもっとも恥ずかしいオス器官が完全にモロ出しになっているのだ。

さらにその真下、左右にこぼれ出るキンタマには、シニヨンキャップのようなフリルつきカバーがかぶせられ、悪趣味に飾り立てられていた……適度に肉のついた太ももをぴっちり覆う清楚な白タイツまでもが、今はどこか扇情的に見える。

「今のあなた、向きにデザインしてあげたかいがあったわあ♥ 前の格好よりよっぽどお似合いよお、新生スターティアちゃん♥ 気分はどうかしらあ？」

「い、いいわけないじゃないッ……！　こんな、こんな変態か痴女みたいな格好させられて……っ！」

なまじ元のコスチュームの意匠が残っているだけに、これまでの誇り高い戦いまでが辱められるような恥辱。美少女戦姫は涙目でうつむき、そこは以前と変わらない白い長手袋の手で胸と股間を隠し、なけなしの抵抗を試みる。

「へえ、所かまわずセンズリぶっこきまくるような淫乱童貞JKはド変態の痴女じゃないのお？ 今のあなたには清楚なコスはむしろふさわしくないわよ、だいたいどうやってそのデカチンポ隠すつもりよ？」

「う、そ、それは……っ!!」

今やスターティアの巨根は勃起していなくても、以前のミニスカからは何かの拍子に飛び出してしまいそうなポリウムだ。戦いともなればなおさらだろう……みずからのカラダが変貌してしまったことを、スターティアは絶望的な思いで噛み締める。

「あらあら辛そうな顔することないじゃない、ホントは気持ちいいこと大好きなクセに……♡ そうそう、おしおきだけじゃなくて、ちゃんとセンズリ記録できたご褒美もあげないかね♡ ほら、これが何かわかるかしら？」

オブシディアがベッド脇のテーブルに手をかざすと、その甲についた宝玉内の空間に収納されていた物体がそこに出現する——それは350 mlサイズの缶ボトル程度の大きさを持つ、ゴムのような質感をしたピンクの円柱だった。

「な……何よ、そのへんな形のは……!？」

「ふふっ、ネンネのお嬢ちゃんは知らないだろうから教えてあ・げ・る♥ これは男どもがチンポオナニーに使う道具……オナホール、よ♥」

「オナ……ホール……?」

まだ意味がよく飲み込めず、卑猥なコスチュームのまま困惑する少女戦姫の眼前に、オブリディアは愉快そうに円柱の底部分に開いた〃穴〃を突きつけてみせた。

「え……っ、そ、そのカタチって……!？」

「ま、無修正エロ画像なんかズリネタにしてるしわかるわよねえ……そう、おまんこよ♥ ここにおチンポ突っ込んでセックスを疑似体験する、ニセのおまんこなの♥」

女幹部の褐色の指が、ドギツイ色をした作り物の淫唇をぐによおんと左右に広げ、その中を……無数のヒダがリアルに刻まれた狭い洞穴を見せつける。

（う、うあ……す、すっごいエッチな造形してるよおっ……あの中に……あのヒダヒダの中に、おチンポを、入れる……入れちゃう、の……っ?）

卑猥な玩具穴に視線が吸い寄せられ、ごくりと無意識のうちに喉が鳴る。いやらしいコスに彩られた少女の赤黒肉茎は早くも膨らみ、びくっ、びくっとな脈動し始めていた。

（ふふっ、もう期待でチンポコおっ勃たせてるわねえ、ムッツリスケベちゃん♥ さあて、

そのドスケベな格好でみつちり恥をかいでもらうわよお……♡)

* * *

「ふふっ、今度はすいぶんと素直に従ったわねえ、スターティアったら。そんなにオナホにチンポ突っ込むのが楽しみになっちゃったのかしらあ?」

「そ、そんなわけ……っ! あ、あなたの命令に逆らえないから、あたしは……」

ベッドにオブリディアと並んで仰向けに寝そべり、クッションを背中に置いて上体をやや起こした姿勢で、しどろもどろに赤面して目をそらす聖光剣姫。女幹部のたっぷりした爆乳が肩口にむにゅりと押しつけられ、巨乳好きの女子高生ヒロインは余計に声をうわづらせてしまう。

そして言葉と裏腹に彼女の太チンポは、エロ下着が突っ張るほどにギン♡ ギン♡ と期待にフル勃起し——そこには、紫色のコンドームがかぶせられていた。

「ふーん? まあいいわ、そういうことにしときましようか♡ さて、多分あなたナマだとすぐイッチャうと思うから最初はゴム越しよ。じゃあ覚悟してね、スターティアの……優姫ちゃんのオナホ童貞、今から奪っちゃうわ……♡」

「う……あ、ああっ……♡」

女幹部の右手に握られたピンクのシリコン玩具の開口部が、同じく卑猥な紫色に包まれ

たビン勃ち童貞亀頭に、ぴとりと密着した。

シャドーマテリアルの科学力によるものか、特製オナホのヒダヒダからは愛液そっくりのローションが溢れ、ごつごつした肉茎の段差をつうつと流れ落ちる。

「このスケベオモチャ、すつごくりアルに造られてるからきつとスゴいわよ……♡ お尻の穴に力入れて、すぐイかないように辛抱しなさいねえ、ほらいくわよお……♡ お待ちかねの、ぬぷぬぷ穴ハメタイム開始いっ♡」

ぬぬうつ……にゅぐつ♡ つぷつ……つぷ、ぷぷつぬぷうう……つつ♡♡

「あ——え、ふああ、あ、あ、ああつ……!! ……っんあッ♡♡」

思った以上に柔らかい入り口が亀頭をにゅっぽりと包み込み、張り出したエラまでをスムーズにくわえ込む……これだけでも声がうわずるほどの心地よさだ。

弾力性のある抵抗感に阻まれ、挿入が止まったと思った次の瞬間……熱をもった硬いチンポが、ぬめつき少しひんやりした洞窟内に、ニユルリと一気に飲み込まれた。

（え、な……何、これ……!! 全部？ おちんぼのまわりぜんぶ、くにゅくにゅヌチュヌチュしたのに包まれっ食べられてるっ、おちんぼ食べら——んっ）

「——んおっ♡ つほおおッ!!!」

思考がそのまま、品のない快感のうめきになって漏れた。敏感肉を余すところなく襲う

スケベな密着感。それは、しよせん指に接した部分だけを刺激するにすぎないセンズリとはまるで次元が違う快美感だった。

しかもまだ奥へ、奥へと吸い込まれ——縦横に刻まれた無数のヒダを、何枚も何枚も何枚も突き抜けていく蹂躪感にも似た快楽が、張り詰めた肉エラに、どくどく脈打つ血管まみれの太い幹に……ゴム越しとは思えないほどダイレクトにビリビリと伝わって……いや、どこまでも伝わり続けてくるのだ。

「うふふつ、どう、予想以上のハメ心地でしょう？　じゃあ、奥までこのまま一気に……♡」

「え、ちよつ、ちよつと待つ——♡」

ぬにゅつ、にゅるるるううつ……ぷこるんつつ♡

「……にゃっ!!　っひにゃああつつ♡♡」

「あらあ？　あらあらあらあ♡」

ぶぷつ——びゅどぷんつつ♡

びゅぐつ、びゅごるぶぷつ……どびゅぷうつ♡

最奥部のややコリッとした輪つか状弾力塊に——疑似子宮口に突き込まれた亀頭先端がこりゅつとキスした瞬間、オナホの、そしてゴムの中で、くぐもった暴発射精音が下品に

鳴り響いた。

白タイツに包まれた足を突っ張らせ、剥き出しのおっぱいをぶるんと揺らして、根元までをピンクのスケベ玩具にぱっくりくわえ込まれたチンポの下で……白フリルで着飾ったキンタマがぶるると蠕動し、きゅんきゅんと白濁液を送り込む。

「あゝあ、あれだけ言ったのに、やっぱりニセモノおまんこにハメただけで即おちんぽミルクビュービューお漏らししちゃったわね♥ ゴム越しで手加減したのにほんツと早漏でだらしないのねえスターティアのデカちんぽったらあ……♥」

「んあああつっ、おとおおつっ……おっ♥ こっこれええっ♥ すごいチンポにしっくりくるっ♥ し、しっくりくるよおっ……おんんお、おっ♥」

オブシディアの小馬鹿にしたような物言いも、もうロクに聞こえていない。

射精に追い込まれるまでの快感も激烈だったが、少女がこれまで経験した射精と一番違うのはむしろ、にゅっぽり包まれた状態で味わう放出の心地よさだった。

「はあうう、んっんお……おっおっ♥ ほおっ♥（ああ凄いつ……お、おまんこのカタチってすごいんだあ……っ！ そっか、ほっ本当に、ここにおチンポを入れて射精するためのカタチなんだわっ……♥）っはあああ♥ はああうう……んひいッ!!!」

放精中の多幸福感にまみれた情けない声に、さらに高いトーンが加わった。

オブシディアがぎゅむぎゅむとオナホを外から圧迫し、精液を残らず搾り取るような容赦のないアフターケア刺激を加えてきたのだ。

「うふふ、こうすると尿道に残った精液までキモチよく引っぱり出されるみたいでしよう？　これがマンコ内発射後のお楽しみ、残り汁搾精タイムよお♡　作り物でもすつごくリアルだから、女の子のカラダのエロおい機能が色々とチンポで体感できちゃうの♡」

「はっはうう……♡　しっ搾られっ♡　せ、せーえきドクドク止まらにやっ♡　は、はへえええ……っ♡」

黄金の髪を左右に振り乱してぶるぶる射精余韻に浸るスターティアからひとしきり搾精を続けたあと、にゆるるるるっ……♡　とゆっくりオナホが引き抜かれる——もちろん、その瞬間にも彼女は情けないあえぎ声をたっぷりとあげた。

少し根元から上にズレた紫のスケベゴムの先、たっぷり詰まった精液溜まり風船が亀頭からワンテンポ遅れてオナホから抜け、亀頭の脇にトプツと横倒しになった。

「二回目なのにまたたくさんどっぷりヒリ出したわねえ、そんなに初オナホが衝撃的だったかしら？　ともあれ、オナホ童貞卒業おめでとうと言っておくわ♡」

「はあ、はあっ……こ、こんな作り物で、童貞とか、関係、ないでしょっ……」

ニヤつきながら手際よくコンドームを外し、ヒモパンのさつきと反対側にくくりつける

女幹部。

むわあ……♡　とイカ臭い湯気に包まれた射精したてフタナリ生チンポが、ぺとんとミニスカコスチュームに横倒しになって、鈴口に濃い白濁玉がぷっくり浮いた。

「つれないわねえ、愉しんでたくせに♡　まあ二回も出したらしばらくは長持ちするだろうから、今のうちにじっくり比べてもらおうとしましょうか……♡」

「く、比べる……？　比べるって、どういう——」

黒いルージュが嗤い、答えのかわりに手の宝石が再び別のものを実体化させた。それは、白と黒——色は違えど、さっきのと同じような円柱のカタマリが二つ。

「そう、合計三つ用意したのよ、あなた用のオナホ♡　もちろんそれぞれハメ心地は違うわ……ふふつ、あなたの欲張りおチンポさんはどれを気に入ってくれるかしら……？」

「み、三つも……!?　さ、さっきみたいなのがまだ……っ！　こ、これ全部あたしのおチンポに……た、試しちゃうの？　あ、あぁっ……♡」

色とりどりのいやらしい玩具の形で突きつけられる、さらなる淫らな予感に……ゾクゾクとその背筋が震え、半萎えになった射精したてチンポまでムクムクッと早くも反応しつつあるのを、果たしてスターティア自身気付いているかどうか——。

第9話 リアルオナホ味比べ！ 優姫、絶望の快樂射精！

ラブホテルの広いベッドの上。

露出過多の改造コスチュームに包まれた体にまだじつとりと汗を浮かばせながら、はあはあと荒い息をつくスターティア。

その潤んだ瞳は、オブシディアが用意した三つのオナホールに釘付けになっている。

あれを順番に試してもらおう——そう女幹部は宣告した。さつき挿入だけですぐイッてしまったほどの、暴力的なまでの快感をもたらしてくれる玩具を、さらに二つも……！

「ふふ、期待にチンポ膨らませるところ悪いけど……」賭けのルールは確認しなくてもいいのかしら、スターティア

「え……？」

「それとも、そんなことは関係なくエッチな行為を楽しみたいなんてことはないわよねえ、まさか……♥ 正義のヒロインたるあなたが、ねえ？」

一瞬、何を言われているのかわからない……といった表情をするスターティア。

何拍か置いて、その顔色がさっと朱に染まる。

「そ……そうよ、こ、今回もあなたと、賭けを……ゲームをして、あたしが勝てば裕美香を解放する……そ、そういう約束だったはずよ!」

（ふふっ、間違いないわ。このコつたら今一瞬、目の前にぶら下げられた快樂に溺れて本来の目的を……友達を助けるって崇高なお題目を忘れかけてたわね）

その事実にもずから気付いたからこそ、スターティアは目尻に涙すら浮かべて小刻みに震えている。おそらく彼女の中では、ふがいなく情けない自分を責める気持ちが渦巻いているだろう——たとえ一瞬でも、友達を裏切るような思考をしてしまった自分を責めているのだ。

そして、その混乱と自己嫌悪が生む心の隙こそオブシディアの思うつぼだった。

「さあ、何をすればいいか教えなさい、オブシディア! どんないやらしい拷問だろうと今度こそ、今度こそ耐えて……が、ガマンしてみせるんだからっ!」

動揺を振り払うように、少しうわずる声で言い放つ聖光剣姫。

しかし、オブシディアはにやりと笑って首を振る。

「あらあら……早とちりしちやダメよ、スターティア。誰が、ガマンしろ、だなんて言ったのかしら?」

「え……? ど、どうということよ!」

「だって我慢させてもあなた、口先ばかりですぐびゅーびゅーぶっこいちやってつまらないんだもの。それじゃ勝負が見えすぎて面白くないわ……だから逆に、得意分野で勝負できるようハンデをあげる」

得意分野、ハンデ——その意味をわかりかね、いぶかしむスターティア。

「にぶいわねえ……今度は逆に、たあっぷりザーメンを射精すればするほど、あなたが有利になるルールにしてあげるってことよ♥」

「なっ……しゃ、射精すればするほど……？」

我慢しなくていい——それは確かにチャンスかもしれなかった。

でも、本当にそれはハンデなのだろうか？ 女幹部の甘言に乗った先には、何かとんでもない罠が待ってはいないだろうか……？

だが、親友の裕美香を救うためには、退くという選択肢は存在しない。

「わ、わかったわ……そのルールを詳しく教えてちょうだい、オブシディア」

危険で淫らな罠に、あえて飛び込む道を選ぶスターティア。

もちろんオブシディアは、少女剣姫の凜とした表情に潜む、新たな快樂へのかすかな期待の色を見逃していなかった——。

* * *

ラブホテルの広いバスルーム、湯を張っていない浴槽の縁に、スターティアは赤面しつつ腰かけていた。

もちろん、その控えめな美乳を可愛い乳首ごと露出させる下品な改造コスチュームを着せられたままだ。

おずおずと開かれた両脚、丸見えの股間からそそり勃つ美少女巨根には、新しいライトグリーンのコンドームがぴっちりとかぶせられている。

そしてすぐ手が届く場所に、ピンク、白、黒——三色の特製オナホールが並び、卑猥な空気を醸し出していた。

「さて、あらためて確認よスターティア。制限時間はこれから十五分間……その間におチンポをシゴきまくって、ドピュった精液の総量が一定を超えればあなたの勝ち。大事な親友ちゃんを助けてあげるわ」

バスルームの入り口付近に、むっちりした脚を組み浮遊するオブシディア。

まるで娯楽映画でも観るように、これから始まる仇敵の痴態ショーを楽しむつもりなのだ。

「わ、わかってるから、いちいちイヤらしい言い方しないでよっ！ 要は、たくさん射精してみせればいいんでしょう……っ！」

羞恥心と雑念を振り払い、なんとか冷静に考えを巡らせる。

短い時間内で、がむしゃらに連続で出そうとしても一回一回の量が少なくなってしまうだろう。それでは本末転倒だ。

効率的に射精できるのは、おそらくせいぜい二回か三回……回数をしばって、その分思いつきキンタマ在庫汁を発射するしかない。

（そのためには……できるだけキモチよく射精できるように、オナホールを全部試さない
と……！　って、うう、何考えてるのよ、あたし……で、でもやらなきゃ！）

少しでも大きな快感をセンズリで得るために、オナホを吟味する——しかも、にやつく
オブシディアの眼前で。

それは少女にとって想像を絶する羞恥と屈辱の最低行為だが、正義と友情のためにはやりきるしか道はなかった。

「はあい、じゃあスタートよ。がんばってシコってね、スターティア♥」
始まってしまった以上、迷っているヒマはない。

まだ使っていない白と黒のうち、まず白いオナホを右手に握って、挿入口を亀頭にぴつとりあてがう。

ぬろろっ……♥　と内部から自動的に垂れたローションが（シャドーマテリアルの技術

力のなせる技だ)、突っ張ったコンドームの表面をくちゅりと濡らした。

(さ、最初は少しずつ慣らさないと……っ)

おそろおそろ力を入れて、クニクニ柔らかい入り口の人工ヒダで亀頭表面を撫で回してみる。

ゴム越しのその感触だけでも、手淫とは比べものにならない甘い快感がじんわりとフタナリチンポに広がっていき、少女剣姫は悩ましい鼻息を漏らす。

「んっ……♡ はっ、はあっ、はふう……っ♡」

「うふふ、最初はまったくチンポ先をくすぐるのがお気に入りなのかしら？ でも、中にズッポリちんぽハメするともっと気持ちイイわよね？」

「だ、黙ってて！ 言われなくてもそうするわよっ……ん、んああっ♡」
ぐぐつと力を入れて、張り詰めた亀頭をいよいよオナホ肉穴へと沈めていく。

つぶ♡ んぷ♡ つぶぷっ……♡

ラブホの風呂場というロケーション、美少女ヒロインの半裸体を淫らに彩るエロ衣装、そそり立った巨根に少しずつかぶせていくオナホール……すべてが非現実で、とてつもなく淫らな光景だ。

「は、はああ……さ、さっきのより断然狭くて、キツいよおっ……♡」

オブシディアの言った通り、色の違うオナホには明確に「差」があった。

最初にピンクのに突っ込んだ時には意識する余裕もなかったが、今スターティアの勃起肉剣を呑み込みつつある白い玩具穴は、一回り狭い刺激をキュウキュウと返してくる——さっきの射精がなければまたすぐに放っていたかもしれない。

「そのホールが一番狭いはずよ。なかなか奥まで入らないと思うけど、その分ネジこんだ時のギチギチした密着感はやみつきになると思うわあ♥」

「や、やみつきになんて……っ♥ な、ならな……いいっ……っ♥」

その言葉通り、ある地点まで行ったところで張り出した肉エラが、弾力ある狭い門にひっかかってつつかえてしまう。

左手でチンポの根元をグツと握り、オナホを掴んだ細い五指にも力をこめ——。

ぐぐっ……ぐにゆるっぷんっっ♥ ぷちゆるるんっ♥♥

「んううっ、ふうっ♥ は、入っ——たああっっ♥」

心の準備をして構えていたため、今度は挿入時の強烈な快樂にも暴発することなく耐えるスターティア。

その分、張り詰め研ぎ澄まされた神経に、未知の挿入快感がみっちり刻まれる。

（こ、これヤバっ♥ これやっぱりすごいっ、よおお……♥ 指とかとぜんぜん違ってっ、

頭ぜんぶバカになっちゃうみたい気持ちいいよおっ♥

甘やかなぷにぷに肉に締め付けられる痛いほどの快楽刺激が、チンポの全方位を余すところなく覆い続ける、たまらない快美感。

みちちっ……！ と一回り、自分のチンポが筒内で大きく張り詰め、オナホの直径が膨らむほどに変わるのを少女は自覚した。

「ふふっ、中でフル勃起して反り返りまくってるの、わかるでしょ？ ニセモノとはいえ、おまんこの中っていう本来の居場所に包まれたおチンポは、そうやって嬉しい嬉しい♥
って悦ぶのよねえ♥」

「だ、だから余計な茶々を入れないでちょうだいっ、オブシディアっ……！」

「あら、それはごめんなさいね♥ 私のことは気にせず楽しんでちょうだいな」

「た、楽しんでなんか……んう、っはああ♥ んおっ♥」

（さあ、いよいよ楽しいシコりまくりタイムよお……♥ リアルオナホの味を存分に知ってお猿さんになっちゃいなさいな、スターティアちゃん♥）

ゆっくり、少しずつ……やり方を試すような動きで上下するオナホが、にゅっぷにゅっぷと卑猥な粘液音を立てる。

ぬらぬらと濡れた緑色のスケベゴムが挿入の隙間から見え隠れし、真っ白な太ももとす

べすべの下腹部、可愛らしいおへソという可憐な少女のパーツを、まるで似つかわしくない下品なギャップで貶める。

「はぁーっ、ふうーっ……んふうっ♥ んううっ、んおお……っ♥ おっ♥」

スターティアはやつと余裕をもつて、快樂の総量をコントロールしつつ動かすことが可能になっていた。

だがそれは言い換えれば、手でシゴくのを遥かに超えるオナホオナニーの快樂を、思う存分知ってしまうという、二度と戻れない道への第一歩に他ならない。

（あああつ、すごい……♥ キツくてプルプルの刺激がつ、動かすたびにおチンポの表面から背筋までじわあつて広がって……！ せ、精液がどんどん作られてる感じするよ
お……っ♥）

この快樂をいつまでも味わっていたいという欲望が、正義の変身劍姫の脳をじわじわ溶かす。

だが、ずっとこのままではいけない……ゲームに勝つために、より快感を得られる道具がどれかを、冷静に判断しなければいけないのだ。

にゅぽぽ……ぽぽっ……ぽおっ♥ と、一旦チンポから外すために白オナホがゆっくりと肉棒から引き抜かれてゆく。

「んおうっ……お、おふっ♥ つ、次はこつちを試さない、と……!」

今度は三本目の黒いオナホが、ほかほかと湯氣を立てる美少女勃起へとあてがわれた。はしたなく腰を突き出したエロ衣装の変身ヒロインは、ドキドキ鳴る鼓動を感じながら、それを一気に……。

にゅっ、にゅるるん——っ♥

「んおあっ!? やっ、さ、さつきと違って一気に入ってくうう……っ♥」

白オナホのキツい抵抗と違い、優しく迎え入れるようなスムーズな挿入感が、ビンビンのふたなりチンポをにゅっぷりとくわえ込んだ。

だが、その内部は決してユルクはなく、むしろウネウネと立体的にウネって複雑な快樂電流を接触面に送り込んでくる。

分泌されるローション量にも個体差があるようで、このオナホが一番多く、ジュプジュプと大きな水音をたててチンポをがつつき、熱心にしゃぶってくるかのようだ。

「最後のそれも、なかなか味わい深い肉穴でしょう? それぞれ個性があって捨てがたいと思うからたっぷりハメ比べしてみてちようだいね、スターティア♥」

「はうう、くああっ♥ お、おっんおっ……はふ、ひへええっ♥」

タイプの違うエロ穴をハシゴするという、初めての贅沢なオナニー体験が、スターティ

アから次第に躊躇いを奪っていく。

最初は控えめに、どちらかというと義務的に動かされていた手が、今やどんどん派手なストロークでオナ玩具を前後させ、ミニスカートに彩られた美尻まであわせてへこへこ動かしつつあることに、彼女は気付いていない。

（こ、これ気持ちよすぎいつ……♡ う、動かせば動かしただけっ、もっとイイ動かし方がわかってきちゃうよおっ……さっ♡ さいしょのもっ、また、ためさないとおっ♡）

荒い息を吐きつつ名残惜しそうに黒オナホを引き抜くと、最初のピンクオナホを手にとって、期待にふるふる震える亀頭に押し当てるスターティア。

あの時はあえなく発射してしまったが、今ならもっとゆっくり丹念にハメハメ感を味わえる——少女の思考はもはや、効率よく大量射精するという目的を言い訳にした、新たな快楽の追求へとすり替わっている。

「ああっ……ひ、ひとりでにつ、にゆぶにゆぶって入ってくみたいいつ♡ や、やっぱりこれがあっ、一番おチンポにしっくりくるよお……ふあ、はへええっ♡」

たまらないフィット感と、貪欲なくわえ込みのピンクオナホ。

もつとも狭く、キツキツの強烈な刺激がやみつきになる白オナホ。

ウネウネした内部が飽きさせず、汁量も多くてジューシーな黒オナホ。

三者三様の個性はどれも捨てがたく、スターティアのチンポをそれぞれの得意分野で攻め立ててくる。

キツい刺激のあとにまったりした快感、そして最後に安心すら覚えるフィット感という、偶然ながら完璧な順番もまた、少女の射精感を的確に加速させた。

「すっかりオナホコキに夢中ねえ、スターティアったら……♡ 人前でめいっぱいズリまくっちゃってまあ、恥ずかしいと思わないのお？」

「ち、違っ♡ こ、これは勝つためっ……ゆ、裕美香を助けるためだからあっ……♡ しっ、仕方なくやってるだけええっ、なんだからああっ♡ んお、ふおおうつ♡♡」

今や正義の変身ヒロインは整った顔をだらしなく歪ませ、よだれさえ垂らしながら、ぐっちゅぬっちゅと肉玩具を激しく動かしてシゴきたてるのに夢中だ——ぷらぷら揺れる雌キンタマの中ではさつきから、大量に増産されたフタナリ精液が出口を求めてみゆるんみゆるんと荒れ狂っている。

「とてもそうは見えないけどねえ……ま、ちょうど味比べが一周したことだし、発射にはちょうどいいタイミングじゃない？ 見ててあげるからニセモノまんこにたあっぷりヒリ出してしまいなさいな、スターティアの濃厚ギトギトオス臭ざーめん♡」

ニヤついた仇敵に……フタナリとはいえ同じ女性に見られながら、恥ずかしいオス器官

の玩具オナニーによる射精を迎える——次々と襲い来る異常な状況でとつくにマヒしたと思われた神経が、今まさにシてしまっているその行為を自覚した一瞬だけ、なけなしの正気を取り戻した。

「あ……やつ、ああつ……や、だつダメえええつつつ♡♡」

そしてそれが余計に、こらえようもない爆発の興奮トリガーとなり……無我夢中でピンクホールに突き込まれたガチ勃起チンポの先端が、最深部に——非貫通型オナホの最奥にリアル造型された、グミのような弾力のニセ子宮口へと密着した。

「さっ先吸われつ……んおっほおう!?♡♡ もつもうダメっ射精いい♡ おちんぽ昇って精液来ちやうよおっ♡ た、たくさん出さないといけないからあつ、裕美香のためだからあつつ♡♡ お願いいっぱい出てええつ、はへえええつつ——んおおつつ♡♡」

——ぼびゆるるるううつ!!

んびゅ、びゅぐつ……♡ びゆるるんつつ、どぶどくうつ♡

びゅぽっ♡ びゅちゅぶちゅつ……ぶぽびい♡

はしたないガニ股開脚で、反り返ったフタナリチンポをオナホへと突き刺したまま。

先のオブシディアに無理矢理導かれてのものとは違い、完全に自分の意志で——自由意志のオナニーでの、言い訳のしようもない大量射精。

心を打ちのめすその事実と、少しでも多く射精しなければという脅迫的義務感がない交ぜとなつて生まれる、とてつもない放出の快楽がフタナリヒロインに襲い掛かる。

「ほへっ♡ ほへえええつつ!?♡ に、二発目ええ出てるうううつつ!?♡ さ、さつきよりすごいどっぴゅん汁噴きまくっちゃうううつつ!♡」

「うふふ、二回目もフィニッシュはそのホールなのね、一番お気に入りかしら? ほらほらあ、イッてる間も頑張つて動かした方が少しでも多く搾り出せるわよお、キンタマに力入れて頑張りなさいな♡」

「はひいつ、はうう♡ し、しぼり出さな、きや……んおっは♡ で、出えるうう……っ♡ まだ出る出てるうっ、あひいっ……♡」

エロコスチュームに包まれた四肢を突っ張らせながら、ヌコヌコと必死でオナホを動かして最後の一滴までヒリ出そうとするスターティア。

叩き込むように腰を密着させるたび、奥部の子宮口モールドがちゅうちゅと淫らなキスをして、射精中の先端を優しく搾ってくるのもたまらない。

「はあ、はああつ……ぜ、ぜんぶ出たあつ……い、いっぱい出ちゃったつ……♡」

震える手でオナホがゆつくりと引き抜かれ、緑色のコンドームを小さめの水風船ほども膨らませた精液が——さつきよりも明らかに多い放出量がそこに溜め込まれているのを

見て、聖光劍姫の顔が羞恥に染まる。

「二回目とは思えないくらいたっぷりねえ♥ まだ十分近く時間あるし、なかなか順調ペースじゃない、スターティア。今のあなたの改造キンタマなら、適切な快樂さえ味わえればまだまだヒリ出せるはずよお、よかったわねえ♥」

「だ、黙っててよ……！ ゆ、裕美香さえ救い出せば、こんなモノつけたことを後悔させてやるんだからっ……！」

「ふふっ、コンドームの口を縛りながらすぐまれても、ぜんぜん怖くないんだけど？」

だが確かに、今回の賭けには光明が見えつつあった。

このままあと一回、同じくらいの量を射精できさえすれば、規定の分量に届く目算だ。

（そうすれば、今度こそ裕美香を救える……！ こんな屈辱からも、解放されるんだわ……！！）

正義の美少女劍姫の瞳に、久方ぶりの勝利の希望が灯りかけた、その時。

かすかに口の端をサディスティックに歪め——軽い世間話でもするように、オブシディアが口を開いた。

「それにしても……『いいお友達を持ったわねえ、スターティア』。裕美香ちゃん以外にも、ね」

……友達？　なぜ今、この文脈でそんな話が？

いぶかしむ聖光剣姫めがけ、女幹部はここぞと突きつけた……その、爆弾を。

「仲のよい三人のクラスメートがみんな、名器の持ち主でよかったわねえ——って言うてるのよ。特に光善寺天音ちゃん、だったかしら？　彼女のおマンコがお気に入りたいね、二回もその膣内で射精するくらいなんだもの……♡」

「え……？」

何を言っているの、と本気で混乱しかかったスターティアが、異変に気付いた。

いつの間にか、三つのオナホールにうつすらと半透明の文字が浮き出ている……彼女が、星ヶ丘優姫がよく知る文字列が。

ピンク——『光善寺天音』

白——『牧野しずく』

黒——『御陵涼子』

全身が総毛立ち、理解したくない現実が、理解してはいけない真実が……音もなく押し寄せる。

「言わなかったかしら？　『リアルに造られたオナホ』だって……そう、シャドーマテリアルの技術で本人も気付かないうちに、体外からスキャンして完全に『型取り再現』した

もののなのよ。それが誰のかはもう言う必要ないわよねえ………♥」

オブシディアの嘲笑う声は、途中からはもう優姫には聞こえていなかった。

裕美香と同じくらい大切な友達の、実物と寸分違わぬ女性器のオモチャで。

天音と、しずくと、涼子のおマンコで。

無我夢中でチンポをシゴきたて、快楽を貪り、射精した……してしまった。

「そ……そん、な……そんなつ……！」

「あらあ、どうしたの優姫ちゃん、固まっちゃって？ ほらほら、まだまだ時間に余裕は

あるんだから、頑張つてまたシゴけばいいじゃない♡ お気に入りのクラスメイトのおマ

ンコで……ね♡」

「いつ」

「次は誰からにするの？ 誰でドピュっちゃうの？ また天音ちゃん？ しずくちゃんの？」

ちっちゃなキツキツおまんこ？ それとも顔に似合わず汁気多めでウネウネ名器の涼子ち

「やんかしら？　ねえねえ、どうして黙ってるの？　あははははははっ！！」

嫌あああつ——！ と……スターティアの、いや優姫の絶叫が、バスルームに激し

く反響した。

タイムオーバーまでの残り時間は、あと7分余り――。

第10話 女幹部の罠！ 少女を襲う悪のパイズリ乳地獄！

かわるがわる試し、たつぷり精液を搾り取るために使ったリアル造型オナホ。

それが大切なクラスメート三人のおマンコを再現したものだった——シヨッキンクな事実に打ちのめされるスターティア。

味わってしまった。

チンポで貪ってしまった。

仲よしの友達が、清楚なスカートとショーツの奥に隠している、一番大事な部分の味を。

そしてそれが——途方もなく気持ちいいということを、知ってしまった。

おそらくは自分だけが……女の子同士なのに、友達同士なのに！

「そうよお、シワの数から愛液の分泌量まで、寸分違わぬ完璧な再現度よ♥ あ、ただし

処女膜だけはついてないケド……ちなみにお友達みんなバージンだったわ、清純ぶってて

実は経験済み、なんてことはなかったから安心ね、優姫ちゃん♥」

半勃ちのチンポを放り出したまま呆然^{ぼうぜん}とする宿敵を心底楽しそうに眺めつつ、黒いルー

ジュの唇をにやりと歪めて笑うオブシディア。

目論見通りに宿敵の心をヘシ折ってやれたのが楽しくて仕方ないという様子だ。

「ところでいいのかしら、そうもたまたしちゃってても？ あと7分くらいしかないわよ

お、規定のスペルマ量を稼ぐまでのタイムリミットは……♡」

「ッ……!？」

オブシディアが宝石内の異空間から取り出した、宙に浮く黒い天秤。

その片方の皿には、先ほどの射精液でぱんぱんに膨らんだコンドームが置かれている。

もう片側に置かれた重りと釣り合うだけの量——先と同じくらいの射精量が必要だ——を制限時間内に追加できなければ、賭けに勝ち裕美香を救うことはできないのだ。

「早くオナホシゴきを再開しないと、間に合わなくなっても知らないわよお？」

（そ、そんな……っ！ で……できるわけ、できるわけないじゃないっ、あんなこと聞かされてっ！）

いくら虜囚の親友を救うためといっても、同じくらい大切な友人の女性器そのものを模したエロ玩具で射精するという行為は、真実を知ってしまった少女にとっては到底耐えがたかった。

スターティアの視線が泳ぎ、三つのオナホと秤、そして無情に進む時計を行き来する。

（普通に手でシゴいて……でも、それでさっきと同じくらいたくさん、射精できるの——!!）

リアルオナホのとてつもない快楽が導く普段以上の射精量。それを知ってしまった今、ただの手淫では届かないであろうことは明白だった。

逡巡^{しゅんじゆん}し、板挟みになる聖光剣姫をたっぷり眺めたあと……オブシディアが口を開いた。

「気付いてないようだから、助け船を出してあげましょうか。あのねスターティア、効率的に射精する手段は何もオナホだけじゃないわよ？」

「え……ど、どういう意味!? 他に何があるって言うの!？」

「あら失礼ねえ、あなたの目の前にあるじゃない……たっぷり精液を搾り取ってくれる、極上のエロエロなお道具が♥」

スツと、音もなく間合いを詰める女幹部。

眼前に突きつけられた「道具」——それは、ちろりと唇をなめてみせる真っ赤な舌と、ビキニ状レザーにむっちりと褐色柔肉が詰まった、豊満極まる胸の谷間……女幹部の扇情的な肉体そのものだった。

「なっ……お、オブシディア、まさかそれって……っ!？」

「別に私が手伝うぶんにはルール違反じゃないもの、言ってくればシてあげるわよお？」

おクチでおしゃぶりでも、おっぱいでパイズリでも♥ ふふ、自慢じゃないけど生オナホに負けないぐらい、たあっぷりドピユれると思うわあ……♥」

あらゆる男を釘付けにする魔性の肉体が、未経験のJKヒロインを妖しく誘う。

これまでに手やオナホでシゴかれたことはあっても、フェラやパイズリは未知の領域——優姫にとってはセンズリの想像上のオカズでしかなかった。

それを実際にフタナリチンポで味わう機会が、ついに目の前に……！

（でもそんな、オブシディアと……敵と、え、エッチなことをする、なんて……！ で、でも他にいっぱい射精する方法は……！）

憎むべき敵の女幹部のカラダを使った、初体験の淫らなプレイか。

大切な友人のそれを模したオナホールによる、裏切りともいえる羞恥シゴきか。

親友を救うための、究極の二択。

迷っている時間はもうない……優姫が、スターティアが出した答えは——！

* * *

ラブホのバスルーム、浴槽の縁に足を開いて腰かけたスターティア。

その表情は羞恥と屈辱、そして自分が今からする行為への後悔と、一抹の期待が入り交じっている。

何せ彼女の開いた脚の間にはオブシディアが跪いて、早くも復活しビン勃ちになったフタナリちゃんぽに熱い情欲の視線を送っているのだから。

「うふふ、それでお客様はどっちがご所望かしら？ おクチでぺろぺろおしゃぶりヌキヌキ？ そ・れ・と・も、この自慢のむっちりおっぱいでコネまくりの乳ズリコキい？」

「だ、だからいちいちそんな言い方……く、くうっ……！」

何度も言葉をつつかえながら……勝つため、裕美香のためと羞恥心を振り払い、ついにスターティアは自分からイヤらしい要求を口にする。

「お……おっぱい、で……し、してちょうだいっ……！」

「あはっ♥ そう言うと思ったわ、アンタ本当におっぱい大好きねえ、男のコみたい♥」

「う、うるさいっ！ 時間がないんだからさっさとしなさいよ！」

「あん、風情がないわねえ。まあいいわ、たっぷりしてあげる、チンポつきお嬢様の夢だった生パイズリを、ね……♥」

でもその前に……と、女幹部は黒色の——優等生ギャル少女、御陵凉子の型取りオナホを手に取り、自分の胸の谷間に入り口をあてがった。

そのままギュッと搾ると、中から大量のローションが溢れ、巨双乳をぬらぬらと妖しいテカりに染める。

「これで滑りがよくなったわ。どんな気分かしら、お友達の愛液ローションでパイズられるなんて……そういえば、涼子ちゃんもおっぱい大きかったわねえ？ センズリの時、あのコの胸で挟まれる妄想してたんじゃないの、おっぱい星人の優姫ちゃんは♥」

「なッ!? そ、そんなわけっ……んおおおっつ!? ♥♥」

——むにゅうううっ♥ にゆるるんっ♥♥

不意打ち気味に、黒ビキニのまま両手で持ち上げられたヌメつく谷間の下側、魅惑の狭い入り口がビンビンに天を突くフタナリチンポを……にゅぷにゅぷりと貪欲に呑み込んでいく。

「ひうあっ、はあおおお……♥ ああっ、はっ入ってくっ♥ あ、あたしのチンポが、オブリディアのおっぱいに食べられちゃったよおお……っ♥」

「うふふ、熱くて硬くてぶつとおい♥ 18cm近くある立派なグロおチンポに育ったのがよくわかるわよお、スターティア♥ 記念に私のパイ肉でみっちり型取りしてあげる♥」

ぬぷりっ♥ ぬちゆるりっ♥ ぬったん♥ ぬたぷんっ♥

邪悪な女幹部とは思えない、きめ細かな柔肉肌がビキビキに血管の浮いた肉棒に優しく密着し、たっぷり詰まったぷりぷりの乳弾力で縦横無尽に圧迫してくる。

オナホとはまた全然違った、勝るとも劣らない乳マンコの猛威。

スターティアは背筋をのけぞらせて未知の快楽にあえぎ、狭い谷間の上に飛び出た真っ赤な亀頭が、限界まで肉カサをビキビキ開いてぷるぷると震える。

「ほおらほらあ♥ 互い違いにおっぱい肉動かしてこねコネこねコネえ〜っ♥ もう先走り汁お漏らししちゃって、嬉しい嬉しいって泣いてるわあスターちゃんのオスチンポったら♥」

「お、おっ♥ んおおっっ♥ ひっ、やっ!? お、オブシディアもつとゆっくりいっ……

♥ きゅ、急にされると出ちやいそおだよお……っ♥」

「ふふっ、わかったわ♥ 初めてのお乳セックスですものねえ、もったいない暴発なんてしないよう、たっぷりキモチよくなれるように……ちやあんと優しく発射感高めてあげる♥」

感覚自体はまるで違い甲乙つけがたいが、オナホでの自慰と明確に違うことが一点あった。

それは、自分で快感を常にコントロールする一人だけの行為とは違い、オブシディアにされるパイズリは当然ながら彼女がペースを握っているということだ。

にゆるんにゆるん上下にシゴきあげる単純運動の次は、八の字を描くようなねっとりした刺激。

ゆっくりあがつていった双球が亀頭を包んでしつこくコネたかと思うと、一気に下まで、たぽおんっ♡と落とされる。

ランダムに襲い掛かる、予想できないパイズリ快感の波に聖光剣姫は翻弄ほんろうされるがまま。
（こっこれ、一人でするHとは全然違っ……♡ キモチイイのがいつどこからどう来るか全然わかんなっ……あ、ああっ、あたし今オブシディアと、悪い敵とエッチ……しちやつてるんだ……っ！ 本番じゃないけど、お乳でセ……セックスをっ……おっぱいセックスうう♡）

仇敵たる女幹部の乳マンコにみずからハメる、禁断の密着性行為。
行動内容やペースの指示といったコミュニケーションをしながらの二人三脚のプレイは、紛れもないセックスの一種。

悪人とそれに及ぶという、正義のヒロインとしての、してはならない裏切り——これならまだオナホを使っておくべきだったという後悔は、もう遅い。

「ふふっ、痛そうなくらいガチ勃起しちやつてまあ……♡ せっかくだからあ、パンパンになった先っぽはねっとりおしゃぶりサービスしてあげる——んちゆるううっ♡♡」

「——んおっほお!!?♡♡♡」

長く伸ばされたワインレッドの舌が、張り詰めたタマゴ大の亀頭の上でにゆるんにゆる

んと、別の生き物じみて下品に踊る。

たぶったぶつと小刻みに乳肉を揺らして肉幹をズリながらの敏感な先端責めに、スターティアは嫌々をするように首を振り、指を噛んで快楽に耐えるばかりだ。

「んちゅっ、じゅぞっ♥ れろろっ、ちゅぷるるうつつ♥ ……最初にあなたにおしやぶりさせた時のこと、覚えてるかしら？ 逆に自分がされるとこんなにキモチイイなんて思わなかったでしょ……やみつきになるのも無理ないって思わなあい？」

「そ、そんなの思わっ♥ あひっ、ひいっ♥ さ、先っぽおつつ♥ すっ吸われ……ひやあああんつつ♥♥」

上目遣いになりつつ、黒いルージュに彩られた唇を不格好に伸ばして吸い付き、卑猥に舌を蠢^{うごめ}かせて宿敵におしやぶり奉仕する女幹部。

ある種の征服感をはらんだ眺めに、ずくんずくと少女の下腹部は意に反して反応し、チンポが新たな熱を持って反り返って、二つの雌キンタマはどきゅどきゅっ♥ と濃厚オスミルクを生産してしまう。

「んっぷ♥ じゅるるるつつ、んちゅぷううつ♥ ほらほらあ、たまらないでしょう？ 女にパイズリさせるのも、くっさいチンポをしゃぶらせるのも最高でしょお♥ その気になればあなたは好きなだけこの快感を貪れるのよ、スターティア……♥」

悪魔の囁き^{ささや}が、乳撃と口撃でとろけたチンポから脳内へとじわじわ浸透していく。

スターティアの持つ圧倒的な力、認識歪曲能力、そして街の人やクラスメイトへの人望。もしそれらを悪用すれば、女の子たちを思うがままにするのは確かに難しくないだろう。たとえ、無理矢理でなくとも。

（りよ、涼子は『スターティア』のファンだから……あ、あたしがその姿で頼んだりしたら……っ！）

シャドーマテリアルの罠で男性器を生やされてしまい苦しんでいる……だから、処理に協力してほしいの——もし、そんなふうに関心したら、涼子は。

かつて聖光剣姫の手で窮地を救われた少女は、戸惑いこそすれ、それを拒みはしないだろう……自分に恩返しができるなら、恥ずかしいけどやってみるよと、あの面倒見のいい友人は赤面しつつ了承するのではないか。

いや、涼子だけではない。天音も、しずくも。

『スターティア』としての頼み、『星ヶ丘優姫』としての頼み、いずれの頼み方でも、優しい彼女たちは要求を断らないのではないだろうか？

そう……いつでも自分は『できてしまう』のだ。思うがままの快楽を、ただ欲しささえすれば——！

「——って、あ、あたし何を……っ!? な、何を考えたの、今っ……!」

おぞましい劣情の思考から我に帰り、自分が考えてしまったこと自体に愕然がくぜんとするスターティア。

女幹部は舌と双乳で巧みに少女の性感をコントロールしつつ、その表情を油断なく読み取っていた。

（ふふっ、手に取るようにわかるわよお、あなたの妄想が、モラルの一線を越えつつある欲望のたぎりが……! さつき、いつでも好きにできるおマンコのよさを教え込んだのも、こうして女のカラダのよさを少しずつチンポに刻んであげてるのもみんな、セックスへの執着を忘れなくするためだものねえ……♡）

横目で時間をさりげなく確認し、いよいよオブシディアは、仕上げ〴〵にかかる。

もぎゅぎゅううつつ♡ と、凄まじい乳圧をかけ、灼けた鉄杭のようになった美少女チンポを肉プレスしたのだ。たまらず嬌声をあげるスターティア。

「は、はううつつ!!♡♡ やっあっ♡ んおおおお……っ♡ んぎゅ、ぎゅうつてええつ、おっぱいがおチンポをぎゅむむつつてしてるよおおつつ♡♡」

「そろそろ時間いっぱいだから、フィニッシュに向けてのトドメに入るわよお♡ 聖光剣姫ちゃんはどこにスケベ液ブチ撒けたのかしら? 顔射キメたいなら、ちよつと屈辱だ

けど浴びてあげるし、おクチに注ぎたいって言うなら全部吸い出しちゃうわ？」

シャドーマテリアル大幹部「七冥塊」の一人、「黒曜の」オブシディアの顔面に精液を放つ、あるいは口腔に思うさま発射する……いずれも、かつて自分がそうされたように。

先の自己嫌悪の反動もあり、スターティアの心中にふつふつと暴力的な衝動がわき上がってきた。

それは自分をこんな状況に追い込んでいる、恨み重なるにつくき悪の女幹部に、どんな形であれ一矢報いたいという……一種の復讐であり、ストレス発散欲求でもあった。

「くっ……！ く、口にっ！ あなたの口の中に、しゃ……射精してやるわっ！ こ、こぼさずに全部受け止めなさいよっ、ちゃんと計るためにっ！」

「わかったわ、ちゃあんと一滴残さずキャッチするから安心なさあい♥ 悪のリップホールよおく狙ってヒロインミルク発射してねえっ、あ~~~~んつつ♥」

そう、これは賭けに、ゲームに勝つためでもある。飛び散ってこぼれてしまう可能性のある顔射より、口内発射の方が量の確保には確実。

心得たとばかりに、オブシディアが乳ズリ運動のボルテージを高めつつ唇を大開きにし、レロレロと舌を踊らせる——かすかに勝利の笑みを浮かべた、その後で。

「げ、下品な顔だわっ……♥ んあ、うっ、き、来たああっ……♥ んんううつつ、おっ

おおっおっっ♡　だ、出すわよオブシディアっ♡　あんたの口の中につ、せーえきっ♡
そ、注ぎ込んでやるんだか……らっっ!!♡♡

「んふ、いいわよおっ、来て来てえっ♡　タマタマの中でたんまりつくったスターティア
のくっさいフタナリちんぽ汁♡　私のおクチめがけて好きなだけブピユって懲らしめて
ちようだあいっ♡♡」

たばっ、たぽっ♡　たぽたばんっ!!♡♡　ぬばんっ♡　ぬぷばんっ♡　ぬたんッぬた
たんっ!!♡

押さえつけた両手の五指が沈むほどに圧搾された女幹部のヌルヌル魔乳が、正義の変身
ヒロインの爆発寸前男根をタマごと押し潰すように超圧迫し——！

「んおおおおおおおっ♡♡　でッでるうううっ!!♡♡♡　お、オブシディアめ
ええっ!!♡♡　わ、私の精液残らず喰らいなさいいつ!!♡♡」

——びゆるるっ、どぶびゆぷううっ!!

ばびゆ、んびゆくっっ、びゆちちっ!!　どびゆぶふんっ!!

「んああ射精^でてるよおおっ、はっ、はへええ〜っ♡♡　あたしっこんなヤツにつ
っ♡　だっ出しちゃって♡　るうううっ!!♡♡」

「きゃっ、んはああっ♡　あぶっ♡　おふっ、おぶううっ♡♡　すっすごい量っ……

んはああんっっ♡♡
」

びゆこん、びゆこんと絶え間なく発射される太い精液の筋が、スターティアのチンポ先とオブシディアの口内粘膜との間に白い橋をかける。

ドクンドクン脈打ち暴れるフタナリペニスの律動に合わせて、女幹部は双巨球をムニグニとりズミカルに揉みこね圧迫し、最後の一滴まで搾り取り受け止めようとする。

「ううっ……くうつつ♡♡ ま、まだ出るわよオブシディ、アっ……ぜ、ぜんぶ受けき
つてちようだいっ……こ、こうやって直接ううつつ♡♡」

「んっ——むぐううつつ!!?♡♡」

宿敵の角と銀髪を掴み、グツと引き寄せて発射中のチンポを頬張らせるスターティア。

正義のヒロインとは思えないその行為、だがすぐに蠱惑的な黒い唇は太い肉筒の根元をみつちりと締め付け、直接ドクドクと注がれる精液をちゅうちゅうと……いや、ずじゆるぢゆるるんつと品のない猛吸引ひよつとこバキュームで引っぱり出す。

「んっはあああ、はとおああああつ……♡ あひいいつつ、すっ吸われっ♡ せーえきが
吸い出されてるううつつ♡♡ あーっ、あああつ……んおっ♡ おっ！」

メスの体を、敵のおクチを放出便器として思うがままに使う、背徳感にまみれた初めての衝撃的体験。

発射中の敏感チンポを容赦なくリップ締めバキュームされることで何倍にもブーストされる射精快感が、ウブなお嬢様を一発で下品オーラルセックスの虜にしていく。

（ひいいいっすっすっ凄いい♡ 女の人のカラダに直接射精するのがこんなにキモチいいなんて知らなかったよおお♡ でっでも、ぜっ絶対ダメ……ほんとはやっちゃダメなのおおっ、今だけ今回だけえっ♡ オブシディアだからいいのおおっ♡）

悪の幹部だから、憎い敵だからこれぐらいしても構わない——そうやって自分を納得させて、パイズリコキ口腔射精の快楽を味わいつくすスターティア。

そして、無限とも思える放出快美のスケベ時間が過ぎ去ったあと……。

「んっ——ぷあ♡ は、はぷううっ……♡」

にゆるるるううっ……と、ひよつとこ状になった卑猥な口唇がヌラヌラのチンポ表面を滑りあがってチュポンと離れ、わずかに朱に染まり上気した顔で、オブシディアがかばつと唇を開いた。

ごくっ……と、眼下のイヤらしい眺めに——美女の口唇内に自分がヒリ出した臭スペルマがたっぷり♡ 溜め込まれているという征服感拔群の光景に、生唾を飲んでしまう聖光劍姫。

「み、見せなくていいからっ……！ は、はやくそれを秤にかけてちょうだいっ！」



今更のように恥ずかしがるスターティアに向けて嘲笑うように口の端を歪めると、女幹部は浮遊する秤の皿を招き寄せ、尖った耳にかかった銀髪をかきあげつつ下を向く。

とろおおつ——♡ と、唾液と混じってなお粘度たつぷりの濃厚美少女ザーメンが、そこからゆつくりと垂れてコンドームの上に折り重なっていく。

（ギリギリ時間内……！　こ、これで、絶対に足りたはず……っ！）

羞恥にも勝る期待によって輝きかけた聖光剣姫の笑顔は、しかし——。

「え……う、ウソでしょうっ!?」

計測針は、無情にも——わずかに重りの側に傾いていた。足りなかったのだ。

同時に、時計のアラームが鳴り、タイムオーバーを告げた。

「うふふ、ざあんねん……ちよっぴり、ほんのちよっぴり足りなかったようねえ……すつごくキモチよさそうだったけどお、やっぱり連続射精だと量が減っちゃったのかしらねえ……?♡」

唇をねっとり舐めつつ愉快げに宣告するオブシディアに、ぼんやりと向けられた絶望の表情が……ハッと、何かに気付いたように怒りに染まった。

「オブシディアっ、あっあなたッ!!　口の中に出した精液を、少しだけ飲んだわね!!　目盛りにはわずか届かないように、計算して——!」

「あらあ、またひどい言いがかりねえ……？ 私がそんなことしたっていう証拠でもあるのかしらあ？」

「そ、それは……っ！」

やられた——油断した。

口内ではなく、顔に出していれば……いや、周到で狡猾こうかつなこの女幹部のことだ、その時はまた別の策と勝算があったに違いない。

最初から、勝てる算段のない勝負へと誘導されていたのだ。そして巧みな話術と行為により、快楽と感情をコントロールされ、そこに思い至れないようにされていた。

「くっ……ひ、卑怯者ッ……！」

歯がみしても、涙ぐんでも、もはや手遅れだった。

残った物証が示すものは、またも賭けに負けてしまったという事実のみ。

そしてそれはすなわち、オブシディアの出す新たな要求に従わなくてはいけないということの意味する……！

「ふふっ、納得いってないってカオねえ？」

「あ、当たり前、でしょう……！」

あらそう、じゃあ——と、女幹部が次に放った言葉は、スターティアの予想を越えたも

のだった。

「引き分け……ってことで、仕切り直し」にしてもいいわよ、この賭け」

「ッ!? ほ、本気で言ってるの!？」

「そうよお、誇り高き七冥塊の私が、卑怯者と思われてまで勝ちを拾いたくはないしねえ……あなたが納得できるように、もう一度チャンスをあげる」

ぬけぬけと誇りを口にしつつ、オブシディアは用意していた言葉が続ける……ここまでの流れは、すべて計算づくだった。

「ただし……あらためて行われるゲームの舞台はここじゃないし、さつきみたいな短時間の勝負でもないわ。仕切り直す代わりに、それは飲んでもらうわよ」

「ど、どういう、ことよ……!？」

一抹の不吉な予感に、スターティアの背筋がざわつく。

いたぶるようにたっぷり間を置いてから、オブシディアは新たなルールを宣言した。

「新たな射精ゲームのステージは、そう——あなたの日常。たっぷり時間をかけて、親友を助けるために頑張ってもらおうわよおスターティア、いいえ星ヶ丘優姫ちゃん……♡」

第11話 禁断の教室！ タブーを犯す白昼堂々のJKスペルマ乱舞！

「あの……星ヶ丘さん、どうかされました？」

もうすぐ昼休み前の授業が終わろうという、私立聖碩女学院の教室。

光善寺天音は隣の席に座る優姫の様子が、どこかおかしいことに気付いて小さく声をかけた。

「……っ！ あ、天音……？」

まるで夢から醒めたように、ハッとうつむき気味の顔をあげる星ヶ丘優姫。

その頬はうつすら上気し、栗色のふんわりしたセミロングが小刻みに震えていた。

「その……ずっとうつむいてらしたので。気分が優れないようでしたら先生を——」

「え、だ、大丈夫っ！ 別につ、なんでもないからっ……ね？」

慌てた小声でそう告げられ、おっとりした印象を与える黒髪ロングの姫カットを、きよとんとした様子でかしげる天音。

「はあ……でしたら、いいのですが……」

「う、うん。なんでもっ、ない、から——！」

優しい友人を安心させようと、微笑んでみせる。

だが、今。

彼女の身に実際起きている出来事は『なんでもない』どころではなかった。

（やだっ、ダメえっ……♥ も、もうすぐ昼休みなのにつ、がっガマンっ♥ できなっ……
…いいっ!?!♥）

そう——その机の下、白く健康的な太ももの間では。

清楚なチェックのプリーツスカートを押し上げ、机の裏面にニュツチリと密着する赤黒い物体があつた。

それはショーツからすっかりハミ出た、20 cm 近くあるブツといグロチンポ。

オブシディアに生やされたフタナリペニスが、授業中だというのに恥ずかしげもなくガチ勃起中なのだ。

（おさまって、おさまってよおお……♥ い、いま授業中なのにつ、あ、あたしこんなあつ……!）

他の席からは死角になっているし、まさか同性の友人のそんな場所でイヤらしい異変が起こっているとは、この教室中のお嬢様生徒たちの誰ひとり夢にも思わないだろう。

長く太くイヤらしく育ち、血管をビキバキに浮かせた、本来この女の園にあつてはなら

ない犯罪的異物。

（あ、朝あんなに……な、何回も出してきたのにつ……！）

今日起きてから学校に向かうまで、優姫は自室とトイレで一回ずつオナニーを……チンポセンズリで大量の精液をぶっコキ抜いている。

だが、女生徒のみずみずしいにおいで満載の通学バスに揺られ、シャンプー混じりの甘酸っぱい体臭を近くで嗅いだ瞬間、元気なふたなりチンポはあっという間に勃起力を回復させてしまった。

（ひ、昼休みになったらっ♥ も、もうすぐおトイレで溜まったせーえきヌケるのにつ、それまでガマンしなきゃいけないのにつ、でもつでもおおっ♥）
ちらりと、さつき声をかけてくれた優しい友達の横顔を見る。

折り目正しいブレザーに包まれた、このお嬢様校でもトップクラスの令嬢、光善寺天音の汚れ一つないカラダ。

だが優姫は——知っている。知ってしまったている。

天音自身すら知らない淫らな事実を。

彼女が、その下腹部に何を隠し持っているかを。

その女性器の^{おまんこ}味^を。

友人のあそこがどれほど名器であるかを、おチンポを気持ちよく射精させる優れたメスの機能を持っているのかを……そっくりリアルに型取りされたオナホールを、それと知らず味わってしまったあの日から。

（か、考えちゃつダメつつ♥ そんなことおつ、友達にそんな最低の恥知らずな妄想なんてつ、そ、想像しちゃダメなのにつつ♥）

何度も精液をぶりゅぶりゅ吐き出したあの極上にキモチいい肉穴が、自分の勃起したオスチンポから2mと離れていない位置にあるのだ。

いや——本物はもつとキモチイイのよと、オブシディアは囁いた。

あれ以上……あれ以上の未使用快楽穴を、天音は無防備にそのカラダに備え付けている。その秘密を、自分だけが知って——いや、天音だけではない。

小柄で小動物のように可愛い、牧野しずく。

一見ギャル風だが、頼もしくて気のいい御陵涼子。

同様に仲のよい友人二人の、それぞれのニセおまんこの味もまた、優姫は味わい比べてしまった。

そう……あのキモチイイ三つのおまんこ、そのさらに上に行くナマのそれが、この教室内にある。

そしてもし自分が力を悪用すれば、あつという間にそれらを好き放題に食い散らかし、味わえる。

三人どころか、この室内の……いや、校内の女生徒たちみんな、みんな……彼女たちがみんな、おまんこというチンポを気持ちよくさせる器官をスカートの中に隠していることを、今や優姫は知ってしまった。

そんなものに囲まれて、どうやって勃起を抑えればいいというのか？

『あらあらあ、ガマンする必要なんてないじゃない？ あなたは皆を怪人から守ってあげてる正義のヒロインさんなんだから……ちよつとぐらいお礼をつまみ食いしちゃてもお、バチは当たらないわよお……案外、喜んで受け入れてくれるかも♥』

脳裏によぎる、オブシディアの悪魔の囁き。

いつそそれに従ってしまえ、そうすれば楽になる……そんなドス黒い欲望まみれの衝動が、否定しても否定しても正義のヒロインの心にずくずくとわき上がってくるのだ——チンポの脈動と共に。

（だめ、だめだめだめええっ!! それこそオブシディアの術中じゃないッ、あいつはあたしにそうやって一線を越えさせようとしているんだわ、だからこうやって日常の中に戻して、じっと待ってほくそ笑んでいるんだわ!!）

まったく耳に入らない授業の声をどこか遠くに聞きながら、必死で首を振る。

さすがのように壁の時計を見るが、昼休みまではあと20分以上……今の優姫には長すぎる時間だった。

内股になったスカートの中で、今にも破裂しそうなガチ勃起ペニスが先走りを漏らし始めている。

このままでは、理性が危ない。

だから——だから。

（だから、これはっ……き、緊急避難っ……そうよ、仕方ない、ことなのよお……っ♡）

優姫は、震える右手をゆつくりと、机の下に移動させた。

同時に、左手首にはまった銀色のブレスレットに思念を送る。詠えられた黒曜石が不気味な光を放った。

（に、認識歪曲フィールド、展開っ……！）

それはスターティアのコスチュームに備わっているのと同じ、一般人の認識能力に干渉するフィールドを周囲に張る装置だった。

他ならぬオブシディアがこれを、新たな『ゲーム』の始まりと共に優姫に与えたのだ。

（ちよ、ちよつとだけ……少し、ほんの少しの間っ、鎮めるだけ、だからっ……！）

普段でも、これを身に着けていること自体が周囲から「不自然」とは思われなくなる。

そして機能を起動すれば、よほどのこと……たとえば殴られてもしない限り、着用者の行動は「ごく自然な行為」として受け止められ、気にも留められない。

それに伴う「音」や「におい」なども含めて、だ。

その用途は、もちろん——！

（んっ……あ、ああっ……♥ しちゃうっ、ほ、ほんとに触っちゃうっ……あ、あああ
んおお!!??）

真っ昼間の学校、それも授業中だというのに。

周囲を友達に囲まれた教室のだ真ん中だというのに。

優姫は、握った——握ってしまった、ガン勃起したスケベチンポを、自分の手で、自分の意志で。

（みっ見られてないいつ、見られてないからああっ♥ だから大丈夫なのっ、仕方ないの、
ゆ……裕美香のためだしっ♥ そう仕方ないのおおっ♥♥）

決定的な一線を越えないため、正気を保つため。

オブシディアの淫らなゲームに耐え抜き、いつか逆転のチャンスを掴んで囚われの親友を救うため。

いくつもの理由が……大義名分が……『言い訳』が、待ちかねたチンポじか握りの快感にビシバシ打ちのめされる優姫の脳髓に明滅した。

そして、一度始まってしまえば、もう止まらない。

（あああつウソ嘘うそおおつつ♥ こんなのダメええええつつ♥ あ、あたしこんなトコでっ、みっみんながいる前でなんてええつつ♥♥）

最初はおそろおそろ、本当にフィールドが有効なのか確かめるように動いていた指先は、本当に安全と見るやすぐに遠慮も慎みも失った。

しゅこ、にゅこっ……にゅく、にゅくにゅっ……♥ りゅここっ……♥

（あふ、おふつつ♥ んお、な……何コレえっ、いついつもと全然ちがつ♥）

肉と皮のこすれるイヤらしい音を響かせながら、ノートを広げた机のすぐ下でシゴかれる優姫のフタナリちんぽ。

反り返る角度も、熱した硬質ゴムのような硬さ熱さも、トクントクンと鈴口から漏れ出るカウパーの勢いも……すべてが朝オナった時などとは段違いだった。

（ひっあひいいいいつつ♥♥ きよ、教室でええっ、みんなの前でシコるのがこんなにキクなんてええつつ♥ しっ知らなかったよおおつつ♥♥）

ぷうんと周囲に漂うオスの淫臭、二つ隣の席にまで聞こえそうなシコリ音。

可愛らしい顔はすっかりセンズリの欲望に染まり、透明なよだれまでノートの上に垂らしそうになっている有り様だ。

認識歪曲フィールドがなければ、天音をはじめ周囲のクラスメートは一発でこの異変に気付いてしまっていただろう。

（だっだいじょうぶううつ♡♡♡ きつ効いてるつつ、フィールド効いてるからっ♡ 見えてない、知られてないいつ♡ んおお効く効くキクううつ♡♡ 教室オナニーチンポに効きすぎちゃうよおおつ、これクセになっちゃうよおお!!♡♡♡）

はかどる。公衆の面前でのチンポセンズリがあまりにもはかどりすぎる。

フタナリ少女はたった今、未知の倒錯羞恥快楽によってわき上がるかつてない自慰快感で思春期の脳ミソをぐずぐずにトロカされ、二度と戻れない変態性癖をガッツリと勃起チンポに刻み込まれつつあった。

（やつんおおあああつつ♡♡♡ あっ天音つつごめんつつ♡♡♡ と、隣の席でこんなことしててゴメンなさいいつ♡♡♡）

隣には、黒板を真剣な目で見る天音の綺麗な横顔。

そのつややかな黒髪から、かすかにフローラルな香りが漂ってくる……それがまたチンポとキンタマにズクズクと響く。

密着したプリーツスカート生地にじんわり広げる濃いカウパーが潤滑液となつて、イヤらしい水音までもが響き始めた。

にっちゅぬっちゅ♡ にゅっこ、じゅここっつ♡ にゆるっりゅこじゅこっつずりゅりゅっつ♡♡

（ああダメ駄目だめええっ♡♡ 止まつ、止まらなひいいっ♡♡ やああっ、このままじゃっ♡ このままじゃあああっつ!!??）

ほんの少しだけ触つて興奮を静めることなど、もはやできるはずもなかった。

今や優姫は両手で長大なグロペニスを握り、血管の浮いた肉幹とパンパンに張った鶏卵大の亀頭を、左右から思いっきりシゴきたてる動きを止められない。

そしてさつきからショーツをハミ出て、椅子の上にでっぷりと鎮座した、たっぷり中身の詰まった雌キンタマ……その中で荒れ狂う白濁ミルク汁は、放出の時を今か今かと待ち構えギルギルと渦巻いていた。

（しゃっ射精♡ 射精なんか絶対しちゃいけないのにつつ、したらこれ一線越えてっ、絶対戻れなくっ……お、おおっ♡ おっほ♡ おほへええつつっ♡♡）

授業の終わりまであと数分、せめてそれまでガマンして発射だけは誰もいない所で……と、なけなしの理性が優姫に告げる。

だがそれでも、肉棒をシゴく手の動きは止まってくれない。

優姫は快楽と羞恥と後悔の涙を浮かべ、思わず、すがるようにして隣席の友人を再び見た——その瞬間。

「……？ 星ヶ丘、さん？」

偶然、天音が優姫の方を見た。

ぷるぷる震える射精寸前勃起チンポをぎっちり握りしめ、汗とよだれを垂らしながらハッハッと発情した犬のような息を吐く、ブザマ極まりない姿を……正義のヒロインとして、乙女として大切なものを失ったその顔を。

もちろん、認識歪曲フィードの効果でそれらの現実には天音に知覚されない。

普段通りの表情の優姫と、ただ目があっただけと理解するだろう。

だが、見られているという実感が、その不意打ちのショックと甘美な絶望感が……ギリギリで踏みとどまっていた理性の堤防を、たやすく決壊させた。

「あ——あ、あああ………あひいへええつつ♡♡」

——ぶばちゅううんつつ♡♡

ばびゅつつ!! んぼぶびゅつつつ!!! どびゅびいいいつつ♡♡

ガタンと椅子が揺れる音と共に、優姫の机の下から太い真っ白なモノが一直線に射出さ

「んんうううおおお……んおつつ♡ おお、んおおおおお……♡♡ おあああ……っ♡」

必死に口を塞ぎ、淫らな嬌声を押し殺す優姫。

だがその下半身では、乙女の絶望と裏腹に、嬉しそうにぶるんぶるんと左右に鎌首を振る肉蛇が、溜まりに溜まった濃厚臭スペルマをびゅつくんびゅつくん我が物顔に吐き出し散らしていた。

（あ、あああ、ふあああ……♡ や、やつちゃった……あたし、取り返しをつかないことを……こ、これじゃどうしようもない変態だよおお……！）

長い長い射精後の虚脱感が、我に返った優姫の心を打ちのめす。

だが、それにも増して正義の美少女戦姫を苛むのは、今しがたの射精の圧倒的な快感、解放感だった。

教室で精液を——友人にそれと知らず見られながらブチ撒けることが、とてつもない快感だったのだ。

その証拠に、今日三回目の射精でありながら、教室を汚す精液の量も濃度もニオイも信じられないほどにドギツイ。

（あううう、さっ最低だあたしっ、最低最悪うう……！ と、とりあえず、これを拭き取

らない、と……っ！)

むわわぁ……♥ と栗の花に似た異臭を立ち上らせながら、床にネットリと広げる精液
ダマリ、椅子の背をゆつくりと流れ落ちる白濁ジェル。

認識歪曲には制限時間が存在するし、優姫がここから離れてしまえば、それらの痕跡は
知覚されてしまう。

その前にこの惨状をなんとかするため、優姫は涙を浮かべながらティッシュを取り出し
床にしゃがみ込んだ——その姿は、傍目には消しゴムか何かを拾うように「補正」されて
映っていることだろう。

* * *

だが——その教室の中に、もう一人。

今しがた展開された恥知らずなセンズリ痴態ショーを、認識を歪曲されずに知覚してい
た者がいた。

(な……何なの、今のはっ……!?)

城鐘アリア。

春からこの学院に転入してきた、流れるような黒髪と神秘的な雰囲気を持つ孤高の美少
女。

彼女は優姫の二列斜め後ろの席から、たった今の一部始終を固唾を吞んで見守っていたのだ。

（いきなり認識歪曲フィールドを展開させたと思ったら、あんな……あんな、ことを……っ！）

そのクールな美貌が、クラスの誰も今まで見たことのないような動揺を浮かべている。無理もない——まさか星ヶ丘優姫が、いや聖光剣姫スターティアが、白昼の教室でよもやこんな蛮行に及ぶとは、冷静な彼女の予想と理解を超えていた。

だが『認識歪曲フィールドが効かない』すなわち同種の力を持つ存在であることを、アリアは……いや、シャドーマテリアル幹部、白銀のシルヴァリアは、今はまだ隠し通す必要があった。

だから気付かぬふりをして一部始終を見守っていたのだが……まさかあんな下品でイヤらしく、不様な姿を見せつけられるだなんて。

（い、一体何をしているのよ、スターティア……！ この白銀のシルヴァリアが、唯一好敵手と認めた戦士の誇りはどこに行ったというの!!）

宿命のライバルが、黒曜のオブシディアの卑劣な罠にかかり、人質を取られて淫らな責め苦を受けていることを、シルヴァリアは知っていた。

だが彼女の見る限り、スターティアは気高く誇り高き精神でそれに耐えているはずだった……以前オブシディアに嘲笑を込めて言ったように、^{「快楽の罠程度」}に聖光剣姫は屈しないはずだったのに。

そんな好敵手を敵ながら認め、信じてすらいたというのに。

（確かめる必要がある……あなたの心が、闘志が、本当に萎えてしまったのかを。……そう、この私自身の——真の目的のためにも）

シルヴァリアが胸に秘めた目的。

それはシャドーマテリアル内部の誰にも知られてはならないもの。そしてその成就には、スターティアの力が必要なのだ。

（でも……もしも本当に、あなたが気高い闘志を失ってしまったというのなら……！）

別の手段をとる必要がある……目の前で、床についた白い汚れを必死でぬぐう情けない姿に、白銀の剣士は失望と侮蔑の混じった視線を送る。

——シルヴァリアがとてつもない過ちを犯したのは、その時だった。

クールな白銀の魔剣士は、あまりに理解を超えた事態に……初めて見るフタナリ少女の痴態に、やはり柄になく動揺し冷静さを欠いていたのだ。

「……え？」

無意識の生み出した偶然。

あるいは、動揺からの油断。

なにげなく後ろに顔を向けた優姫の視線と、それを冷ややかに見下ろすアリアの視線が……交わった。

（しまっ——）

目と目が合った。

そして固まった。

何食わぬ顔を作ろうとしても、もう遅い。

「ただのクラスメイト」であるはずの「城鐘アリア」が、『今の優姫の姿を認識している』ことを。

その様子を見て『ただならぬ表情をしている』ことを……見られてしまった！

「し、城鐘、さん……っ？」

「っっ……!!」

授業終了のチャイムがのんびりと鳴り響き始める中。

まるでそこだけ、スポットライトでも当たっているかのように。

自分のブチ撒けた精液をあらかた拭き終えた優姫と、それを強張った表情で見下ろす黒

髪の転入生は、互いを呆然と見つめ合っていた――。

第12話 狂い出す齒車！ 聖光の剣姫と白銀の魔剣士、禁じられた契約！

その日の昼休み。

ほとんど人が立ち入らない校舎屋上の一角で、星ヶ丘優姫と城鐘アリアは人知れず向かい合っていた。

「なるほど……じゃあ、あなたは体に『特殊な疾患』を抱えているということね」

長い黒髪をかきあげながら、つとめて平静そのものを装うアリア。耳まで赤面してしどろもどろになった優姫が、こくこくと頷く。

「う、うん。いつもは押さえられてるんだけど、さっきの授業中にどうしても……その」

「……どうしても我慢できない『発作』が起こってしまった、と」

「う、ううつ……そ、そういうことになる、かな」

それは奇妙な対話だった。

優姫の方は、眼前の転入生がまさか幾度となく剣を交えたシャドーマテリアルきつての魔剣士とは知る由もない。

対してアリア——シルヴァリアは優姫がスターティアであることを知っているものの、

そのことを相手に知られるわけにはいかないのだ。

それゆえにシルヴァリアはあくまで『偶然』を、『常人』を装うことにした。

認識歪曲フィールドには、かかりやすさに若干の個人差がある。

ちょうど有効時間が切れかかったタイミングでもあったので、アリアは一人だけそのごまかしにかからず、真実の光景を垣間見てしまった……そう思わせるように計算された反応を、優姫はその目論見通りに信じこんだ。

そして優姫の、普通なら誰も信じてくれないであろうそんな説明を、逆にシルヴァリアは鵜呑みにした……フリをした。

「城鐘アリア」が知ってしまったのは、あくまで優姫の体に奇妙なオスの器官が生えていることだけ。

そういう筋書きで辻褄を合わせることにしたのだ。

もちろん、異様に物分かりのいいアリアの態度に、普通なら逆に不審を抱いてもおかしくない。

だが、慌てふためく今の優姫は、決定的な秘密（スターティアとしての正体）まではバレなかった。ことに安堵し、そこまで頭が回らないだろうとシルヴァリアは判断し、事実その通りになった。

「その……不可抗力とはいえあんな場面を見てしまったことは、悪いと思っているわ」

「あ、う……や、やっぱり見られちゃったんだ……城鐘さんに、あんな所つ……！」

クラスメートに見られてしまった……あの恥ずかしい射精の顛末を。

あらためて突きつけられる残酷な事実にも、みるみる飛び降り自殺でもせんばかりの青ざめた表情になる優姫に、慌ててシルヴァリアはフォローを入れる。

「だ……大丈夫よ、病気の発作みたいなものでしょう？　なら気にすることはないわ。見たのが私だけでよかったわね」

「う、うん。でも、その……き……気持ち悪いよね、こんな。女の子なのに男の人のがついてるとか」

「星ヶ丘さん？」

優姫のつぶらな瞳に大粒の涙がじわつと浮かんだのを見て、シルヴァリアはぎよつとすすむ。

「あは、あはは。最悪だよね、あたし。ほんと最低、教室で、あんな、あんなつ——！」

一度堰^{せき}を切った言葉が止まらない。

思えば今まで、優姫は自分の体に起こった淫らな異変を、誰にも知られまいと隠し通してきた。そうするしかなかった。

孤独な戦いに張り詰めた心が、教室で射精に至ってしまった絶望感も手伝い、一気にぷちんと切れて決壊しようとしていた。

「……星ヶ丘さん！」

強い語気で名前を呼び、思わずシルヴァリアは目の前の少女の肩を両手で掴んでいた。

「し、城鐘、さん？」

「あのね、星ヶ丘さん。うまく言えないけど、あなたは、その……よくやっていると思うわ」

「え——」

「そんな、誰にも言えないような悩みを一人で抱えて……とても頑張ったと私は思うもの。本当よ」

「……っ!!」

まっすぐに目を見つめて、不器用だが真剣な言葉を伝えるシルヴァリア。

それはこの場をおさめるための演技のはずだったが、白銀の魔剣士は驚くほど素直にそれを言葉にすることができた。

一拍を置いて、今度は言葉のかわりに大粒の涙がボロボロと優姫の瞳からこぼれ出す。「だから……だから、自分を責めるのはもうやめなさい。あなたは悪くないわ。きつとそ

れは、仕方のないことなのよ」

「う、ううっ……うああああんつつつ!!」

栗色のセミロングが、並ぶとやや背の高いアリアの首筋に飛び込んだ。

大切な親友を今なお救えていない煩悶。

オブシディアの罠からいまだ脱出の糸口が見えない絶望。

そして淫らなオスの器官を抱え込むことへの恐怖。

ずっと誰にも言えずに溜め込んできた感情の数々を、優姫は泣き声に変えて思いっきりぶちまけた。

シルヴァリアはただ、城鐘アリアとしてそれを受け止める——優しくその背を撫でさりながら、まるで姉が妹にするように……。

* * *

「落ち着いた、かしら？」

「うん……ありがとう、城鐘さん。あたし、城鐘さんのこと誤解してたかも……もつと怖い人かと思っちゃってた」

「なによ、それ……」

フェンスによりかかりながら、えへへ、と赤くなった両眼で笑いかける優姫。

その天真爛漫な、太陽のような笑顔に、シルヴァリアの胸がなぜかドキリと高鳴った。

「……アリアでいいわ」

「え？」

「名前よ。城鐘さん、なんて呼ばれるのは性に合わないもの」

「あつ……じゃあ、アリアさん、かな？」

「同じ年でしょう？ 私たち」

「ん……でも『アリアちゃん』って感じじゃないし、やっぱりさん付けがしつくりくるかなあつて。だめ？」

「……好きに呼べばいいわ」

さっきの取り乱しぶりはどこへやら……どこまでも楽しそうに喋る優姫に、逆に押され気味のシルヴァリア。

それは親友が敵の手に奪われた時以来ついぞ見せなかった、優姫という少女本来の笑顔がひさかたぶりに復活した瞬間だった。

「じゃあ、とりあえずアリアさんで！ あつ、あたしのことも呼び捨てとかでいいからね？」

「はいはい」

「ふふふっ♪」

子犬か何かのように無邪気そのものの表情で、周囲をくるくると動き回る優姫、対応に困るシルヴァリア。

ある目的をもってこの学院に通っている彼女は、友人関係など必要ないものと考えていたため、こういう時にどう反応していいかわからない。

「あつ……それと、アリアさん、さつきくつついた時にわかったけど、思ったよりおつきいね」

「……は？」

「う、ううん、こつちのこと！ 忘れて！」

何を言われたのかよくわからず、きよんとするシルヴァリア。

さつき泣かれてからというもの、どうも会話のペースを思うように握れない。

（まったく……なんで私が、こんな……）

内心で、ため息をつく。

単に言い訳を取り繕って終わらせるはずが、予想外に懷かれてしまった……これではどうにもやりにくい。だが、不思議とそれが悪い気はしなかった。

「……とにかく。また『発作』が起こったら、今度はもっと冷静に対処しなさい。いいわ

ね？」

「う、うん……」

「しゃんとしなさい。あなたには、それができるはずよ」

「そ、そうかなあ……？」

思い出したように顔を伏せ、再び真っ赤になる優姫。

シルヴァリアに思わせぶりの言葉を投げかけられても、その裏を読む余裕はないようだった。

「そうよ。……私も協力してあげるから」

照れ隠しになにげなく口にした、そのひと言。

あとから思えば——まさにそれが、さらなる過ちの入り口だったのだ。

「きよ……協力、って？」

ぴくりと、優姫がその言葉尻に食いついた。

だがシルヴァリア自身は気付かない……自分がどれだけ、不用意に危険な領域に踏み込みつつあるかを。

「だから、あなたが衝動なんか流されないよう、自分のカラダを律することができるよう——」

「それって……」

優姫が一步、さりげなく距離を詰めた。

なにげなく空に視線をやっていたシルヴァリアは、気配に気付いて視線を戻し……思ったより接近されていたことに、少しだけ不意を突かれ、言葉を途切れさせた。

その間隙に、優姫が割り込ませる——その禁断のセリフを。

「それって……アリアさんが、手伝ってくれるってこと……？」

「……え？ な、何、を」

普段なら、決して星ヶ丘優姫はそんなことは口にしなかっただろう。

少女の理性が、自尊心が、そして正義の変身戦姫としての自覚が、そんな言葉は喉元以下に押し込めていただろう。

だが——だが、今この時。

教室でのありえない羞恥行為、ひさかたぶりに感情を爆発させたこと。

そして一連の非日常的な流れを共有した、城鐘アリアという目の前の女性への、一時的とはいえある種盲目的な全幅の信頼……言い換えれば、依存。

それらが起爆剤となって、星ヶ丘優姫は思わず、悪意なく越えてしまったのだ——その決定的な一線を。

「あの、その……あたしがまたあの『発作』を起こしたら、手伝ってくれるのかなあ……とか」

「——っっ!？」

そして、城鐘アリア……白銀のシルヴァリアもまた、一種異様なこの状況に『吞まれて』しまっていた。

悪の組織に身を置きながら彼女は本質的に、ひどくお人好しだったゆえに。

「あ、あはは……な、何言っただろうあたし、ごめん忘れ——」

だから、たった今日の前で大いに泣き、笑った、好敵手であるという以上に特別な存在になりつつある少女が……自分にすがりついているという事実を認識し、とっさに突き放すことができなかった。

おどけて冗談めかしているが、彼女がその秘密を共有し頼れるのは他ならぬ自分しかないのだと、本能的に察してしまった。

——だから。

「……いいわ」

「——え？」

自分は何を言っている？ やめろ、すぐ引き返せと、戦士のカンが危険信号をシルヴァ

リアに告げる。

だが、もう遅かった。

吸い込まれるような、それこそ宇宙の星のような——星ヶ丘優姫の、スターティアの、何かを期待するように潤んだ瞳に魅せられるように、シルヴァリアは……答えてしまった。「いいわ——と言ったの。これから私が、あなたの『発作』を鎮めるのを……て、手伝つて、あげる」

とてつもなく淫らな扉を開けてしまう、決定的なそのひと言を。

第13話 白濁の魔剣士！ 美少女転校生は淫獣優姫のフェラ玩具！

『あなたに渡したその認識歪曲フィールド発生装置……それにはチンポの状態をモニタリングする機能もあるわ』

オブシディアがああ時に告げた新たなゲームのルール。

『あなたがたあくさん射精すればするほど、興奮したり発情したりするほど、その腕輪に記録されたポイントが溜まっていくのよ』

そして、それが一定値に達した時。

『その時はあなたに、挑戦の権利をあげる。大切なお友達の奪還をかけたバトルへの、ね』
オブシディアが用意した、怪人との対決。

それに勝てれば、裕美香を解放するということのだ。

つまり、決戦の参加権をゲットするために、急ぎ腕輪のポイントを稼げということ。

『フフッ、簡単でしょう？ そのおチンポでいっっぱいエロいこととしてドピュドピュ射精しまくればいいだけだもの♥ チンポセンズリお猿さんのアンタなら二週間くらいで達成できるわよお』

赤面する優姫に、ああ、でも……とオブシディアは意味ありげにほくそ笑んだ。

『オナニーよりもっと興奮できるドピュリ方——そう、たとえばあんたのチンポにエロ奉仕してくれるメスでも見つければ、圧倒的に早く達成できるでしょうねえ……？ 何をすべきかよく考えることね、お友達を早く自由にしてあげたいなら……ね♥』

オブシディアの狙いは明白だった。

裕美香のためという口実で、自分が他の女の子に手を出してしまう所まで堕ちるのを誘っているのだ。

正義のヒロインとして、その一線だけは越えてはならない。いくら裕美香が心配でも。だが……もし逆に向こうから、協力してくれるという相手が現れたなら？

合意の上での行為なら——まったく問題ないのでは、ないか？

* * *

「ねえねえ。最近の優姫ちゃん、あの城鐘アリアといつの間にか仲よくなってるじゃない？」

放課後の教室。

机に腰かけた小柄な体をツインテールごと揺らしながら、牧野しずくは御陵涼子にそう切り出した。

「ああ、そういうや昨日もなんか廊下で話してたな」

「うーん、あの難攻不落の孤高の転校生をついに落としたのが、このあたしじゃなく優姫ちゃんとは……意外な展開だねえ」

今日も授業が終わるや、二人は連れだって教室をそそくさと離れてしまった。

「まあ、今の優姫に友達が増えるのはいいいことじゃんか。裕美香が入院してから、どうにも元気がなかったし」

「それはそうだけど、気が付くと二人だけでどっかに消えてるんだよ？　なんか怪しくない？」

「なんかって何だよ……また禁断の関係とか、ありきたりな妄想言い出すんじゃないだろうな」

やれやれと肩をすくめる涼子。

ぷーっと頬を膨らませるしずくは、どちらかという置いてきぼりにされたことに憤慨しているようだった。

「むーむー。なんか最近、みんな付き合い悪くない？　天音もさっさと帰っちゃうし」

「いや、あいつはいつもの習い事だろ」

「あっちでもこっちでも禁断の個人レッスン……みんなそうやって大人になっていくのか」

「あのな、わけわかんないこと言ってるんで、お前もちゃんと勉強しろよ？ 試験、近いんだからな？」

のんびりと他愛もない女子生徒二人の会話。

彼女らは友人に今起こっている事態を、もちろん知る由もない――。

* * *

「……………っ！」

ぶるんっ！ と目の前に突き出された太いフタナリ肉棒を、城鐘アリアことシルヴァリアはかすかに息を吞んで凝視していた。

フタをした便座に腰かけた彼女の目の高さで、どくん、どつくん♥ とはち切れそうに脈打っている。

（あらためて見ると…………とてつもなくグロテスクだわ、これ…………）

ここは利用者の少なさで有名な、教室棟二階端トイレの個室。

優姫がオナニーによく使っている場所だが、もちろん彼女は知る由もない。

二人がああ約束を交わしてすぐの翌日。

この場所ですいに、またもゝ我慢できなくなったゝ優姫の性欲処理をゝ手伝うゝ行為が開始されようとしていた。

「それで……私はこれを、どうすればいいのかしら」

「え、あつ……うん、えっと、その」

その声で夢から醒めたように、ビクンとなる優姫。

なにしろ同級生の人形のように綺麗な、神秘的でクールな憧れの美貌めがけて、おっ勃つた生チンポを仁王立ちで突きつけているのだ。

フタナリ少女の脳内は、倒錯的な興奮で今にも焼き切れんばかりだった。

「あの、で、できたらでいいんだけど……舐める、とか」

「舐め——っ!？」

いきなり想定以上の要求に、形のいい眉根がピクツと歪められる。

それに気付いた優姫は慌てて、

「あつ、ごつごめん！ や、やっぱりムリだよねそんなの……できっこないよね」

「う……」

あわあわと要求を引っ込める優姫。だが、本人は遠慮のつもりでも、それは逆効果だった。

「無理だとか……まだ何も言っていないわ。うまくできるかはわからないけど、やってみればいいんでしょう？」

「え、あ……う、うん」

上目遣いで軽く睨むようにして、そんなことは別に大したことでもないと言うように、やれると宣言するシルヴァリア。

優姫の言い方が、シャドーマテリアルきつての魔剣士の高いプライドに触れたのだ。

「ん……っ」

薄く繊細な唇から、うつすら濡れたピンク色の舌が差しのばされた。

そのままシルヴァリアは長い黒髪をかきあげ、

ぴとっ……♡

（あ、うああっ♡ ふ、触れてるう……あ、アリアさんのベロがつ、あたしのおチンポの

先っちょにいい……♡）

このクールな転入生は、今まで男とキスをしたことがあるのだろうか？

とてもそうは思えない……そんな不可侵の気高い粘膜が、自分の醜いオス器官の先端に、鶏卵大のナマ亀頭に接触しているという事実。

それだけで優姫の背筋に、早漏射精してしまいそうなほどの快感電流が駆け上る。

（う……思ったより熱い、それに変な味が、するわ……先端、この割れ目から何かが漏れてるのね……確か、カウパーといったかしら？）

ショックを受けていたのはシルヴァリアも同じだ。

威嚇的なまでに太くいきり立った初体験チンポの帯びる熱に 密着した鈴口の割れ目から舌にじっとり染みてくる先走り汁の感触に、味蕾が痺れるような錯覚すら覚える。

「あ、あはあぁ……♡ そ、そのまま舌を、動かしてほしいなあ……♡」

半ば固まっていたシルヴァリアに、快感のため息と共にそんな要求が降ってくる。

（う、動かす……要は、表面に刺激を与えればいいのよね……？）

ねろっ……ぬろろっ……♡ にちゅっ……れりゅううつつ♡

ゆつくりと手応えを確かめるように、亀頭の表面を上品に踊るクールな美少女転入生のナマ舌。

「お、おあぁ……♡ そ、そこおお♡ もつとつよくっ、ベロに力入れて大丈夫だからあぁ……♡」

（こう……これでいいのかしら？ そ……それにしても、コレ、どんどん大きくなってるわ……刺激に反応してるのね？）

ボデイルダーの腕を思わせるゴツゴツした血管混じりの肉棒が、思春期の女の子そのものの白い体から生えているギャップは、あらためて見るとあまりにも非現実的なアンバランスさだ。

その偉容に、淫らな存在感に圧倒され、いつもは冷静沈着なシルヴァリアの思考にピンク色の霞がかかっていく。

「はああ、すっごい気持ちいいよアリアさん……♡ あのね、じゃあ、じゃあ……先っぽをぱっくり口に入れてもらうのって、で……できるかなあ？」

（く……口の中にこれを……!!）

口の端からよだれを垂らしそうな勢いのトロけ顔で、調子に乗ってそんな要求まで持ち出す優姫。

むああ♡ とオス臭い湯気を放つこの太肉棒を、口の中に——さすがに躊躇するシルヴァリアの様子に気付き、

「あつ、えつとね。そのままじゃやりにくいと思って……あのね、これを用意してきたの！」
優姫が制服のポケットから取り出したものは、半透明の小さなプラスチック容器だった。
喫茶店などでよく使われる、ガムシロップだ。

「……？ ええと、話が見えないのだけれど。それを一体どう——なっ!!」

その次に優姫がとった行動に、目を見開いて絶句するシルヴァリア。

なんと、フタナリ少女は目の前で自分のチンポめかけ、封を切った小容器からトロツとしたシロップを垂らし、まぶし始めたのだ。

「んっ……♥ ほら、あたしのおちんちん、変な味すると思うから……こ、こうやって甘くすると、お口に入れやすいかなあって」

「え？ ……え？」

優姫の発想がまるで理解できない。

半透明の粘液にまみれ、甘ったるい香りを立ち上らせながらビクビクと脈打つ眼前のフル勃起チンポは、余計にいやらしさとグロテスクさを増したようにも見えた。

（な、なに考えてるのよ、この娘……っ！ つ、ついていけない発想だわ……！）

だが、ここで拒絶すれば相手は捨てられた子犬のような哀しい顔をするだろうことが、シルヴァリアには容易よういに予想できた。

仕方なく、精一杯口を開いて、シロップデコレートされたフタナリチンポへと震える唇を寄せ――。

（あ、ああっ♥ アリアさんのおくち、近付いてきてっ……か、かぶさっちゃうう、あたしのチンポにいいっ……き、来たっっ♥）

にゆるううッ……にゅみゆるんっっ♥♥♥

「お……おおっ、んおおおうっっ!!!♥♥♥」

少しひんやりした口腔内に、亀頭がニユプニユプ包まれていく快感――思わず顔をのけ

ぞらせ、舌を宙に突き出して情けないアへり声をあげる優姫。

シロップがローションのように働いて、同級生の処女口マンコは生温かな即席のオナホールと化していた。

「ん、んううう……んぷっ、んおお……ッ！」

一方、甘ったるい味が口の中いっぱいに広がりチンポのそれと交じり合う異様な感触に、シルヴァリアは目を白黒させていた。

微弱な認識歪曲フィールドを展開させているので、漏れた声や音が周囲に気付かれる心配はない……そのことをシルヴァリアが理解してしまっていることが、優姫の要求を断りづらいという点では逆に不幸といえた。

「あ、あああつつ……♡ く、唇ぎゅつと締め付けてっ、そのまま動かしてええ……っ♡」
「ん——！ んう、うむうう……っ！ っぷ……！」

にゅぶぷっ、むみゆるるっ……♡
にゅちゆるっ♡ ぬっぷ、ぬっぽ♡ ……ぬののおつつ♡♡

耳にかかった黒髪を手でかきあげつつ、わずかに赤面した顔をくぼくぼと前後させるシルヴァリア。

イヤらしく下品な粘膜と粘液のハーモニー、口マンコファックのSEが女子校のトイレ

に鳴り響く。

（し、信じられないっ♥ あたし今、アリアさんのおクチに……おチンポじゅぽじゅぽ出し入れしちゃってるんだあっ♥）

白磁^{はくじ}の西洋人形のようなアリアの唇に、血管の浮いた粘液まみれの醜いオス器官がブツ挿さっている。

美しいものを穢し、冒瀆しているその絵面が、優姫の中にかつてない背徳的な征服感をムラムラと呼び覚ます。

（これじゃ、あいつと……オブシディアと同じなのにつ、本当はこんなこと女の子にしちゃいけないのにつ♥♥ つあ、あおおっ♥）

いきり勃った赤黒肉マラを、無抵抗の処女美少女リップで思うさま快楽奉仕させ酔いしれる――。

その行為は他でもない、あの敗北調教の始まりの日に優姫自身がオブシディアにされたゲスな行為とほぼ同じだ。

宿敵の悪人と同じことを、正義の戦士たる自分がしてしまっている……その事実は一瞬、スティアの心を打ちのめすと共に、不可解な昂揚感となつて腰の奥でムズムズと蠢き、温かなクラスメートの口腔内に突っ込んだチンポをさらに太く硬く変えた。

一方、シルヴァリアはというと。

（あ、熱いっ……まだ熱く、大きくなるなんて、これは一体どうなっているというの……っ!? こ、こんなのが普通だというの……!?）

鼻で息をしながら、言われるがままキュッとすぼめた唇ホールでゴツゴツした肉棒表面を必死にシゴき運動し続ける。

「そっ♡ それいいよおおっ♡ も、もっと早くおクチ動かしてええっ♡ んおおお……♡」

いつの間にか優姫は、そんな彼女の流れるような美黒髪に手をやって撫でさすっている。快樂の吐息を漏らしながらオーラルセックスを教え込むその光景は、まるで恋人奴隷にドスケベ変態調教を施すフタナリビッチそのものだ。

（あさましい表情と声……ほ、本当にあなたは快樂の虜になりつつあるというの、スターティア……?）

チンポ快樂を貪る好敵手を軽蔑し、拒絶するべきかもしれないが、優姫の気持ちよさそうな顔を見ると、突き放すのがかわいそうに思えてしまう。

その甘さに無自覚に付け込むように、フタナリチンポの張り出したカリ首が唇をめくりあげるほどに激しく前後され――

「んぶっ、んぷううつ!! おぶっ……んむぷううつ!! ぷあうつ!!」

しかも酸素の供給が少なくなつて、頭の中にボーッとしたモヤがかつてくる。

今や、上から降ってくる優姫の命令にただ従順に従うことが、シルヴァリアに唯一とれる選択肢だった。

「あつアリアさんっ♡ くっクチもつとすぼめてっ、そうそうそれええっ♡ ああゝゝ

ゝつつっ♡ みつちりおチンポ包まれシゴかれてっ、すっごいよおお……っ♡」

んぼっ♡ ぷぼぼっ♡ にゅぶぶぶっ……ぱぶぶぼっ♡

長く伸びた唇が顔の動きに取り残されるように、チンポの根元にしつこく食らい付く。

美少女台無しの、ブザマなひよつとこフェラ顔だ。

クールな美貌は今、とてつもなく滑稽な……それでいてイヤらしさ抜群の形状へと崩壊して、優姫の射精専用オカズ顔にされてしまっていた。

「んおうっ、んおおあゝゝつつ♡♡ こっ腰持ってかれそおおっ♡ んおはあああつつ♡♡」

「はぶっ、つつんぶぶっ!! はぶうつ、んじゅぶつつ!! んううゝゝゝつつ!!」

優姫の方も、はしたないガニ股ポーズで腰を突き出すようにして、そんなシルヴァリアの唇オナホにスカートごとチンポを叩き付けている。



ボタボタと口の端から漏れた唾液とカウパー、そしてシロップの混合液が、ブラウスやネクタイに飛び散りシミをつくる。

クラスメートが見たら卒倒しかねない、美少女お嬢様二人による非現実的で恥知らずな痴態の競演だった。

「あああごめんねつつ、ごめんねアリアさんっこんなことしてえつつ♥でもつつ、でも止まらなつつ……いばっ♥♥」

髪を撫でる優姫の手は、無意識のうちに後頭部を掴んで強制的にグポグポと前後させるスケベな動きへと変わっていた。

頬の内側を、時には喉奥までをガチガチの亀頭で突き回され、蹂躪され……だがシルヴァリアはそれに抗議する余裕もなく、口内を荒々しく突きほぐされる初めてのオーラル陵辱ピストンに翻弄されるがまだ。

（やばっ♥これやばっ♥♥しゃっ射精スイッチ入っちゃううっ!? でっでもでもどうしよううっ、このまま射精しちゃったりなんかしたらあっ♥♥）

口の中で爆発させても、直前で抜いても、大惨事はまぬがれない。

だが、優姫がその時、無意識に——あくまで無自覚にめぐらせた思考は次のようなものだった。

（じ……事故のふりして、アリアさんに顔射しちゃえ……♡）
ずりゆりゆんっ——にゅぽおおんっ♡ と、長大なヌラヌラの怒張が清楚な唇から抜けた。

律儀に限界まで唇を亀頭に食らい付かせていたシルヴァリアが、最後に盛大なひよつとこ顔を形作り、次いでやつと解放された口で大きく息を吸ってケホケホとむせた。

「けほっ、えほっ……！ お、終わった……の？」

涙目になって長いまつげを伏せるシルヴァリアの意識が、完全に無防備となった刹那。ギラついた目の優姫はチンポの根元から先端を結ぶ直線上に、そのクールな美顔をターゲットする。

そして、ぱくぱく震えるスペルマ発射口がぱっくりと開き——。

「あああああっつアリアさんッ♡♡♡ よ、よけてえっつ……んお、おっほおお♡♡♡」

「え——？」

……どびゆるるるうううっつ!!!

ぶぴっつ♡♡♡ んぶぴっつ♡♡♡ どぴっつ、どびゆるるるんっつ!!♡♡♡

「きゃっつ!! ちょ、止めっ……んああっ、やつ、待っ……っぷあ!!」

美しさと気品を兼ね備えた白磁の美顔に、つややかな黒い河のようなストレートの長髪

に、宙をのたくって襲い掛かる極濃白濁スペルマ。

慌てて飛来物をかわそうとしても、狭い個室内で壁を背にしゃがんだ姿勢ではろくに動きようもない。

ずびゅっ、んびゅううつつ!! どくどくんつつ♥♥♥ びゅぱつつ!!♥♥♥

「あ、あへええ♥♥♥ おふつつ、おおひいひい♥♥♥ むっ無理だよお止まらなつつ♥♥♥
ごつごめんごめんごめんなさいいひ♥♥♥ ひお、お、おおっ……おふうう♥♥♥」

男性の一回分の射精量は平均3.5ml程度、よほど多くても10ml少々が普通だが、バイオ改造キンタマでブーストされた優姫のそれは余裕で30〜40mlに達する。

十人近い汁男優に一斉にぶっかけられるようなものだ。ウブな処女が味わうにはあまりにもドギツイ、一生のトラウマになるほどの顔面スケベファック。

（か、顔につつ!? 私の顔につ、スターティアから排泄されたモノがっ……っ、次々と着弾してっ、あ、あああつつ……♥♥♥）

しかもそのクサさといったら……まるで中年オヤジが何週間も溜め込んでヒリ出す熟成発酵ザーメンのそれだ。

こんなにも可愛らしい、どこもかしこもいい香りを漂わせた女の子から発射されるとは思えないほどに、凄まじく臭くて汚らしいオスの汚濁排泄液。

「んほおおああ〜〜つつ♥♥ でっ出る出るううまだ射精でるううう♥♥ き、キン
タマが空っぽになりゆううつつ……♥」

獣のような発射快楽のあえぎを聞きながら、そんなものに顔面を直撃汚染されるという
衝撃的な体験は、シルヴァリアがこれまで漠然と知るだけだったわずかな性知識では及び
もつかないショックとトラウマを、ドロドロの白濁洗礼と共に体と心に刻んだ。

ぐちやああ……ねちやああああ♥♥

どぶお……♥ どぺええ……つ♥

「ご、ごめんアリアさんっ！ あ、あたしタイミングとかコントロールがうまくいかなか
て、ついそのっ——」

顔を、髪を、制服の各所までをネットリどっぷりと大量の白濁ジェルで汚しつくされた
クラスメートの姿に、今更ながら顔を青くして平謝りする優姫。

「だ、大丈夫よっ……げほっ、っ、次はちゃんと、出す時には前もって言いなさい……」

「うっうん、あつ、拭くのにあたしのハンカチも使って？」

だがあろうことか、その甘い反応を見た優姫の深層心理では、次のような恥知らずな打
算的発想が渦巻いていた。

『これはあと一回くらい顔射を喰らわせても許してくれる』——と。

（あ、アリアさん……っ、次はちゃんと拒んでねっ……♡
じや、じやないとあたし、も
っとイヤらしいこと要求しちゃうよぉ……？♡）

第14話 乳辱の淫戯！ クールなライバルと、 おうちでイチャラブパイズリ特訓！

「お邪魔しまぁ〜す……うわ、広いんだね、アリアさんのおうちって」

「大したことないわ。あなたの友達の光善寺さんの邸宅の方が、よほど大きいでしょう？」

「いや、天音は例外中の例外っていうか……」

両開きの扉から、教室ほどもある玄関ホール（左右二つの階段が二階の踊り場に繋がっている、いかにも古風な洋館といったそれだ）に入った優姫が目丸くする。

だが、市街地の外れにたたずむこの広大な館の中に、人の気配はまるでなかった。

「ここに一人っきりで暮らしてるの？ お手伝いさんとかもナシで？」

「ええ、両親は仕事でずっと海外暮らしだし……身の回りのことくらい自分でできるもの」
それはもちろん、嘘だ。

シルヴァリアにはもう、家族など一人もいない。

『城鐘アリア』としてのニセの身分は、人間に混じって暮らす上でのカバーにすぎない。
（本来なら、ここに誰かを連れてくることもなかったでしょうね……）

学校帰りに、アリアの家に寄ってみたいという優姫の……スターティアの提案を、シルヴァリアは結局断りきれなかった。

どうも、自分は彼女の〴〵押し〴〵に弱くなっているのではないかという懸念が白銀の魔剣士を悩ませている。

「さて、何もない家だけど。お茶くらいなら――」

「あ、アリアさんっ……!」

ぎゅっ、とだしぬけに手を握られ、シルヴァリアの思考と動きが思わず硬直した。

年代物の柱時計の音だけがカツ、カツと、清楚な制服に身を包んだ二人の美少女を取り巻く。

「あっ、あのね……ま、また、アレ……お願いしても、いい?」

「え……なっ、ま、まさかこんな場所で……す、するつもりなの!」

「で、でももうあたし我慢がぁ♥ お、お願いアリアさんっ……♥」

「っ……! し、仕方ない、わね……っ」

捨てられた子犬のような潤んだ上目遣いに出迎えられ、強い言葉が出せなくなってしまった。

そしてまた、流されてしまうのだ。女同士の、だが女には決してありえない器官を用い

た——淫らすぎる行為へと。

「わ、わかったわ。……私の部屋に、行きましょう」

* * *

にゅむっ……むにゅうう……っ♡

「お、んおおほお……っ♡ い、いいよおアリアさあんの、おっぱいい……ッ♡」
にゅぶにゅぶんっ♡ と柔らかい双丘に潜り込んでいく、スカートから飛び出た剛直

フタナリ棒。

制服のブラウス、そのボタンをブラのホックと一緒にいくつか外しての着衣パイズリ体勢で、優姫のぶっといチンポが城鐘アリアの乳マンコに下から挿し込まれていく。

（う……あ、熱いわ、やっぱりこれ……胸の谷間が、火傷しそうな錯覚ね……っ）

優姫に懇願されるがまま、初めてする行為に驚き戸惑う黒髪の美少女転校生。

一度一線を越えてしまっただけというもの、アリアへの優姫の淫らな要求がエスカレートするのになんて時間はかからなかった。

『む……胸で!? ええと、それは一般的な行為……なの、よね?』

『う、うんそうだよ? で、でねっ、おっぱいを全部見せるのは恥ずかしいだろうから服は着たままでっ——』

今日も、気が付けば、おっぱいで射精を手伝う、ことを承諾してしまっていた。

しかもここは自分の部屋……広いが殺風景な、最低限の家具と本しかない洋室だ。互いに制服のまま、その大きなベッドに腰かけた優姫の股間に体を割り込ませるような形で、シルヴァリアは胸奉仕の体勢をとらされていた。

優姫が言うには、大きな胸を性欲の処理に使うのはごく一般的な行為の範疇……らしい。(でも、こういう行為って普通は……こ、恋人や夫婦がするものではないの……？　って、何を考えているのよ、私はっ……！)

思わずの想像に、はくせき白哲の美貌をかあつと赤く染めるアリア——いや、シルヴァリア。異世界の人間であり、しかも幼い頃からわけあって戦いの場に身を置き続けている彼女は、一般常識から少しでも踏み込んだ知識には驚くほどに疎い。

「あつはあ……♡ や、やっぱアリアさんのおっぱい、おおきい、ねっ……♡ す、すっごい圧力だよおお♡」

そんなシルヴァリアの混乱を知ってか知らずか、すっかりトロけた表情で腰をいやらしく動かす優姫。

むんにゆりとチンポに響く肉圧を通った先、温かいブラウスの上側をこんもり押し上げる亀頭のデカさたるや、大好きなパイズリにむせび泣くJKチンポの劣情を表しているか

のようだ。

（しっしかもっ、ここアリアさんの部屋っ♥ アリアさんのおいでいっばいっ♥ だ、だからなのかなっ……おチンポいつもよりビンビンになっちゃってるよおっ♥）

その人の部屋というロケーションがまた、学校のトイレに負けず劣らずの興奮を呼ぶ。美少女戦姫は、彼女が与えてくれる快樂にすっかり溺れ、依存してしまっていた。

（スターティア……こんなに情けない顔になってしまっ、よっぼ私の胸が……き、気持ちいいというの……？）

悪い気はしない、という思いがわき上がってきて、慌ててシルヴァリアはそれを打ち消した。

このままではいけない——自分まで流されてしまっ、どうする。

あのオブシディアの卑劣な罠から脱出してもらうためにも、そしてその先の『目的』のためにも……スターティアにこのまま墮落されては困るのだ。

「優姫……一つ提案があるわ」

「ふ、ふえ？」

真っ白く柔らかな肉球によるチンポ挟みの快感に酔い、よだれまで垂らしかけていた優姫が、その冷静な声にハッと我に返った。

「おちん……い、いえ、この器官からの快感の発作に、あなたは流されやすすぎる。少しそれをガマンする訓練を積む必要があるわ」

「が、がまんって言われても……ど、どうすれば？」

今も節操なく、ビクビクと嬉しそうに跳ね暴れるチンポの上で、シルヴァリアはため息をついて言葉を続ける。

彼女にも明確な自信はなかったが、とにかくこのままではいけないのだけはわかる。

「その……射精を、少しはこらえるとか。まずはそこから始めてみましょう」

「え、それって――」

「このまま刺激を与えるから、できるだけ限界が来るのをガマンするということよ。それで抵抗がつくかもしれないわ」

「そ、そんなので効果あるのかなあ……？」

「わ……わからないけど、やってみるしかないでしょう？ いいわね？」

「う、うん……アリアさんって、意外と体育会系キャラだよね……」

言っていて自分でも自信がなくなってきたが、今更撤回することもできない。

気持ちを切り替えるために目を閉じて一つ深呼吸すると、シルヴァリアはあらためて胸の谷間にブツ挿さったフタナリチンポを、制服の上からゆっさりと着痩せ巨乳でホールド

し直した。

「じゃ、じゃあ刺激を……加えるわよ」

「うっうん……い、いいよっ♡ きてっ……♡」

（要は、手や口と同じでコスリあげる動きや圧迫感が、この器官への強い刺激になるようだから……なら、こうすれば——）

ぐぐむにゅにゅぐっ……♡

と、乳圧が急激に高まり、優姫が思わずのけぞってあえいだ。

シルヴァリアが左右から乳をみずから圧迫して、谷間をみっちり占拠する太肉棒を締め付けにかかったのだ。

「んおおお……んおっ!?♡♡ こ、これすごっ……や、柔らかヤバっ♡ んおおおっ♡♡」

「こ、これくらいで音をあげてちゃいけないわよ。ほら、まだこうやっ……て！」

にゅむんっ♡♡ にゅぱんっ、にゅぽぱんっ♡♡

たっぽたっぽっ♡♡ たぽゆんっ♡♡

「やっあっっあ♡♡ お、おっぱい上下運動きたあっっ!?♡♡ すっすごっ♡♡ すごい

よおアリアさああんっ……!!」

初パイズリとは思えない的確な乳責めは、シルヴァリアがこれまで磨いた戦士としての

カン——戦闘センスの応用だった。

相手の反応を見て、効果的に弱点を突く……それが、未熟な性経験を補って余りある淫技として機能したのだ。

「ほらっ、ちゃんとガマンしなさいっ！ あと十分間は、このまま辛抱を続けるのよ、いわね!!」

「っそ♥ そんにやあぁっ♥♥ そんなの無理っばいよぉおっ、んおふっ♥ おふうううっつ!!♥♥」

柔乳肉に激しく緩急をつけてズリ搾られ、ドクドクと漏れる大量の先走りがブラウスに灰色のシミを広げるが、シルヴァリアは気にしない。

元々、優姫に言われたように彼女は少々体育会系気質……特訓の類に熱を入れすぎてしまいうタイプであり、異常な状況とはいえこの「特訓」にも没頭してしまいつつあった。

（しゃ、射精我慢っ♥ あ、アリアさんと射精ガマン特訓……♥ あ、アリアさんにつ……あたしの射精がつ、管理されちゃってるうう……♥）

ローファーに包まれたつま先をピンと立たせ、手の爪を噛んで、早くもこみ上げる射精感を必死で押し戻す優姫。

ガマンさせられている——というもどかしさが、なおさら興奮の炎に油を注ぐ始末で、

メスチンポの反り返り方たるや尋常ではない。

「うんつつ、がっガマンするうっ♡ するっするからあっ♡ だ、だからアリアさん、ごほうびっ♡ ガマンできたらご褒美ちようだいっ……♡♡」

「え、ど……どうということ？」

にゅっぽ♡ にゅぷっぽ♡ にゅぽにゅんつつ♡♡

無自覚な乳凶器でドスケベ極楽ズリコキマッサージを律儀に続けながら、意味不明の提案に聞き返すシルヴァリア。

「うんつごほうびいつ♡ あのっあのねつつ♡ がまんできたらあたしのお願いつ、聞いてほしいのおつつ♡ お、おふううっチンポ響くううっ!!♡」

「よ……よくわからないけど、わかったわ、ガマンできたなら何でも聞いてあげるから、ちゃんとガマンするのよ？」

「うんつつ♡ うんうんつつ♡♡ が、がんばるよおおッほおおつつ……♡ んおんつつ♡」

そんな要求を呑む理由はどこにもないはずなのに、シルヴァリアはまたしても勢いに流されてしまう。

嬉しそうに体をくねらせながら、四肢をブルブル震わせて全力で早漏発射をこらえる優

姫。

盛大にタレ流されたガマン汁、普通の男の射精よりもよほど多いそれが乳肉の谷間をぐっしより濡らし、スケベな潤滑液となってニチャニチャといやらしい滑りを加速させる。

「そ、そのかわり、どうやれば強い刺激が加わるかちゃんとあなたが指示しなさい。そうでないと特訓の意味がないわ」

「は、はいい……♡　じゃっじゃあ、おっぱい互い違いに動かして、挟まったおチンポ強くコネ潰すようにして……っ♡」

「左右交互に？　——こう？　こういう動かし方でいいの？」

「おおっふおお!!♡♡　そ、それぞれええっ♡　そう次はおっぱい同士が縦に重なるくらい寄せ潰して、8の字を描くみたいに派手な勢いでっ……んおお♡　そうっ、や、やっぱりアリアさん上手うう……♡」

それらは他ならぬあの仇敵、オブシディアにパイズリされた時に喰らったテクニクだ。悪の女幹部が繰り出す魔乳淫技を、無垢なクラスメートに教え込む禁断の背徳快樂が、チンポへの強烈な刺激となない交ぜになって優姫の脳を溶かした。

もつとも彼女は、アリアの正体もまたシャドーマテリアル七冥塊の一人という事実を知らないのだが――。

「す、すごいビクビクしてるわ、それにさつきより硬く……じゃあこのまま、私があと100数えるまでガマンするのよ、いいわね？」

「わっわかったよおっ♥ するっ、おチンポがまんするううっ♥♥」

「100……99……98……97……」

かすかに上気した声で始まるカウントダウン。

ぷうんと立ち上るチンポ先走りの淫臭が、アリアの私室にこれまでまったく存在しなかったモノ……オスの性臭を刻みつける。

また快樂によつて優姫の女の子の部分からも漏れた愛液が、ベッドに控えめな染みを広げつつあった。

（んおおあつつ♥ あたし、あたしアリアさんが毎日寝起きするお部屋につつ♥ エッチなあたしのおい、こびりつけちゃってるよおおっ♥♥）

いつの間にか優姫は、ベッドにあつたオリーブ色の枕を胸に抱え、そこに顔を埋めて息を吸い込んでいる。

かすかにそこからアリアの、クラスメートの清潔なシャンプーのにおいが漂って、その持ち主にチンポパイズリされる快感をさらにビキバキとブーストした。

「67……66……65……64……」

「んんつつ♡ ほおつふああわぁ♡ あふうツツ、おふつつ……!!♡♡ が、ガマンがまん我慢しなきゃああ……っ！」

シルヴァリアのパイズリテクは、この短時間で驚くほどの成長を見せていた。

優姫の快楽に正直なチンポが、より太く硬く血管を浮き立たせてわかりやすい反応を見せるので、こういったスケベ運動が、よいゝかすぐに学習できるのだ。

（これは特訓……そう、何も恥ずかしがるようなことはないのよっ……！ 剣の扱いと同様に、ただ目の前の目標を追い詰めていけばいいだけ……）

羞恥心をマヒさせ、一心不乱に好敵手の肉剣を、みずからの乳という鞘におさめ揉みシゴく白銀の魔剣士。

その変幻自在の剣技と同じく、時に強く、時に弱く——寄せては返す波のごとく緩急をつけて左右から襲う乳津波が、谷間に捉えたチンポをこれでもかと責め苛み、極楽ドピュリ発射の高みへと導いてゆく。

「あああつつスゴいよおつつ♡ あ、アリアさんのおっぱいの中すごすぎるううつつ♡♡ は、はへええつつ!!♡♡」

むにゅんむにゅるんつつ♡ もぎゅつぐにゅむつつ♡ むぎゅるんつつ♡

「35……34……33……ほら、あと少しよ頑張りなさいっ！ あなたならできるわ、頑張る

のよ、さあつつ!!」

「はっはひいゝゝゝつつ♡♡ がっがんばるつつ♡ がんばりゆううつ♡♡」

栗色の髪を振り乱し、はしたなくガニ股M字開脚となつてめくれあがつたスカートの中から突き出した怒張チンポを、クールな黒髪美少女の制服着衣乳にガッツリ埋め込んでカクク動かすフタナリ美少女のなんとブザマで淫らなことか。

もはや当初の目的を互いに忘れ、何のためにやっているのかすら不確かになったその行為。

だが、一つだけ確かなことはあと三十秒以内にその決着が訪れるということだ……友人の部屋での大量ぶちまけ射精という、破廉恥極まる終局をもつて。

「あと10秒っ！ 9……8……7……！」

「ふーっ、んふーつつ♡♡ んお、あおんおおおつつ♡♡ がまんがまんがみゃんんんツツ♡♡ んっひいゝゝゝつつ!!」

にゅっぽつつ♡♡ にゅぽぽおおつつ♡♡ にゅぱんにゅぱんつつにゅぽぱんツツ♡♡

♡

手加減一つない搾精肉凶器と化したシルヴァリアの隠れ処女巨乳が、そのきめ細かな肌で密着したドクドク脈打つ美少女チンポに、ラストスパートの凄まじい高速乳圧を送り込

む。

可愛らしい薄桃色のショーツから、でっぷりハミ出た巨キンタマがベッドのシート上をぐむんぐむんと転がり回り、その中に蓄えた爆発寸前大量メスミルク解放の瞬間を今か今かと待ちわびていた。

そして、ついに――！

「3……2……1っ……!!」

「つつっ――!!!」

「……ゼロっ！」

「っほ……♡」

永遠とも思えた100カウントが終わった。

よく頑張ったわね、とシルヴァリアが優しい言葉をかけようとした、その瞬間。

ブラウスを突き破らんばかりの勢いで、首筋に近い上側のボタンが一つ弾け飛び――熱乳の谷間から、湯気をたてた赤黒い爆発寸前亀頭が、唇の真正面に飛び出した。

「ああつつアリアさんツツツ!! お願いをつ、ガマンしたから約束のお願いッ聞いてツツツ!!」

このタイミングでのゝお願い、その真意をはかりかね困惑する暇もなく。

「くちっ お口開けて ええつつ!!
ん おっ ほお おお おお おお うう うう ツツ !!
??

「え、ちよッ、なにをつ——んぷうううつつ!!」

んどびゅっ♡♡♡ どぶひるるるる ううつつ!!♡♡♡ どびゆぽおおつつ♡
 ぶひるるっ♡♡♡ ひゆくっつどびゆくくんっ……ぶぽおおつつ♡♡♡ ご

「ほっおお!! ♡♡ ほっほへええ~~~~~♡♡ おおお出る出る出りゆう
ううつつ~~~~!! ♡♡ あっへええんへええああ!! ♡♡」

反射的に言われるがまま口を開けたシルヴァリアの、ピンク色の口腔内へとグロい亀頭がムリヤリ突っ込まれ、そこからぶりゆぶり流し込まれる白濁排泄液。

ほっそりした少女の体のどこに溜め込まれていたのか不思議なほどの、暴力的なまでの質量を備えた精液、ザーメン、スperm……大量のオス子種の猛襲。

（な、なにこの量っ……!!? それにこのえぐい味っ、むせかえるようなにおいがっ……ちよ、直接口の中に注がれっ……!!?）

豊かな乳の谷間でじっくりと熟成され、たっぷりガマンにガマンを重ねたフタナリチンポミルクは、通常以上の量と濃度とクサさでシルヴァリアの口内粘膜を蹂躪し、あとからあとから小さなスペース内へと送り込まれ続けていく。

「ひい いっへは ああッッ♥♥♥ ごっごめっつアリアさっつ♥♥♥ 止まらにやつ、おチンポびゅーびゅー止まらないよおおっつ!!♥♥♥」

おそらく無意識のうちに、シルヴァリアの胴体を両脚でがっちりホールドし、黒髪の頭を押さえ込むようにしてチンポから逃げられない状態を作りつつ大放精を続ける優姫。

（むぐっ、んぐうううう……っ!! だっダメ、これ、飲み込まなければ息がっ……!!）

——ごきゅっ、ごくんっ♥♥♥ こくっ、ごくん……っ♥♥♥

やむなく、ゼロ距離から放たれ続ける美少女遺伝子満載のドロネバ精液を、少しずつ飲み込むことで陵辱に耐えるシルヴァリア。

それは奇しくも、かつてスターティアがオブシディアに包茎チンポしゃぶりの白濁陵辱を受けた際に喰らった強制精飲の洗礼と同じだった。

「あっあああっ!! あ、アリアさんがあたしの精液っ、のっ飲んでるっ……んお、んおおあっ♥♥♥」

そしてその征服感満点の光景によって、なおもしつこくどっぷんどっぷん♥♥♥ と長く続く大量射精。

なんとかシルヴァリアがそれを受けきった頃には、彼女の食道も胃袋もこってりと濃いたんぱく白濁スープでとっぷり汚染しつくされていた。

「っ……けふっ！ はあ、はあっ……！ お、終わった、かしら……？」

「あ、ご、ごめんアリアさんっ、あたしまたっ、こんな無理矢理みたいにつ！」
やっと正気に返り、涙目になってむせるクラスメートに平謝りする優姫。

本人に悪気がない（少なくとも表層意識では）ので、シルヴァリアもそれを頭ごなしに怒ることがなかなかできずにいた。

「い、いいえ……発射する時のことを考えてなかった私にも非はあるわ。外に漏らしていたら部屋が汚れていたのだし……っ、次からは、気をつけましょう」

「う、うんっ！ つ、次から……ね……♥ こ、この特訓、結構効いてるみたいな気がするし……」

飛び散った白濁の飛沫が付着する豊かな双乳の谷間に、半勃ちになってビクビク嬉しそうに余韻に浸るチンポをおさめたまま——優姫は荒い息の下からえへへ、と笑いかける。

その声色に、次への淫らな期待が見え隠れしていたのは、言うまでもない。

「と、とりあえずシャワー浴びよっか、アリアさんっ？」

「そっ、そうね……」

* * *

（まったく、私はどうにもあの娘に甘い——そんな気がするわ）

銀甲冑と仮面を身に着けたシルヴァリアは、いくつもの黒水晶の柱が林立するシャドーマテリアル要塞の無人通路を、規則正しい足音で進んでいた。

あれからシャワー（さすがに一緒にではなく、交代でだ）を浴び、辞去する優姫を家から送り出したあとのことだ。

（どこか妹に似ているから……なのかしら）

ふと湧いたその考えを、らしくないと黒髪を振って打ち消す。

そんな感傷に浸るよりも、今はすべきことがある。仮面に隠されたシルヴァリアの口元が、さつきまでとは別人のような冷たい表情へと変わった。

「……それで隠れているつもりか？ 出てこい、黒曜の『オブシディア』」

「あらあ、やっぱりバレバレだったかしら」

後方に立つ水晶の柱、その横の空間が黒く歪んで、そこから扇情的なボディスーツに身を包む女幹部が降り立った。

いつものニヤついた表情が、シルヴァリアを苛立たせる。

「ふふっ、見えないけど怖い顔お。いえね、ちよつと不穏な噂を耳に挟んだだけよ……」

『白銀の』シルヴァリアが、あの聖光剣姫スターティアと仲よくつるんでる——ってね」

「……くだらん風聞だ」

芝居がかった口調に、だがつとめて平静なそぶりで返すシルヴァリア。

七冥塊が持つ認識歪曲フィールドは、あらゆる手段による監視やモニタリングを妨害し、観測や記録を事実上不可能にする効果もある。

つまりシルヴァリアの『城鐘アリアとしての』これまでの行動は、オブシディアであつても正確には把握できていないはずだ……そして肉眼で確認できる距離まで接近した場合、今のようになんか気が付く。

クラスメートという立場を利用した、星ヶ丘優姫の監視。そしてそれ以上の『関係』であるという事実は、シャドーマテリアルの誰にもバレていない——はずだった。

「あつそ、じゃあそれはそういうことにしておくとして……もうひとつ、聞きたいことがあるのよお」

「……さつさと話せ。知っているだろう、私はお前との会話をあまり好まない」

不愉快さを隠そうともしない態度に、だが同じ七冥塊とはいえ戦闘力で大きくシルヴァリアに劣るオブシディアは、これまで齒がみするしかなかった。

そう——これまでなら。

「アリアルⅡシルヴァラント……って、誰が捨てた名前だか、ご存じよね？」

「……ッ!？」

シルヴァリアの行動は早かった。

地を蹴り、抜き放った剣先をオブシディアの喉元に突きつける。そしてそのまま……！
「ま、待ちなさい！ 私を殺せば、その情報は他の七冥塊に漏れるようになってるわよッ！」

「……………！」

ぴたりと止まる剣先。

想定以上のスピードに冷や汗をかきながら、たった今殺されかけた女幹部は、それでもシルヴァリアが動きを止めたことで余裕を取り戻す。

「ふふ、ふふふっ……あらあらあ♥ やっぱり本当なのね……！ まさかアンタが……七冥塊の一人が偉大なる晶帝グリズダーさまへの反逆を企てていたなんて、うふふ、私はこの情報を一体どうするべきなのかしらあ？」

（くっ——！ よりにもよって、この女にっ……!!）

ぎりっ、と歯がみする白銀の魔剣士。

晶帝とは、シャドーマテリアルを支配する強大な絶対者だ。

もつとも、今は長い眠りについており、その目覚めのためにも構成員たちは負の精神エナジーを集めているのだが……。

「でもね、実を言うと……私はね、あんたの正体がかつてシャドーマテリアルに滅ぼされた世界の王族だろうが、生き延びたあんたが復讐を企んで七冥塊に入ろうが、そんなことはどうでもいいのよお……やっと掴んだこの事実をわざわざ告げたのも、それを他の連中に報せるつもりがないって証明よ」

もちろん、あんたが私を殺すっていうなら別だけどね……と、いやらしく笑うオブシディア。

その口調には、忠義や仁義の欠片もない。

「何を……企んでいる？ 黙っている代わりに、何を私に要求するつもりでいる？」
すべては今オブシディアの言った通りだった。

隠し通してきた過去を暴露されれば、シルヴァリアの悲願、シャドーマテリアルへの復讐という目的が瓦解がかいしてしまう……それだけはまだ避けねばならなかった、なんとしても。
「話が早くて助かるわあ……フフツ、何をって決まってるじゃない、愉いとしいことよお……！
私は自分が好き放題楽しむためだけに生きてるんだもの……♡」

「……っ!! 貴様……!」

黒いルージュに浮かぶ淫蕩な笑み。

快樂のためならみずからの命すら厭いとわぬといわんばかりのそれが、今までただの快樂主

義者の卑怯者と侮っていたシルヴァリアを初めて威圧し、ゾクリと背筋に不吉な予感を走らせた――。

第15話 白銀の剣士散華！ 襲い来る女幹部の極悪チンポ！

「くくっ、ブザマな姿ねえ、白銀の魔剣士さん？ いい眺めだわあ、どれだけこの時を待ったことか……♡」

黒水晶の壁に四方を覆われた、薄暗くも淫猥な空気漂うオブシディアの私室。

今そこに、天井から垂れ下がったヌメつく触手状の器官によって四肢を拘束され、M字開脚の姿勢で宙吊りにされたシルヴァリアの姿があった。

「くっ……！ 貴様あ……っ！」

仮面を外されたクールな美貌が、羞恥に染まる。

それもそのはず——触手で無理矢理開かされた美脚の間では、下着はすでに取り払われ、彼女の二つ名通りの白銀甲冑に彩られたスカートの下を隠すものは何もない。

ムダな肉の一つもない白雪のような下腹部と、うっすら黒い恥毛をたたえた女性器のスリットが今、軽蔑すべき女幹部のニヤけ顔の正面に晒されてしまっているのだ。

「ふふっ、ぴったり閉じちゃって見るからに処女くさいオマンコねえ。ま、あのままだとあと一週間とかからず、あの淫獣スターちゃんにブチ破られてただらうけど♡」

「な……ふざけるなッ！ お前のようなゲスと、聖光剣姫と一緒にするな！」

「あらまあ、あなたって見る目ないのねえ……まあ、だからあいつにチョロいヌキ玩具扱いにされてるんでしょけどね、どうせ♥」

やはり、スターティアこと優姫との関係をオブシディアは察している。

その事実とライバルを侮辱された怒りに、かあつとシルヴァリアの頭に血が上る。

（こいつ、やはり絶対に生かしておけないッ……！ でも、だからこそ今は耐えなければ
っ！）

オブシディアに掴まれた、シルヴァリアの出自と真の目的……すなわち反逆の意志。

ヘタに手を出せば、その情報は他の七冥塊に、シャドーマテリアル全体に知られること
となってしまう。そうなれば一卷の終わりだ。

逆に言えば、オブシディアが隠匿しているうちにその記録を見つけ、破棄すると共に彼
女を消しさえすれば望みはある。

だから今は——耐えるほかない。故郷を滅ぼした憎むべき組織の一員であるオブシディ
アに、秘密を盾に何をされようとも。

「さあて、いくらあんだでも今からどうされるかくらい想像つくわよねえ？」

「……勝手にしろ。だが、私は決してお前の喜ぶ反応などしない」

「あらそう、どこからその無根拠な自信が来るのか知らないけど、じゃあ遠慮なく……んっ、あんっ♡」

「う……っ!!」

ぼるんっ♡ と黒ビキニ状のレザーを押し上げ、粘液にまみれたおぞましいフタナリ巨根が女幹部の股間から出現した。

「あんたはずっと私のことを見下してくれてたわよねえ？ 陰謀しか能がない卑怯者、もし戦えば瞬殺できる取るに足らない相手だって……！ そのムカつく態度、ずっとスターティアの次にぶち犯してやりたい相手だったわあ……あん、ついにそれが叶うのねえ♡」
やはり最悪の予想通り——オブシディアは、みずからの魔巨根でシルヴァリアを陵辱するつもりなのだ。

「ふふっ、スターティアのチンポもグロく育ってるけど、まだまだ私の方が一回りデカくて長ぶつといでしょう？ さあ覚悟なさい、おままごとみたいなエロ行為しか知らないあなたのカラダ、大人チンポでガッツリ寝取ってやるわあ……♡」
シルヴァリアを吊り下げる拘束触手が蠢き、処女マンコの位置が反り返るチンポの高さにぴったりと合わせられた。

その先端にかぶっていた包皮が、みゆきっ♡ とひとりでにムケて、むわああ♡ と鼻

をつく淫臭が立ちこめる。

（な、なんてグロテスクなの……!! スターティアのともまるで違う……私の体つ、これからこんなモノに……ッ!!）

ぱくぱく鈴口を開閉させながら飢えた肉食獣のように透明のヨダレを垂らす、子供の握り拳ほどもある赤黒い亀頭。

その根元でエラ状にミチミチと張り出し、1cm近い女殺しのエグい段差を作っている分厚い肉カサ。

ミミズ腫れじみた太い血管がビッシリのたくる、ドス黒く淫水焼けした長大な太肉幹。そしてムッチリした太ももの隣でぶらぶら垂れ下がった、無尽蔵の精力を象徴するような二つの巨キンタマがドグンドグンと不気味に蠢く。

どのパーツも、優姫のモノより一回り巨大なスケベフタナリ棒の偉容——だが、それ以上で決定的に違うところがあった。

「はあぁっ……♡ ここ何日かは処女膜ブチ破ってないから余計ギンギン勃起が半端ないわぁ♡ しかもそれがスターティアに負けず劣らずクソ生意気なメスガキへの生ハメ仕置きなんだもの、期待感ヤバすぎて今にも射精しそうよぉ……♡」

そう、スターティアの童貞ペニスとは違い、オブシディアの大人チンポは——欲望のま

まに幾多のメスを食い荒らし、極悪遺伝子を植え付けた、百戦錬磨の実戦経験済み繁殖肉凶器なのだ。

「スターティアと違ってあなたの処女はわざわざとっておく必要もないからあ、今までさんざんタマった鬱憤のドロドロ、全部スッキリ晴らさせてもらっても構わないわよねえ……？」

「く……！ 何を勝手な、ことをッ！」

自由にならない足腰をグツと両手で掴まれ、いよいよググツ……とその切っ先が、守るもの一つなく震える割れ目へと無慈悲に接近する。

（だめ、犯され……る……！ 本当に、こいつに犯されるッ!!）

どんな苦痛や陵辱にも耐えてみせると決心した女剣士の心中を、パニック寸前の恐怖と押し殺した悲鳴が駆け巡った。

亡国の王女として、あの時より復讐に捧げた残りの人生……女としての生き方はとうに捨て、今更自分の処女などに何の意味もなかったはずなのに——！

「あらあらあ？ まさか震えてるの、あなた？ うふふ、怖いならやめてあげましょうかあ？」

「な……っ!!」

馬鹿にしきった嘲笑う声が、シルヴァリアに冷静さと敵愾心てきがいしんを取り戻させた。

切れ長の美しい瞳がキッと陵辱者を睨み、殺気と共に言葉をぶつける。

「侮るなよ、オブシディア！ 私はシルヴァラント界の王族にして最後の生き残り、そして七冥塊最強の魔剣士！ 仮面の内でも外でも、お前ごとき卑劣非道なクズを哀れみこそすれ、恐れることなど微塵もあるものかッ！」

凜とした声音は、シャドーマテリアルに滅ぼされてさえいなければ姫として平和な国に君臨しただろう高貴な出自にふさわしいものだった。

だが、それは余計に陵辱者の興奮に油を注ぐ結果になる。

「いいわいいわあ……最高よあなた♥ その綺麗なお顔が歪む瞬間を、どうしても見たくなったわ。ただし、苦痛じゃなく別のもので……ねっ！」

ぱちりと、黒レザーに包まれた指を鳴らす女幹部。

と——今にも押し入ろうとしているデカ亀頭の至近距離で、当然だが濡れることもなくぴっちり閉じていたスリットに異変が起こった。

「な……う、うあッ!? な、なんだこれ……はっ!?」

ぶるるっ——！ とシルヴァリアの全身が震えたかと思うと、柔肉の割れ目がみるみる充血し……じゅんっ♥ と処女穴が、湿り気と熱を帯び始めたのだ。

「なっ……わ、私の体に何をしたっ、オブシディア!!」

「アハハッ!! 馬鹿ねえ、思い返してご覧なさい？ あなた、スターティアの体液を……チンポ精液を体に入れたでしょう？ 改造で生やしてやったアレの分泌物には、当然バイオナノマシンがたあつぷり仕込まれてるのよお♥」

（なッ、そんな……うかつだった——!!）

精飲によってシルヴァリアの体内におさまった極小の侵入者は、かつてスターティアにチンポを生やした時のように彼女の体を女幹部の意のままに造り替えていく。

謎の強制発情は、その第一段階目だったのだ。

「うふふっ、あんたのオマンコがうっすら開いて、私のチンポを求めてひくひくパクついてるわよお♥ 心は折れてなくても、体は感度全開、あっさり媚び媚びラブセックスの準備万端ってわけ♥」

「ば……馬鹿なっ、わ、私の体がそんな、あさましいマネをするわけが……ッ!!」

じんわりと情欲の熱を帯びる体のかつてない反応を、慌てて否定するシルヴァリア。

しかし言葉と裏腹に、さっきまで閉じていた秘裂はまるで花が開くように広がって、とろおり……♥ と透明な愛液に濡れヒクヒクと蠢いていた。

「あらあら、この処女マンったら私のパコリ棒を欲しい欲しいって熱烈歓迎してるじゃな

い♥♥　じゃあ遠慮なく、お待ちかねのモノをブチ喰らわせてやろうかしらッ！」

「ま、待て！　やめっ、今されたらっ——んひつつ!!」

割れ目にぴっと押し当てられたオブシディアのチンポ先が、ドクドクと脈動を伝えてくる。

にゆりにゆりと自分の愛液が黒光りする亀頭にまぶされ、その接触刺激だけで体がのけるほどのおぞましい快感が襲うというのに……挿入されたら一体どうなってしまうのか？

痛みなら戦いの中のように耐えられても、女としての快楽という未知に、シルヴァリアは初めて恐怖した。

「あはっ♥　ついに弱音が出たわねえ、いいわよいわよお！　さあいくわよおおおッッ！　かすかに怯えたその可愛いお顔で、私にバージン奪われるブザマな姿を晒しなさいなッ、シルヴァリアッ!!」

「うっ……うああああああッッッ——!!!」

ずずッ……ずにゆつつ………ずぐんんッッッ!!♥♥

「おっ、おおっ……おおおおおッッッ♥♥　は、ハマっちゃったああ~~~~っつっ!!♥♥　う、奪ってやったわああ、この私があんたのッ、白銀のシルヴァリアの処女膜

をブチ抜いてメスにしてやったわあつつ!!♥♥ おっほおお~~~~ツツ、この征服感たまらないいいいつつ!!♥♥♥

「か、かはっ……!! うあ……は、ああああつつ……ああツツ!」

ぷちぷちと何かが裂ける感触と、比べものにならないほどの圧迫感、そして喪失感。

強制発情で濡れとろけたシルヴァリアの処女膣に、猛り狂ったナマ巨根がずぶずぶと容赦なく侵入し、奥へ奥へと割り開いていく。

その瞬間、亡国の姫にして女剣士の脳裏をよぎるのは、あの笑顔。

（す、スターティア……ゆ、優姫っ……!! ご、ごめんなさいつつ……!!）
痛みがほとんどないことが逆に恐ろしかった。

体そのものを股間から喉元まで串刺しにされたと錯覚するほどの異物挿入感は、バイオナノマシンで膣内の拡張性と感覚をいじられたシルヴァリアに、激痛どころか初めて味わうほどの暴力的快感の波を与えてきたのだ。

「んふーッ、んふううう……っ♥ どうかしら私の優しい気遣いはっ♥ 初めてなのにすつごくキモチいいでしょう？ さあ、すぐに私のおチンポが大好きになってくわよおお♥」
「す……好きになどッ、なるかああ……っ!! こ、殺すっ……絶対に殺してやるッ、オブリディアああ……!!」

貫かれた下腹部から広がるおぞましい快樂に、全身に玉の汗を浮かべ、涙をにじませつつもキツと殺意のまなざしで陵辱者を見据える女剣士。

フタナリ女幹部はペロリと黒い唇を舐め、ゾクゾクと満足げにそれを眺める。なにしろ何を言われようと、現にチンポが突き刺さってしまったているのだから勝利感は揺るがない。「いいわよその殺意いっぱい視線、悔しくてたままないって顔お♥クッソ生意気なメスガキを生チンポで食い散らかすのはこれだからやめらんないわああ♥しかもそれがあのスターティアから寝取ってるようなもんだからなおさら格別よおッ、おおっほ♥達成感でキンタマ爆発しそうよおッ、ふんッッッ!!♥♥」

「んぎつつ!! ひっひぎっ……ひぐううううッッ!!??」

……ごちゅんッッ♥♥

と、熱した鉄球のごとき亀頭が未開拓腔道の最奥部——誰も触れたことのない幼い子宮口を突き上げ、こらえようのない悲鳴があがる。

「はあい奥まであっさりおチンポ到達うう♥か、覚悟なさあい……これからドスケベな腰使いでパコリまくって私のチンポハメ穴にしてやるから、好きなだけ吠えたりムダな努力したりなさいな、ほらほらほらああっ♥♥」

「や、やめろおお!! つぐ、んぐううう……んああ!! あああうあッ、——あッ♥」

ずちゅんどちゅんつつ♡♡♡ ばちゅんッ、ぬっちゅどっちゅんつつ!!♡♡♡

容赦なく女幹部の尻がウネり、百戦錬磨の腰使いが無防備な体内を開拓する。処女剣士がそれに耐えられるはずもなく、初めてシルヴァリアの声にトロけた色がわずかに混じった。

「あはっ♡ いま可愛い声が漏れたわよお、もつと聞かせてちょうだあい♡ さあこの角度はどうかしらあ、斜めからエグリこむようなえげつないハメピストン♡ あんたのマシンの弱いトコ全部見つけてやるわよお……ふんふんふんッッ!!」

「うっうああ!♡ うぐううっ、いつ嫌っ……んお、おお……はううッッ!♡」

細い腰を正面から抱き寄せ、恥骨同士を密着させての、ネットリした開拓運動がさつきまで処女だった膣内の柔肉を襲う。

それも出し入れのたびに少しずつ角度を変え、左右の壁や天井を入り口から奥まで、余すところなく硬いチンポが初心者マークの性感細胞をこそげ落とすようにしてネチっこく刺激するのだ。

（な——なに、なんなの今の声はっ、私がそんな声を出しているの……!?! こ、こんな奴に犯されて、獣みたいな声を抑えられないなんて……ッ!?!）

快楽の大波に翻弄され、自分の体なのに思い通りにならない恐怖と困惑。

しかも相手はあの憎いオブシディアだというのに……！ シルヴァリアは狂いそうなほどの混乱を必死で押し止め、下腹部に力を入れることでせめて異物を外に追い出そうと試みるが――。

「おおおっ!? ♡ しよ……処女のくせにいつちよまえにチンポ搾ってくるなんてっ ♡ あっはあああ、いいわいいわチンポにビリビリ来るわああ ♡ 狭いしウネるし、かなりの名器よおお ♡」

その抵抗もキュンキュン肉棒を締め付ける搾精運動となつて、逆に女幹部を悦ばせてしまふ有り様。

（うううッ……わ、私の体あ、自分の体なのにどうにもならないなんて……こ、こんなやつを気持ちよくさせてしまつて……っ!?）

魔乳をぶるんぶるん下品に揺らし、褐色尻にたっぷり汗までかいて、エグすぎる腰テクを容赦なく打ち込むオブシディア。そのたびにこらえきれない甲高い嬌声が、魔剣士の口からどうしようもなくあがる。

「ほ、滅びたシルヴァラント王家の皆さまああんっ ♡ あんたたちが必死で逃がしたプリンセスの初物マンコ肉はマジで美味よおおっ ♡ 私に食い散らかされるために守ってくれてありがとうねええっ ♡ んほおおお包まれチンポが幸せえええっ……っっ！ ♡」

「きッ貴様ああああ!? わ、我が王室まで侮辱をつ……んぎつつ♡ ひぎいいいいつつ!♡」

心底嬉しそうにハメ腰を使う極悪女幹部のチンポをいくら食いちぎってやりたくとも、マンコには侵入者を悦ばせる機能しか備わっていないなかった。

そして、我が物顔で処女穴をひたすらエグりこねくったあげく、膣内で一回り膨らんだ極太フタナリ男根が、ブルブルつと不吉に胴震いを始めた。

「んおおつ、ほああつ……や、やばやばツツ♡ もっ漏れる漏れるううつ♡ そ、早漏でゴメンなさいねえつつ♡ もうすぐド濃厚一番搾りが噴き出しそうよおおおつつ!!」

「んぐつ、ひうううつ♡ も……漏れるって、まさかッ、まさか貴様ああ!? ひっひぎああつつ♡」

ぬこぬこにゆここつつ♡♡ ずっこずっこツツ、どちゅどちゅばちゅばちゅんツツ!! ♡♡

腰のカクつく動きがスピードを増し、無防備な子宮めがけて熱い肉ピストンが叩き付けられる。

その先に待ち受ける運命を知り、シルヴァリアは美しい黒髪を振り乱して暴れるが、四肢をがちり拘束する肉触手からは逃れられない。

「おほおっ♥ そっそうよ精液よお♥ 私の極悪繁殖遺伝子を満載した特濃孕ませ汁がッ、あんたの未使用子袋にぶぢゆるぶぢゆるゼロ距離射撃でたらふくミッチリ卵管まで詰め込まれるのよおっ!!♥♥」

「な、なあッ——!？」

だが、シルヴァリアの乏しい性知識でも妊娠のメカニズムくらいは知っていた。

生理周期から考えて、今の自分の体が孕む確率は低いはず——と、一抹の希望にすがったその時。

「あははっ、ひよっとして危険日じゃないから油断してるのかもしれないけどお！ 私の超バイオ改造キンタマで造られる征服ザーメンをナメンじゃないわよお……子宮に入ったが最後、排卵を強制誘発して確実に着床させる絶対妊娠精液にするくらい、簡単なんだからあっ!♥」

「なっ、そ、そんなッ!? や、止めろおおっ、止めろオブシディアああああ!!! んひっ、おおお奥ううっ、んはあああ!?!♥」

無理矢理絶頂へと誘う暴力的ハメピストンと共に襲う、絶望的な宣告がそれすらも打ち碎いた。

もはやシルヴァリアは、触手に吊された体を前後にブランコのごとく揺らされ、全身が

オブシディアの生オナホになったような扱いで精液爆噴の決定的瞬間を待つのみ。

「でも安心なさあい、一発ですぐに孕ませるつてのもつまらないから、最初の妊娠率は50%に調整してあげるわッッ♥ さあ、孕むのがイヤならせいぜい祈ることねえッ!!」

「んうああ、うあああああ!! ばっ馬鹿にしてッッ、やつやめっ……んぎいいっ、ひぎっ♥ んおおおひいいつつつ!!!♥♥♥」

夢にまで見た完全征服の瞬間めがけ、銀髪を振り乱しガニ股に開いた脚をパコパコとブザマなまでの欲望ピストンで叩き付けるオブシディア。

そしてついに——ぴったりと狭い子宮口にむちゅううっ♥ とスケベデュープキスをした女幹部のバリ勃ちペニス先が、白濁に爆ぜた。

「んおおおおおつつ来た来た来た精液昇ってきたわああ!! 発射よ噴射よ大放出よおおっ、ギトギトふたなりザーメンしこたまヒリ出すわよおおおつつ♥♥ おっおおッ♥♥ おッひひひひひひひひひひッッ!!!♥♥♥」

「うああッ、いつイヤあああうああああひひひッッ!!?? んああッッああああ……あああああッッ!!」

どくっ——どくんッッッ!!♥♥
びゅくつつ……びゅぐんつつ、びゅつくどびゅびゅびゅつくううッッ!!♥♥

どぶんっ♥ ごびゅびゅうつっ……どぶどぼおおつつ、どぶどぶううつっ♥♥

「おほッ、おっほおおお!!♥♥ おっおほへえええ……っつっつ♥♥♥♥ はっ排

泄排泄ううつっ♥♥ 私を侮りやがったクソメスガキの生意気マンコ奥めがけてオブシディア様の偉大な子種どっぶんどっぶんナマ注うう入うう……ッッ♥♥ ごっ極楽よ
おおっほへえええ……っつっ♥♥」

「うああッ熱っ熱うう!! は、入ってえ……入ってくるうう!!?? き、汚いモノが流れ込んで……いつ嫌あああッッ!! あ、あああ……あ……♥」

煮詰めたシロップかヨーグルトのような濃厚スperlマが、汚れを知らない処女子宮を食い荒らし卵巣を占拠すべくドクドクドクと……あとからあとからひっきりなしに送り込まれていく。

オブシディアは恍惚こうこつのヨダレすら垂らしながら、むっちりした尻をキュキュツとすぼめて種付け射精の解放感に酔いしれ、ぶりゅぶりゅと下品な精液噴射の真っ最中のチンポをなおもズコバコ動かし続けた。

「んおおっ、さあ孕め孕めつつ♥ はッ孕みなさいこのクソガキっ♥ 最終的にスターティアと仲よく私の精子でボテ腹にしてやるわああッ、そして生まれた子供もまた犯してやるううつ♥ おっほ、まだ出る出るうう……っ♥」



「ひっひぎいいいっつ♥　いつ嫌だ嫌だ嫌ああ……っ!!　お、お前の子など絶対にいいっ、妊娠するものかああ……っ!!」

抱きすくめられた上半身をのけぞらせ、息も絶え絶えにその陵辱を受け止めるシルヴァリアには、もはや抵抗の呪詛を叫ぶくらいしかできない。

殺したいほど憎い相手の子を孕むかもしれないという絶望にわななく細い肢体を、半ば強制的に高められた性感が容赦なく貫き、屈辱の絶頂アクメへと引きずり込んでいるのだ。

「ふーっ、んふーっ♥　ああ、おしっこみたいにドボドボ出たわああ♥　これだから嫌がる相手への強制中出しは最高ねえ……っ♥　何回やつても精液の出が違うわあ♥」

たっぷり二分近くも続いたしっこい放出のあと——お腹がとっぷりと重くなったような違和感すら覚えつつ、それでも瞳に闘志をみなぎらせて陵辱者のニヤけ面を見上げるシルヴァリア。

今まさに、一匹一匹に悪の遺伝子を積んだ精虫が自分の胎内でウジャウジャ蠢いているかと思うと、気が狂いそうだ。

「く……う、ううッ……!　き、貴様あ……!　これまで、何人の女をこうやって毒牙にッ……!」

にゆりにゆり子宮の奥まで精液を練り込むように、イヤらしく押しつけた腰を8の字に

動かしながら、オブシディアはその追求を心底愉快そうに笑い飛ばす。

「あはっ、知りたい？ そうねえ……私も忙しいから最近は二日に一人ペースってところかしらあ♥ 学生とか人妻とかアイドルとかあ、目についた美味しそうなメスを適当にさらってパコパコずこずこ、よりどりみどりつまみ食い♥」

「なッ……!？」

「ああ、でも私も鬼じゃないわあ♥ ちゃあんと認識歪曲で記憶消して帰してあげてるわよ？ ま、知らずに私の子供妊娠してる地球人がざっと百人はいるんじゃないかしらあ、ふふふっ♥」

「お、オブシディアあ……！ こ、この外道めえ……ッ！」

悪の組織に身を置いているとはいえ、あまりにも暴虐で身勝手な想像以上の淫行に、シルヴァリアが殺意の灯った視線を飛ばす——ザコ戦闘員ならそれだけで戦意喪失しそうなほどの殺気だ。

だが、その身をいまだ貫いたままの陵辱フタナリ棒は、逆に硬さと熱さを再びムクムクと取り戻した。

「——うああ!! ま、まだ大きくっ!!」

「んふふ、当然一回や二回で終わるわけないでしょお？ あんたには今までさんざんコケ

にされた分、みっちりパコりまくって子宮をとっぷり精液漬けにしてやるんだから覚悟することねえ……っ♥」

ねろり……と舌なめずりをして、ハメたままの巨チンポを生き物のごとく。ピクピクさせながら、今から犯しつくすという宣言をするオブシディア。

しかも、抵抗できない女剣士を襲う恐怖は、それだけではなかった。

「な、なにっ……!! か、体が痒くっ……う、うああ!!」

「ふふっ♥ 始まったみたいねえ、さあいよいよお待ちかねのメインディッシュよお♥」
ずっぷりと太い肉棒がハマりこんで、精一杯広がった充血マンコの上で——包皮に隠れた可愛らしいクリトリスに異変が起こった。

見る間に体積を増した肉芽が、ずろろんっ——♥ とまったく別の性器官に変貌したのだ。

「な……こ、これはっ、そんなあぁっ!! こ、これってッ!!」

「生えた生えた♥ あゝあ生えちゃったわねえ♥ くくっ、ついにあんたにも醜いチンポを生やしてやれたわぁ、感無量よお……♥」

そう、かつてスターティアを襲ったのと同様の、体内に注ぎ込んだバイオナノマシンによるフタナリ生体改造。

以前オブシディアは『スターティアと同じ目に遭ってもそのクールぶった顔をしてられるか見物だ』——と、去りゆくシルヴァリアの背中に吐き捨てた。

まさにそれを現実とするための、おどましい処置がついに施されたのだ。

「うふふ、それにしても……これはまた情けない包莖チンポが生えたものねえ♥ 白銀の魔剣士さんにしては、コッチの『剣』はずいぶんと弱そうじゃない？♥」

そう、シルヴァリアから生えたフタナリチンポは、オブシディアやスターティアのそれのようにたくましいものではなかった。

生っ白い包皮にすっぽりと覆われ、サイズも中学生男子の平均レベルだろうか。ビンビンと精一杯勃起しても、女幹部のドス黒い大人チンポとは比べものにならなさそうな、いかにも頼りない早漏童貞ペニスといった具合だ。

「き、貴様が生やしておいて何を勝手なッ……あうんッッ!!」

ぴん、と黒レザーの指先で先端をはじかれ、途端に情けない声をあげるシルヴァリア。

それは七冥塊最強と謳われた女剣士の体に生まれた、鍛えようのない新しい弱点だった。

（な……なに、今の感覚……っ!? む、剥き出しの神経が集中してるみたいな……!!）

彼女の困惑を、オブシディアは心底楽しそうにニヤニヤと眺めている。

みゅちちっ♥ と、膣内にハマりこんだままの対照的な極太男根が、真新しい血流を受

けて肥大化し、あらためての陵辱準備を完了した。

「ふふっ……さあ、アリアちゃん♡これからそのよわおチンチンをたああつぷりイジめながら、開通したてのマンコもズボズボ犯し抜いてやるからあ、せいぜいイイ声で鳴いてちょうだいねえ……あはっ、あははははははっ♡」

（う、ううつ——わ、私はどうなってしまうの……す、スターティアあ……つ！）

第16話 女怪人乱舞！ 早漏チンポに叩き込まれるドスケベ快樂責め！

「ひっひぎつつ♡ あぐっ、うあああつつ!!? さ、触るなあああつつ!!♡」
にゆく♡ にゆく♡ にゆく♡ くにゆくにゆんつつ♡

淫らでたおやかな女幹部の指が、敏感な生えたとてチンチンを弄ぶ。

「あっはははっ♡ ホラホラちよつとはガマンしてみせなさいよアンタ、スターティア以上の早漏クソザコちんぽにもほどがあるわあ♡」

肉触手で拘束宙吊り状態のシルヴァリアを、背後からずつぷりと生ハメで犯しながら、オブシディアはそのフタナリ皮かむりペニスをオモチャにしていた。

過敏な神経まみれの刺激に弱い器官を、痴女の指先に容赦なくイジくられる暴力的刺激に、生えたとて童貞肉茎が耐えられるはずもない。

「うっうぐううつつ♡♡ い、嫌だ嫌だ嫌だッッ、きつ貴様の手で好き勝手にされるなどとおおっつ!!♡ おっおうううつつ!!♡」

「ほおーら、諦めてさっさとブザマ精通キメときなさあい♡ 我慢とかムダムダ、すぐにドピュドピュどっぴゅん♡ 秒殺発射させちゃうわよおおっつ!!」

左手の指で作った輪っかで、根元をスコスコきゅつきゅ♡

右手はかぶせるように、余り皮たっぷりの亀頭をグリグリぐりゅりゅん♡

十本の淫らな指が織りなすチンポ殺しの魔快楽に、童貞勃起が耐えられるわけもない。

（こ、こいつの前で思い通りの不様な姿を晒すなどトッ……そ、それだけはあッッ!! それだけはイヤだっ、イヤなのがいいっ!!）

オスの刺激に集中させるために、マンコにハメたままの比べものにならないほどたくましい大人チンポは、ピストンせずにグングンッ♡と反り返らせるだけだが、無防備な子宮口に快感振動をグリグリと流し込むのは忘れないオブシディア。

それらの複合した悪魔的な刺激に晒され、ザーメン蛇口を閉めることにすら慣れてないシルヴァリアの「おチンチン」はガマンのかいなく……たやすく決壊の時を迎えた。

「おっんおッ♡ おおふううッッ!!♡♡♡ くっ来るううつつ、なっ何かが肉の中を昇って……うっうあぁあぁあぁあつつ!!♡♡♡」

——ぶぴゅつつ♡ ぴゅくんつつ!

ぴゅくっ、とくとくんつつ♡ ぶぴぴつつ!♡

「あははっ♡ ずいぶんと可愛らしい射精音ねえあなた、まさに精通って感じのお子ちゃま発射だわぁ♡」

「とっ止まらなっつ♡　なんでこんなッ……じ、自分の体なのに止められないのよおお、おっつ!!!」

「おほっ……くううつ♡　肉穴マンコも発射に合わせて生意気にぎちぎち締まってっ、なかなかいい具合よお、ガキのくせにつつ♡」

「こっ、こんなあああおっつ♡♡　んおあああ~~~~ツツ!!♡♡」

オブシディアの指の中で、精一杯反り返った男子中学生サイズの生っちろいペニス、包茎余り皮の中にぴゅーぴゅーっ♡　と精液を吐き出した。

先っぽからダラダラと溢れ陵辱者の指を汚したそれを、ちゅるんっ♡　と女幹部の黒いルージュが飲み込んでティスティングする。

「んふっ、青臭あい……♡　量はまだ少なめだけどネバっ気が濃くて、元氣ぷりぷりの若々しいザー汁ねえ、んぷあっ♡」

「やあっ、やめろっ!!　あ、味わうなあ……!」

自分がヒリ出した黄ばみ粘液を、妖女の赤い舌がチュルチュルとしゃぶりすすする淫らかな光景——無意識に反応した股間が再びじくじくと熱を持ち、シルヴァリアは自身の変化に愕然としてしまう。

「あゝら、またすぐにお勃起?♡　フフッ、喜んでちょうだあい♡　あなたの早漏よわよ

わチンチンだけどお、回復性能だけはピカいちに調整しといてあげたわぁ♡」

「なっ!? だ、誰がそんなことを喜ぶ!? わ、私の体をどれだけ玩具にすれば気が済むっ

——んひんつつ!?♡」

ぐぐんつつ!! とグラインドした女幹部のむっちり腰が、たくましい極太チンポを支点に、貫かれたシルヴァリアの体を大きく揺さぶった。

ユサユサと、まるで馬の背に揺られるような前後運動……その結果、ねっとりした先走り汁を鈴口から垂らした半勃起ペニス、空中でぶらんぶらんと前後に揺れ動く。

「ほおら、ほおらぁ♡ こういうのはどうかしらあ? あはっ、触つてもないのにビンビンにフルボッキおつき♡ してきたわねえ?♡」

「ひっんひいいつつ!? やっ止めつつ♡ とっ止めろおおっ!?♡ く、空気に触れてっ、ねっ根元を支点に振り回されっ……んおおおつつ!?♡♡」

ぶんぶん、ぶるんっ♡ と、スレンダーな女剣士に似つかわしくない豊かな巨乳と生えただてチンチンが宙に躍る。

風を切る感触と根元にかかる反動だけでどうしようもなくキモチよく、再びグツグツと昇ってきた精液が、ぴゅぴゅっ♡ ぶぴッ♡ と先走りのお漏らしを撒き散らすほどだ。

「あっはっは♡ こんなヤワな刺激だけでイキそうなお? 生やしたての時のスターテ

「イアでさえもうちよつと頑張ったわよお、あんたって本当にザコい早漏おチンチンねえ？」
「うつつうるさいつつ、だつ黙れええっ!? こ、こんなおぞましい感覚になどっ……く、屈してなるものかあつっ!♡」

荒い息を吐きながら、背後の陵辱者をキツと睨むシルヴァリア。

だが一筋離れた美しい黒髪が上気した口元に汗で貼り付き、何ともなまめかしい表情になつてしまっていることに本人は気付かない。

（いいわいいわあ、その顔……見てるだけでゾクゾクしてどんどん孕ませミルク作れちゃいそ♡ スターティアともども堕ちるところまで堕としてやるから覚悟なさい……っ♡）

ねろおり♡ とゲスな期待に黒い唇を舐め、でもその前にまずは……と、悪の女幹部は陵辱計画の段取りをめぐらせる。

「んふふ、口先だけは何とも立派ねえ……じゃあ、せっかくだからもうつとキモチいいイキ地獄を体験させてあげるわあ、アリアちゃん♡ ……さあおいでなさいな、お前たち！」

オブシディアが指を鳴らす。すると――。

「はぁ♡ お呼びがかかるのを待ちかねましたよお、オブ様あ♡」

「んふふ、あのシルヴァリア様とえっちできるなんて光荣です……♡」

「な……こ、こいつらはっ!!」

部屋の奥から現れたのは、茶色のショートヘアと藍色のロングヘア、女子学生くらいの声と体格を持つ美少女二人。

だが、その外見は一見してわかるほど、人間のそれではなかった。

ショートヘアの娘は、背中や二の腕など体のあちこちに猫科動物を思わせるすべすべの毛皮を持ち、猫耳と尻尾、牙に似た八重歯を生やしたいはずらっぽい表情の持ち主。

そしてロングヘアのもう一人は、うっすら青みがかった肌と、爬虫類のような縦長の瞳孔を備えており、その舌はチロチロと蛇のように長く細く伸びて先が二股に分かれている。そしてどちらも、ほとんどヒモ状の高露出下着にあられもないムッチリ裸身を包み、全身から発情したメスのフェロモンをむんむんと放っていた。

「そう、ご覧の通り女怪人……しかもこの娘たちは、私みずから改造と調教の限りを尽くして自分好みに変えた専用ハメ肉玩具どもなの♡」

「そうですよお、オブさまの素敵なおチンポ様のお世話が、あたしたちスケベ怪人のお仕事なんですよ♡」

「んふふ……その中でも選りすぐりの二人のテクニク、その身でたっぷり味わってくだ

さいな……♡」

「な、なにを言って……！ く、怪人ふぜいがッ、私に触れるなッ!？」

欲望にギラついた目で舌舐めずりしつつ近付いてくる二人の女怪人……本来なら一撃で打ち倒せるはずの取るに足らない相手。

だが、今や身動き一つとれない状態で新たな弱点をさらけ出すシルヴァリアは、本能的な恐怖を覚えて白い裸身をぶるりと震わせた。

「あはっ、これがシルヴァリアさまの生えたとおチンチンさんなんですねぇ♡ かつわいい♡♡」

「すんすん……ああっ、青臭い初搾りスペルマのにおいでいっばい……♡」

「うああっ!？ や、止めろ、にっにおいなど嗅ぐなあっ!？」

目をハートマークにした女怪人たちが、突き出されたシルヴァリアの腰の正面に陣取る。さつきブチ撒けた精通ザーメンが周りにこびりつき、包茎余り皮の中にも残ったままの汚れたフタナリペニスを、怪人美少女たちに至近距離で見つめられるという予想外の羞恥に白銀の魔剣士は焦る。

「じゅるっ……とても美味しそう、です♡ たっぷりと、繁殖欲いっばいの精気が詰まっているのを感じます……♡」

「ああん♥ も、もう構いませんよねえオブ様あつ？ 早くドスケベれろれろおチンチンあそびつ♥ し、したいですうっ！♥」

「ふふっ、自分でしつけたとはいえまったくこらえ性のない淫乱ビッチどもねえ……♥ まあいいわ、壊さない程度にしゃぶりヌいてあげなさいな、そのザコちんちんをねえ！♥」
「はあーいっ♥♥♥」

れろんっつ♥ と、猫女怪人の可愛らしい口から突き出される、たっぷり肉厚のベロ。
ちゅろんっ♥ と、蛇女怪人の薄い唇から出現する、粘液まみれの長大な細い舌。
それらが両サイドから卑猥に宙をのたくって、プルプル怯えて震える肉サオに近付き……！

「き、貴様らッ!? い、一体何をつ……や、やめっ——んおおおうっつ!!?♥♥♥」
れろろおっつ……ずろろっ、ろろろっろおおおんっつ♥♥♥
りゅぷぷううっつ♥ ちゅるんっつ♥♥♥

「はあい怖くないでちゅよお♥ シルヴァリア様の汚ポコチンさん、お皮のナカまでキレイキレイしましうねえ♥」

「んひっひいいいいっつ!! やっやめッッ♥♥♥ そっそんな所をホジくるなあああつっ!!♥♥♥」

「フフッ、こいつらのチンポ狂いつぷりときたら、一度吸い付いたら離さないわよお……」
♥ 私でも油断するとタマキン空っぽにされちゃいそうなくらいだから、覚悟することね♥
」

かすかにザラリとした……だが本物の猫のようにささくれだったそれではなく、まるで細かいシリコンの突起を無数に並べたような快樂刺激を発生させる、猫女怪人の肉厚ベロ。そして、ローションめいた粘液唾液にたっぷりまみれ、包皮と亀頭の間を器用にズルズルと侵入してくる、蛇女怪人の長い舌。

異なるダブル刺激が、こちよこちよ♥ ずりゆずりゆ♥ レロレロ♥ ぐりぐり♥ と、初フェラ体験にしては強烈すぎるハーモニーで童貞ペニスを責めるのだからひとたまりもない。

「おッおひつつ!!♥♥ んひっひやうううつつ!!??♥♥ やっ止めっ、止めろおおおつつ!!♥♥」

「れろれろつつ♥ ずろろつ……れりゆんつつ♥ あら、シルヴァリアさまったら、ひよつとしてまたイキそうになってませんか？ くすつ……はやあい♥」

「はむはむっ……こらこらあ、お掃除の最中なんですからあ、白いオシッコびゅー♥ しちゃ、めっ！ でしょお？♥」

くすくす笑いながら、シルヴァリアの情けない反応を小馬鹿にする女怪人たち。

七冥塊最強の魔剣士の、そして元シルヴァラント王族の誇りを最低の形で踏みにじられ、
白晳の美貌にカァツと血が上る。

（わ……私がつ、この私がこんな屈辱をつ……ザコどもにいいように弄ばれ、なぶりもの
の晒しものにされるなどとお……ッ！）

だがこの状況では、さしもの彼女も抵抗のしようがなかった。

肉触手に拘束された太ももや両腕をカクカクとブザマに開閉させて身をよじり、黒髪を
振り乱して気を散らし、ドスケベ極まるダブルおしゃぶりによる暴発を必死に先延ばしに
するほかない。

「れろれりよりよつ……ぷはっ♥へえ、今度は意外と頑張るんですねえ、シルヴァリ
アさま偉い偉いっ♥じゃあ……そろそろアレ、やってあげたらあ？」

「ふふ……そうね、オブ様も褒めてくださる私の得意技を……♥」

猫娘怪人が身を退き、蛇娘怪人にペニスの真正面ポジションを明け渡す。

その口からひととき長い舌がによりと先端めがけて伸び、シルヴァリアの脳裏に不吉
な危険信号を鳴らした。

「ふふっ、今からナニされるかわからないってカオですねえ♥すぐに、イヤというほど

味わえますよお……♡」

「な……何を、するつもりだッ……!!」

手、いや口の空いた猫娘怪人が、シルヴァリアの耳元に唇を寄せて——囁く。

「……によ・う・ど・う・ほ・じ・く・りっ♡」

「な——!!」

待て、ニョウドウとはなんだ……と女剣士が思わず声に出しそうになった、その瞬間。

んちゅぷぷつつ——れる、ずろろっ……みゅぐぐぐんんツツ♡♡

「ッお……えあ!! お、おおッ……んおッひぎいいいいいいつつ!!??♡♡」

細くねじられた長い蛇舌が、ぴつとりあてがわれた鈴口から早漏チンポの中へと……にゅぶにゅぶと先走りにまみれて侵入していく。

おぞましい圧迫感と、そして襲い来るそれ以上の被虐快感……あらゆる「穴」の感度を高められたシルヴァリアに、さつき処女を散らされながら味わわされた本来ありえないほどの魔快樂が再び襲い掛かった。

「んおおおおおおっ♡ おっおおおおおッツツ!!??♡♡ なっ何この感覚うううつ

っ!!♡ くっ来るな来るな入って来るなああつつ!!♡♡ ひっひぎいいいいつつ!!」

にゅぞ♡ にゅぶっ♡ ぶぷっ♡ ずによりろろお……っ♡

にゅっふ♡ にゅぷぷっ♡ によぷ、ぬぷぼっ♡ ぷちゅにゅむるんっ♡

嬉しそうに上目遣いで、シルヴァリアの絶叫をサディスティックに見上げながら、ヌポとリズムカルに、粘液まみれの蛇舌をチンチン排泄穴に出し入れする蛇娘怪人。

まるで、強制的に生み出されたもう一つの敏感処女マンコをハメ犯されているような：
：魔剣士の股間から背筋、脳天までを、ばちばちと絶望的快感の火花が爆ぜ貫く。

「どう？　すごいでしょうその子のドスケベ尿道舌ファックは♡　それもただホジくるだけじゃないわよお…：そいつの舌が分泌する粘液があんたの射精穴を内側から造り替えて、感度をバッキバキに強化改造しちゃうんだから♡」

「うふふっ、お射精が死ぬほどヤバくなるのはもちろんっ、これからオシッコするだけでものたうち回るくらいキモチよくなっちゃうんですよね♡　あと、尿道の太さもどんどんユルユルに大変身っ♡　ぶっとくて男らしい精液がヒリ出せちゃいますよお、よかったですねっ♡」

女幹部と女怪人による外道な宣告が、ただでさえ脳細胞を削り溶かすような尿道姦の衝撃快楽に翻弄されているシルヴァリアをさらに打ちのめす。

（うっ嘘嘘ウソ嘘よおおっっ!!!　わ、私の体がそんな淫らに改造されてっ…：こ、これ以上イヤらしく造り替えられるだなんてッッ…：!!）

だが彼女には、そんな残酷な運命に思いを馳せる余裕すら与えられなかった。

ぬぽぽっ、ずぷぷぷうっ……♡ と奥の限界まで押し込められた蛇舌のうねりが、一瞬ぴたりと止まったかと思うと。

「あはっ♡ いよいよショータイムですねえオブ様♡ 一気に尿道からペロ引っこ抜かれちゃうトドメのし・げ・き……シルヴァリア様、耐えられると思いますう？」

「そうねえ、私でもアレで射精ガマンするのは並大抵の苦勞じゃないから……ま、なっさけなく瞬殺ドピュっちゃうのが関の山でしょうよ♡」

「な、なあ……っ!? ぬ、抜く、だとっ……!? そ、それも一気にっ……!?」

元々射精そのものの穴に「栓」として舌を押し込められているからこそ、かろうじて発射をまぬがれているような一触即発の状態なのだ。

これを一気に引き抜かれたりなどしたら——！

「あっ、でもでもっ♡ あたしはシルヴァリア様を信じてますよお、だって七冥塊いちの魔剣士！ その誇りにかけてきつと、お漏らし射精くらいガマンしてみせてくれるはずですっ♡ ねっ？♡」

（な……こ、こいつ何を勝手なッ、ことを……ッ!! か、体さえ自由になるなら今すぐ殺してやりたいッ……!!）

再び蛇娘怪人の隣にしゃがみ、頑張れ頑張れふれーふれーっ♥ と目の前の爆発寸前ペニスめがけて無責任な笑顔で応援する猫娘怪人。ふざけるなど叫びたくてももはや口を開く余裕すらないシルヴァリア。

そして、にまあ……♥ と上目遣いで笑う蛇娘怪人の長い舌が、ついに——！
にゅろぞぞぞぞおお——じゅぞぞぞるぞぞんつつ♥♥

「おっおおおおおおおおツツツ!!?!♥♥♥ ぬっヌケっ♥♥ 抜けるううううツツツひい
いいツツツ!!?!♥♥♥」

んじゅるんっ……♥ ぬぬっ……ぽおんつつ!!♥♥♥

「いいいッッッ!!?!♥♥♥ あおおおんぶんおおおつつ、うああああ嫌ああつつ!!?!♥♥♥
でっ出りゅうううつつ、ひっ引っ張りだされりゅううううううッッッ!!!♥♥♥」

ぶびっ……どびゅふううつつ!!♥♥♥ どくどくううつつ!!

どびびっ、びゅぷるんつつ♥♥♥ びよぽおおつつ、びゅちやあつつ!!♥♥♥

最後まで引き抜かれ、二股の舌先がちゅるりんっ♥ と宙に躍るのと、その後を追うように白い粘液が噴き出すのは、ほぼ同時だった。

宣告通り、早くも太くだらしなく改造されつつある尿道内を、煮詰まったうどん状ザー汁が一気に通り抜けヒリ出てゆく圧倒的放出感、解放感……！



「おおっ……♡♡ おっんうおおお……♡♡ んおおおっほおおお……!!♡♡」

ぶっぴ♡ ぶぽぴっ♡ とペニスがびよこびよこ脈打つたびに、シルヴァリアの理性はぶちぶち音を立てて千切れ、あさましい肉欲中枢に置き換わっていくかのようだった。

「あはあっ♡ やんっ、シルヴァリア様のイカくっさいオスミルクっ♡ 顔にネチャネチャぶつかかってるう♡」

「ああんっ……あぶあっ♡ す、すごい量……っ♡ そんなに私の尿道ホジホジがお気持ちよかったですか、光栄です……♡ 毎日でもしてあげますよ♡」

早漏包茎ペニスから射出されるものとは思えないほど、先の精通とは比較にならない量と太さで空中をのたくってドピュリ舞う、白蛇めいた太ザーメン帯。

ビクビク震えるチンチンの先でイヤらしく口を開けて待ち構えていた二人の女怪人の発情顔めがけてぶち当たり、たっぷりこつてり降り注ぐ。

「あゝら、初ギメ顔射がダブルぶっかけなんて意外とドスケベねえ、シルヴァリアったら♡ せっかくだからまんべんなくブチ汚せるように私がチンポ操縦桿でコントロールしてやるわあ、ふんっ♡ ふんっっ♡」

「んおおおっっ!!♡♡ うっ動かすなあああっっ!!! いいッッ今っそっちも刺激されたらっっ♡♡ んぎいいっっ!!♡♡」

射精の脈動に合わせて不意打ち気味に女幹部が腰を叩き付けると、シルヴァリアの射精中ペニスがぶるんぶるんと暴れる。

それに合わせて上下左右に振り回される射精の軌跡が、猫と蛇の相を持つ女怪人たちの顔面といわず髪といわず乳といわず、下品にマーキングしていく。

どぶどびつつ、べちよおおつつ♡ んびゆるるうう……ねちやあああつつ♡

「ふは……♡ シルヴァリア様のお出しになった生涯二発目のスペルマ、とっても臭くてこつてりで素敵です……♡」

「ほんと、オブ様に負けないくらい濃ゆうい♡ ……でも、あゝあ残念っ、ガマン失敗！次はもっと頑張りましょうねっ♡」

「く、きつ、貴様らああ……!! んあああぐっ♡ こつ、腰を止めろっオブシディアああつつ!! んひぎっひいっ♡♡」

「おっほ♡ おほおっ、そんなの無理よお♡ あんたのイキマンコが生意気に締め付けてくるからチンポピストン止まらないじゃなあいつ♡ ふんふんフンツツ!!♡♡」

うつとりした表情をしながら、長い舌で飛び散った精液を集めネチョネチョとコネ回しつつその味を褒める蛇娘怪人。

よしよし♡ と小馬鹿にした態度に奇妙な母性を交えて、頭をなれなれしく撫でてくる

しかも貧相なペニスに反して、スターティアのそれよりも一回り大きく、こつてり濃ゆい中年オヤジ臭すら放ち……オブシディアが言った通り強化された精液増産能力や連射能力を象徴するかのようだ。

「こつこれはっ……す、スターティアにもついてたあのっ……う、うああっ!! そ、そんなまたすぐにっ……!! たっ勃っうっ♥ おっ勃ってしまっうっ!!♥♥」

ある意味ペニス以上に、白銀の女剣士のすらりと流麗で無駄一つない肢体にふさわしからぬ醜悪なだらしない器官が蠢く。

とくとくんっ……ぎゅるるるう……♥ と、袋の中で脈動し渦巻く何かの感覚が、ゾクゾクと背筋を駆け上って、脳が勝手に勃起の指令を出してしまう。

「あはっ、素敵……です♥ それにタマタマの中から……さつきにも増してくっさい濃ゆ濃ゆザーメンのにおい、むわむわって感じますよ……♥」

「すっごおい♥ こんなにすぐボッキできるなら早漏でもぜんぜん気にすることないですよお、シルヴァリアさますごいですっ♥ おりこうチンチンさん♥」

「ま、待てっ……や、止めろっ、そんなすぐに刺激されるなんてっ……!!」

ぐっ、ぐぐっ……♥ と再び仰角をあげるイキたておチンチンめかけ、目を輝かせた女怪人たちの舌が、指が、無慈悲に殺到した。

「ではオブ様、ご命令通りすぐにこのザコチンを恥射精に追い込みますので……♡ れえろれろれろ……れろれろりゅんつつ♡♡」

「あつガマンとかムダですからねー？ ほくらヨワイとこほじくり♡ ほじくりつつ♡ キンタマもナデナデさわわっ♡ 精液いっぱい作れるマッサージっ♡」

舐め、ねぶり、吸い、くすぐり、しゃぶり、甘噛あまがみし、ほじくる。

粘液まみれの蛇舌がチンチンに巻き付いてニユグニユグとシゴきあげると同時に、猫のペロが包皮と亀頭の隙間に侵入しぞりぞりとコスりあげ。

本気の女怪人たちの搾精コンビネーションが、パンパンに膨らんだ精液タンクに直結された早漏ペニスへと容赦なく襲い掛かる。

「ひいいいッひびびいッ!!??♡♡ まっまたイカされるうううッ!!♡♡ む、ムリヤリこんな怪人どもにイイイッ!!♡♡」

絶叫と共に、下半身から再び怒濤のごとくわき上がる射精感。

拡張されつつある尿道では、さつきにも増して発射を先送りすることすら不可能だった——ガマンできた時間は、せいぜい十数秒。

「あはあつ、お漏らし発射準備完了お♡♡ じゃあ今度はたっぷりプリプリ♡♡ 口内射精しちゃってくださいねえ——ぱくっ♡♡」

「あん……ずるい、独り占めなんて……じゃあ私は、おタマタマを可愛がることに……♡」
蛇娘怪人のぬめつく指で、ぶら下がったキンタマをモミモミされながら……にゅっぷり
ペニ先をくわえ込んだ猫娘怪人の唇がオナホルのように収縮して、シルヴァリア印の生
ミルクをじゅぞぞっ♡ と食欲に搾りあげていく。

たまらず、そのほっぺたの中でブリュブリュどきゅどきゅ♡ と響き始める、くぐもつ
た下品な射精音。

「おおおおああああっっ!!?♡♡♡ すっ吸われっっ♡♡♡ ね、根こそぎ吸い出されりゅう
ううっっ!!??♡♡♡ ひぎッ、はっはひいいいッッ!!??♡♡♡ おおっ……んおおおっ
……お♡♡♡」

射出の脈動に合わせ、絶妙にちゅーちゅー♡ と口腔吸引でアシストされ、タマキン
精液増産マッサージされ……おかげで長く長く続く、人をダメにするドスケベ極まる放
感が、白銀の魔剣士のクールな美貌をだらしなく変えてしまう。

しかもドロドロに溶かされつつあるペニスのすぐ後ろから、オブシディアの大人巨根が
メス穴をさつきからしつくこくコネくり、かき回し、突き崩し——魔乳を揺らしてガッ
ツンガッツン攻め立ててくるのだ。

「おおっおふううっ!!♡♡♡ イイわよイイわよこの締めっぷり♡ ふんふんフンふんっ

っ!!♥♥ ほらほらあつ、さっきまで処女だった生意気マンコを私のチンポ型びつたりにしつけ変えてやるわああつつ♥♥ さあなれッ、なるのよッ♥ 私の都合のいいマンコオモチャになりなさいなああツツ♥♥」

「だっ誰があああツツ!!♥♥ だ、誰がそんなものに堕ちるものかあああつつ!!♥♥ わ、私は負けなッ……ま、負けなひいいいつつつ♥♥♥♥」

ドスドス♥♥ どきゅどきゅツツ♥♥ ばすんばすんつつ♥♥

シルヴァリアのすべすべしたヘソまわりに、亀頭のシルエットが内部から浮き出るほどの肉槍蹂躪……オブシディアはこうやって、獲物の下半身全体に一生忘れられない巨チンポの味を覚え込ませるのだ。

「あはあっ♥♥ シルヴァリア様ったら羨ましいなあ……オブ様の全開ピストンで、おマンコがつつり耕してもらえるなんてえ♥♥」

「気絶するほど気持ちいいんですよ、あれ……♥♥ もうぜったいに他のチンポじゃ満足できなくなるって言うし……ああっ、見てるだけで濡れちゃうう……♥♥」

ドツと汗の浮いたむっちり尻をバックからがつつり抱え込み、床を思いっきりガニ股で踏みしめて繰り出される本気ピストン。

何人ものメスをむせび泣かせマジイキさせてきた極悪な腰使いに、今日初めてセックス

を経験したばかりの処女剣士が敵うはずもない。

「おっほお♡ 今度はメスマンコが先にビクビクイキ痙攣し始めたわねえ♡ さあッ、あんたが次に早漏ザー汁ドピユると同時に私もたあっぷり追加子種をナマで注ぎ込んでやるからっつ、今度もせいぜい孕まず済むよう祈りなさいっつ!!♡♡」

「ふっふざっ♡ ふざけるなああっつ!!♡♡ もっもう射精するのもされるのも嫌あああっつっ♡♡ 来るなっ、止まれっ、止まってっ……おっおふうううっつ!!♡♡ おっはへえええええええ!!??♡♡♡」

チンポとマンコの快樂がもはや区別できないほどに溶け合い、混じり合い、ぎゅるぎゅると細い体の内を荒れ狂う。

心では嫌悪しているのに……体はオスの部分もメスの部分も、陵辱者たちの行為に激しく反応してむせび泣き、よがり狂う。全身の隅々までが快樂細胞に置き換わったような有り様だ。

（す、スターティア——スターティアっ、ゆっ優姫いっつ♡♡ わ、私に力を貸してっつ、こんなチンポなんかには負けないための力をおおっつ!!♡♡）

縦横無尽に突きほじくられる膣内粘膜が、亀頭でゴリゴリ押し上げられる子宮口が……そしてその奥の、大切な愛の営みの部屋が。

それらがオブシディアの、パワフルかつねっとりしつこい陵辱に適應しつつあるという実感に……メスとして媚びつつあるというおぞましい現実には、シルヴァリアは恐怖していた。

それゆえに、あの大切な笑顔の幻に彼女はすがる——だが。

「……ふんつつつ!!♥♥♥」

——ぼぐんつつ!!

オブシディア渾身のエグいチンポ突きが、シルヴァリアの子宮が楕円形にへこむほどに押し上げた……それがトドメとなった。

瞬間、脳裏に描かれた星ヶ丘優姫の笑顔はがらがらと砕け散り——!

「んッんおおうううつつ!!♥♥♥ ひいいんおおおあああああぶぶぶつつつ!!??♥♥♥

♥♥♥ ばいばいイクイクイグバツぐうううつつつ!!!♥♥♥♥♥♥♥」

「んおおおッッ来た来たきたブチ込むわあああつつ、抜かずの二発目えええつつ♥♥♥
蜂蜜みたいにネっとり濃ゆうううい孕ませ汁うう!!♥♥♥ 極悪オタマジャクシ満載で叩き込むわよおつ、その無防備な子宮で私の味をみっちり覚え込みなさいなあッツ!!♥♥♥」

どびゆるるうううつつ、どくどくんつつ!! ごびゆつつ、ぶぢゆるるつつ♥♥♥♥♥♥♥

——と体の最奥で白濁爆発し、ドクドクと子宮に我が物顔で流し込まれるオブシディア

の悪の子種の火傷するような熱さ。

「あっはあ♥ オブ様のたくましいおキンタマが、孕ませジュースどつくんどつくん送り込んでるう、いいなあ♥」

どぴゅふんっつ、びゅぱぱっつ♥ びゅちぶぴいっつ♥

——と意志に反して漏れ弾ける、四度目の射精がもたらす脳がぐずぐずに溶けるような暴力快感の熱。

「あっ……今度は私が吸い取る番♥ ちゅぷつ、んふうっ……♥ ごくつ、こくんっ……♥」

おぞましい二つの快樂がシンクロし、シルヴァリアは身を焼くような屈辱と羞恥と無力感……そしてこれまでの常識が崩壊していく目眩にも似た転落の感覚に、ただ打ちのめされていた——。

* * *

「ふううっ……♥ つはあゝ、射精^だした、射精^だしたわあ……♥ ひさしぶりにキンタマ在庫汁が空っぽになりそうな勢いよお……んふーっふううーっ♥」

ぬっぽお……んっ♥

すっかり充血したシルヴァリアのメス肉ビラから、さまざまな混合汁でマールブル模様に

汚れた半勃ち巨根がずろろっ……と抜け出た。

むりゆりゅっ……んぼぽっ♡ ぶりゆりゅんっっ……♡

続いて、ほとんどゲル状の塊になった白濁ゼリーが、だらしなく開いた割れ目からこぼれ落ち、女怪人たちが慌ててそれを舐め取り始める。

「ああんっ、勿体^{もったい}なあい♡ れろっ、ぺろぺろおっ……♡」

「オブ様の偉大なザーメン様が、こんなに……やっぱり、羨ましいです……んちゆるるううっ♡」

「こちらお前たち、ちよっくらいいならいいケドしつかりバイブか何かで栓をしておくのよ？ そいつには言った通り、私の子種を孕むかもしれない恐怖をみっちり叩き込んでやらないといけないんだから……♡」

今やシルヴァリアは肉触手に四肢を吊されたまま、ただ荒い息を吐くだけでびくりとも動かない。

よく見れば、本来無駄な脂肪なく引き締まっているはずの白いお腹が、ぽっこりと膨らむほどになっている……オブシディアに詰め込まれたフタナリ精液の洗礼だ。

しかもその尻には——何かの回数を示すとおぼしき五本一組の棒線が、左の尻たぶに十四本、右に十一本、いつの間にか書き殴られていた。

「はぁ……♥ それにしても、一度も抜かずに十四発もおドピュリ連射なさるなんて……相変わらずお強くて素敵です、本気のオブシディア様……♥」

「でもシルヴァリア様もすごいですよお♥いくら改造キンタマがあっても十一回も連続で噴きまくっちゃうなんてなかなかできないですよお♥ 最後の方は結構、ガマンできてましたしい？」

「またも小馬鹿にしたような女怪人の言い草。」

だが当のシルヴァリアは、全身を弛緩させて肉触手に吊られ、無言で下を向いたまま……まさに息も絶え絶えといった有り様。

「さあて、とりあえず今日はこんな所かしらね。それじゃあシャワーでも浴びてくるわあ、アリアちゃんもちゃあんと休んでリフレッシュしときなさいよお……なにしろあんたのフタナリ調教は始まったばかりなんだものねえ、あっははははっ♥」

性臭に満ちた部屋の後始末を女怪人たちに任せ、嘲笑う声を残して消えるオブシディア。それを待っていたかのように……死んだように動かなかったシルヴァリアの頭が、かすかにぴくりと上を向いた。

（私は……私は決して、オブシディアなどには屈しない……!）

垂れ下がった黒髪の間からのぞく魔剣士の瞳は、死んではいなかった。

（奴は私を侮っている……！ その油断を、慢心を突いて必ず……逆転の契機を掴んでみせるッ！ スターティアの、優姫のためにも……ッ！）

体を汚しつくされた自分だからこそ、できることがあるはずだという覚悟。

オブシディアがもたらす白濁快楽に溺れつつも、シルヴァリアのプライドの芯はまだ折れていない――。

第17話 屈辱の種付け！ 亡国の美剣姫、女怪人逆レイプ！

「さて、シルヴァリア。今日はあなたに耳寄りな話を持って来たわ♥」
いつものように調教部屋に入って来たオブシディアが、悠然と魔乳を揺らしながらそう告げた。

両手足を肉触手に拘束されたシルヴァリアは、恨みと疑惑のこもった視線で顔をあげ、憎むべき陵辱者を睨みつける。

「耳寄りな……だと？ 何の冗談だ」

オブシディアの提案など、どうせろくなものではないに違いない。

当然のことながら警戒心を緩めない黒髪の魔剣士。

「ふふ、そうコワイ顔しないで。あなたは滅びたシルヴァラント王国の唯一の生き残りなのでしょう？ 言い換えると、王家の血筋はあなたが子を成さない限り絶えちゃうわけよねえ？」

「……何を言いたい？」

「ふふっ、『子』と聞いて暗い顔になったわね？ まあ、それはそうよねえ。まだ私の注

ぎ込んだものが命中しちゃってるかどうかはわからないけどお、今の状況が続けばどのみち遅かれ早かれそうなるってくらい想像つくものねえ？」

「くっ……！」

そうなのだ。

調教開始以来シルヴァリアの胎内は、オブシディアの極悪フタナリチンポによる度重なる生中出しによって白濁蹂躪し続けられている。

まだ、はつきり妊娠したと判明したわけではないが、このまま逆転のチャンスがなければいずれはそうなってしまうだろう。いや、すでに孕んでいてもおかしくないくらいだ。

そう、この憎んでも憎み足らない卑劣な女幹部の子を……！

それは想像するだけで背筋に怖気が走る屈辱と恐怖だった。それゆえに子供を成すという話題を耳にして、シルヴァリアが平静でいられるわけがない。

「あん、でも勘違いしないで♥ 今は、あなたがママになる話はしてないわ、そう、少なくとも今はね……でも、本来なら次代の王家の跡取りたる存在が、悪の女幹部に孕まされた赤ちゃんって展開は、あなたにとっては受け入れがたいでしょう？」

「と、当然だッ！ 誰がお前の子など孕んで嬉しいものか！」

「だ・か・らあ、そうじゃない方法で『世継ぎ』をキープさせてあげようって言ってるの。

だって、自分が妊娠しなくなつて、今のあなたは『別の方法』でも子供をつくることで
きちゃうでしょ？」

「別のだと……？ ま、まさか……っ!!」

ハッと、おぞましい事実に思い至るシルヴァリア。

女幹部の言う通り、今の自分にはそれが可能なのだ。淫らな改造を受けた今のカラダな
らば。

「そう、そのおチンポとキンタマの有効活用よ♥ 王家の血を守るなんて簡単なことじゃ
ない、適当な女にいくらでも子種をぶりゅぶりゅ注入しちやえばイイのよお♥ 王族のた
しなみってそういうモノでしょ？」

「なっ……!! ふ、ふざけるな！ そんな真似ができるわけがっ!!」

抗議の声などオブシディアは聞く耳持たない。

彼女が黒レザーに覆われた指をパチリと鳴らすと、調教部屋奥の扉から三人の人影が出
現した。

「はぁい、シルヴァリアさま元気い？」

「くすくす……今日もいっぱいイヤらしいこと、しましうね♥」
「お、お前たちは……っ！」

そのうち二人までには見覚えがある。

耳や尻尾といったネコ科動物の特徴を持つ女怪人と、蛇のように長い舌と青白い肌を備えた女怪人だ。チンポを生やされたその日に彼女たちから刻まれた屈辱は忘れようにも忘れられない。

「あん、そんな睨まないでくださいよお♥ あんなにドスケベえっちをたっぷり楽しんだ仲じゃないですかあ♥」

「そうそう、それに今日の主役は私たちじゃなくてこのコなのですから……♥」

二人の女怪人の真ん中から、初めて見る三人目が進み出る。

それは全身がうっすらとピンク色を帯びているほかは、これといった特徴を持たない奇妙な女怪人だった。

拘束され動けないシルヴァリアにそっと近付くと、そのかすかにひんやりした手が白銀の魔剣士の頬に触れた。

「く、私に触れるなッ！ 何をするつもりだっ!？」

「うふふ、説明してあげましょうか？ そいつは私お気に入りのお怪人の一人ですねえ……ちよつと面白い能力を持っているのよ」

いぶかしむシルヴァリアの前で、謎の怪人に変化が発生した。

体型が、肌の色が、髪型が、そして顔が。

みるみるうちに、CGモーフイングめいて『変身』していくではないか。

「これは、変身能力……!!」

「そうよお、特殊なスライム怪人♥ しかもそいつの変身はトクベツでね？ 触れた相手の記憶をスキャンして、よく知る人間にそっくりな姿に化けることができるのよ……ほら♥」

「よく知る、だと？ ……なっ!!」

さすがのシルヴァリアも、驚きの声を漏らした。

『変身』が完了し、目の前に立っていたのは……あのスターティアの正体、星ヶ丘優姫その人だったのだ。

にっこり笑う人懐っこく愛らしい顔。ふんわり柔らかそうな栗色のセミロング。どういう原理か、聖碩女学院の制服まで再現されている。

「久しぶりだね、アリアさん？ あたしだよ、優姫」

「お、お前は……っ」

声や喋り方まで瓜二つ。本人に話しかけられたと錯覚するほどだ。

もつとも、本物なら今の状況を見てそんな反応は決してしないだろうが。

これは何のつもりだ……と、悪趣味な余興に怒りの声をあげようとしたシルヴァリアの機先を制して、ニセの優姫が行動を起こした。

「じゃあアリアさん、じつとしてね。よいしょっ……と」

「ちよっ、何をしているの、ゆ……あなたっ!？」

危うくニセモノであることを忘れて名前を呼びかけ、慌てて訂正する黒髪の魔剣士。

優姫に化けた怪人は、仰向けに拘束されたシルヴァリアの体の上に制服のまま、さも当然のようにまたがったのだ。

「何って、オブシディア様の言った通りですよお♥ 頭にぶいですねえ♥」

「うふふっ……シルヴァリア様には今から、そのニセ優姫ちゃんと『シて』もらうんですよ♥」

いつの間にか両サイドに位置し、シルヴァリアの太ももをぐぐっ……と左右に押し開きながら、残りの女怪人二人がにんまりと笑う。

そして、両耳にそつと唇を寄せてステレオで囁いた。

「そう……子作り♥ 生ハメ交尾♥」

「ドスケベ孕ませセックスをね♥」

「な!? なんだと……っ!？」

優姫の顔とカラダを持つ変身怪人が、可愛らしいチェック模様の制服プリーツスカートを手でつまみあげ、その奥にあるモノを見せつけた。

コピー元と唯一違ってフタナリチンポとキンタマは生えておらず、無毛の丘の下でうつすら濡れ光るぴっちり閉じた清楚な割れ目が、呼吸するようにふるふる息づいている。

「や、やめろっ!! わ、私はそんなこと絶対につ……!!」

「あらあ、したくないって？　じゃあなんであなたのおチンポは、恥知らずにどんどんボツキしちゃってるのかしらあ？♥」

オブシディアが愉快そうに指差した先。

今にも腰を下ろそうと待ち構えるノーパンのニセJKマンコの真下では、先日生やされた男子中学生サイズの包茎ペニスが、みるみる血流を集めて反り返りつつあった。

ごまかしのようなない生理反応……これからすることに誇り高き女剣士の体が反応し、欲情してしまっている証だ。

「こ、これはっ!?　ウソ、どうしてっ……と、止まれっ、止まってえ!」

「あはははっ、イヤなら萎えさせりゃいいだけのことじゃない♥　ほらほらあ、ボツキさせたままだとニセモノ優姫ちゃんの女怪人マンコに挿入^{はい}っちゃうわよお……♥」

悲痛な声をあげ抵抗するも、触手拘束された体は腰の位置をずらすことすらままならな

い。

ビン♥ ビビンッ♥ と、意志とは裏腹に精一杯ガチ勃ちし天を衝くフタナリスケベペニスの切っ先は、先端からとろとろと透明な先走りを漏らしつつ、ゆっくり降りてくるニセ優姫の処女穴をまっすぐロックオンしていた。

「あははっ♥ シルヴァリア様のおチンチンさんったら、はやく童貞捨てたくていっしょーけんめー背伸びしてるぅ♥ かわいぃ♥」

「くすくす……必死で可愛らしいですね……♥ そんなに慌てなくたって、お友達のおマスコさんは逃げませんよ？」

左右の女怪人たちが好き勝手に屈辱を煽る。しかもそれだけではない。

大切な友人にして無二の好敵手の姿を模倣したニセモノは、まったく区別がつかないほどそっくりの声色で——だが決して本物が口にしないセリフを繰り出し、シルヴァリアの理性をガリガリ削りにかかってくるのだ。

「大丈夫だよ、アリアさん。あたし、アリアさんが相手ならイヤじゃないから……ね？」

「そ、その声でそんなセリフを言うなああ!? やめっ……やめろっ、んあああああああ!!!」

にゅぷん♥ と、みずみずしい肉ビラによってふるふる震える童貞亀頭が捉えられた。

全身に汗を浮かべて抗う女剣士の抵抗もまるで無力、そしてついに……！

にゅぶぽっ……♡ ずにゆるるううう……んっ♡♡

「んっんお♡ んおおっっ、おふうううっつ!!??♡♡」

「あっは♡ はふ、食べちゃったあ♡ アリアさんのお、どーてーおちんちん♡」

とぷんっ……と深い水に沈み込むような錯覚が、シルヴァリアの全身をかつてない快美と共に貫いた。

文字通り、柔らかな肉壁に『食われる』絶望感めいた没入快楽。

現役JKナマ肉マンコの感触を、熱さを、みずみずしさを……余すところなくコピーした邪悪な女怪人生殖器が、クールな魔剣士の童貞チンチンをぬっぽり♡とくわえ込んでしまったのだ。

「ひっひぐっっ!!?♡♡ おっ♡ おっ♡おおおっっ♡♡ なっなんだこれはあああっっ!!?♡♡ おふッッんあふうううっつ!!?♡♡」

今までに感じたことのない圧倒的チンポ快感に、背筋をのけぞらせ獣じみた情けないアヘリ声をあげるシルヴァリア。

それはまるで柔らかい肉のヤスリで剥き出しの快楽神経を削られるような、未体験の暴力的喜悦だった。

「童貞卒業おめでとうと言っておくわ、シルヴァリア♥ あら、でも思ったより頑張るじやない？ あんたのよわよわ早漏チンチンのことだから、てっきり入れた衝撃でドピュっちやうかと思ってたわあ」

意外そうに片眉をあげて嘲笑うオブシディア。

女幹部の言葉通り、シルヴァリアは射精をかうじて耐えていた。

菌を食いしばり、全身に玉の汗を浮かせ、ふー♥ ふー♥ と今にもトロけそうな鼻息を漏らしつつ、それでもギリギリのところで精液の噴射を踏みとどまっていた。

それは今や大切な存在になりつつある友、スターティアこと優姫と同じ顔を持つ女体を、自身の白濁液で汚すわけにはいかないという最後の意地であり、外道女幹部の望む痴態など晒すものかというプライドのなせる技だった。

「あはっ、おしゃぶり特訓したかいがありましたねー、シルヴァリアさま♥ えらいえらいっ♥ おチンポがまんできてえらいでちゅねー♥」

「ふふっ……生まれたての子鹿みたいに両足プルプル震えちゃって可愛いですね♥ すぐにでも『お友達』のマンコ奥めがけてくっさいザーメンぶち込みたいはずなのに……♥」

耳に唇を寄せて嘲る二人の女怪人に反論する余裕など、あるはずもなかった。

少しでも気を抜けば、バイオ改造で生やされた巨キンタマの中で暴れ狂う白濁オタマジ

ヤクシ群の奔流^{ほんりゅう}はチンポを昇^{のぼ}って殺到し、決壊した鈴口から下品な音をたてて爆噴^{はくぷん}されてしまうだろう。

「んふふっ、言うまでもないと思うけどその『優姫ちゃん』の子宮は孕む準備万全の無防備タマゴを抱えた超ド級危険日マンコよ♥　そしてあんたが今、でっぴりキンタマに満載してるネバドロ濃^のゆうい白濁ミルクもお、卵子めがけて撃ち込まれたが最後100%メスを妊娠させる凶悪孕ませ兵器……♥　ぶちまけた瞬間、絶対確実にあんたはパパになっちゃうの♥　大切なお友達と同じカオとカラダをした女の子をママにしちゃうのよお♥」

「あひっんひいひい♥　いつ嫌だあああつつつ!!♥　んあああぐっ♥　んほおおつつ、んおおおつ……♥　そつつそんなのイヤあああああつつつ!!♥　だっ射精^だしたくないいいいつつつつ!!?♥♥」

「あんっ♥　暴れると余計におちんちんこすれてすぐ出ちゃうよ、アリアさん?♥　あたしはもちろん、それでもいいんだけどお♥」

優姫の姿と声色を持つ女怪人は、なすすべないシルヴァリアをうつとりと、どこか母性すら感じさせる優しい瞳で見下ろす。

手加減しているのか腰こそ振らないが、童貞を失った魔剣士チンチンを柔肉ヒダでしつとり^{しつ}にゆっぽりとくわえ込み、ひくひくと微細な振動で内壁を波打たせて静かに追い込ん

でいくのだ。

「そうそう、いいことを教えてあげるわシルヴァリア。スターティアの中に注入したバイオナノマシンによってあいつの体内構造はスキャン済み……その情報がそのコにも反映されてるわ。これがどういう意味かわかるかしら？」

「つまりい、今シルヴァリアさまがヌツポリ生ハメハメしちゃってるニセ優姫ちゃんのおマンコはあ、ホンモノと分子一つぶんの違いもなく同じ作りをしてるんですよお♡」

「なっ、なあああつつつ!!!?♡♡」

「そう、深さから狭さから、肉壁のウネリ具合、ヒダのつき方ひとつひとつまで……♡
正真正銘、星ヶ丘優姫ちゃんのオマンコの味をシルヴァリアさまは初物食いしてるんです♡」

「この私ですらまだ味わっていないのだから光栄に思いなさいよお?♡ あははははつつ!!」

告げられた残酷で甘美な真実。

その情報は単なる肉体的快楽だけにとどまらず、高貴な女剣士の精神を毒のように、麻薬のようにジワジワ侵蝕する。

成り行きのこととはいえ、スターティアと淫らな行為を重ねたことで彼女の胸に灯り始

めた暗い欲望の火——優姫という少女に対する情欲。

それはチンポというオスの器官を生やされたことも手伝って、どんなに目をそむけようともシルヴァリアの中で日に日に少しずつ肥大化していた。

そう、あのかけがえのない少女を……めちゃくちやにしたい、そしてされたいという、深層に秘めた淫らな願望。

普段の彼女なら、想像しただけで自分を決して許せなくなるような、心の奥底に押し込めた欲望だった。

（い、今私のアレがつ、おチンチンがつ……ゆ、優姫の大切な所を……ホンモノの優姫と同じおマンコをおっ……っ、貫いて味わってしまったというのっ……!!♡）

オブシディアによる陵辱調教で疲弊した精神に、まるで砂糖水のようにじわじわ染み込んでくる甘美な禁断の実感。

それは今も絶えず肉棒を責め苛む挿入快感と一体になって、誇り高き魔剣士の鉄の意志をぐずぐずに溶かそうと溢れてくる。

何もかも忘れて、このキモチいい肉穴を味わってしまえと。

チンポとキンタマから流れ込んでくる本能のままに、目の前の女体を貪り孕ませてしまえと——！

「あっ♥ シルヴァリアさまの目が、とろお〜んってしてきましたよお♥」

「ふふっ……よく頑張りましたけど、いよいよ陥落一步手前ってところですね……♥」

「……っっ!!」

小馬鹿にするような女怪人たちの声。それが、ギリギリの狭間で溶けそうな意識を現実
に引き戻した。

故郷を滅ぼしたシャドーマテリアルへの怒りを、オブシディアへの憎悪を、そして本物
の優姫への思いを糧に、脳にかかるピンク色のもやを必死で振り払う。

血が出そうなほどに唇を噛み締め、だらしくふやけそうになる表情をキッと伶俐なそ
れに作り替えるシルヴァリア。

「なめっ……る、なああ……っっ♥♥ ふーっ、んふううーっっ♥♥ わっ♥ わたし、
はっ……お前のっ♥ お、思い通りにはああ……っ、にやらないい……ッッ!!♥」

「あはっ!! いいわいいわあ……半分トロけかけてるとはいえ、まだ抵抗するつもりの生
意気な顔を見せてくれるなんて、やっぱり最高の獲物よおあなた♥」

期待以上の光景にゾクゾクと頬を上気させ、口の端を歪めてサディスティックな愉悦に
酔う女幹部。

むしろそうでなくては面白くないとばかりに、女怪人二体に指を鳴らして合図を送る。

「ふふっ♡　じゃあオブ様の許可が出ましたからあ、私たちも『お手伝い』しちゃいますね……♡」

「せっかくかつこいいこと言ったんだから頑張ってくださいねっ、シルヴァリアさまっ♡」
「な……!?　きつ貴様ら、今度は何をっ……んおおおおおおおっつっ!!!♡♡♡」
にゆるっぽんっ……ぬぼるんっ♡♡

なんと、みっちりと騎乗位で繋がったシルヴァリアとニセ優姫の背後に回った猫型怪人と蛇型怪人は、その結合部でぶらんぶらん揺れる二つの巨キンタマに狙いを定め……イヤらしく大口を開けて口内にくわえ込んだのだ。

「あひいいいっんびいいい……っつっつ!!!♡♡♡　たっ玉あああああ!!!♡♡♡」
♡　玉が両方おおおおお!!??♡♡♡

「あらあらあ、白銀の魔剣士さまともあろうお方がそんな弱点を二つも露出させておくものだから捕まっちゃったじゃない♡　さあ覚悟なさいな、私がねっとり仕込みまくったドスケベ壘丸マッサージの始まりよお……!♡」

にゆるるるるるるんッッ♡♡　るろろろおおおん……っ♡♡
るっふるっぷ♡　ころろっ♡　ころるんっ♡　くりゅんくりゅんっ♡♡
左タマをぱっくり丸ごとくわえ込んだ猫娘怪人は、狭い口内でリズムカルに獲物を転が

り回しつつ、舌に並んだシリコンのような突起でランダムなラブ刺激を加える。

右タマをにゅつぶしと覆った蛇娘怪人のひんやりした口内粘膜は、ぐみぐみと全体を押すように愛撫しながら、長く伸びた舌を根元からませキュキュツと甘く搾ってくる。

チンポ以上に敏感な器官を、痛みを感じる寸前の甘くせつない刺激で可愛がり、ひつきりなしに左右別々の容赦ない人外快楽を送り込んでくるのだからたまったものではない。

しかも彼女のタマタマは、オブシディアの鬼畜なバイオ改造によってあらゆる刺激をチンポ愛撫そのものに匹敵する快感に変換するようにされているのだ。

「ひぎつつつつんぎいいい~~~~ツツツ!!??♥♥♥ たつタマイやあああああああ!!!♥♥♥

♥♥♥ そつそれ以上しゃぶらないでえええつつ!!♥♥♥ すつ吸うなあああつつつ、んほお
おおお~~~~~~~~うううぶううツツツ!!??♥♥♥♥♥」

「あはあつ♥♥♥ アリアさんのおちんちん、びんっびんに反り返ってさつきまでよりガチガチに硬くなつてつ、あたしの膣内^{なか}でびくびく震えて暴れてるう♥♥♥」

「ふふっ、女怪人どもの下品ダブル玉転がしは気持ちいいでしょお？ 私も射精^だし疲れたらいつもそうやってエロエロマッサージさせて、ぎゅんぎゅん精液大量生産してメスどもを孕ませてるわあ♥♥♥ ほおらほらあ、ねぶられたキンタマの中で物凄いスピードで精子が作られてつてるのがわかるでしょう？♥♥♥」

まさにオブシディアの言う通りだった。

とくっ♥ とくん……とくとくんっ♥ ずくん、ずくんっ♥ と、齒痒いほどのダ

ブル玉しゃぶりによって精子は元気いっぱいフル稼働し、あとからあとから湧き出すド濃厚スperlマヨーグルトがはち切れんばかりに肉サオの中を暴れ回る。

すぐにでもめいっぱいブチまけ、目の前で無防備に待っている卵子を妊娠させるという種の本能を満たしたいのになぜ噴射の許可をくれないのか——と、精子の一匹一匹自身がシルヴァリアに猛抗議しているかのようだ。

「じゃあ……これ以上おちんちんガマンさせるのかわいそうだし、そろそろ気持ちいいお射精しようか、アリアさん♥」

「んおっおっおおおおうううう!!!♥♥♥ だっダメだめだめ駄目ええええ!!!♥♥♥ やめて優姫っつ、そっそれだけはっつ♥♥♥ それだけはああああ!!??♥♥♥」

今から何をされるかに思い至り、思わず、ニセモノ相手に優姫の名で呼んでしまったことを恥じる余裕もあればこそ。

本物そっくりの天真爛漫な笑みでにこっ♥ と笑うと、制服姿の星ヶ丘優姫本人にしか見えない女怪人は、ゆっくりと腰を真上に引き上げ……!!

「だぁゝめ♥ とどめの逆レイプ生搾りピストン、いっくよぉ♥」

…ぬぶんっっ!!♥♥♥ ぬつぶぬっぼ♥ ぬぼっつぬぼぼおおっっ!!♥♥♥
にゅばんっつにゅばぽんっっ!!♥♥♥ ずにゅばっつぬぼぬぼぬぼぬぼっつにゅぐぐん
っっ!!♥♥♥

「おおおおおんおほおおおおおおおおっっっ!!??♥♥♥♥♥ ひっ引っこ抜かれりゅう
うううううううううあ!!!♥♥♥ チンポがチンポがチンポが根こそぎ持っつかれりゅう
ううううううッッッ!!??♥♥♥♥♥ おっひひひひいああひひひひい!!??♥♥♥♥♥」

本物の優姫には決して不可能な、オブシディアにがつつり仕込まれたドスケベな腰使い。
みっぢりと貼り付かんばかりに粘膜密着した肉ヒダが、童貞卒業したての貧弱ペニスの
表皮をこそげとり磨きあげるかのような勢いで猛烈に上下し、愛液の海に溺れさせていく。
どちらがどちらを犯しているのかは明白だった。

この場においては弱者であるシルヴァリアが、本来なら一蹴できる変身能力だけが取り
柄の格下ザコ怪人に、一方的に精液を搾り取られにかかっているのだ。

「だめだめだめだめえええええッッッ!!!♥♥♥ やめてっつやめて止めて腰動かさないでそ
れ以上おおおおおおおお!!??♥♥♥ おねッお願いだからああああ!!♥♥♥ しやつ射精す
るの駄目なのおおおっつ、はッッ孕ませるなんてそれだけはああああ!!!♥♥♥♥♥」

「だからいいって♥ あたしがいいって言うてるんだから気にせず出して、射精してよお

アリアさんっ♡ そりゃあたしニセモノだけど、もうどーでもいいでしょそんなこと♡
射精のことしか考えられないでしょ♡ JKマンコも子宮も本物とそっくりおんなじだよっ♡
♡ 浮気ザーメンいっっぱいどぴゅどぴゅドピュりんこ♡ して無責任孕ませっ♡
し・ちゃ・お・う・よお♡」

今や、ニセの優姫は本物らしく見せる努力をかなぐり捨てていた。

可愛らしい唇からピンクの舌をだらしなくのぞかせ、快楽と嗜虐心にトロけたスケベな表情で腰をぐりんぐりん回す、ビッチめいた仕草を本物と同じ姿でやるのだからそのギャップたるや凄まじい。制服をしっかり着たままの着衣結合セックスなもの、余計に卑猥だ。「れろれろ、んっぷ……ぷはああんっ♡ あはっ、お友達にも逆レイプで一方的に負けちゃって、ほんっつと情けないったらありやしないですねえ、シルヴァリアさまったら♡
それでも七冥塊いちの魔剣士なんですかあ？♡」

「私たちにも、もちろんオブ様にも連戦連敗負けっぱなし……♡ 一体何になら勝てるんですかザコヴァリアさまのクソザコおちんちんさんは♡ そのへんの小学生にも負けそうですね♡」

もちろん、嘲り笑いながらのキンタママッサージに没頭する女怪人コンビも負けてはいない。

発情肉便器顔でだらしなく鼻の下を伸ばしたひよつとこディープスロートが、一切の手加減なく第二第三のチンポと化したキンタマに襲い掛かる。

ぬぼるつつ、ぬぼるんつつ♡♡♡にゆるぶるんつつ!!♡♡ぬるっぽにゆぼるんつつ!!



と、肥大化キンタマたちを溶かして飲み込んでしまいかねない勢いで愛情こめて舐めしやぶり、ねぶり転がし、吸い上げては、情け容赦なく精液増産スピードにニトロブーストをかけてゆく。

「くくっ……さあ、いよいよの決定的瞬間をじつくりと間近で見届けてやるわぁ♡好きでもないメスを、大切なお友達そっくりの顔をした悪の怪人を屈辱お漏らし射精でガッツリ孕ませる甘美な絶望の顔を♡この私にたっぷりと見せてご覧なさいなつつ、シルヴァリアああ!!♡♡」

「いやつつイヤああああああああ!!!♡♡♡嫌なのに嫌なものにもっ漏れっ漏れるううううつつ!!??♡♡あぁあぁあぁ~~~~~ツツツ!!??♡♡おぉおぉおぉおぉおおおおツツほおおおおおおおおおおおつつ!!??♡♡♡」

孕ませる。女のはずの自分が、今日会ったばかりの別の女に種付けする。

それはある意味、自分がオブシディアによって孕まされるかもしれないという恐怖以上

の絶望だった。

自身一人のことなら背負いましょう。いざとなれば命すら断つ覚悟もある。

だが……他人の胎に宿った、無責任に宿してしまった罪の重さを、どうやって受け止めればいいというのだろうか？

その、未知の恐怖に抗わんとする必死の抵抗が、今や秒読みに入ったシルヴァリアの射精欲求を寸前の所で遅らせていた……のだが。

「あはっ……あのですね、ほんとに気にしなくていいですよシルヴァリアさま♥ わたし、シルヴァリアさまのことをお慕いしてましたから……孕めるの、嬉しいんです♥」
「えっ……」

それはニセの優姫としてではなく、オブシディアに命じられての言葉でもなく、初めてスライム型女怪人自身として放たれたセリフだった。

「だから、ほんとうにいいですよ♥ 遠慮なくわたしに種付けを喰らわせてくださいませ♥ 七冥塊きつての剣客にして、シルヴァラント王家の高貴なお種を……お情けをとつぷりと、この卑しい子宮でよければ恵んでくださいませ♥ オブシディア様に命令されただけではなく、わたしが心から望んでいることなのですからっ♥ だからどうか、どうかあぁっっ♥♥♥」

うっとり熱に浮かされた二セの優姫の表情は、心底から中出しを、妊娠を望んでいた。演技ではなく、本心から……だったら、別に構わないのではないか？

我慢なんかせずに、いや、自分は十分我慢したのだし……これ以上無益な意地を張らずとも、射精してしまってもいいのでは？

どうせ悪いのはそこにいるオブシディアだ、自分ではない……！

思わぬ方向からの不意打ちによって思考にぽっかりできた隙に、そんな卑しい欲望が滑り込む。

それが、トドメとなった。

「あっ……あああ……っ!! ♡♡♡ ちよっ、止まっ ♡♡♡ ダメっ止まってええええっっ!!?
♡♡♡ できないっ ♡♡♡ できないガマンできないいいいっっ!!? ♡♡♡ んおおお噴くっ
♡♡♡ 噴くうう ♡♡♡ 噴き出すううううっっ!!? ♡♡♡ んほおおあああああ
あああああっっ!!?? ♡♡♡」

んびゅるるるうううっっ……ごぶどぶうううっっ!!! ♡♡♡

ぶびゅるんっっ、どくっぴゅ ♡♡♡ びゅぐるるるんっっ!! ♡♡♡

どぐっ ♡♡♡ どくくっ ♡♡♡ びゅちちっ、どぽぽおお……っ ♡♡♡ ぐぶどぶうううっ

っ!! ♡♡♡



「んああああ来た♥ 来た♥ きた♥ きてますううつつ!!♥♥ シルヴァリアさまのお種があ♥ 高貴な濃ゆい孕ませミルクが♥♥ わたしを妊娠させるためにどつくんどつくん流れ込んで来てますううつつ!!♥♥ しつ子宮が熱いいいつつ♥♥ はっ孕むううつつ♥ これ絶対孕んでます♥ しっ幸せえええ〜〜つつ!!♥♥ 孕みイクうううつつつ!!!♥♥♥」

とてつもなく罪深い、だがそれゆえに甘美すぎる大量放出の快美感。

ガマンにガマンを重ねた濃厚熟成種付けゲル塊が、ぶりゆりゆりうううつつ♥ と尿道を駆け上ってひっきりなしに変身怪人の子宮口へ、その奥の無防備な卵子めがけて連続射出されてゆく。

取り返しのつかないことをしてしまっているという破滅の絶望と表裏一体の、既存の何もかもを壊し解放されるかのような禁断の快楽。

どくん♥ どくん♥ と断続的に繰り返す射精感のたびにそれは、息も絶え絶えの女剣士の肢体を大波に浮かぶ小舟のように翻弄した。

「あはっ、キンタマの中身がキュッ♥ って上がって次々に元気なぷりぷり子種え♥ ニセ優姫ちゃんめがけてぎゅんぎゅん送り込んでますよおシルヴァリアさま♥」

「ご立派です、ちゃんと妊娠させられましたねえ……♥ これで真正銘童貞卒業ですよ、

おめでとうございます♥ まあ、相変わらずのザコ弱い早漏お子様おチンチンですけど♥」シルヴァリアの初種付けを祝いつつ、しっかりとヌポヌポと玉しゃぶりは継続する女怪人コンビ。

その刺激がさらに精液生産工場を加速させ、まるで小便をお漏らしするようにびゅーびゅー♥ と長く続く、脳みそがザーメンに変わって流れ出すような噴射感が、誇り高き魔剣士の理性をバチバチと焼き苛む。

「あゝあらあら、とうとうマジ射精しちゃったわねえ♥ なっさけなくヒリ出しちゃったわねえ♥ シルヴァラント王家の姫君ともあろうものがまあ、どうでもいいザコ怪人に、友達とのセモノなんかを相手に♥ ロイヤルスペルマ流し込んでママにしちゃったわねえ♥ あゝあ、スターティアがかわいそう♥」

「んおおお……おおおおおお………♡♡♡ 止まっ♡ 止まらにや♡♡ 精液止まらないばいばい♡♡♡ おほ♡ おほおお♡ ご、ごめんにやさしい優姫い……!!♡」

「くくくつ、どう？ たまらないでしょうシルヴァリア♥ 女の子宮を、くつさい凶悪チンポ汁に詰め込んだ自分の生搾り遺伝子で蹂躪する征服支配の快感は……♥ 一度味わったらやみつきになってやめられなくなるわよお、この私みたいにねえ♥」

女剣士の形のいい隠れ巨乳をむにゅむにゅと我が物顔に揉みしだきながら、汗で濡れた黒髪を貼り付かせ息も絶え絶えの顔に囁く悪の女幹部。

目の前の卑猥な光景にあてられたのか、黒レザーからハミ出した野太い包茎チンポもすっかりフル勃起だ。

「ああん、あなたの気持ちよさそうな孕ませっぷり見てたらもよおしてきたわぁ♥ さあ
お前たち二人、せっかくだからアシストプレイのご褒美をくれてやるとしましょうか……
尻を突き出して並びなさいな、この私が偉大なる孕ませザーメンを直々にブチ込んでやる
わぁっ♥」

「ほっ本当ですかオブ様あっ!!♥ 生意気なこのカラダを乱暴に犯しちゃってください
っ♥♥ よっ喜んで孕みましゅうつっ♥♥」

「こっ光荣ですうつ♥ すぐに排卵しますのでっ、こんな私めの卵子でよければお種を仕
込んでくださいませっ、ヤリ捨て大歓迎ですっっ♥♥」

嬉しさのあまり一瞬でドロドロに濡れた改造ドスケベマンコを我先にと突き出し、オブ
シディアに尻振りダンスで媚びる猫娘怪人と蛇娘怪人。

先走りのよだれを垂らしたフタナリ魔巨根がそこめがけ近付いて行く光景を横目に、シ
ルヴァリアの疲弊した意識は闇の中へと沈んで行った……。

なおこの日、シルヴァリアのブザマな痴態に興奮して孕ませ欲を刺激されたオブシディアは女怪人二人だけでなく、誘拐した人間二人（JCジュニアアイドルと24歳人妻）にもしこたま絶対妊娠精液を流し込み、見事全員に種付けして大いに満足した。

人間たちは記憶を消されたが、人妻はちょうど夫とそろそろ子作りを始めようとしているタイミングだったため、将来自分たちの子供と思い込んだ悪の落とし子を産み育てることになるだろう……。

第18話 チンポに負けゆく理性！ 淫獣ヒロイン、昼休みの教室内で

恥知らずオナホセンズリ！

昼休み、私立聖碩女学園の教室。机をくつつけ、めいめいにお弁当を広げて談笑する女生徒たちの、微笑ましくも華やかな光景がそこかしこで見られる。

「おっ、涼子ちゃんの今日のメインディッシュはお魚かぁ。いつもーらい！ ……うわ美味しい!? なになにこれっ!?」

「ただの西京焼きだよ。てかお前なく、人のおかず奪ってくならせめて自分のも供出しろ、しずく」

可愛らしいツインテールを振りつつ、いつものように友達の手作り弁当を味見するしずく。

おかずを取られてぼやく涼子は、一見ギャル風の金髪メッシュや着崩した制服姿にそぐわず、家庭的な方面も大得意なのだ。

「うう……腕前の差がありすぎて、差し出すのがはばかれるよう」

「こんなもんレシピ通りに作りゃ誰でもできるぞ。教えてやるって前から言ってるのにサ

ボるからだ」

「ふふ、牧野さん。おかずが足りないのでしたらわたくしのをどうぞ」

黒髪姫カットも麗しく、にっこり笑った天音が差し出したのは漆塗りの重箱だ。

「さ、三段重ね……！ もはやお弁当ってレベルじゃないよね、天音ちゃんのそれ」

「こういうところにお嬢様ランクの違いを感じるよな。なあ、優姫？」

「えっ……う、うん！」

隣に座る友人のセリフに、一拍遅れてビクツとしつつ答える優姫。

彼女だけは早々に食事を終え、椅子に座って何やらぼうつと宙に視線をさまよわせていた。

「どしたん、優姫ちゃん？ 最近なんか上の空が多いってゆーか」

「もしかしてアレか？ 城鐘アリアがガッコー休んでるのが気になるか？ 最近、仲いいもんな」

「あ……そ、そうね、体調でも崩したのかなって……ちよつと心配かな」

まさか、城鐘アリアこと、白銀のシルヴァリアが卑劣なオブシディアの手中に落ち、今まさにフタナリチンポ陵辱調教の真っ最中とは、優姫は知る由もない。

シャドーマテリアル要塞が存在する異空間は、地球とは時間の流れが違う。

調教部屋では何日も時間が経過しているが、こちらではまだ丸一日程度にすぎないのだ。

それに元々、アリアとシルヴァリアとしての二重生活を送り、さらにその中で組織に反逆すべく独自に動いてもいた彼女は、多忙さゆえに今までも学校を休みがちだったため、この程度では不審に思われないのも無理はなかった。

「ご心配でしたら、今度城鐘さんのお宅に様子見のお見舞いにでも参りましょうか？　一緒に参りますわ」

「お見舞い……う、うん、そうだね。それがいい、かも——」

友人の優しい提案にも、どこか上の空な二つ返事を返す優姫。

……一体誰が気付けるだろう？

友達のを半ば遠くに聞きながら、彼女が今まさに……食欲とは別の欲望を満たしている真っ最中だとは。

（おっ……おほおおおお……う……は、はふうう……っ……は、入っちゃうう

う……♡♡♡ み、みんなとお話しながらなの……ッ♡♡♡）

にゆるにゆりとヌメつく感触を味わい、適度な弾力に押し返されながら、スカートの中で優姫のフタナリチンポが濡れたオナホールの中へと飲み込まれてゆく。

だがもちろん、すぐ近くにいるはずの友人たちは誰一人、その事実には気付かない。

認識歪曲機能に加え、悪の組織のテクノロジーによって、オブシディアに与えられた特製オナホはこちらの世界からは見えない異空間に収納されている。

つまりその中に挿入されている優姫のデカチンポ自体も、今はまるで存在ごとなくなつたかのように視覚的には消えているのだ。

これらの機能さえあれば、どんな場所、どれだけ人がいようと、着衣のまま手すら使わずに、気付かれることなく快適なオナホオナニを敢行できるというわけだ。

オブシディアから渡されたオナホは至れり尽くせり、すっかりセンズリ中毒になりつつある優姫にとって理性のタガを外すに十分な、夢のアイテムといえた。

（んおおおっ……すっすっすいよおお♡♡ や、やっぱりみんなのすぐ近くでオナホにおチンポハメするのすっごいい♡♡ へ、部屋とかトイレですると気持ちよさがぜんぜんちがうう……♡♡ はほおおっ、んおおおっ♡♡）

ぬっ♡ ぬぽ♡ にゅぽっ♡ にゅっぽ♡ にゅぽぬこんっ♡

ぬっぽ♡ ぬぬるっ♡ ぬぽぽっ♡ にゅぬぬっ♡ ぬっこぬこっ♡♡

自動的に分泌されるローションをまといつつ、異空間の中でひとりでオナホが前後し、ビキバキにフル勃起したチンポを優しくシゴく。

体内のバイオナノマシンを媒介に発せられた優姫の思念波を受信し、思い通りのペースや強さ、圧迫感で手を使わずとも動かせるのだ。すっぱ抜けたり、液体が外に漏れる心配も無用である。

（あっああ〜♥んおあああつつ、んはああああ〜♥こっこれ便利すぎいいい♥センズリすつごいはかどるよおおつつ♥ひいいいっせっ精子がキンタマに溜まるううつ♥♥ニユコニユコするの気持ちよすぎて玉がパンパンになっちゃうう〜〜つつ!?♥♥）

涼子の胸元のシャツからチラチラ見え隠れする、小麦色の柔らかそうな巨乳。

清楚なプリーツスカートにむっちり輪郭を露わにする、天音の安産型のお尻。

しずくが無自覚に振りまく、年頃の女子高生特有のフローラルなみずみずしい体臭。

友達の無防備な一挙手一投足すべてが、大迫力の生オカズと化して迫ってくるようだ。

それらをいくらガン見し、ボディタッチし、至近距離でにおいを嗅ごうと、認識歪曲機能によって不自然な行為とは気付かれないのだ。

（ごめっ♥ごめんねみんなああつつ♥エッチなオカズにしちゃってごめんねえつつ♥でも、でもこうしてエッチなことをすればチャンスが♥裕美香を取り戻すチャンスがやってくるんだものっ…♥だ、だから仕方ないのおっ♥みんなのためでもあ

るから許してっつ♡ い、今の間だけだからあぁっ♡)

先日、オブシディアから提案された淫らなゲーム。

それはドスケベなチンポ遊びをすればするほど、優姫の興奮度に比例した『ポイント』が加算され、一定以上に達すれば人質の親友を奪還する戦いのチャンスが与えられる……というものだった。

それが悪辣な女幹部によって鼻先にぶら下げられたエサであり、変態行為の『大義名分』として優姫の羞恥心とモラルを崩壊させるための策略だと、心のどこかで気付いてはいても他に道はなかった。

そして、フタナリチンポが与えてくれる禁断の快楽にドハマリしつつある優姫にとっては、まさにうってつけの『言い訳』として機能してしまっていたのだ。

(でもでも仕方ないよおっつ♡ アリアさんが学校来ないんだもん♡ せっかくいっぱいエッチなお願い聞いてもらおうと思ったのにいつ♡♡ だからこうやって一人でするしかないんだもんっ♡♡ オナホでするしかないんだよおっつ♡♡ あたしだけじゃなくてアリアさんも悪いのお……っ♡♡)

あろうことか、この場にはいないシルヴァリアに責任を転嫁する卑しさ。

ほんの少し前まで、天真爛漫で正義感溢れる少女だったとは思えないチンポ快楽優先の

浅ましい思考が、今の星ヶ丘優姫の中で少しずつ育ってしまっている。

そしてシルヴァリアⅡエリアに成り行きとはいえ淫らな行為を受け入れてもらい、フタナリ射精欲望を満たしまくってしまった優姫は、今やクラスメートを人知れずセンズリオカズにすることにもほとんど躊躇すら持てなくなっていた。

いや……それだけではない。

「りよ、涼子ちゃん……っ♥」

「んお？　なんだあ、どーした優姫？　いきなりくつついて来るとか、しずくみたいだな」
食事を終え、椅子の背にもたれかかって立つ涼子の背に、いきなり優姫は両腕を回して抱きつくと、スカートに包まれた腰同士を密着させた。

その行為は『親しい女の子によくあるレベルのスキンシップ』と補正されて認識される。
だが、実際は違う。

そう、優姫は大切な友達の子に、バックで腰を叩き付け犯すような姿勢をとっているのだ。

ましてや今、優姫のチンポがハマっているオナホールは御陵涼子その人の女性器を寸分違わぬ精度でコピーしたもの。

ほとんど本当にハマているかのような錯覚に襲われ、優姫の全身にゾクゾクと罪悪感混

じりの凄まじい快感が駆け巡る。

（あああああつつ♡♡♡ うそっ嘘嘘っ♡♡♡ しっしちやったああつつ♡♡♡ りよっ涼子にいいつつ♡♡♡ 涼子に後ろからチンポハメえええつつ♡♡♡ あたしのチンポが挿入はいしちゃってるうううううつつ!!!♡♡♡ んおおおおおおおおおつつ♡♡♡）

「ぶー。涼子ちゃんひどいなー、あたしそんなお子様じゃないもん」

「はいはい、そーいうことにしといてやるよ」

「うふふ。あんまりお二人の仲がおよろしいので、星ヶ丘さんがちよっぴりヤキモチを妬いてしまわれたのでは？」

和氣あいあいと話す友人三人の楽しげな様子。

その日常的光景すら、守るべき大切な笑顔すら、今の優姫にとってはドスケベな人前センズリ行為とのギャップでさらなるチンポ快楽を貪るためのスパイスに墮落している。

「へー、そうなのか優姫？ おっとでもダメだぜー、アタシはスターティア様ひとすじだもんな！ ファンクラブ1ヶタナンバー会員は伊達じゃないぜっ！」

「はふあ♡♡♡ んおお♡♡♡ あふっ♡♡♡ う……うんっそうだねっ涼子お♡♡♡ おっ♡♡♡ おっおっ♡♡♡」

よだれすら垂らしかけたトロけ顔（もちろんそれも認識歪曲によって補正されるため、

バレる心配はない）になりつつ、ヘコヘコと可憐な腰を大切な友人のJKヒップに叩き付けるフタナリヒロイン……いや、もはやそんな行為をする者をヒロインと呼んでいいのかどうか。

（んおおお♥ きつキンタマがイライラしてきたよう♥ も、もつとエッチなセンズリしちゃいたい♥…♥ ま、また『アレ』しちゃうつ♥♥ う…『浮気遊び』今日もしちやうの止められない♥…♥）

思念によつて全自動オナホに指示を出し、異空間の中で一瞬にして『入れ替える』。

優姫が密か『浮気遊び』と呼んでいるそれは、さらにドスケベ極まりないセンズリ方法だ。

そう、友達の誰かに密着して疑似セックスを味わいながら、別の友達のマンコ型取りオナホに瞬間チェンジし、そちにチンポを突っ込むのだ。

今回涼子のそれから入れ替えたのは、牧野しずくの型取りオナホ。

（きつ、キツううう…ツツ!!♥ こっこれ感触ぜんぜんさっきまでと違うよおおお!!♥♥ ひいいつおひいいつつ♥♥ りよっ涼子のお尻に腰叩き付けながらあぁっつ♥♥ しずくのキツキツおまんこオナホでおチンポゴシゴシすりゆの死ぬほどチンポにクるうううううツツツ!!♥♥）

いくらバレてないとはいえ遠慮も羞恥心も快楽の前に吹き飛び、何も気付かない涼子の腰をがっしりとバックからホールドしつつ腰をパンパン叩き付ける変態センズリヒロイン。しかもそのチンポがハマっている柔肉ホールは彼女ではなく、隣で無邪気に紙パッキンユースをすすっているロリ顔クラスメートのもの……いや誰のものであっても恥ずべき行為に大差はないのだが、そんなことを冷静に考える理性すらもはや優姫にはない。

（あつあたし最低だよおつつ♡♡♡ こつこんな最悪なオナニーしちゃってるのにいつ、友達相手にこんなあああつつ♡ でもでもチンポがチンポがバキバキにいいつ、んおお、おおお~~~~~そッ反り返るうううつ♡♡♡ キンタマでぎゅんぎゅん白いオタマジャクシ作りまくっちゃううう♡♡♡）

いよいよスケベ極まるフィニッシュに近付き、さらにエスカレートする腰使い。

今や、優姫はダダ漏れになった欲望のまま『腰のひと振りごとにオナホを交換する』というドスケベセンズリマニアの極みともいえる恥知らずな発想を実行していた。

これではもはや浮気遊びならぬ乱交センズリ遊びだ。

（んほおほおおおあツツ♡♡♡ あ、天音のにゆるにゆるふわふわマンコがああ♡♡♡ しずくのキツキツちっちゃマンコがあつつ、涼子のぷりぷり肉厚マンコがああああ♡♡♡ あ、あたしのおチンポを交代でヌポヌポもぐもぐううツツ♡♡♡ ぜ、ぜんぶあたしのモノ

おおおつつ♡♡ このマンコぜんぶううツツツ!!♡♡)

すっかりチンポに支配された今の彼女の脳内では、スターティアに変身し、大切な友人たちを組み敷き無理矢理レイプする鬼畜妄想が鮮明に再生されていた。

まるで憎むべきオブシディアのような欲望まみれのチンポ中心思考。

しかし、そんなことを考えてしまっているという罪悪感や羞恥すらも、でっぷり太った醜いキンタマの中で凄まじい快感に変換されてしまうかのようだ。

(んおおおおでつつ出る♡♡ もうすぐ出るっ♡♡ でつでりゅううっ♡♡ 教室でツみんなの前でつすぐ近くでまたおチンポザーメン噴射しちゃうツツ、どぴゅどぴゅつてキメちゃうううつつ♡♡ ひっひいいいっつダメなのにガマンできないいいいゝゝゝゝゝツツッ!!?♡♡)

感極まった優姫は、何も知らない涼子に背中から覆い被さりつつ、震える左右の手で天音とせずくの頭と肩をそれぞれ抱き寄せるようにして自分に寄せる。

甘く混じり合い鼻孔をくすぐるJKお嬢様たちの髪や体のニオイは、もはやオヤジと化したチンポつき美少女の脳にはたまらないラストスパート用オカズとして機能するのだ。

「ん、どしたの優姫ちゃん？」

「あらあら、今日はちよっぴり寂しがりやささんなんですか？ うふふ」

「そっそうつつ♡♡ そうなののおおつつ♡♡ み、みんなでいっしょにイきたいのおおツ♡♡ も、もうすぐっ、もうすぐだからあああつつっ!!?♡♡」
「なんだなんだ、ずいぶん嬉しそうだな〜？」

最近のオナニーではすっかり人前での射精行為に抵抗がなくなってしまった彼女だが、中でも優姫が一番お気に入りなのは、女の子と密着しながらのザーメン発射だ。

あつたかな体温、鼻孔をくすぐるシャンプーのいいにおい、髪の毛のサラサラ感、すべてで柔らかいきめ細かな若い肌。

それら現役JKの性的魅力のすべてを全身で味わいながらオス快楽の絶頂に達し、オナホ奥めがけて白濁液を思うさま爆噴する……！

もはやオナニーというより疑似セックス。

その恥知らず極まるドスケベ下品教室内センズリのクライマックスが、尿道内でみなぎる濃厚ザーメンのうねりと共についやってきた。

（おおおおんおおおおおおツツ!!♡♡♡ 出る出る出る出すおチンポがドピユるううつつ!!?♡♡ ほおおおっんおおおみんなの前でイクイクイクイクチンポ発射しちゃううううううつつ!!♡♡♡ ほおおおんおっひっひいいいい〜〜〜つつつ!!??♡♡♡）

ごぶぷっ……どびゆるるるるるるッッ!!!♡♡♡

ぶびゆるるんっっ、んびゆるるるぶびゆりゆりぶびゅんッッ!!!♡♡♡

んどぷっっ♡♡♡ ぶびぴッッ♡♡♡ んぶっぴ♡♡♡ びゆるろっっ♡♡♡

どぶ♡♡♡ ぶびゆ♡♡♡ びゆば♡♡♡ ぶっぽ♡♡♡ どぶどふんぶばああっっっ♡♡♡

(ほおおおおッッッ出てるッッッ出てる出てる出てる出まくってるよおおお~~~~ッ

ッッ!!!♡♡♡ みんなのオナホでみんなに射精いいいいッッッ♡♡♡ ちッチンポ

があっ♡♡♡ チンポがっっ♡♡♡ チンポがチンポがチンポバカになるうううっっっ!!!♡♡♡

♡♡♡)

どっふん♡♡♡ どぶふんっっ♡♡♡ どぶふんふんっっ♡♡♡ ……と、嬉しそうに美少女

遺伝子満載の大量白濁スペルマをあとからあとから吐き出しまくる、優姫の肉棒ポンプ。

ここで彼女はオナホに付加された機能の一つ『バキューム吸引機能』を起動させた。

すると熟練の風俗嬢のエロテクのごとく、オナホは凄まじいバキュームと蠕動を見せ、

太いザーメンを吐き出しまくるチンポに甘美な追い打ちをかける。

(すっ♡♡♡ 吸われるうう!!!♡♡♡ み、みんなのエロおマンコにおチンポ先ちゅーちゅー

吸われりゅうううっっ♡♡♡ ひいいい~~~~っっこれッこれキクキクうううっっっ

♡♡♡ 精液引っぱり出されるみたいにないつまでもドピュリ続けられちゃう~~~~ッッ

ッ
!!?
♥♥♥

そしてさらに発射中にはもちろん、チンポのひとつコキ、ひと噴射ごとにリアル型取りオナホを交換する命令を出すことも忘れない。

こうすることで天音、涼子、しずくと、三者三様のオナホに吸い取られるというこれ以外の方法では味わえない変態快楽が背筋をビリビリ突き抜けるのだ。

教室オナホセンズリマスターの優姫にぬかりはない。

(みッ、みんなに平等に発射発射 ああ♥♥♥ 仲よし中出し いつつ♥♥♥ しずくにッ♥
天音につつ♥♥♥ りよっ涼子に出るうううツツ♥♥♥ みんなのおマンコめがけてあたしのザーメンドピュリまくるうううつつ♥♥♥ あへっあへええええつつ♥♥♥ こ、これ
やつば最高おおおおお……つつ♥♥♥)

涼子のむっちりしつつハリのあるお尻に、ぱんぱんっ♥♥♥ ズパンツツ♥♥♥ と制服スカートの越しに派手に腰を叩き付けながら、一秒一瞬でもこのキモチいい噴射タイムが続くようキンタマに気合を入れる優姫。

もはや美少女台無し、欲望にまみれた顔は、あへ♥♥♥ はへっ♥♥♥ とよだれの筋を制服にこぼしつつ、友達オナホでキメまくる絶頂射精快楽に酔いしれている。

「うふふ、でもなんだか先ほどよりお元気が出たみたいでよかったですわね、星ヶ丘さん」

「うんうん、あたしたちの仲よし友情パワーってやつだね天音ちゃん、涼子ちゃんっ！」
「おめー何もしてねーだろ、しずく？ ま、アタシもひと安心だけどね」

彼女たちには、射精後の恍惚の表情が認識歪曲によって笑顔に変換されて見えている。
まさか大切な友人が、その清楚な制服スカートの中……正確には異空間の中で赤黒いフタナリ太肉棒から、イカくっさい濃厚タンパク質を大量にヒリ出してご満悦とは、夢にも思わないだろう。

「う、うん……っ ♥ あ、あたしがキモチよくいられるのはあ……みんなのおかげ、だよ
お……っ ♥ ♥」

——むろんこのあと、射精後の賢者タイムで正気に戻り『自分はなんてことを』『またやってしまった』と白々しく罪悪感に浸る優姫だったが。

次の授業中にはまた、ぎゅんぎゅん高速稼働して元気な精子を大量生産するバイオ改造キンタマによってむくむくと巨サオは再び反り返り、あっさり欲望の虜となるのである。

現に午後の休み時間にはあっさり、優姫は友達というほど親しくない距離感の相手を取っ替え引っ替えオカズにし、密着してにおいを嗅ぎながらザーメン大量噴出をキメるというもう一つのお気に入りセンズリをたっぷり楽しんだ。

それはまるで、行きずりの相手と尻軽なセックス遊びを繰り返すかのような背徳的快楽

の極みを少女にもたらし、友人相手とはまた違うたまらないチンポ発射感を与えてくれるのだ。

なお学年やクラスを問わず、ここ数日ですでに二十

人以上の学院関係者が優姫のド変態オナニーの『餌食』になっている。

ある時はバレエ部に所属する長身の先輩の、健康的に引き締まった太ももの間に手を挟みながら、挟まれているのがチンポだという妄想でカクカク腰を振ってしこたま射精した。

ある時は『可愛くて優しくて人気の先輩』という自分の評判を利用し、つい何ヶ月か前までJCだった後輩の一年生たちの輪に混ざって、ミルクのように甘い幼な香を嗅ぎながら体型の近いしずくオナホで発射しまくった。

ある時は赴任したばかりの、若くて美人のふわふわおっとり系女教師の作業を手伝うという名目で近付き、床にしゃがんだ彼女の頭を掴んで目の前で腰を振り、イラマチオさせている妄想で達してオナホ奥に濃厚ザーメンを流し込んだ。

救いがあるとすれば、あくまでチンポをシゴく道具はみずからの体の一部、あるいはオナホ。

直接チンポを他人の体や服に触れさせてはいないし、射精するのも異空間の中めがけてだ。

そしてオブシディア特製オナホ第三の機能……任意の場所に射精した白濁液を転移させる空間転移機能だけは、勢いで選んでしまったとはいえまだ一度も使っていない。

一応……ほんの一応だが、まだすべてが『オナニーでおさまる範囲』の淫行といえる。少なくとも、優姫自身はそう考えていた。

その意味では優姫は、正義のヒロインとしての最後の一线をкаろうじて守っている……のかもしれない。

もつとも、逆に『だからまだセーフ』という言い訳で良心をごまかすことで、認識歪曲を悪用した欲望まみれの屋外 senzuri の追求にもはや躊躇いのない彼女なのだが……。

果たしてその最後の砦が、スーパーヒロインとしてののけなしのプライドが、いつ決壊し粉微塵に砕けてしまうのか……それは誰にもわからない。

第19話 玩弄の魔剣士！

駄肉オナホに改造されゆく気高き戦乙女の肉体！

ぬっぷ♡ にゅこ♡ ぬっこ♡

にゅっ♡ ぬたんっ♡ にゅたたんっ♡♡

ぬっとん♡ ぬとっ♡ にゅっぱ♡ ぬばたっ♡ にゅとたぷんっ♡♡♡

「おほおお~~~~おお♡♡ さ、最高おお~~~~っ♡♡ ぷりっぷりたっぷたぷの若いパイ肉がああ♡♡ わ、私のサオにからみつくう~~~~っ♡♡」

天蓋つきの豪華なベッドの上、はしたなく両足をおっぴろげて横たわりながら、心底嬉しそうな嬌声を漏らすオブシディア。

その足下の床には、命じられるがまま品のないガニ股蹲踞そんきよの姿勢となったシルヴァリア。悪逆のフタナリ女幹部は、灼熱の鉄を固めたように反り返り天を突くガチ勃起包茎肉棒を、ローションをまぶしたシルヴァリアのまるやかな柔乳房でにゅっぷり包ませ、シゴキ磨かせているのだ。

「く……ッ！ オブシディアッ……この、欲望まみれのゲスめ……ッ！」

「はいはい好きただけ罵倒していいわよお、その方がチンポにイライラきてもっとズられ心地がよくなっちゃうから♥」

凛々しい銀の甲冑に身を包んだまま、キツと頭上の陵辱者を切れ長の瞳で睨む黒髪の美剣士。胸アーマー部分だけを外されたたわわな隠れ巨乳で、憎むべき仇敵相手に屈辱のアイズリ奉仕を強要されているのだ。

美の神が造形したような純白の乳房は今、ローションでぬらぬらとイヤらしくヌメ光り、その谷間でリズムカルに出し入れされる巨根もテラテラと赤黒く輝いている。

（くっ、こ、こいつ……！ しかも、私の胸をつ……こ、こんな恥知らずな姿にさせるなんて……っ）

シルヴァリアの両乳首には下品な蛍光ピンクのハート型ニップレスが貼り付けられ、豊かな乳房の上部には左右それぞれ『流麗』『優美』と太い毛筆で落書きされていた。

あえて淫語ではなく、白銀の魔剣士本来の美麗な有り様を表現する言葉。

それはブザマな現状とのギャップで彼女のプライドを徹底的に辱め、肉玩具に貶めるためのスケベなデコレーションだ。

「んふふう♥ せっかくガキのくせにこんなデカ乳ぶら下げてるんだからあ、ちゃあんとガッツリみっちり乳コキさせとかないとねえ♥ おっほ♥ こ、これが王家の谷間の感触

うう……♡ あ~~~~包まれたチンポが幸せええ~~~~♡♡

ベッド脇のテーブルには、日本国内で市販されているローションの容器があり、シヤド―マテリアル要塞の幹部私室の中で奇妙な異物感を放っていた。

あえて一般人が使う下賤なセックス用品を用いることで、余計に元王女たるシルヴァリアに今自分がしていることのあさましさ、情けなさを実感させるという女幹部のゲスな手口だ。

「ああ、イヤなら無理にやらなくてもいいのよお？ けどその時はあ、またあなたのチンチンで女怪人マンコにいっっぱい種付け子作りさせちゃうけどお？♡」

「ッ!? ま、待てっ！ そ、それは――それだけはっ……！」

慌てて、乳肉谷間に極悪チンポを挟んだまま否定の声をあげるシルヴァリア。

（くッ……あ、あんなことをまたさせられるくらいなら、こうして体を弄ばれた方がいくらかマシ……そう思うしか……!）

星ヶ丘優姫に化したスライム型女怪人への強制逆レイプ種付け、そのおぞましくも甘美な記憶は、シルヴァリアの脳裏に悪夢めいて焼き付いている。

女の自分が、他のメスをフタナリ男根で孕ませる……一度の過ちでも眠れないほどに気がでないのに、それを繰り返させられるなど冗談ではなかった。

「んふふ、じゃあほらほらあ♥ もっと愛情こめておっぱいセックスして貰わないとねえ？ 私のおチンポ可愛がつてちようだあい♥」

「だ、誰が……！ ふざけるなオブシディア、嫌悪こそすれ、お前のようなクズにこの私が愛情などひと欠片でも抱くとでも!!」

「あらヒドおい。まあいいわ、それならあなたの愛しのスターティアにしてる時を思い出して、ラブラブいちゃいちゃ愛情ズリしてよねえ♥」

「なっ——む、無関係なスターティアの名前を出すな!!」

その名を耳にした途端、シルヴァリアの頬がさらに赤く染まり、焦りの色が浮かんた。

二人の淫らな関係をオブシディアに揶揄されると、七冥塊最強の魔剣士としての仮面は剥がれかけ、年相応の少女の素顔をのぞかせてしまうのだ。

かつて星ヶ丘優姫が同様の行為……欲望まみれのパイズリを彼女に要求していた事実からは、あえて必死に目をそらしていた。

「く……言う通りにすればいいのだろう……っ！」

動揺する姿をごまかすかのように、嫌悪感を噛み殺しつつ、みずからの乳肉に両サイドから手のひらを添えるシルヴァリア。

ぎゅむむうう……っ♥♥ と女幹部への憎しみを込めて、そのまま左右から平手で押し

潰さんばかりにヤワ肉圧搾する。

ハートニプレスでデコられたたわわな巨乳房が歪み、エロ落書きの文字が潰れてグンニユリ変形した。

「んお、おお……っ♡ ああんっ、にゅ、乳圧があ♡ おふ♡ はへえ♡ そ、そうよお
イイ感じよおお♡ きめ細かなお肌のあったかい密着感がチンポを押し包んでえ……っ♡
た、たまんなああいつ♡」

ぶびっ♡ と、デカ亀頭の発射口から押し出された濃厚カウパーが嬉しそうに飛び出て、
流れるような美黒髪に飛び散り汚した。

それをさらに数十倍煮詰めたような白濁孕ませ汁で、幾度も胎内にナマ中出しを喰らわ
されたことを思うと、怒りと屈辱で頭が沸騰しそうになる。

（くうう……このまま、いつそ本当にこの醜い肉の棒を挟み潰してやれればどんなにいい
か……！！ でも、それでは私の宿願を果たすことはできないっ……い、今は耐えなくては
……っ！）

シルヴァリアがひた隠しにしている自身の正体……シャドーマテリアルを内部から壊滅
させることを目指す亡国の王家の生き残りであるという秘密を握られている以上、今はこ
の邪悪な女幹部に服従してみせるしかない。

復讐のために鍛え上げた体で、憎むべき仇の一人にまるで風俗嬢のようなドスケベ奉仕をするという屈辱にも、甘んじて耐えるほかないのだ。

「いいわぁいいわぁ♥ そ、そのまま私の包茎チンポの余り皮をあんたの乳オナホでムキムキしてちょうだぁい♥ はやくはやく♥ 乳マンコでズリ剥いてええ〜♥♥」
「うう……！ な、なんでわざわざこんなにたるんだ皮を余らせて……っ!？」

あえてそのような形状にバイオ改造する女幹部の嗜好を理解できぬまま、命令の通りに乳圧をかけたままの両乳房を下腹部めがけ下ろしてゆく。

ぬずずうう……っ♥♥ ぬろんっ♥

「お、おふう♥ だ、だってこの皮がヌリユんってムける瞬間の感触、解放感っ♥ さ、最高じゃなぁい？♥ クセになっちゃうわぁ……っ♥」

妖艶な肢体をのけぞらせながら、嫌悪にうめくシルヴァリアの乳谷間で完全解放されたダークルビー色の亀頭を嬉しげにテカらせるオブシディア。

みゆききっ♥ とはち切れんばかりに主張するズル剥け先端部に、むわぁぁ……♥

と鼻をつくオス臭を鼻先でふんぷんと放たれ、黒髪の少女魔剣士の眉根が不快げに歪む。

「それに、皮がある方がスケベプレイの幅が広いのよお？♥ たとえばぁ、長い舌を持つ怪人娘三人くらいにチロチロこちよこちよ皮の中をおしゃぶり掃除させるのとかぁ、すっ

「ごい濃いのが射精^でちやうのよねえ♥ ああ、今度あんたの粗チンにも味わわせてあげましょつか？」

「ふ、ふざけるな！ だ……誰がそんなことを望むとでもっ！」

ニヤつくオブシディアを慌てて睨み返しながら、ムリヤリ教え込まれた通り、みずから両乳房に手を添えて嫌々動かすシルヴァリア。巨乳肉が上下ひと往復、ひとコキするたびに、

ビキ♥ ビキキッ……♥ ビキバキィッ♥♥

と、肉棒の先端で四方に広げる肉カサのエラはよりエグく張り出し、エッジ部分を硬くパンパンに尖らせてゆく。まるで、それがマンコに打ち込まれた際に内壁をどれほど容赦なくこそげとり、女をむせび泣かせるかという肉の威力を誇っているかのようだ。

（あらためて見ると、なんて凶悪で禍々しいフォルムなの……長さも太さも、ゆ……優姫のよりも……って、わ、私は何を考えてるのよ!?)

無意識に、オブシディアのチンポスペックをスターティアのそれと比較している自分に気付き、赤面した視線をチンポ先からそらすと、慌ててその恥ずべき思考を振り払う。

密着した乳肌越しに伝わる赤銅色のビンビン太幹の熱気が、目の前に突きつけられた鈴口からプクッと膨らみ漏れたカウパーが放つオスのフェロモン臭が、一瞬でも油断したが

最後、シルヴァリアの意思を淫らな沼へとムリヤリ引きずり下ろしてしまいそうだ。

（くうう……っ、接している部分の肌が熱くてヌルヌルして気色悪い……っ！　でも今は何も考えず、無心に、この下品でくだらない行為を終わらせることだけを目指すのよ……！）

にゅっぷ♡　にゅぷんっっ♡

ぬとっ♡　ぬとっぷ♡　ぬりゅんっっ♡

るっぷ♡　ぬぷぷっ♡　にゅとっ♡　にゅととんっっ♡♡

軽く閉じた目を伏せ、弄ばれた自分の肢体をただの道具として考えるようにつとめながら、一心不乱に乳マンコホールを動かして巨根をズリあげ、ズリ下げるパイ肉サオ磨き運動。

反逆の日のため、心ならずもシャドーマテリアルの幹部として戦っている時にいつもそうしているように、心を殺して体を動かす。

いくら犯され穢されようとも折れない、白銀の魔剣士のプライドがそこにあった。

「んお、おおうっ♡　んふふ、なかなか上手な乳コキっぷりじゃないのシルヴァリア♡

んは、はふっ……♡　くうう……っ♡　き、キンタマがウズいてきたわぁ♡　元王女様のロイヤルパイズリで、油断すると濃ゆ……いのヌかれちゃいそうよおおっ♡」

「ふん……！ なら、さつさと汚らしいその中身をブチ撒けて、この馬鹿げた行為を終わらせてくれることを期待するだけだ……っ！」

つとめて冷たい声で、せめてとばかりに皮肉を飛ばすシルヴァリア。

だが、怒張チンポを若い柔肉であやされながらそのさまを見下ろすオブシディアは、彼女の気高い矜持^{きやうじ}を辱め貶めるべく、さらなる外道なアイデアを思いついていたのだ。

「んふふっ、じゃあせっかくだからその前に♡ フィニッシュにふさわしい、もったもおーっとスケベな『ヌキ道具』をあんたにプレゼントしてあげないとねえ……♡」

「っ!? 一体何を……んあうッッ!!」

ビクン、とシルヴァリアの流麗な肢体が、電撃に打たれたように跳ねた。

その体内で、細胞ひとつひとつが犯されかき回されるような、醜怪^{しゅうかい}な嫌悪感が暴れ回る。

「こ、これはああ……ッ!? な、なにをしたっ、オブシディア貴様あッ!!」

「大したことじゃないわよお♡ この前ザーメンに乗せてあんたの体にたあぷり注入したバイオナノマシンの作用でえ、ちよっぴり愉快的『形態変化』が肉体に発生してるだあけ♡」

「な……!!」

おぞましい事実をあつさり嬉しそうに告げる外道女幹部。

やがて、文字通りの『変異』が、はつきりと形をなした。

「う……ウソ、私の胸がつ……一回り大きくなつて……っ!!」

ずっしり……♡ どぷんっ♡

という擬音すら聞こえそうなほどに、シルヴァリアの両乳房サイズが一回り、肥大化していたのである。

さすがにオブシディアの100cmをゆうに超える魔爆乳には及ばないが、それでも明確に『成長』が見てとれるレベルの変化だ。

左右の乳肌にそれぞれ書かれた『流麗』『優美』の落書きがうつすら引き延ばされ、文字が崩れていることからそれがわかる。

「元のままでも十分巨乳だったけどお、うふふ、私ってば重力に負けて垂れる寸前のだらしない駄肉乳が好きなの♡ やっぱパイズリホールとして使うにはこれくらいあった方が気持ちよく又けるわよねえ♡」

女幹部の言う通り、これまでシルヴァリアの巨乳はいくら年齢にそぐわぬ豊かなサイズとはいえ、ギリギリのラインで上品な調和を保っていた。

しかし今、肉体改造によって一回り肥えさせられた乳房肉は、淫らさと女体の貪欲さをフェロモンとしてぷんぷん放つ『下品』なデカ乳と呼べるラインを踏み越えてしまったの

だ。

これでは制服の下に押し込めていても、あらゆる男が舐めるような欲情の視線を送り『ムリヤリ孕ませたいエロい体』として即認識されてしまうだろう。

それは無駄なく引き締まった肢体を誇っていた最強の魔剣士にとって、もつとも屈辱をもたらしいびつな恥でしかない肉体改造だ。

「く、き……貴様あ！ この外道めっ、人の体をオモチャのようにッ……んあああ!!」
♡

燃えるような憎悪を込めての糾弾、だがその語尾は、突然の嬌声となってハネあがった。オブシディアがいきなり腰を動かし、挟まれたままの勃起チンポで乳房をぐりりっ♡と突き上げエグったのだ。

（な……なに、今の感触っ……ま、まるで、アレをされた時のような……っ!!）

そう、まるで女幹部の魔巨根をもつてして、膣内を思いつきりほじくられた時のような悪魔的快感。

白銀の魔剣士がこらえきれない媚声をあげたのは、生セックスそっくりの快楽があるうことか自分の乳房から全身に広げったためだ。

「くくくっ、ついでにあんたの乳の谷間の感度、マンコ並みにしっかり改造しといてあげ

たわあ♥

「な——なん、だとっ!? うあ、んひいいいつつ!?♥」

ぬぶんっ♥ と肉丘の中を滑ってテカテカ亀頭が乳マン内から飛び出すと同時に、シルヴァリアの形のいいあごが未知の快楽電流に思いつきりのけぞった。

「さああらためて再開しましょうかつ、私のチンポとあんたのだらしなく育ったエロ乳で、今までとは比べものにならないホンモノのスケベパイズリセックスをねえっ!♥」

まるでマンコ挿入時に尻を掴むような仕草で、重力に負け『だっぷり♥』と太ももの上に乗った肥大化乳肉をがっしりとホールドするオブシディア。

ぺろりと黒いルージュを舌なめずりし、これから味わう愉悦に興奮してハアハアと息を荒げている。

「ま、待てっ、やめっ……」

……にゅずんつつ!!♥♥

「んおおおおううつつつ!!!♥♥」

かはっ……と上体を反らせるシルヴァリアを襲ったのは、子宮口まで一気に貫かれたような錯覚。

もちろん、その一突きだけでは終わらない。

「ふんっ♡♡♡ ふんっつ！♡♡♡ ほらほらあぁっつ！！♡♡♡ ふんふんっつ！！♡♡♡」

ずんっつ♡♡♡ ずずんッッ♡♡♡ ずっぱんずぱんッッ！！♡♡♡

ぬっぷ♡♡♡ ぬばぷっつ♡♡♡ ぬとんっつぬとんッッ！！♡♡♡

「やッ♡♡♡ あっんあぁあッッ♡♡♡ あッひ♡♡♡ んおおおひイイッッ！！？♡♡♡ こっこんな

あぁッッ！！？♡♡♡ む、胸の谷間を犯されているだけでウソ、こんなことってえええっつ！！？

♡♡♡」

乱暴に掴まれて真ん中に寄せられた乳房がもう一つの性器へと変えられ、その狭間をズンズンと激しく行き来する灼熱チンポの猛威が、シルヴァリアの冷静な美貌をドロドロに崩してむせび泣かせる。

本来のマンコよりも頭部に近いぶん、まるで脳内の快楽神経に直接肉棒をブチ込まれ、蹂躪されるかのようにですらあった。

「ほおおっくく喰らいなさいっつ♡♡♡ 私の怒チンポで駄肉乳マンコをこねくり回してやるわぁあっつ！！♡♡♡ 凶悪感度パイズリファックでスケベ顔晒しちやいなさいアリアちゃんっ！！♡♡♡ おらッおらあッッ！！♡♡♡」

「ひぎっひぐうううッッ！！？♡♡♡ んおおおあうううッッッ！！？♡♡♡ イヤっ嫌あぁあっつ！！♡♡♡ こっこんなのイヤあぁあっつ！！？♡♡♡ おおおおおんほおおっくく」

くつつ!!?♥♥」

むっちりした太ももでシルヴァリアの胴体を締め付け、十本の指で乱暴に巨乳房を鷺掴みにしてグミグミとまるで餅でもコネるように弄ぶオブシディア。

指と指の間から無駄肉がハミ出てプリプリと踊り、ランダムに加わった圧力が深い肉の谷間に埋もれたチンポを搾って愉しませる。

「おほ♥ おおおつつ♥♥ くうツツくううくくくつつ♥♥ あはああくくくこれよこれこれ最つつ高おおくくくく!!♥♥ チンポをあやしてシゴき抜くしか使い道がないだらしなおっぱい♥♥ ぶら下げてるだけでも恥ずかしいスケベ肉う♥ クソ生意気なあんたのカラダ、醜いチンポとキンタマに続いてもおくと辱めてやれて感無量よおおくくくつつ♥♥」

「あうううツツこつ殺すツツ♥♥ こ、殺してやるツオブシディアああくくくつつ!!?♥♥ よくもつつよくもおおおつつ!!♥♥」

不本意な快楽に歪みトロけ、悔し涙すら流した美貌に黒髪を貼り付かせて、股間から陵辱者を見上げ睨もうとするシルヴァリアだった。

「……ひぎいいいツツ!!?♥♥ やつあつああツツ♥♥ んおおおツツあぐつひぐううつつ!!?♥♥ はひッひいいいツツ!!?♥♥」

抵抗を見せようとしても、ズンズンと響くパイズリピストンの凶悪快樂波によって集中を妨げられ、思考をバチバチと焼き焦がされてままならない。

そんな不様な醜態を見下ろすオブシディアのデカキンタマは、チンポを覆う柔肉快感とサディスティックな愉悦で今にもはち切れそうだ。

（くううくうッッ♥ そうそうこの顔よ、このお・カ・オ♥ 嬉しそうにアへってる顔射乞いフェイスにぶっ放すのもイイけどお、やっぱ私を憎み嫌ってる女の心底悔しそうな顔に無理強いぶっかけザーメンマーキング♥ こんなに楽しいドスケベフィニッシュつたらないわあっつ♥）

この邪悪な女幹部がもつとも好むフィニッシュはもちろんナマ中出し、絶対妊娠精子による凶悪種付けで美少女や美女を孕ませることだが、その次に好むのが顔射だ。

わざわざ精液の濃度やネバリ気、射出される際の勢いや収束率などを念入りに改造して、よりネットリとイヤらしい軌跡で犠牲者の顔という顔を蹂躪し汚し抜くように調整しているほど、オブシディアは顔面陵辱にご執心のこだわり派フェイスファッカーなのである。

なお、余談ではあるが彼女の端末には1000枚以上に及ぶ『顔面征服コレクション写真集』が保管され、日々お気に入りが増加されている。

そこに収録されているのは、彼女の性玩具たる女怪人たちや女戦闘員たちばかりではな

い。

頬に手を当てるポーズで直撃を喰らい、結婚指輪ごとドロドロにされた発情顔の若い人妻。

カラオケボックスを背景に、ピースサインで二人まとめてぶっかけられ笑顔の間に精液のアーチを引いている、頭の軽そうなギャルたち。

ランドセルにまで跳ねた大量精液に小顔を覆われ、何をされているのか理解できないといった表情で困惑している、育ちのよさそうな子。

ヒット曲のキメポーズで、ステージ衣装ごとギトギトのザーメン漬けにされている涙目の人気アイドル。

いずれも認識歪曲と記憶操作を駆使し、オブシディアが日々食い散らかしまくっている犠牲者たちだ。

胎内には孕ませ汁をぶち込み、顔はスpermabuffかけで体の内外を念入りにマーキングし、征服欲を満たす。それがこの極悪性豪女幹部のモットーであり、日課なのである。

だがそんなことは露知らず、改造されたマンコ乳を凶悪なストロークでズンズン犯され悲鳴じみたあえぎ声をあげさせられつつも、せめてもの抵抗とばかりに逆効果にすぎない睨み顔をキッと必死に作ろうとするシルヴァリア。

「わ、私は決してええつつ♡♡♡んおあううつつ♡♡♡お、お前のような卑劣なクズには屈しないいいつつ——いひイツツ!!!♡♡♡か、体をどれだけ弄ばれ変えられようともおおうつつ♡♡♡こ、心は折れなッ……ひいいいいつつツ!!♡♡♡」

「あ、ああんダメよおアリアちゃんったら♡♡♡そんなニラマレ顔向けられたらお姉さんもう、余計にぶちまけ欲がウズいてきちゃううつ♡♡♡き、キンタマに詰まった濃濁リキッドがドクドクにゆるにゆる暴れまくるううううつつ!!♡♡♡んおおおお♡♡♡ほおおおつつ……!!♡♡♡」

ぬっぽ♡♡♡ぬっとな♡♡♡ずっぶぬっぶ♡♡♡ぬとんつつにゆとんつつ♡♡♡にゅっぱん♡♡♡ぬぱんつつ♡♡♡たぱんつつ♡♡♡にゅぷんツにゅぷとぷんつつ♡♡♡いよいよ激しくなる乳ズリコキ運動の最中、ゴポゴポと沸き立つかのごとく、のたくり、蠢き、早く外に出せ、メスを汚させるとばかりにザーメンタンク内部で暴れ狂う、超濃縮大量精液。

それ自体が激しい快感として味わえるようセルフ改造されており（これはスターティアやシルヴァリアの改造キンタマにも施されている）改造乳房による下品パイズリで煮えたぎる肉棒快感と共に高め合って、女幹部をフィニッシュの予感が襲う。

「くうううううつつ♡♡♡う、裏スジに浮いたぶっとい盛り上がりがウネウネのたくつつて暴

れてるわああ♥♥ はち切れそうな肉幹の中で熟成された圧縮スペルマが、発射の出口を求めて暴れまくってる証拠よぉっ♥ んああゝゝゝっ!!♥♥ こ、これは絶対かなりの発射感、射精感が楽しめるわよぉ……っ♥ さあて、あなたにもちゃあんと最高の屈辱フィニッシュを用意してやらないとねえ……!♥」

極限までタメてタメての解放に向け肉棒にグッとガマンを込めつつ、オブシディアはさらなる『仕込み』に手を伸ばした。

激しい乳ズリピストンによって今にも剥がれそうに震える二つのハート形ニプレス、その両方をいきなりベリベリッと剥がしたのだ。

「んぎつつつ!!!♥♥ いぎいいつつ!!♥♥」

だしぬけに襲った、痛み混じりの快楽にのけぞるシルヴァリア。

だが、露わになった己の乳首……その『変化』を目の当たりにして絶句する。

「なあっ……!! こ、これはあああ……ッッ!!」

そう、乳房と同様に、乳首もまた以前よりも大きなサイズに肥大化していたのだ。

成人男性の親指第一関節より先と同等の長さを持ち、ビン♥ ビビンッ♥ と突っ張って勃起するはしたないエロ突起に変貌していたのである。

「ぷぷっ、だらしないわねえ♥ まるでちっちゃいおチンチンが二本生えてるみたい♥

元シルヴァラントのお姫様にして七冥塊きつての魔剣士サマが放り出すモノにしちゃ、ちよとおお〜つと下品な乳首ねえ〜？♥」

「き、貴様がこんなふうにしておいて何を勝手なことをっ……あ、あうう!!♥ な、何この感覚っ……!! と、突起がうずいて、あつ熱いっ……こ、これはまるでっ……!」

「そ♥ んふふ、まるでそう、おチンポみたいでしょう?♥」
女幹部の言う通りだった。

サイズアップされた両乳首をぞわぞわと襲う菌痒いようなせつなさは、改造フタナリチンチンで常を感じさせられているものと瓜二つ。

「ま、まさかああつつ!? まさかオブシディア貴様アッ……んひぎいいつつ!!?♥♥」
新たな暴力的快感が、困惑する女剣士に追い打ちをかけた。オブシディアがニヤつきながら、できたばかりの弱点突起をつねりあげたのだ。

同時に、その股間で粗末なチンチンが連動するかのようビクンっ♥ と勃起して跳ね上がり、薄いカウパーを撒き散らす。

「そうよお〜♥ あんたの長乳首、第二、第三のチンポと言えるほどに感度をガンあげしといてあげたわ♥ こうやってシゴくとお、まるでその粗チンをシコられてるような快感がしかも二倍になって襲うでしょお?♥ ほらほらあっ!!♥♥」

ルヴァリアの醜態に、いよいよご満悦のオブシディア。

ラストスパートの腰ピストンでズンズンにゆぽにゆぽと駄乳肉をエグり犯しつつ、同時に両乳首をシゴきあげる指技も抜かりない。

「ひぐつついぎツツ♥♥♥ やッ嫌つつんひいいつつ!!♥♥♥ あぐつつあふぐうううう
~~~~ツツツ!!!♥♥♥ おっオブシディアあああつつ!!♥♥♥ おおおんんんおおおツツ  
ひっひいひいツツツ!!!♥♥♥」

「んおおおほおおつつ♥♥♥ んああ~~~~つ乳首チンポでヨガらせながらの睨まれパイ  
ズリレイプ最つつ高おおお~~~~♥♥♥ か、かわいそうねえアリアちゃんったら♥♥♥ 復讐  
のために一生懸命鍛えて鍛えて強くなったその優美なボディ♥♥♥ でも私が無駄エロ肉に変  
えてズリコキ玩具にしちゃううつつ♥♥♥ ご、ごめんなさいねえ~~~~つつつ♥♥♥」

シルヴァリア、いやアリアルルシルヴァラント皇女の人生そのものを陵辱し、蹂躪し、  
快楽のために消費する外道極まりない肉体改造スケベセックス。

かつて自分を貶め、小物と侮蔑した生意気な少女、本来なら圧倒的に強く戦いではかな  
わぬ相手をそうやって支配しているという優越感にオブシディアは酔いしれ、フィニッシ  
ュ寸前のガチ勃起チンポをバキバキにおっ勃たせてアザが残りそうなほど猛烈に乳谷間を  
ズリまくる。



「おおおあうううッッッ!!?♥♥♥ こッこりよすううッッ♥♥♥ ぜったひ殺ひてやるううッッオブシディアアアアッッアッあッあひいいいいッッッ!!?♥♥♥」

「あッそう頑張ッてねええッッ♥♥♥ でもダメええ〜♥♥♥ ダメダメでしたあ〜〜ッッ♥♥♥ そんなカッコいいこと言ッても七冥塊いちの魔剣士様の末路はあ、私のチンポを楽しませるチョロい肉オモチャでした〜〜〜ああッッ♥♥♥ あ〜〜〜あんたのおっぱいマンコ最高よおお〜〜〜ッッ!!♥♥♥」

心の底からバカにした口調でケタケタと笑いつつ腰を振る外道女幹部めがけ、常人なら発狂してもおかしくないほどのおぞましい快楽の中、もし視線で人を殺せたなら確実に息の根を止めているほどの憎悪を向けるシルヴァリア。

チンポ並みの快楽器官と化した乳首をダブルでいたぶられ、マンコと化した巨乳房をハメ犯されているというのに、トリプル魔快楽の中でまだ敵意を失わないのは超人的な抵抗というほかない。

「くうううッッッ♥♥♥ ほ、ホントあんたッてば最高よおシルヴァリアあ♥♥♥ そうよそのカオ、そのおカオが欲しかったのおッッ!!♥♥♥ ギリギリのところを決して折れずに私を貶み、反抗し続ける気高い心ッッ!!♥♥♥ それこそが私の穢したい最ッッッ高のザーメン便器フェイスよおおおッッ!!♥♥♥」

ぱくうう……♡

と、鶏卵ほどもある亀頭の先端で鈴口が不気味に開いた。バイオ改造によって常人よりも大きくなった、ぶつといザーメン射出口だ。

そこからピュピュッ♡と断続的に飛び散り、シルヴァリアの頬や鼻先に付着して異臭をあげるカウパーは、いわば『照準用レーザー』である。

女幹部はその軌跡を参考に、さあどんな手順でこの小娘の顔を汚し抜いてやろうかと、極悪な大量顔射のドスケベプランを練っていたのだ。

そしていよいよ、待望の顔面陵辱パイヌキフィニッシュの瞬間はついにやってきた。

「おおおおおおおオオオッ♡♡♡ 噴く♡♡♡ おお噴く♡♡♡ さ、最大限に濃ゆくエグく濃度調整した顔射用黄ばみ鬼スペルマがあああッ♡♡♡ ひ、ヒリ出るウウウウ……ッ♡♡♡」

「な……ッ」

鷲掴みにした女幹部の十指で挟み潰され、最大限まで乳圧を高められた極楽パイコキ空間の中心で、ダラダラと大量の先走りを溢れさせながら不吉に震える亀頭の熱気にシルヴァリアが気付いた時には——もう遅い。

ドギョルルルルルウウウウ!!♡♡♡ とウネりをあげて尿道を駆け上り噴射口に殺到した

超高压縮ザーメン塊は、もはや女幹部自身にも止められぬ猛烈悪臭奔流となつて、高貴なる元王女のロイヤル顔面めがけてド下品スケベマーキングの体勢に入ってしまったのである。

「さあしつかり眼前で見てそして受け止めなさいっっ!!  
スターティアなんかより男らしく圧倒的に格好いい私の精液大爆噴をッッッ!!  
いずれこの世界を支配する覇者の偉大チンポ様による最強のフタナリザーメンシヨットをねええ  
おっ おっ おっ オッ ……ん おおおお おおおお おおッッッ!!!」

どピュウウウウツツ!!  
♡♡ んべちやあああつつつ!!!  
♡♡ 勢いよく射出された人差し指ほどもある太さのスペルマ一本筋が、シルヴァリアの美貌に影を落としてつつ前髪のアたりまで一直線に伸びブチ当たったかと思うと、そのまま重力に引かれて汗ばんだ顔面に『乗った』。

自慢のキンタマの中でパイズリ興奮による熟成を重ねグツグツ煮立ったそれは、もはや液や汁と呼べるほど生易しいものですらない。

まるでプリンを潰したような半固形じみた超濃度を誇り、ずっしり重い質量と鼻がひん曲がるほどの中年オヤジめいたオスホルモン臭とを備えた極悪ザーメンなのだ。

「おおおおッ  
ッひイイイ  
いはひッは  
へえええ  
ゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝ  
ッッッ  
!!?!  
!!?!  
♡♡♡



出る出る出る出る出ええるウウウ~~~~ツツツ!!!♥♥♥ 駄肉乳マンコパイズリで溜まりにタマったイライラザーメン最高の射精で噴きまくるううう~~~~

っ!!!♥♥♥ ほおおおおオオツツホおお~~~~おおツツツ!!!♥♥♥

びゆるるんビュルルウウツツツ!!!♥♥♥ べちやどびゆぱああツツツ!!!♥♥♥

ぽぷつつ♥♥♥ んどつぶ♥♥♥ どつぶん♥♥♥ どぷウウ~~~~ツツツ!!!♥♥♥

ぶぷツ♥♥♥ びゅーぱつつ♥♥♥ ぶぱつつ♥♥♥ んどびゆるるんつつつ!!!♥♥♥

「んやつつ、あぷアつつ!!! うあ、ああッ……やッ、くつ臭ッ……嫌ああああッツツ!!!」

「す、スターティアに続いてこのクソ生意気ガキにも念願の顔射マーキング達成イイ~~~~

~~~~っつ!!♥♥♥ 亡国のお姫様に下賤の子種ぶっかけキメまくっちゃ~~~~っつ♥♥♥

さあ逃がさないわよおおっつ汚れる汚れるおっ♥♥♥ 私の孕ませ外道ジェルでネバドロに穢れなさいなああつつ♥♥♥ 顔面で妊娠するくらいプリプリの男汁シャワー浴びせてニオイとフェロモンとれなくしてやるわあああつつ!!♥♥♥」

出る出る出るわ、どうやって体に溜め込まれていたのか不思議なほどの質量を誇る汚濁ザーメン塊のぶつといヒモが、形のいいあごのあたりを支点に扇状に広げるように巧みに射線コントロールされて、気高い美貌をネバネバのドロドロにドスケベデコレーションして

いく。

高圧水流のごとく射出された白い濃濁液の一筋一筋が頬といわず額といわず鼻筋といわずネチャグチャとブチ当たり、シルヴァリアのプライドを打ちのめし反抗心を叩きのめすかのようだ。

もちろん肉幹の脈動に合わせてだらしない乳マンコ肉をグッグッ♥♥ と圧搾し、より気持ちいい射精感を味わうことにも余念がないフタナリ陵辱者。

「あぶっ、おぶっ……うあっ!! あぐうううつ、き、貴様あああッッ!!? ……んおお、おッッ!!!♥♥」

一方、ドロドロの汚濁粘塊で顔面をブチ汚されてゆくことによる嫌悪への抗議は、だがしかし——強制的に1オクターブあがった快楽の嬌声へと変えられてしまった。

快楽ザーメンをどびゅるどびゅる噴出しつつ、オブシディアが不意打ち気味にトドメの乳首同時ひねりを喰らわせたのだ。

「さあ、あんたも改造スケベ乳首でイキなさいっ♥♥ 私の顔射を喰らいながら恥さらしな絶頂をキメるのよおおっ♥♥ ザー臭嗅いだけで反射的に乳首ビンビンにする恥さらしな脳みそに改造してやるううううっ♥♥ イッたが最後そうなるようにバイオナノマシンで条件反射刷り込んでやるわあああッッ!!♥♥」



シコ♥ シコシコッ♥ しこりしこりんっ♥♥♥

「うそッツイやつイヤああああッッッ!!?♥♥♥ だッだれがそんな体にッ……ひぎいいいいうそうそうそウソおおおお!!?♥♥♥ いくイグイグ強制的に乳首でイカされるウウウうづう!!?♥♥♥ おほおおおお

おッッ嫌だやだやだあひイイイイ~~~~~ッッッ!!?♥♥♥」

必死の抵抗むなく、いまだ噴射の脈動を続ける魔巨根をパイズったままシルヴァリアは、ガニ股蹲踞の姿勢でプルプルとブザマに痙攣してあっさり乳首絶頂に達した。

しかもそれはただの乳イキではない。

びゅるるうつつ!!♥♥♥ んびゅるるうつつ!!♥♥♥

「うッ嘘おおおお!!?♥♥♥ でッ出てるうううう!!?♥♥♥ ちっ乳首から両方おおおおおお!!?♥♥♥ おおおお噴くっ♥♥♥ がっガマンできないイイツッ白いの噴きこぼれるうううう!!?♥♥♥」

女幹部の淫らな指先でシコられ続けるシルヴァリアの両乳首から勢いよく噴出したのは、まぎれもない生搾り母乳。

しかもそれはトロミがついて濃厚な、どちらかというとザーメンじみた濃ゆく淫らな液体だ。

加えて本来、一本にまとまって噴射するような構造ではないはずの母乳がこうしてチンポ汁めいた噴射をしてしまうのは、異次元科学による生体改造の神秘というしかない。

「あゝあ噴いちゃったわねえ♥ 妊娠しなくても出る改造母乳よお、まあどっちみちもう私の赤ちゃん孕んでるかもしれないけど♥ くくくつ、あんたの早漏チンチンに負けず劣らずのユルユルよわよわ漏らしまくり乳首に調整してやったから、これからは外もまともに出歩けないわねえくくく？♥」

嘲りの言葉と同時に、股間で精一杯ピンと天を向いたフタナリ粗チンが、

びゅぱつつ♥ ピュピュうくくくくくつつ♥

と連動した強制フィニッシュを迎え、オブシディアの今なお顔面めがけ折り重なり続けるそれと比較すると圧倒的に劣る青臭い精液流を床にぶちまける。

「あつはははははつつ♥♥ 言ったそばから触ってもないのにチンチン発射しちゃったわねえくくくアリアちゃんったら♥ 一度イキぐせがついちやつたらこれから大変よおくく？♥ しよつちゆう合計三本の早漏突起から白いのいっぺんに撒き散らしちゃうドスケベ下品ボディ、もう剣士とかカッコつけるの無理じゃないかしらああ♥♥ くううくくく生意気メスガキのブザマな醜態で精液噴射止まんなああああいッツツ!!♥♥」

「あぐつ♥ えぐううつつ♥♥ ひうううあああ……つ♥♥ おおおおつつ♥♥ い、

イキ続けるうううつつ♥♥ 止まらないいいいいッ、とッ止まってえええつつ♥♥
さ、三ヶ所から白いの漏れ続けりゅうううううう♥♥ お、おほオオお……♥♥」
だつぷりと増量され、マンコ並みの肌性感を植え付けられたパイズリのためにあるよう
な乳房肉。

チンポに匹敵する感度と、ニプレスすら貼れないほどのだらしないサイズを与えられた
長乳首。

亡国の王女としての矜持も、七冥塊最強の魔剣士としての誇りもゴミクズのように打ち
砕かれ、女幹部のチンポに媚びるセックス専用のエロボディに急速に作り替えられてゆく
シルヴァリアの肢体。

さすがに絶望の色を浮かべた顔面めがけ圧倒的征服感と共に最後の一滴までザー汁を氣
持ちよく出し切ると、オブシディアは口元を邪惡にニヤリと歪めた。

「でも心配することはないわあ……♥ そのスケベな肉体、むしろ喜んでくれるんじゃないかな
いかしら♥ マスカキ大好きのコ猿ちゃんと化した今のあの娘なら、ね♥」

「な、何を……ま、まさか……っ!？」

どつぷりと悪臭白濁汚染され氣を失う寸前の顔が、その不吉な言葉にハッと反応した。
「そうよお、あなたの愛しのスターティア♥ そんな目に遭ってまで必死に守ろうとして

いるあの星ヶ丘優姫ちゃんに、そろそろ再会したいんじゃないかしらあ……？
♡

第20話 覚醒する淫才！ シコ猿と化したヒロイン、
通学電車内センズリ天国！

朝の電車内は、汚れ一つない制服に身を包んだ見目麗しい女生徒たちでいっぱいだ。

終点が学校前ということもあって、この時間は事実上毎日、聖碩女学院生たちの専用車両のようなものである。

そんな女の園にまぎれるのはさすがに気後れするのか、今朝も男性客は一人もいない。お嬢様学生たちは友人と談笑したり、読書をしたり、スマホをいじったりとそれぞれが自由な時間を過ごしている。

まさに、平和そのものの華やかな光景。

そんな中……優姫はというと。

（おっ♥ んおっ♥ は、はううつ♥ やっ、やっぱり女の子がいっぱいいる場所でおチンポセンズリするの、さっ最高おお……♥♥ んああ~~~~っつ♥）

言うまでもなく、もはや日課となった恥知らずな人前屋外オナホオナニーに夢中であつた。

異空間に隠された全自動特製オナホの中に朝立ちでビンビンに反り返ったフタナリチンポを突っ込み、にゆるにゆるのシリコン壁で敏感な勃起肉をシゴきまくる快楽を満喫中である。

「あの……星ヶ丘センパイ、私、重くないですか？」

席に着いた優姫の膝の上に、背中を預ける形でちよこんと座った黒髪ロングの可愛らしい一年生が、おそろおそろ振り向いて心配げに聞いてきた。

「ふえ？♥　だ、だいじょうぶだよ♥　心配しなくても、すつごくちようどいい感じだから……っ♥」

「そうですか、だったら安心ですっ」

ハアハアと発情した栗色の髪の美少女の膝の上に、大真面目な顔で乗っかる後輩の少女……もちろん、いくらなんでも本来なら不自然な光景である。

だが、乗っている本人を含めて車内の誰もが違和感など欠片も抱いていない。

オブシディアから渡されたアクセサリが発生させる認識歪曲フィールドによって、現実認識が自動的に補正されているのだ。

その結果、女生徒たちは『親切な星ヶ丘先輩が、後輩に席を譲ってくれた』程度の実感しか抱けないのである。

（ほおおお……っ♥ 今朝思いついたこのやり方、か……かなりイイよおおっ♥ 柔らかいカラダの圧迫感がぎゅってなって気持ちいいし、電車の揺れも伝わって……ほ、ほんとうに入っちゃってるみたい……っ♥ んおおお♥）

鼻息も荒く興奮し、清楚なスカートに隠したグロ肉棒をビッキバキに怒らせる優姫。

その目的はもちろん、年下の女子学生に後背座位でチンポを挿入し、下から突き上げながら犯すというスケベ妄想でセンズリをコきまくるためである。

柔らかい太ももと尻がスカート越しに伝えてくる密着感と体温。

軽く抱いた背中や髪から漂ってくる上品なシャンプーのにおい。

そして名も知らぬ……言葉を交わすのも初めての後輩（反応からして他の大多数と同じく、人気の先輩で通っている自分を慕う少女らしい）を生オカズにするという行きずりやり捨てセックスじみた破廉恥行為が、優姫の節操なしグロチンポをこの上なくエキサイトさせるのだ。

「あ、あのね♥ いつもは朝起きてすぐにベッドの中で一発目をぶっこくんだけど、今日はガマンしてきたんだあ……っ♥」

「ガマン、ですか？ よくわからないですけど、すごいですねセンパイっ」

「う、うん♥ だから、ちよつと揺れるけどこうやっていっぱい、お……オカズにさせて

ね？♥

「?? あ、はい、私でお役に立てるなら喜んで」

卑猥な言葉も、認識歪曲によって単なる雑談としてしか受け取られない。

かといって当初は、面と向かってそんな会話をすることはさすがに躊躇していた優姫だったものの、一度何かの拍子に禁を破ってしまえばあとはずるずると一直線だった。

何より、こうして言葉を交わした方が『ドキドキしてさらに気持ちよく射精できる』ことに気付いてしまえば、スケベセンズリ追求マニアと化した今の優姫が止まるはずもなかった。

（ああ……あ、あたしまたイヤらしい言葉を、こんな何も知らないままの子相手につ……で、でも、こうするといっぱいタマタマの中で精液が作られて……♥ たっぷりどぴゅどぴゅお射精できて……♥ そのぶん裕美香を助けるチャンスが近付くんだから、し、仕方ないんだよっ……正義のためだもん、ゆっ許してえ♥）

優姫が興奮すればするほど、生体モニタリングを通して記録される『ポイント』がたまり、それが一定数に達すれば親友奪還のチャンスをおブシディアから与えられる。

その約束には、いかにも外道女幹部らしい巧妙な罠が存在した。

どんな行為にも『慣れ』はつきものだ。最初はそれだけで非日常的興奮を与えてくれた

人前センズリも、回数を重ねて慣れてしまえば興奮度は落ちていく。

つまり、目に見えて得られるポイントが減っていくということだ。

結果、焦った優姫は、効率的にポイントを稼ぐためなら……という思考を言い訳に、ほとんどエスカレートした新たな変態行為に手を染めていくという寸法である。

「んへうっ♥ おおんお♥ やっ、あっああうっ♥ も、もっちりした感触がああ……♥

お、おチンポの芯に響くうう……っ♥」

ずにゆっぷ♥ にゆずるんっ♥ ずぬっ♥ ぬこっぬここっ♥ ぬぷんっ♥

卑猥なローション擦過音さっかおんがスカートからブポブポ漏れる中、チンポを甘く締め付ける人造ニセマンコの快楽に酔いまくる優姫。

今突っ込んでいるのは、大切な友人の一人、光善寺天音の女性器を象ったオナホだ。

もちもち肉厚の挿入感をたっぷりローションをまぶして楽しむテイストが、朝のけだるい雰囲気 베스트フィット。

何度も何度も色んな組み合わせで試しまくったオナホセンズリソムリエの優姫ならではの。

「へ、へうう♥ ね、ねえそのあなたあ、この子の友達い？♥」

「あ……は、はい。中学が同じで……」

すぐ左隣に座っていたおとなしそうなセミロングの一年生が、急に話しかけられて少しびっくりしたような反応を返した。

今、優姫が膝の上に乗せている子と一緒に電車に乗ってきた、こちらもなかなかの美少女だ。

「ふ、ふーん、そっかあ……♡」

優姫のギラついた視線は、彼女の胸部分に注がれている。

制服を内側から窮屈そうに押し上げる、その膨らみ——一年生には珍しいほどの巨乳であることは間違いない。

ごくり、と優姫の喉が鳴った。

「あ、あなたにもちよつとお願いがあるんだけど♡ あたしの顔を、おっぱい……じゃ、じゃなくて胸でぎゅーっしてもらっても、い……いいかなあ？♡」

「私の胸で……ですか？」

一瞬、戸惑うような表情を巨乳後輩が浮かべ、優姫の背筋をドキリと冷たい焦りが走った。

まさか、認識歪曲でもごまかしきれないほどの不自然さが今のやりとりに存在したのだろうか？ 調子に乗り油断して、やりすぎてしまったのだろうか？

と、その時、膝の上に乗った方の後輩があっけらかんとした口調で声をかけた。

「ほらほら、せっかく星ヶ丘センパイがご指名なんだし、早くやってあげなきゃだよ」

「う、うん。私なんかでよければ……よろこんで」

友達に言われてうつすら頬を赤らめ、こくりと頷くおっぱい、いやおっぱい後輩。

（な、なんだあ……引っ込み思案な子だったから、私にいきなり声をかけられて戸惑ってただけだったんだ。び、びっくりしたあ……♡）

これで問題なく、当初の期待通りの欲望を満たせる。

一度焦ってからの落差も手伝い、チンポをさらにはち切れんばかりに反り返らせる優姫の頭部を、座席に膝立ちになって遠慮しがちに両手を広げた巨乳後輩がおずおずと抱き寄せた。

「それじゃあ、失礼しますね……こう、ですか？」

「はうっ……♡ も、もっと強くぎゅって♡ おっぱいでぎゅってしてえっ♡」

「こんな感じですか？ んしよ、……っ」と

「わぷっ♡ そ、そうこれこれえっ♡ はううう……し、幸せええ♡」

ぎゅんむり♡ と抱きかかえられた横向きの頭部に密着する、ミルクのたっぷり詰まった水風船のような大迫力おっぱいのポリウムと柔らかさが、ブラ越しにでもはつきり

と感じられる。

オブシディアやアリアにパイズリ奉仕された影響で、すっかりおっぱいに欲情する巨乳好きフタナリっ子と化した優姫だ。

こうやって乳房に体のどこかを密着させながらのチンポコキにドハマリして久しい。

ターゲットは主に友人の涼子だったが、最近ではこのように巨乳が視界に入るたびその感触を味見せずにはいられないほど節操がなくなりつつある。

（お、おっきいおっぱいってなんでこんなに幸せになれるんだろっ♡ ああ〜キンタマの中でギュンギュンって精子増えまくってるのわかるよお♡ げ、元気になっちゃう♡ 朝のおチンポピンピン元気いっぱいになるうう〜♡♡）

名前も知らない二人の可愛い後輩の、若くみずみずしい太ももとおっぱいの肉感をダブルで味わいながらオナホでコキまくる快楽といったら、もうこたえられない。

なお、乳を揉む、性器をいじるといった明確な愛撫行為は『アウト』だが、ぎゅつと抱きつく、抱きつかれるといった日常のスキンシップでギリギリすむ行為までは『セーフ』。

それが現時点での、優姫の中で勝手に作られた基準である。

（あ、ああっ……♡ ほ、ほんとはこの子たちにもっと直接エッチなことしたいよおお♡ おチンポしゃぶらせたり、おっぱいでずりずりしてもらったり、それから、それからもっ

ともつとスゴいことまで……!)

認識歪曲を使えばそれはできる。いともたやすく、できてしまうのだ。

だがその一線を越えては、その時こそ決定的に正義のヒロイン失格……許されているのは、あくまでセンズリの間接的な手伝いまで。

……別に優姫のオカズとして餌食になった女の子たちが、真実を認識した上で許してくれているわけでもなんでもないのだが、とにかく優姫の中ではそうなっている。

(でもつでもつ、私は正義の聖光剣姫スターティアなんだからあ……つ♥ 今はオブシディアの罠で『仕方なく』こうやってるだけでつ♥ この子たちも含めて『みんなを守るための行為』なおおっこれはあつ……♥ だから『今だけ』だからっ、ゆっ許してええつ♥ あ、あたし一線は越えないようにちゃんとガマン、ガマンしてるんだからっ、むしろ褒めてほしいくらいで……つ♥ ね、だからこれくらい、し……しちやつてもいいんだよ おお……♥)

少しずつ論点をすり替え、チンポの欲望を優先したあさましい考えを自己肯定する優姫。それこそが、誇り高き正義のヒロインを自分本位な快楽の奴隷にジワジワと貶めてゆく外道女幹部の真の狙いだということにも気付けない……いや、たとえ気付いたとしても心の奥底で目をそらしてしまっているのだ。

『次は、聖碩公園前。聖碩公園前です』

学校までもう何駅もないことを告げる車内アナウンスが響く。

だらしなくよだれを制服の襟元に垂らしつつ夢中でアへっていた優姫は、まるで風俗で残り時間が少ないことを知らされた客のようにハッとした。

反射的に心の中にわき上がるのは『せっかくだからできるだけ気持ちいい射精がしたい』という恥知らずな欲求だった。

裕美香の無事を思えば、本当は一日だってぐずぐずしてられないのだから、一回一回の射精で味わう興奮は大きい方がいい……それを言い訳に、あっさりと欲望を優先させた彼女は大胆な行動に出た。

「ね、ねえちよつと！ そのあなたとあなたっ♡」

「えっ、私？ 私ですか？」

「わたしも？」

「そ、それからそっちに座ってるあなたと、その隣の……」

慌てて四方に声をかけまくり、追加で五人もの女生徒に『お願い』を出す。

後輩だけでなく、同学年や三年生もそこには含まれていた。

その一見無差別な指示で何をさせるかと思えば、

ぎゅむっ♡　ぎゅっ♡　ぎゅむむっ♡　ぐむむんっ♡

「はううっ!!♡　あはああ……っ、こ、これスゴお……っ♡　お、おっぱいがいい
い……♡♡」

そう、声をかけた五人は、いずれも車両内で上から数えた巨乳の持ち主。

一人にはさっきの巨乳後輩の反対側に立て膝で座ってもらって、両側から胸を押しつけてもらう形で顔を乳サンドされる体勢を作る。

他の四人には、左右に伸ばした優姫の腕を抱き挟む形でそれぞれ二人ずつおっぱいを押しつけてもらう。

これで合計12個のおっぱいが全身に密着する、変態オヤジめいた発想のJKおっぱい風呂の完成というわけだ。

（な、なにこれやってみると想像以上にヤバっ♡♡　ぜ、ぜいたくすぎるうう♡　ちよつとずつ感触の違うおっぱいが数えきれないくらいあちこちに当たって、ぐにゅぐにゅ押しつけられて、あったかくていいニオイしてっ……ち、チンポシゴきはかどっちゃうっ♡♡　シコシコめっちゃ早くなるよおおおっっ!!!♡♡）

ちなみに、呼ばれた子の何人かは最初の二人と違い、特別そこまで美少女というわけでもない。

優姫はおっぱいのデカさ優先、カラダで選んだのである。

「こんな感じかな？ センパイ、きつくはないですか？」

「ちよつと脇にずれてもらえますか？ 星ヶ丘さんの右腕、この位置の方が抱えやすいと思うから」

「はい、いいですよー」

「んっ……結構場所取るわね、これ」

「つとと、今ちよつと揺れましたね。大丈夫でした？」

自分たちがしていることの正体を認識できず平然とした顔で、優姫の全身を柔肉ハーレムで包むスケベな共同作業に熱心に没頭する女学生たち。

彼女らの主観では『星ヶ丘先輩がカバンの中身を床にぶちまけたので、みんな得手伝つて拾ってあげている』といったレベルの認識補正がされている。

おっぱいサンドに加わった者だけでなく、位置を空けるために移動した女生徒も何一つ不審は抱いていないのだ。

「へうあ♥♥♥んおおっ♥♥♥すっすぎいいっ、んへあっっ♥♥♥き、キンタマ煮えくり返ってきたああ♥♥♥おおおっ発射準備っ♥♥♥朝からお外で女の子に囲まれてオナホにぶっ放す準備できちゃうううっつ!!♥♥♥」

ゴポポ♡ グビュルルウウツ♡ ドキウドキユウウ……ツ♡

と、もはや認識歪曲なしでは出歩けないほどでっぷり膨らんで可愛いショーツからハミ出た二つの精液増産工場が不気味に脈打ち、たっぷり濃縮ブレンドされた美少女ザーメンが尿道をウネりながら駆け上る。

認識歪曲をいいことに思わず大きな声で口に出した言葉に反応し、周囲の女の子たちが優姫の方を一斉にきよんとした顔で見た。

（え、みつ、見られてる見られてるうううつつ!!?!♡♡ やっ、あっあつつ

♡ あたしもうすぐザーメンどぴゅどぴゅしちやうのにいつ、名前も知らないたくさん女の子たちにはっちりしっかり見られちやうよおおおおおっつ!!!♡♡ やだっ、でもこれ止まらなっ……止まっ……おっ♡ おおおおおおひいいい………つつつ!!?!♡♡

♡♡

そして高速シゴキピストンを加速させる友人才ナホから『ぶぢゅるるるるつつ♡♡』と先端バキューム機能によるトドメを喰らい、おっぱいまみれになった全身をビクン!!と座席の上で可愛く跳ね上げ……とうとう優姫は、電車内でのスペルマ大爆噴を開始した!

ぐびゅるるるるツツ……びゅくるるるんつつ!!!♡♡♡

どぷっ♥ どぶぴッ♥ どぶどぶどぶんごぶどぶウウ~~~~ッッッ!!!♥♥♥
びゅるりりりりっ♥♥♥ ぶぴーっ♥♥♥ んぶっぴ♥♥♥ ぶぼびゅびい~~~~っ
っ!!♥♥

「おっ♥ おっほ♥ おへえッ♥ はッへええ~~~~ッッ!!!♥♥♥ おお出る♥ 出てる
これっ♥ これっへエエ♥ ひへええほへえ~~~~!!♥♥♥ おーっ♥ おお♥ みっ見ても
っで見えてええっ♥♥♥ ああああびゅーするのとッ止まんないよおお!!!♥♥♥」

ぱっくり開いた鈴口から一直線に吐き出され、オナホ奥へと怒濤のごとくブチ込まれて
ゆく元氣な朝の極太ザーメンショット。

敏感な尿道を内部からゾリゾリ刺激しつつ高速で通り抜けていくたまらない射出快樂に、
おっぱいにホールドされた両腕をしならせ、同じく四つの柔球に包まれた頭をぶんぶん無
理矢理暴れさせて悶えまくる優姫。

「ちよ、センパイ、急に動くと危ないですってば」

「えと……どうかなさったんでしょか？」

「私たち、な、なんかまずいことしちゃった……？」

困惑気味に、だがあくまで常識的な反応の範疇としてそれを受け入れるオカズおっぱい
たち、いや女生徒たち。

何も知らない彼女たちをセンズリ道具にしているという背徳感がさらに射精欲をブーストし、自動で蠢くオナホのアシストも手伝って長い長い放出がなかなか止まらない。

やや黄ばんだ一番搾りザー汁が、くぐもった下品な音を立ててオナホ奥の異空間内に消えていくたび、優姫は発情した猿でもこれよりは上品だろうという美少女台無しのあえぎを漏らした。

「ほへええ……♡　へ、へうう……♡　だ、だいじょうぶ、だからああ……♡　ありがとうねえ、みんなああ……♡　お、おかげでいっぱい、キモチよくどっぴゅんできたよお……♡」

やがて射精の余韻に脱力し、ろれつの回らないあえぎと共におっぱい風呂に沈む優姫。人外フタナリ快楽の絶頂にこうして全身を貫かれるたび、脳細胞がどんどん、スケベなことしか考えられないものに置き換わって行く空恐ろしさと、それでもなおさらなる快美を味わいつくしたいという貪欲な想いが、チンポサイズと共に肥大化していくようだった。

『次は、聖碩学院前。聖碩学院前です』

学校への到着を告げる、のんびりしたアナウンスと同時に。

びゅるりっ♡　と最後のひとコキを友人才ナホに搾り取られ、優姫は「あうっ♡」と間抜けなうめき声をよだれと共に漏らした――。

* * *

朝の教室。上の空でホームルームを聞く優姫の表情は、複雑だった。

確かにさっきの電車内射精はキモチよかったが、得られたポイントは予想していたほどではなかったのだ。

（うう……やっぱり、慣れてきてるから、なのかな……？　で、でもこれ以上興奮するなんて、どうすれば……）

いや、答えはとづくにわかっている。必要なのはやはり、スキンシップレベルではない本格的な性行為だ。

城鐘アリア。

彼女にしてもらっていたような行為……だが彼女は今日も登校していないようだ。

（うう……アリアさんってば、わかってるのかな……？　アリアさんが学校来ないから、あたしのセンズリのお世話してくれないからっ、あたしさつきみたいな恥ずかしいこといっぱいしなくちゃならないんだよ……？）

欲求不満のあまり、正義のヒロインとは思えない理不尽で一方的な欲望まみれの苛立ちすら浮かぶ。

ビキッ ♥ ビキビキッ……♥　と怒りの青筋が、再び膨らんできたチンポに浮かんだ。

(す、すご♥ アリアさんのこと考えると、おキンタマめっちゃ元気になってくるよう♥
いつもの何倍ものスピードで濃い精子が作られちゃってる感じするうう……っ♥ あ、あ
たしのカラダが、アリアさんを求めちゃってるんだ……っ♥)

早鐘のように打つ心臓をドギマギさせ、うつすら頬を赤らめる優姫。

やはり彼女は優姫にとって、そして優姫のチンポにとって特別な存在だった。

さつき電車内で目をつけた少女がそうだったように、長い黒髪や巨乳といったアリアと
共通点のある子をセズリオカズに使うことが自然と増えているほどだ。

(こ、今度会ったらいっぱいエッチなお願い聞いてもらわなきゃ……アリアさんって意外
とあたしの押しに弱いから、強引にお願いしたらきつと何でも聞いてくれるよね……♥)

真っ先に浮かぶのは、あの学生離れた巨乳、今朝のおっぱい風呂の誰よりも大きい
わわな柔肉でのパイズリ。

今までは自分が座った状態でチンポを挟んでもらっていたが、ネットでHな画像を検索
したところ、寝かせて馬乗りになるやり方もあるらしい。

自分本位におっぱいをヌキ道具として『使う』にはぴったりのやり方だ。

しかも、逃げ場がない顔に好き放題ぶっかけフィニッシュできるというのがたまらない。
(あ、アリアさんは嫌がるけど、やっぱりあの綺麗なお顔めがけてぶっかけちゃいたいよ

お……っ♡

高貴さすら漂わせる美麗な顔面に事故を装ってぶっつけた時、背筋からわき上がった暗い征服感はたまらなかった。

自分がキンタマからヒリ出した臭くて汚れた濃ゆい種汁で、人格の象徴ともいえる顔を好き放題に汚し抜く……それはまるで今まで大切に慈しんできたものを衝動的に壊すような、やってはいけないことをしてしまう背徳の愉悅に満ちた行為だった。

（ううん、アリアさんも悪いんだから、ちよつとくらいわがまま聞いてもらっても当然っていうか……あたしのチンポのお世話してくれないアリアさんに、おしおき……チンポでたっぷりおしおき、おしおき顔射あ……♡）

次にしてもらう時は、思いつきりザーメンをぶちまけて顔からおっぱいまでドロドロのぬちゃぬちゃに汚しつくそうと優姫は決心した。

それも一回では済まさない。

ぷるんぷるんのスペルマゼリーが美貌にこびりついたままパイズリフェラを続行させて、二発目の搾り汁もその上から追加でドピュリ散らかしてやるのだ。

さすがにあとで怒られるかもしれないけど、その場の勢いでたぶんいけるし、平謝りしたら自分に甘い彼女はきつと許してくれる。

（うあ、そ……想像したらすつごく興奮してきたよお♥ た、たぶんそれ三回くらい余裕で連射できちゃう……っ♥）

もちろん、やりっぱなしはよくないので終わったらちゃんと綺麗に拭いてあげよう。

いや、それを口実に、一緒にお風呂に入ろうという提案も通るかもしれない。そうになったらこっちのものだ。

強引に押しまくって、全身ボディソープの泡まみれ状態で密着にゆるにゆる洗いとかをやってもらえたらきつと極楽に違いない……。

そして、これまで優姫がずっと、心の奥底に封じてつとめて考えないようにしてきた『その先』。

本番行為——セックス。

おまんこにチンポを挿入する、男女の行為。

もしかしたら、それすらもアリアは受け入れてくれるのではないか……？

ニセモノの型取りオナホでもあんなに気持ちイイのだ。そして、本物はそれ以上だとオブリディアはかつて言った。

（つて、だ……ダメよ、そんなこと考えちゃ……っ！ そ、それだけは……お、女の子でも正義のヒロインでもなくなっちゃう……っ！ だから、しちゃダメなの……！ ダメ

え………
♡

だが、優姫は気付いていない。

今や本番セックスすら『そんなことしたくない』ではなく『興味はあるがダメな理由があるからできない、してはいけない』と捉えている自分の変化に。

それはすなわち、しても構わない状況ならセックスをしてしまう、ということなのに。

当初はおどましいだけだったはずのフタナリチンポと、それを使つてのイヤらしい行為……だが抵抗感も嫌悪感も、生やされたまま送らされた淫らな日々の中、少しずつ薄紙を剥がすように取り払われていきつつあった。

（で、でも想像したらキンタマみなぎってきちやったああ……♡　そ、想像だけなら……いいよね？　ちよ、ちよつと早いけどもう一回、今の想像で白いの又いちやおつかん……♡　んおつ……おおつ♡　んへう……♡）

何も知らない友人たちを横目に、再び異空間オナホに勃起チンポを突っ込むと、墮落しつつある正義のヒロインはこの朝二発目の恥知らずな人前オナホセンズリをいそいそと開始するのであった――。

第21話 宿命の時！ 重なる体と貫くチンポ、剣姫の新たなる誓い！

夕暮れの光が照らす、放課後の教室。

そこにはただ一人、可憐なバトルコスチュームを身にまとったスターティアの場違いな姿があった。

（こんな場所を指定するなんて……オブシディアのやつ、一体何を考えているの？）

彼女がこれから臨もうとしているのは、女幹部が約束した『勝てば裕美香を取り戻せる決闘』だ。

だが、あろうことかオブシディアがその場所に定めたのは、優姫たちが普段使っている聖碩女学院の教室だったのである。

いくら認識歪曲の作用で人払いが済んでいるとはいえ、違和感と一抹の不穏さが感じられた。また、何かの卑劣な罠かもしれない。

（でも、負けられない……！　とうとうここまで来たんだもの、あんな……そ、そうよ、あんな恥ずかしいことをたくさんして……っ）

日々、破廉恥極まりない露出スケベセンズリを繰り返すことによって、ついに既定のポ

イントに到達しもぎ取ったチャンスである。

行為の数々を思い出すだけで、たっぷり使いこまれたチンポがむくむくとスカートの中で反り返りそうになるのを慌ててこらえる変身ヒロイン。

（裕美香のため、そしてオブシディアを倒すためなんだから！　どんな相手だろうと、勝つてみせる……ッ！）

キツと表情を真剣なものにシフトさせ、いつどんな怪人が襲ってきても不意を突かれまいと、輝光剣ティアセイバーを握り直す。

まさにその直後……教壇側の入り口から、一人の人影が現れた。

「現れたわね——え!？」

闘志に満ちたスターティアの顔が、驚きの色に染まった。

それは怪人などではなく、あまりにも意外な人物だったからだ。

「シ……シルヴァリア!？」

白銀のシルヴァリア。

シャドーマテリアル七冥塊の一人でありながら、常に他の幹部とは違う孤高のスタンスを貫き、時としてスターティアに助力すらした謎めいた最強の女剣士。

流れるような黒髪、目元を隠す仮面、銀のアーマーに彩られた濃紺のボディーツ……

姿を現したそれは、紛れもない彼女の姿だったのだ。

「どうして、あなたがここに……!？」

無言で歩み寄ってくるシルヴァリアに、焦るスターティア。

正々堂々を好む誇り高い白銀の魔剣士と、オブシディアとの中が険悪であることは彼女も知っていた。あのゲス女幹部の計画に協力しているとはとても思えない。いや、思ったくもなかった。

敵でありながら、時として師のように助言や特訓を施してくれたシルヴァリアの仮面の下に、スターティアは不器用な優しさと秘めたる意志を感じ取っていたからだ。

（で、でも……! 万一、この人が決闘の相手なら、倒さなきゃいけない……! どれほど格上の相手でもっ! そう、裕美香やみんなのために……!）

逡巡のあと、輝光剣を握り直すスターティア。

だが、いくつもの机に囲まれた教室の中、あと数歩の距離で足を止めたシルヴァリアは――あまりにも予想外の行動に出た。

「す……スターティア……み、見て……!」

「え――」

シルヴァリアの口から、今まで聞いたこともないうわずった声が漏れたかと思うと……

白銀の魔剣士は、流麗なラインを描くみずからのコスチュームの下腹部に手を当てた。

スツと、ヘソの下にスリットが開き……そこから、ぴよこん♥と飛び出したものは。

「……えっ!? そ、それって……お、おちんち……っ！」

「——っ」

仮面越しにでも伝わる羞恥と屈辱に、目をそらすシルヴァリア。

そう、彼女の下腹部から露出し緊張でふるふる震えているのは、紛れもないふたなりペニス……それもずいぶん可愛らしいサイズの包茎だった。

（ど、どうということ!? なんでシルヴァリアにこんなものがっ……ま、まさか!?）

脳裏に浮かぶのは、オブシディアの邪悪な笑み。

まさか、同じ組織の幹部をこんな目に……いや、快樂主義に狂ったあの妖女ならやりかねない。険悪な相手ともなればなおさらだ。

「シルヴァリア、あなたもまさか……あいつに何か弱みでも握られて!？」

「……っ! お、お前の知るべきことでは、ない……ッ!」

スターティアの鋭い推測に一瞬ハッとしたものの、首を振ってそれ以上の詮索を拒否する白銀の魔剣士。

「そ、そんなことよりも……! 今の私は、お前の決闘相手として、ここに来ているっ!」

「け……決闘って、そんな……ウ、ウソでしょ!？」

そんなあられもない姿で何を言っているの、と困惑するスターティアだが、シルヴァリアは首を振り、再び下腹部に手をやって男根をコスチューム内にしまうと、衝撃的な言葉を告げた。

「た、ただし……剣や力のみの戦いではないっ！ 倒した相手を、チンポで犯して初めて勝ちを得られる……これは、そういう戦いだ!」

「え!? な、何を……!」

明らかに不本意な内容を、やむを得ず『言わされている』と想像できる言葉。

だが、シルヴァリアは容赦なく距離を詰め、いつの間にか抜き放った細剣——銀光剣シルヴァリオン・エッジを振りかぶった。

「お前の想像通り、私も何としてでも勝たねばならない状況にある！ 悪いがお前を倒し……犯させてもらうぞっ!」

「し、シルヴァリア!? 本気なのね!？」

夕暮れの教室の中、二人の女剣士の刃同士が交錯した。双方の斬撃がぶつかり合っている衝撃波で、いくつもの机や椅子が寸断され転がる。常人には知覚すらできないスピードによる、超常の戦いだ。

「そうとも！　それが私をこんな姿にしたオブシディアが突きつけた条件だ！」

「や、やっぱりあなたも……！　ま、待って！　話を聞いて！」

なら、協力することであの女幹部を倒す道が開けかもしれない。一縷の望みを託し、防戦一方になりつつ叫ぶスターティアだったが、

「――問答無用ッ！」

魔剣士の神速の踏み込みが、ティアセイバーを彼女の手の中から弾き飛ばし、床に転がした。

「あうっ!？」

「未熟者め、とったぞッ！」

がら空きになったティアラのスタージュエルめがけ、シルヴァリオン・エッジの切っ先が迫る。

聖光剣姫のパワーの源でもある部位に直撃を受ければ、変身解除による無力化はまぬがれないだろう。

（だ、だめ……このままじゃ、負け……っ）

スローモーションになる視界の中……スターティアの、優姫の中で何かがはじけた。

「う――うああああッ!!」

「なッ!？」

その時、不思議なことが起こった。

スタージュエルがまばゆい光を放ち、スターティアの胸飾りからエメラルド色の刃がせりだすように出現したのだ。

それは迫り来る銀光剣に真っ向からぶち当たり、これまで誰も破壊できなかった魔剣の刀身を百もの微細な破片へと一瞬で碎き散らす。

「ジュエライザー……スターバーストツツ!!」

頭に浮かんだ言葉を叫ぶと同時に、宝石にも似た碧光の刃が爆裂した。

エメラルド色のエネルギー奔流はシルヴァリアを教室の天井まで吹き飛ばし……光がおさまった時、そこには戦闘不能となった魔剣士の姿があった。

「っ……し、シルヴァリア……!」

「くっ……かはっ! お、お前の……勝ちだ……! スタージュエルは、持つ者の強い意志に呼応する伝説の宝石……」

「じゃあ、あたしの負けたくないって気持ちに伝えてくれたっていうの……?」

よろよろと力なく机によりかかったシルヴァリアを心配顔で見下ろすスターティア。

だが……勝負はまだ終わっていないのだ。

「さあ、何をしている……わ、私を犯すまで……戦いは決着しないぞ……っ」

「!! で、でも……!」

こうして敗北しても、恨みごと一つ言わずむしろ成長を讃えてくれるシルヴァリア。彼女はやはり、好敵手であり師のような存在だった。

それをチンポで犯す……レイプするなどということが、自分にできるのだろうか？

「いいか、今更哀れみをかけるなど、むしろ私の剣士としての誇りを穢す行為と知れ……! 勝者らしく奪え、スターティア……っ!」

「——っ! あ……あなたが、そこまで言うのなら……!」

尊敬すべき相手の言葉に後押しされ、意を決して近づくスターティア。

確かに、ここで躊躇すればすべてが無駄になる。

オブシディアは、七冥塊の名にかけて誓った約束は破れない。あとはシルヴァリアとの行為を完遂するだけで、裕美香を取り戻せるのだ。

（そ、そうよ……何も、シルヴァリアを殺したりするわけじゃない。あとはただ、あたしのチンポを……こ、この人に、挿入して……っ、射精すれば……ッ!）

あらためて、目の前でハアハアと荒い息をつくシルヴァリアの肢体に、正義のヒロインはギラついた視線を向けた。

よくよく見れば乳も尻も、むっちりと柔らかそうな肉がはち切れんばかりにコスチュームを内側から押し上げて、よりかかった机に当たった部分がムニユリと歪んでいるほどだ、（え……し、シルヴァリアって、こんなにエッチな体してたっけ……？）

目の前にさらけ出された、蠱惑的な——下品とすらいえるスケベな女体は、記憶の中にある流麗で優美なそれとはどこか違った。

それが腐れ外道な女幹部による駄肉改造の結果とは知る由もないスターティアだったが、におってくるようなフェロモンは彼女のキンタマ繁殖欲をずくんと刺激した。

（あ、あたし、今からあのシルヴァリアと……この綺麗でエッチな人と……し、しちゃうんだ……！　せ、セックス、を……っ！）

実感したが最後、カッと頭に、そして海綿体に血が上り、みるみるうちに怒張した欲棒がスカートを押し上げた。

そう、彼女は気付いてしまったのだ。今から自分がしようとしている行為が『叩きのめした相手にチンポをねじ込んで犯す』ことに他ならないと。

それはあのオブシディアがもつとも好むフタナリ征服快楽の極致、オスの欲望を思うさま満たせる究極の暗い愉悅。

「ほ、ほんとにいいのねっ、シルヴァリア……っ♡」

「うあっ……♡」

机の上にうつぶせになった細い腰と柔らかい尻肉とを、衝動に突き動かされるままスターティアはがっしりと掴んだ。

一瞬、シルヴァリアの口から漏れたかすかに甘い声が、受け入れる意思を伝えていた。早鐘のように心臓が鳴り、口の中がカラカラに乾く。正義の美少女ヒロインは今まさに童貞を捨てる男子学生のごとき、余裕の欠片もない有り様でスカートからイキりチンポを取り出した。

「こ、ここよ……挿れる場所は……っ」

片足をあげ、みずから指先でピッチリしたコスチュームをズラして、可憐なピンク肉の割れ目を示してみせるシルヴァリア。

白銀の魔剣士の秘所はうつすら濡れ、ぷるぷる震えながら息づいていた。

（はあッ♡ はあ♡ はーっ♡ これがっ♡ シルヴァリアの……！♡ こ、ここにつ♡ チンポ挿れてセックスっ♡ ほんとにしちゃうっ♡ あたし女の子なのにつ♡ 女同士でホントのエッチ♡ どうとうしちゃうんだあ……っ♡）

もはや冷静な思考は何もかも吹き飛び、スターティアは……いや優姫は、ぎゅんぎゅんとフル稼働するキンタマで思考していた。

掴んで仰角を下げるのすら苦勞するほど、かつてないまでにビキバキにガチ勃起した興奮肉棒を、焦りながら目指す柔らかな侵入口へクチュリ♡と押し当て——そして。

本能的な手ごたえが命じるまま、戦いの中で剣を繰り出す時のように……！

「うああっつ!!♡♡♡ あっ、あっあッあああっ……!!♡♡♡ は……入、るうううううう」
「……ッッッ!!♡♡♡」

「やつ♡♡♡ んああああ!!♡♡♡ す、スターティアのが入ってく……んあああああああ」
「……!!♡♡♡」

スターティアとシルヴァリア、黄金の髪を持つ正義のヒロインと、黒髪をなびかせた白銀の魔剣士は、ついに——フタナリチンポとマンコによって、悦樂の生ハメ結合を果たした。

「す、捨てたあっ♡♡♡ あたし童貞捨てちゃったああっ♡♡♡ 綺麗なシルヴァリアのおマンコでっ♡♡♡ い、今ハメてるうっ♡♡♡ ぷりっぷりであったかいおマンコ肉にあたしのチンポがみっちりずっぷりハマっちゃってるよおおお!!♡♡♡」

感無量の歡喜の声を、教室いっばいに響かせるスターティア。

それほどまでに『本物』のマンコは、セックスは衝撃的だった。これまで友人たちの型取りオナホでさんざん味わった偽マンコも気持ちよかったが、やはり比べものにならない

違いだった。

（すごいっつ ♥ しゅ、しゅごすぎるうう…… ♥ ♥ ああっ、ほんとに女の子のおマンコ
ってチンポを挿れるためにある場所なんだあ……しっくりくるっ ♥ しっくりハマりすぎ
ちゃってるよ、これええ……っ ♥）

ブッ挿^さしているだけで細胞ひとつひとつで愛撫されているような超絶快感、あるべき場
所に性器をハメこんでいるという幸せな実感は、尻とキンタマに力を入れて必死にこらえ
ていなければ今にも暴発射精してしまいそうなほどだ。

だが、初めて味わう快美に翻弄されているのはスターティアだけではなかった。

（うあ ♥ んうあああっつ ♥ はううあッ……こ、これ違うっつ ♥ オブシディアに貫か
れている時とはっ、何かが全然違う……っ ♥ あ、相手がスターティア——優姫だからな
の？ この子のおチンポだから違うの……っ!! ♥ ♥）

オブシディアに命じられ、このバカげた決闘行為を強制された彼女は、実のところ最初
からあえて負けるつもりだった。

体内のバイオナノマシンによって行動を監視されている以上、この場で本当の事情を伝
えることは難しい。

だが幸い、仮面に組み込まれた強力な認識歪曲機能によって、優姫が自分を城鐘アリア

だに見抜くことはできない……ならせめて、敵として戦い敗北することで、彼女の力となるろう。

そう、自分がどんな目に遭おうとも——それが、いつしか優姫に失った妹の面影を見ていた孤独な女剣士の悲壮な決意だった。

しかし……これは。まさか、こんなこととは。

憎からぬ……いや、大切に想う相手と繋がる生セックスの味が、これほど『違う』とは。
「はおおおおすつごいッ♥　すごつつこれッ♥　これ腰止まんないっ♥　セックスやばいっ♥　こ、こんな気持ちイイことがあったなんてええっ!?♥　や、やばすぎるよおおおッツ!?♥♥」

「んおおおおつつ!?♥♥　すッ、スターティアちよつと待つ……んひいいいッツ!?♥　おっ♥　ひっひいいいっ♥　ああッうああううッツ!?♥♥」

シルヴァリアの片足を抱きかかえるようにして、わき上がる獣欲のままに腰を叩き付ける脱童貞ピストン運動。

にゅずっ♥　にゅぱんっ♥　にゅたぱんつつ♥　とりズミカルな肉と汁の淫ら音を鳴らすそれは、本能とセンスのなせる業か——初めてとは思えないオスの威力に満ちていた。

日々の下品セズリで磨かれ鍛えられたフタナリ長太巨根は、オブシディアのそれに迫

る凶悪な威力と熱量でシルヴァリアの雌穴をエグり、こねくり、がむしゃらに突き崩して陥落させようとする。

「こ、こう!! ♡ これでいいんだよね!! シルヴァリア気持ちいい!! ♡ あたしちゃんとうまくおチンポハメこめてるうつ!! ♡ 動かし方これで合ってるうつ!! ♡」

「あ、あつてるッわっ ♡ あつてるからあっ ♡ だ、だからもう少しゆつくり手加減をッ……ほおおおうッ!! ♡ おッ奥だめえッ ♡ そ、それダメッ……んおおひいいッ!! ♡

♡」

若さと勢いに任せて熱したハンマーのごとく襲い来るデカ亀頭が、敏感な膣壁や子宮口をゴスッ ♡ ごちゅっ ♡ と容赦なくぶん殴るたび、シルヴァリアはあられもない嬌声をあげさせられてしまう。

しかもオブシディアの改造によって形成された敏感な前立腺は、カリ太の巨根でハメえぐられるとちようどクリティカルヒットする場所にある。女幹部に犯されている時と同様の、理性を焼き切らんばかりの魔快楽となつて女剣士を波間の小舟のように翻弄するのだ。「あは ♡ よかった気持ちいいんだシルヴァリアあっ ♡ おちんぽガマンするコツもっ ♡ 腰の角度とか振り方とかもっ ♡ あたしだんだんわかってきたよおっ ♡ こう? ♡ ここ、こう? ♡ こうだよ——ねっ? ♡」

「ひぎッあひイイッッ!!?!!?♥♥♥」

対する優姫はというと、変身中の身体能力と天性の戦闘センスの応用によるものだろうか……ややサディスティックな舌なめずりすらして、早くもねちっこいヤリチンチャラ男や中年性豪オヤジめいた女泣かせの腰使いを習得しつつあった。

どうやれば目の前の無防備な極上の女体をよがらせ、むせび泣かせ、余裕をはぎ取り——そして屈服させることができるのかを、危機に陥った時の逆転と同じくスタージュエルが教えてくれるかのようだ。

（そ、そんなっ♥ わ、私は今優姫につ……妹みたいに思っていた娘につ、たくましいチンポで貫かれて泣かされてしまってるっ……し、しかもそれがっ——嫌じゃない、なんて……ッ♥）

ガスゴス突かれるたびに駄肉改造された乳肉をだぶんだぶん揺らしつつ、子宮の奥底からわき上がってくる情動に混乱するシルヴァリア。

それは外道女幹部に陵辱されていた時にもうつすらと感じ、そして必死に否定していた、背徳の被虐の悦びだ。

強いオスに蹂躪され、骨の髄まで快楽をブチ込まれ、一匹のメスとしてよがり狂う禁断の甘い悦楽——それも、小動物のように慈しんでいた相手による逆転というもつとも強烈

な形でだ。

しかも、未知の快樂地獄にはまだその先があった。

「んおおおおキンタマで精子ぎゅるんぎゅるん暴れてるうう♥ せ、せり上がってきたあッ♥ まだ我慢したいのにいつ♥ このおマンコもつと味わってたいのにッ♥ も、もうすぐドピュっちやうよシルヴァリアの中でええつつ!!♥♥」

ふーっ♥ フーッ♥ と荒い息を漏らし、爪を立てるほどがっちりと駄肉をホールドして、獲物の首筋に噛みつく狼のごとくライバル戦士の子宮を逃がすまいとする正義のヒロイン。

これ以上ないほど反り返る肉幹に鉄のワイヤーのごとく走った血管がビキビキ……ッ♥ と怒り狂い、メリメリィッ♥ と龟头を取り巻く肉カサが一回りエグく花開く。

紛れもないトドメの繁殖射精——それも今までガマンできていたことが不思議なほどのフル稼働パンパン金玉爆汁による大量極悪ナマ噴射の前兆だ。

「え!?♥ や、うっウソおっ!?♥ ま、待ってそれだけはっ♥ そっそれだけはダメよスターティアあああつつ!!?♥♥」

慌てて、なけなしの理性の欠片にしがみつき抵抗を試み、無理矢理体を引き離そうとするシルヴァリアだったが、

「——うるさいッ!!♥♥♥」

「ひッぎ!!?♥♥♥」

スターティアらしからぬ感情的な叫びと、シルヴァリアの甘い悲鳴が同時にあがった。聖光剣姫の左手は彼女のピッタリコスチュームに浮いたビン勃ち乳首をつねりあげ、そして右手はヘソの下でだらしなく甘勃起した短小チンチンを掴んでいたのだ。

「シ……シルヴァリアはあたしに負けたんでしょッ!!♥ こうされるの覚悟してたんでしょ!♥ そういう決闘だったんだからッ、これは正しいことなのッ!♥ し……『仕方ない』のおおッ!!♥」

「そ、そんなッ!!♥ あ、あなた落ち着いッ……おおおチンチンシコらないでへええッ!!♥」

へこっ♥♥へこへこッ♥ と射精直前の汗みどろ腰をブザマにカクつかせてラストスパートの膣シゴき快楽を貪りつつ言い訳する姿には、もはや高潔なヒロインの矜持も、天真爛漫な少女の純粹さも見当たらない。

最高に気持ちいいであろう目前の初膣内射精を邪魔するならば、守るべき人間だろうと輝光剣で斬殺するかもしれない——それほどまに鬼気迫るものが、極限のチンポ欲に狂った今のスターティアにはあった。

初めて肌を重ね、女同士でナマ中出しをキメるといふことの異常さも危険さも、すでに眼中にない。

「ふーっ♥ ふうううつつ♥ 出すっ♥ 出るッ♥ だすウウッ♥ だってもうガマンで
きないのっ♥ ごめんねシルヴァリアっ♥ でも本当に嫌なのっ？ あたしのザーメンじ
やいや？♥ ドピュリ汁受け止めるのイヤ……っ？♥」

一瞬、水に濡れた小動物のようなせつなげな涙目が必死に訴えかけてきて、シルヴァリアの母性本能をチクリと刺激した。

「え……!!? そ——それ、はあ……ッ!♥」

オブシディアの魔チンポによって何度も何度もハメ犯され、極悪ザーメンスープをグビグビ吞まされてきた自分の子宮。

女幹部の宣言通り、すでに妊娠している可能性は十二分にあつた。そして万一までも、それは時間の問題でしかない。

なら——ならせめて、胎に宿す子を選べるとするなら、これは唯一無二のチャンスなのではないか？

あの憎むべきゲス女の子種などではなく、失った妹の代わりに今度こそ守り抜くと密かに誓った愛しい少女に孕まされるのなら……!!

それは魔が差すような甘美な誘惑。こうしている間にもメスの弱点を凶悪チンポでボコボコに叩きのめされているシルヴァリアに、もはや胸の奥底に秘めた本音を覆い隠すだけの余裕はなかった。

「……だ——出し、てっ！♥」

「っっ！！♥」

肩越しにスターティアを振り返り、上気して汗と涙に濡れた顔同士を近付けての、禁断の囁き。

「わ……私の奥に、子宮の中につ♥ あ、あなたの精液を流し込んでちょうだい……っ！

♥ スターティア、私を孕ませてっ！♥ 他の誰でもないあなたにめちやくちやにされたいの、女にされたいのっ、あなたの子供を宿したいのおッ！！♥♥」

「し、シルヴァリア……っ！♥ んむうっ!?♥」

仮面の隙間から溢れる熱い涙と共に、自分でも認識していなかった深層心理の本音が、女剣士にして元王女の唇から叫ばれた。

そして同時に、スターティアの耳の後ろに手をやって抱き寄せ、唇を奪うシルヴァリア。たちまち、ねりよ♥ ねちよっ♥ ねりゆりゆんっ♥ と可憐な美少女の舌同士が下品に絡み合う、ドスケベペロチューセックスが展開される。

「んぶちゅっ、んぷあっ♡ スターティアっ♡ スターティアああ♡ あ、愛してるっ♡
あなただけを愛してるのっ♡ 本当は前からずっとおっ！♡」

「はふあ♡ あ、あたしもだよシルヴァリアっ♡ 好きっ♡ しゅきいいっ♡ あたしも
愛してるからっ♡ 愛のザーメン受け取ってえっ！♡」

騙されてはいけない。

シルヴァリアはともかくスターティアは、優姫は、完全にその場の勢いと、脳ではなく
キンタマによる思考でものを言っているだけである。

愛を叫びながらペロチュー射精するのがより気持ちイイに違いないからにすぎないのだ
——もちろん本人にその自覚はないが。シルヴァリアの正体も知らないのに盛り上がって
いるのがその証拠である。

もし城鐘アリアとしての姿で誘惑されれば、その時もまた愛だのなんだのと耳障りのい
い言葉を並べつつ、無責任な生ハメセックスで据え膳マンコをパコリにかかるだろう。涼
子や、しずくや、天音が相手でも同じことだ。

そしてシルヴァリアも、このあまりにもチョロい本質的な箱入り娘もまた、あっさりと
それに騙され流されて感動の涙すら流している。

遠くでこれを見ているオブシディアも爆笑しているであろう、欲望優先の愚かで哀れで

んぶっぴ♡
ぶっぴイイツ♡
びゅーぱっ♡
んびゅろろんっ♡

どぶどぶどぶどぶ
びゅくくんっ♡
びゅるるるるんッ♡♡

へええ♡
ほおーっ♡
あッほおお
くくくくっ♡
あー♡
あーっ♡
んあくくくっ

つ♡
ひい♡
うひい
いっ♡
いっ♡
いっ♡
いっ♡
んお
おお
おお
おお
おお
おお
お……し、
しほられちゃう

う
う
く
く
く
く
つ
つ
!?
♡
♡
「

尿道をニユルンニユルンと内側からシゴきあげながら、全身全霊で優姫の繁殖欲を叶えようとする親孝行な元気いっぱいプリプリ繁殖ソースが、生きたスライムのごとく猛烈にあとからあとから放たれる。

本物のメス腔内でぶっ放し、同時イキ痙攣によつて搾り取られる極上の初体験は、スターティアの表情をヒロイン台無しのトロけたアホヅラへと変えるに十分だった。

「あああああこれッ♥
これ来てるうつ♥
スターティアの熱いのがっ♥
優姫のザ

ーメンがあつ♡ お、奥の奥までぶちゅんぶちゅん注がれてるううううううううううう

つ
!!?
♡
♡
└

それはぱっくり開いた子宮口のさらにその奥、大切に抱えたシルヴァラント王家世継ぎのラブタマゴに美少女遺伝子をブチ込まれるシルヴァリアも同様だ。

怯えるそれをうじやうじやと数億匹がかりで輪姦され、絶対にあたしの子供を産ませて



やるとばかりに卵管までミッチミチに詰め込む勢いで繰り出される蹂躪大放精——その行為は本来、オブシディアにされたのと変わらないはずだった。

だが愛というスパイスのおかげで、背筋に脳に、そして子宮に電撃が走るほどの多幸感が溢れ、クールな女剣士の顔も声もダダ甘のメス媚び痴態へと作り替えられてゆく。

「イッて♥ イッてえっ♥ あたしと一緒にっ♥ おマンコでもチンポでも子宮でもイッてよおっシルヴァリアあぁっ!!♥♥」

「い、イッてるわっ♥ さつきからあなたにイカされまくってるのおおっ♥ おチンチンからも精液ぴゅーぴゅーって♥ し、子宮で飲むの幸せでイクの止まらないのよおおっ♥ も、もっとキスうう♥ キスしてえっ!♥」

「う、うんっ♥ ちゅーしながらドピュリ続けるねっ♥ んちゅっ♥ れろりよっ♥ んぷううう……っ♥」

バトルコスチュームの下半身を互いのドロドロ白濁粘液で汚しながら、可憐な唇をついばみ合うような百合キス……だが一見睦まじいそれは一滴でも多くのスケベ汁をキンタマから気持ちよく引きずり出すための、むせかえるほど濃厚な繁殖脳行為なのだ。

「はっ♥ はーっ♥ はぁあっ……♥ だ、出しちゃった……あたしほんとに、女の子の膣内で……っ♥」

ようやく、半勃ちのフタナリペニスがにゆるんっ♥ と名残惜しげに抜けた時。

目の前で力なく机にうつぶせになり、全身ぐっしより汗と雌フェロモンに濡れたシルヴァリアのむっちり尻駄肉の股間部分……激しい行為で充血した割れ目の内側から、ゴポッ♥ と黄ばんだゼリーが盛り上がってくるのをスターティアは見た。

（あ、あたしの精液だ……っ♥ あの気持ちいいおマンコのカカに、あたしがヒリ出したあんなに濃いドピュリミルクがぎゅうぎゅうに詰め込まれちゃってるんだあ……ッ♥）
どくん、と高鳴る胸にわき上がってきたのは、後悔でも、申し訳なさでもなかった。

極上のメスに遺伝子をぶち込んだ征服の悦びと、童貞を捨てたオス特有の今なら何もかもうまくいくという万能感。

「し……シルヴァリア、安心して……！ これで裕美香を助け出したら、次はあなたを——！」

「す、スターティア……？ あなた、何をっ……んむうう!!♥」

困惑する女剣士の息も絶え絶えの唇が、今度はスターティアからの強引なキスで奪われた。

そのまま抱きつかれ、密着する尻肉に当たる聖光剣姫チンポがみるみる再充血していく感触に、思わずビクッと身をすくめるシルヴァリア。

「ぷはっ……♥ ぜ、絶対！ 絶対あなたもあいつの手から助け出してみせるんだから！ オブシディアは、あたしが倒す——ううん」

輝く唾液の糸を引いて離れた唇から、スターティアが次に放った言葉は、シルヴァリアすら戦慄させるものだった。

「いつそ殺してでも……っ！ 絶対に！」

「っっ!？」

かつてないほど暗い瞳で宣言するスターティアの表情は一瞬、正義の変身ヒロインのそれとも、無邪気な少女のものともかけ離れていた。

その瞬間、黄金の輝きを飾るスタージュエルに闇色の影がさしたように見えたのは錯覚だったのだろうか、それとも。

そして——これまでなら、そんな彼女の暗黒面にすら堕ちかねない暴走に『目を覚ましなさい』と喝を入れただろうシルヴァリアも。

「スターティア……っ！ あなたが、そうしてくれるなら……っ♥」

潤んだ瞳で、聖光剣姫の危うい決意を逆に肯定していた。

そう、彼女はわかってしまったのだ。

スターティアが自分をメスとして勝ち取り孕ませるために、チンポの競合相手である敵

——オブシディアに殺意にまで高まった嫉妬心と競争欲を抱いてくれたのだと。

そしてそれが、一人の女である自分にとって紛れもない幸せであると……！

「うん、うんっ♥ だから、まだするよっ♥ いっぱいセックスしちゃうよおっ♥ んっ……はああうつつ♥」

「あ……あああつつ♥ す、スターティアのがまた、入って……くるうつつ♥」

夕暮れの教室で、コスチュームを淫臭と淫液に包んだ二人のバトルヒロインは、再びフタナリチンポでハメ穴をかき回すドスケベ繁殖セックスの二回戦目へと没頭してゆく。

かくして、今や正義や友情のためだけでなく、はつきりと自覚したみずからの欲望のために勝利を誓った聖光剣姫。

彼女がオブシディアに打ち勝ったとして、それは本当に『正義のヒロインの勝利』なのか——今となつては、もう誰にもわからない……。

* * *

「くくくっ……くははははっ、あーっはっはっはっはっはあっ!! これよこれこれッ、私はこれが見たかったのよおっ！」

シャドーマテリアル要塞——モニターでふたなり少女たちのラブラブ痴態を鑑賞しつつ、オブシディアは情欲にギラついた瞳で心底楽しそうに笑った。

その足元には、股間から超濃厚精液をゴツゴツ逆流させた女怪人たちが何人も横たわり、気絶したり息も絶え絶えの余韻に浸ったりしている。

興奮した女幹部の手で次々と取っ替え引っ替え、肉オナホとして使われたのだ。

「最高よお、時間をかけて仕込んだだけのかいはあったわあ……あのスターティアが、いい子ぶった正義のヒロインちゃんがついに——！ 私に卑しい殺意を向けてくれるようになったなんてっ！」

スターティアが『オブシディアを殺してでも』と口にした時の昂揚ときたら、思わずオスとメスの部分で同時絶頂に達してしまったほどだ。

悪の幹部として対峙した時、彼女はスターティアにとって倒すべき敵の一人にすぎなかった。

ふたなり調教が始まったあとも、嫌悪こそあれ、口に出すほどはつきりと殺意を向けられたわけではない。

だが今、かつて純真だった少女が、ドロドロした醜い感情を、他の誰でもない自分に向けている——その事実が、この上なくオブシディアを昂ぶらせた。

なぜなら……それほどまでに強烈な感情とは、愛の裏返しとなるほどに強い執着に他ならないからだ。

「私はついに、あなたの心に決定的な黒いシミを刻むことができた——私という存在をねえ！」

ねばつく混合粘液にまみれたオブシディアのチンポが天を突き、嬉しそうに先走りを噴き始めた。

さつきまで貫いていた肉穴など、何人いようがどうでもいい性処理オモチャにすぎない。シルヴァリアすら、上等だけの肉玩具——彼女が真に貫きたいのは、大事に大事にとつておいたあのみずみずしい肉体なのだから。

「待ってなさい、憎くて愛しいスターティア……これからが本当の調教の始まりよお……！ 刻んでやるわ、ドスケベ調教でドロドロになったその体に、淫欲の炎にあぶられてグズグズに黒ずんだその心に！ この私——黒曜の〃オブシディアの全存在をねえ！」

堂々たる仁王立ちで、はち切れんばかりのド級チンポをビンビンに反り返らせながら……欲望と歪んだ執着に狂った悪の女幹部は、高らかに宣言するのだった——。

外伝 二人の美少女戦士、正義の電車内ダブルチンポバトル！

早朝——この時間の電車内は、通学中の聖碩女学院生たちで事実上の貸し切り状態だ。甘酸っぱい思春期の香りで満ちた華やかな車内に、男の姿は一人もない。

だが、いつもなら思い思いに学校までの楽しいひと時を過ごしているはずの女生徒たちの顔は今、恐怖に凍り付いていた。

「くくくつ……ごきげんよう、可愛い生徒さんたち♥ 私の名はオブシディア……ニユースとかで知ってるかもしれないけど、悪の組織シャドーマテリアルの大幹部ってやつよ」
「ひ、ひっ……！」

「あ……ああ……っ！」

車両の真ん中に仁王立ちし、煽情的なコスチュームで爆乳を揺らす銀髪の女幹部。

いきなり出現した彼女に、戦う力を持たない女生徒たちはまさに蛇に睨まれたカエルだ。いや、逃げ出そうとしても隣の車両に繋がるドアは謎めいた力で閉ざされ、びくともしなかった。

「さてと、さっそくだけどあなたたちは私がシャドーマテリアル要塞に連れ帰って、怪人

の材料とか個人的な慰みものとかにしちゃうわあ ♡ 今日この場にいた不幸を呪うことねえ……♡」

「そ、そんなっ……た、助けてえっ！」

と、絶望に染まる女生徒たちの中から、一人の少女が進み出た。

染めた金髪がお嬢様然とした周囲とは異彩を放つ、御陵涼子だ。今日は寝坊して、仲のよい友人とはズレた時間に一人で乗っていたのである。

「あらあ？ あなたは私が怖くないのかしらあ？」

「こ、怖いもんかよ！ お前なんか……スターティア様がすぐにやってきて、ぶっ倒してくれるぜ！」

足を震わせながらも、オブシディアの余裕顔をキッと睨んで敬愛する変身ヒロインの名前を出す涼子。

「ふうん……なるほどねえ、噂をすれば影、つてところかしら」

「え……？」

女幹部の目がスッと細められ、次の瞬間、彼女が出現した時と同様に空間が歪んだかと思うと、凜とした声が車内に響いた。

「そ……そこまでよ、オブシディア！」

「あらあ、やつと来たのねスターティア♥ 待ちくたびれちゃったわあ、それに——シルヴァリア、あなたまで」

「く……っ」

スターティアに続いてどこからともなく現れたのは、黒髪をなびかせた仮面の魔剣士。彼女はスターティアと共闘するように並び、オブシディアと対峙した。

「す、スターティア様あ！ それにあれば……もしかしてスターティア様の仲間？ すっげえ！」

かつて自分を助けてくれた憧れのヒロインと、謎の新たな助っ人らしき人物の登場にはしゃぐ涼子。

周囲の女生徒たちも、これで助かると口々に歓声をあげた。

——だが。

「くくくっ♥ あらあらあ、どうしたのおヒロインさんたち♥ いつもの生意気なくらい堂々とした態度と違って、ずいぶんと縮こまって体を隠してるように見えるけどお……？♥」

「くうう……！ い、今更何を！」

「お、オブシディア、貴様あ……ッ！」

二対一なのに不自然なほど余裕を崩さないオブシディア、そして逆に様子がおかしいヒロインたち。

「なんだ……？ どうしちゃったんだよスターティア様っ、相手は隙だらけだぜっ!?」
いつまでたつても攻撃しようとしないうその様子に、涼子も他の女生徒たちも困惑気味だ。
そう——彼女たちは、認識歪曲によって気付けないのだ。

今、スターティアとシルヴァリアが本当はどんな姿をしているかを。

（うう……！ こんなバカみたいな格好で無理矢理っ……！）

（下らない茶番をやらせるなんて、いつもながらなんてゲスすぎる発想……ッ！）
当事者たる三人にだけは見えていた。

まず、二人のコスチュームは胸カップの部分を取り外され、乳房をあられもなく露出する改造を施されているのだ。

さらにスターティアの美乳には『正』『義』シルヴァリア側の巨乳には『駄』『肉』と、筆文字でデカデカと辱める文字が書かれている。

そしてヘソあたりから下腹部にかけても隠すものが取り払われ、『シコ猿』『粗チン』と大書された文字が矢印で示す先で、露出したチンポとキンタマが電車の揺れに合わせてぶらぶらしていた。

こんな姿で人前に出るだけで羞恥で自殺したくなるような、間拔けで下品な最低の痴態である。

「ほらほらあ、何固まってんのよ二人とも♥ それじゃ観客が退屈しちゃうでしょ、もつと堂々おっぴろげてサービスなさいよお♥ あははははっ！」

愉快そうな女幹部の馬鹿笑いに、ぎり、と唇を噛むしかない二人。

これは最初から、オブシディアがセッティングした公開露出調教だ。スターティアたちは言われた通りに現れたにすぎない。

聖光剣姫が童貞を捨てたあの日以来——裕美香は解放できたものの、事実上シルヴァリアとスターティアにとって互いが互いの人質だった。

オブシディアが新たに命じる理不尽な調教に耐え、チャンスがうかがうしかない。今日のこれも、その一環たる女幹部の新たな遊戯なのだ。

そして、この先の『台本』ではもっと屈辱的な行為をしなくてはならないのである。

「し、仕方がない……！ やるぞ、スターティア」

「え!? で、でも——っ」

固唾を吞んでこちらを見守る涼子の視線を意識し、躊躇するスターティア。

だが、迷っている暇はなかった。ここで言う通りにしなければ、女生徒たちを餌食にす

るとオブシディアにあらかじめ宣言されているのだ。

「わ、わかったわ……か、覚悟しなさい、オブシディア！」

「我ら二人の、この刃で……き、貴様を成敗してくれるッ！」

言葉に反して、二大美少女戦士が手に握ったのは剣ではない。

ぶるんッ、ぼろん……♡ と外気に晒された、羞恥と緊張で半勃起状態のフタナリチンポだ。

「あらあコワ〜い♡ 私、ダブル正義チンポで退治されちゃうのねえ♡ でもお、そう簡単には負けないわよお♡」

おかしそうにくすくす笑いながら、オブシディアはガニ股ポーズで跪くと、震えながら突き出された巨根と短小包茎とを手慣れた指で握ってシゴき始めた。

「くっ……ふああっ♡ ゆ、指の刺激があ……っ♡」

「うっ、うあっ♡ し……シコられるうう……ッ♡」

女幹部の巧みな指刺激で、むくむくとフル勃起してゆくWヒロインチンポ。

背筋を反らせながらおぞましい快楽に耐える二人だが、お嬢様生徒たちは別の光景を見ていた。

「私たちを守るために、スターティア様が剣を振りかざして悪人と戦ってるわ！」

「もう一人の美しい方も……が、頑張ってくださいませっ！」

真剣に応援する彼女らの目には、認識歪曲によって眼前の淫らは光景は変身ヒロインの崇高な正義のバトルに映っているのだ。

「ほおーら、どーお二人とも？ 悪のシコシコ攻撃は♥ あっさりチンポソードからカウパー漏らしちゃって、ひよつとしてもう負けちゃうのおー？♥」

「くううっ……♥ こ、こんなものっ、おぞましいだけだっ……♥」

「し、シルヴァリアの言う通りよっ♥ こ、このくらいで絶対に負けたりしないんだからあっ♥」

ヒロインとしての誇りそのものを辱める公開羞恥行為に、必死に反発する二人だったが――。

「あっそ、じゃあこれならどうかしらあ♥ このぽっかり開いたバキュームホールでえ……おしゃぶり攻撃いいーっ♥」

「な……!? 待っ——はおおおッッ!?♥♥」

情けないアヘり声をあげ、仮面の女剣士がビクンッとのけぞった。

唾液の銀糸を引いてイヤらしく開いた悪のピンク色リップホールが、にゆるりんッ♥とザコ弱チンチンをくわえ込んで甘しゃぶりを始めたのだ。

「し、シルヴァリア!!」

「んっぷ♥ にゅっぷ♥ ちゅるるんっ♥ ぷりゅんっ♥」

「ひッ、ひううう!!♥ し、舌があっ……にゅるにゅるからんでくるウウ!!♥ あひい
いいッッ!!♥」

がくがくと美脚を震わせ、唇マンコのもたらす未体験快楽に敏感包茎があっさり陥落暴
発しそうになるのを慌てて耐えるシルヴァリア。

「っぷあ♥ くくくっ、白銀の魔剣士サマったら意外とだらしないじゃない?♥ 自慢
の剣もお、ずいぶんとちっちゃくて弱そうだし?」

「そ、そんなことないぜっ!」

嘲り笑う女幹部に、ギャラリーの中から反論したのは涼子だ。

「確かに小さめの剣かもしれないけど、そのぶん小回りがきいて素早そうだぜ! なあ、
みんな?」

「え……ええ、その通りですわ!」

「頑張っつて、小さい方の剣の人!」

短小チンチンを期待の視線で見つめながら応援する彼女たちは真剣そのものだ。今は二
人のペニスをまともな武器と錯覚しているから無理もない。

「ぷ、ぷぷっ……だそうよシルヴァリア、いえ『小さい方の早い剣の人』——あははははっ！♥」

「う、うう……くッ！」

さすがにこらえきれず噴き出すオブシディア、顔を真っ赤にして屈辱にふるふる肩とキンタマを震わせるシルヴァリア。あまりにも哀れな仕打ちであった。

「あゝおかしい、これだから認識歪曲って最高ね♥ ……って、さっきから物欲しげに亀頭揺らしてるスターティアの方もそろそろ『攻撃』しないとね♥」

「え!? ……だ、誰が物欲しいとかっ……ひいいうっつ!?♥♥ お、おクチ攻撃きたああっつ!?♥」

今度はスターティアの、相方に比べて長大で立派なデカチンポをぬっぽりくわえてヌキしゃぶり攻撃をかける外道女幹部。

「んぶっ♥ ぬぶぷっ♥ にゆるぶっ……ぷはああ♥ これはなかなか、さっきまでの短小ナイフと違ってシゴきがいのあるバスターチンポソードだわあ♥」

黒ルージュの唇から真紅の舌をハミ出させつつ、変身ヒロインのスカートから雄々しく反り返ったスケベ勃起を唾液と粘膜で磨きあげる女幹部。

りゅっ♥ んりゅっ♥ と弾力質のシコリ音をたてて派手に銀髪が前後するたび、ビッ



シリ血管の浮き出た太い幹が唇の中から出現するのが恐ろしく卑猥だ。

「シルヴァリアって人が小回りとスピード重視なら、スターティア様は重さとパワーってとこか——ど、どっちも頑張れっ！」

（う、うああっ♥ りよ、涼子にチンポサイズ比べられちゃってるよお、あたしっ!?!♥）

（く、くうう……！ 女の子たちから間接的にバカにされるなんて……こ、この屈辱っ……!?!♥）

下品改造コスチュームでふたなりチンポを弄ばれ、味比べされ、あまつさえそれを純真な瞳で応援される二重の羞恥に、耳まで真っ赤に染まるWヒロイン。

そのザマを心底楽しみつつ、オブシディアは二本のテカった美少女サオを交互に激しくしゃぶりあげる。

「ほくらほらっ♥ 声援を受けた正義のヒロイン様は無敵なんですよ〜?♥ もっとチンポに気合入れてガマンしてみなさいよお♥ んじゅっ♥ んじゅぶぽっ!♥」

「ひゃああんああっ♥ や、やああっそうよガマンっ♥ ガマンするのおおっ!♥」

「あぐっ、ひぐううつつ!?!♥ そ、そうだこの程度でえ……っ♥ ま、負けなヒイイツッ!♥」

金と黒の美髪を振り乱し、情けないアヘりボイスで暴発をこらえる二人。

彼女たちが必死になるのには理由があった。

(も、もしあたしが先に射精しちゃったらあっ♡ シルヴァリアがひどい目に遭わされちゃうっ……だ、だからガマンしなきゃああっ!♡)

(そ……そうよ、私が精液を漏らすわけにはっ……スターティアが、優姫を守るためには……た、耐えてみせるッ!♡)

彼女たちはそれぞれ、あらかじめ一対一でオブシディアから『先に射精した場合のペナルティ』をこっそり伝えられていた。

それはスターティアが発射すればシルヴァリアに、シルヴァリアが漏らせばスターティアにさらなる外道調教を喰らわせるという悪辣な宣告だ。

こうして互いが互いを守るため、バトルヒロインたちは必死の射精我慢勝負を強いられるのである。

だがしかし、女幹部の百戦錬磨の口撃は恐るべきものだった。

「おっ♡ んおおっ♡ うひいっチンポがっ♡ チンポがオブシディアのクチまんこでぬぼぬぼコかれるっ♡ き、キンタマの中身引っこ抜かれちゃうよおお!!♡」

ドスケベにすぼまったひよつとこ変形フェイスが、スターティアのビンビン棒をよだれが泡立つほどの豪快唇ピストンでシゴき抜いたかと思えば。

「んあはアッ♥ あおおおお……か、皮の中がクチュクチュこちよこちよされるううッ♥ 舌が入ってきてクチュられるウウ!!♥」

間髪入れず今度はシルヴァリアの包皮内に長舌がネロネロと侵入し、軟体動物めいた動きで早漏敏感粘膜をねぶり回す。

「ぴ、ピンチになってるみたい……!」

「くそっ、頑張れスターティア様あ！ シルヴァリアさんも！ 悪の攻撃になんか負けないでっ!」

「え、ええっ♥ が、がんば……りゅうううつつ♥」

「そ、そうだあっ♥ スターティアの前でっ、誇りにかけて無様な姿は見せられるものかああ……っ♥」

今にもドピュリそうな情けない声を漏らす二人を、剣を用いた戦いで劣勢にあると認識した女生徒たちの必死の声援が飛ぶ。

彼女らを、そして互いを守るため、ぶら下がったキンタマに力を入れて射精欲に耐える両者だったが、

「ぷは……っ♥ うーん、ギャラリーが応援ばっかりつてのも芸がないわねえ。こうやって変化をつけちゃいましょうか——♥」

オブシディアの額の黒曜石が妖しく輝くと、突然、何人かの女生徒たちの表情が一変した。

「え……？ う、うそッ、何あれ!？」

「な、なんであんな格好で——へ、変態いい!？」

突如、赤面して目や口を押さえ、羞恥と軽蔑と恐怖の視線をヒロイン二人に向け出す一部の女生徒たち。

「ッッ!? こ、これって……!？」

「くくっ、そうよお認識歪曲の部分解除お♥ あのコたちにだけはあんたらの本当の姿が見えてるってわくけっ♥」

「な……ッ!？」

それはつまり、恥知らずなスケベコスも体の卑猥な落書きも、そして外にほり出した裸チンポを女幹部に快楽肉責めされる光景も——正義のヒロインに本来あつてはならないすべてが、はつきり見られてしまっているということだ。

「な、なんであんな汚いものを生やして、悪の組織相手にあんなことを……っ」

「スターティアって正義のヒロインじゃなかったの？ ひ、ひどい……!？」

ドン引きしてひそひそと囁き合う一部の女生徒たち……ギャラリーの認識がごまかされ

ているのが不幸中の幸いとどこか油断していた二人の頭にカッと血が上り、比較にならないほどの絶望的羞恥が満ちた。

「ち、違うのっ——こ、これはあっ!!♥」

「みつ、見るなああっ!!♥ うああああ!!♥」

思わず腰を引いて逃げようとする二人だったが、そんな浅知恵はお見通しのオブシディアン。

ぱつくんっ……♥ と、二人のキンタマをまとめて口腔に含み、人質ならぬタマ質にとつてしまう。

「ひっひひひひ!!♥ おおんおおお……た、タマタマまでえええ!!♥ やっ、みつ見られてるのにそんなとこねぶっちゃダメへえええ!!♥」

「んぎいいい……!!♥ んおおッ♥ こ、転がされるウウウ!!♥ す、スターティアのまとめてコリュコリュつてえええ!!♥」

温かい口の中で仲よくタマをこすり合わせ、互いの精巢をまるで手のひらでクルミを転がすようにして練り合わせる女幹部。

そんな下品奉仕ではしたなくあえぎ、よだれすら垂らす姿を、認識歪曲を解かれた何人かの女生徒たちは呆然として、あるいは冷めた目で見つめている。

「あらあらあ、痴漢以下の汚物として見られちゃってるわよおあなたたち♥ なのにこんなにキンタマばんばん、サオもビン勃ち♥ 女の子に貶まれて興奮するドスケベマゾヒロインなのかしらあ?♥」

「そ、そんなわけないっ……こ、これはあなたにムリヤリ強制されてこうなってるだけでええっ♥ お……おほおおっ♥」

「そっそうッ♥ た、ただの生理的反射だッ……だ、だから誤解しな——いひへえええっっ!!♥」

なおも続くオブシディアのドしゃぶり猛攻に、肉棒も乳首もビンビンにしてアへり狂うスターティアとシルヴァリアの言葉に、説得力など欠片もなかった。

認識歪曲をまだ解かれていない涼子たちは相変わらぬ声援を飛ばしてくれているが、それも今となつては滑稽さとみじめさを加速させるだけだ。

ならばあととせめて、お互いだけはさらなる陵辱から守るためにと必死で射精感をこらえる生き恥ダブルヒロインだったが……。

（んふふっ、かろうじて我慢できてるのは私が手加減してるからにすぎないってこと、氣付いてないようねえ♥ こうやって限界まで高めて、最高に情けなくて気持ちイイ爆射を噴かせてやるわよオ……♥）

そう、オブシディアは少女たちの射精の前兆を感じ取るたび、それと気付かれないように巧みに攻撃の手を緩めて『調整』していたのだ。

二大ヒロインが冷たい視線に耐えつつどれほど懸命にこらえようとも、最初から外道女幹部の手のひらで転がされる身の程知らずの敗北確定チンポにすぎないのだ。

約束された生き恥大噴射のために、キンタマ内で我慢ザーメンをにゆるにゆる練って熟成させるだけのむなしい抵抗。

そしていよいよ——無防備な改造コスチューム姿へとトドメの一撃がもたらされようとしていた。

「がッ♥ 我慢っ♥ 我慢をおおッ♥ がまッ……んおおほおおッツツ!!?♥♥」

「し、シルヴァリアどうしたのっ!？」

かつてない嬌声でのけぞった黒髪魔剣士のキンタマの裏——チンポ快楽でヌルヌルに濡れたマンコへと、オブシディアの指二本が挿入されたのだ。

「はーい、そしてあんたは……こっち♥」

「えっ——んぎっ!?!♥♥ なッ、そ、そこお尻ッ……ひいいッひほおおオオおうう!!!♥♥」

一方スターティアには、可愛らしいアナルのすばまりめがけ唾液ローションをまぶした細い指一本がズブズブと襲い掛かった。

しゃぶられつつ前立腺をクチュクチュとイジられる禁断の魔快樂に、涼子が聞いているのも忘れて獣のごとき絶叫が上がる。

「だめっ♥　だめッ♥　ダメッ♥　これ駄目ええええッッ!!♥♥　うそうそウソッ、どっぴゅん射精スイッチ無理矢理押されるううう!!♥♥」

「りよ、両方なんてガマンできるわけないイイイッッ!!♥♥　こ、こみあげるうう!!♥♥　タマから汚いドロネバ汁が昇ってくるウウウ!!♥♥」

Wヒロインチンポをまとめて口内粘膜に捉え、口の中にゆりんにゆりんコスリ合わせるドスケベ輪フェラテクと、敏感なメス弱点への容赦ないほじくり攻撃の合わせ技――さつきまでですらギリギリだった射精堤防は、本気の搾精フィニッシュにあっさりと決壊した。

「はぁいギャラリーの皆さんご注目うー♥　今からキメちゃうのはスターティアとシルヴァリアのお……大敗北ぶっ放しダブル射精ええいっつ!♥」

「やだっ♥　やだっやだやだああっ!!♥　ひいいい止まってお願いチンポ汁昇るの止まってええええ!!♥♥」

「こ、こんなああ!!♥　かつ下半身に力が入らないッ、漏れる漏れる射精漏れりゅううううッッ!!♥　……おおおんほおおお!!♥♥」

——どびゆりゆるるるるッッ!!♥♥♥ びゆるんぶぶりゆんつつ!!♥♥♥

どぷどぶつぴゅ!♥ びゆくッんぴゆくんつつ!♥ びゆっぱぶぱあっ!!♥♥♥

「はうひッ!!♥♥♥ んふっひいひいゝゝゝ!!♥♥♥ やああ出てるっ♥♥ お外でっ

♥♥ 電車でつつ♥♥ みんなの前でええっ♥♥ あたしフタナリザーメンどん噴^ふいちやつてる
よおおおお!!♥♥♥」

「おおおヒィッッ!!♥♥♥ あああウソッこんなこんなああああ!!!♥♥♥ 負けっ♥♥♥ 負
け射精噴くっ♥♥♥ 敗北汁噴きこぼれるウウウ!!♥♥♥ ほっへ♥♥♥ おお♥♥♥ ひいッほへえ
え……ッ♥♥」

同時に勢いよく噴射され、空中で白い軌跡をクロスさせた美少女ザーメン帯が仲よくビ
ュルンビュルン踊りつつ、女幹部の顔やら髪やら、互いのコスチュームにまで臭くネバッ
こいぷるぷる繁殖オス汁痕を刻んでいく。

「あはッ噴いた噴いたあ♥♥♥ すっごおゝいつ♥♥♥ ああんっ、正義のびゆるびゆるザーメン
でぶちのめされちゃうゝゝゝつつ♥♥♥ あはああんっ、ダブルヒロイン合体スケベビーム
で私の悪いお顔もつと清めて浄化してええゝゝゝつつ!!♥♥♥」

射出の最中も休まずケツ穴とマゾマンコをいじくり、前立腺を肉マッサージして大量射
精をアシストする女幹部の淫らな指先。



心底バカにした嘲り顔でザーメンを浴びながら、言葉の追い打ちでさらなる敗北を刻み込むのだ。

「す、すげえ……なんだかわかんないけど、スターティア様たちの必殺技が決まったみたいだぜ！」

「悪人が怯んで、敗北を認めているわ！ か、勝ったんですね！」

状況が理解できないまま、困惑交じりの歓声をあげる涼子を始めとした認識歪曲継続中の女生徒たち。

一方、それが解除された少数の方はというと。

「ひっ、ひいいい!! な、なんなのあの人たち、汚いものを次々噴き出してますわああ!!」

「う、うわああ……! ほ、本当にこんな場所でイッちゃってる……さ、最低……ッ」

「くっ臭いいい……!! 生臭いニオイがここまで漂ってきて……うえええっ！」

下品改造コスで情けなくフタナリ射精をキメるヒロイン失格の痴態に、悪の女幹部よりよほどおぞましいものを見るかのような視線が痛い。

「んはああああ……っ♥ ほ、ほおおお……っ♥」

脱力してブザマにケツ肉を突き出し這いつくばりつつ、悔し涙すら浮かべて絶望的射精の余韻にあえぐシルヴァリアには、もはや情けないチンチンを隠す余裕もなかった。

「はああ♥ はううう……そ、そうよお安心して涼子お……っ♥ せ、聖光劍姫スターテ
イアはっ……む、無敵なんだからああ……ッ♥」

片や、ガクつく腰でなおも半萎えポコチンをピクつかせながら、正義のフタナリ変身ヒ
ロインはトロけたアへ顔ピースで友人の声援に応えた。

いずれも、これから二人を待つであろうさらなるチンポ調教に、子宮とキンタマがどく
りと熱く高鳴るのを感じながら――。

あとがき

どうも、作者のあろまーらです。普段は P i x i v やノクターンノベルズでふたなりものを中心に色々書いております。今回、こんなニツチな作品を書籍化したいというお話をもらった時は「マジですか」と思わず聞き返してしまいました。本作は思い返せば三年前……自分が読みたいふたなりヒロインものを欲望のまま、無計画に書き始めた不定期連載でした。一番書きたかった「ふたなり化した主人公がそのままの体で日常に戻され、少しずつチンポの欲望に負けて墮落していく」という部分を優先するあまり構成のバランスが悪いなどの問題も多々ありますが、ご容赦くださいませ……！（今回の書籍化にあたり、あちこち修正や加筆を入れています）

最後にこの場をお借りして、素晴らしいドスケベイラストを描いて下さった 8000 先生、この作品に影響を受けたと言ってくださった『変幻装姫シャインミラージュ』のいいーと先生や『天煌聖姫ヴァーミリオン』の有機企画先生、そして敬愛するふたなり界の大家・火田先生に厚く御礼申し上げます。感謝！（びゅるびゅる）

二次元ドリームノベルズ407

聖光剣姫スターティア

女幹部にふたなり調教される変身ヒロイン
【電子書籍版】

著 者
あろまーら

装 丁
マイクロハウス

発 行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル1F
●編集部TEL.03-3551-6147 / FAX.03-3551-6146
●販売部TEL.03-3555-3431 / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Unal 2017
当ファイルは、二次元ドリームノベルズ『聖光剣姫スターティア 女幹部にふたなり調教される変身ヒロイン』
(2017年9月30日 初版発行) に基づいて作成しております。

<http://ktcom.jp/>

本作品のご意見、ご感想をお待ちしております

本作品のご意見、ご感想、読んでみたいお話、ジャンルなど
どしどしお書きください！ 読者の皆様の声を参考にさせていただきたいと思います。
手紙・ハガキの場合は裏面に作品タイトルを明記の上、お寄せください。

◎アンケートフォーム◎ **<http://ktcom.jp/goiken/>**

◎手紙・ハガキの宛先◎
〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
(株)キルタイムコミュニケーション 二次元ドリームノベルズ感想係



ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義感に燃える少女達をたっぷり陵辱! ヒロインのピンチ満載!!

【偶数月】
隔月発売
2・4・6・8・10・12月

【奇数月】
隔月発売
1・3・5・7・9・11月

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月
発売!



二次元
**ドリーム
マガジン**
2D DREAM MAGAZINE

COMIC
UNREAL
アバウト

正義の
ヒロイン
**姦獄
ファイル**
Justice Heroine Prisoner File



あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌

全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中

二次元ドリームノベルズ

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル！

女刑事美優
——機関は白銀の義体で——

リアルドリーム文庫

あとみつく文庫

呪詛喰らい師

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

二次元ぷち文庫

ハルキ

あの人気作品の
外伝作品もあり！
電子書籍でしか読めないエッチノベル！

姫騎士 クラスメート！

ビギニングノベルズ

「小説家になろう」の男性向けサイト
「ノクターンノベルズ」
から書籍化！

異世界で
デキる妹は
イケメンですか？

ドキドキラブラブな
ハーレム系
ライトノベル！

二次元ドリーム文庫

S T O R Y

悪の組織シャドーマテリアルと日々戦う正義の変身ヒロイン・聖光剣姫スターティア。そんな彼女に妖艶なる女幹部オブシディアの卑劣な魔の手が伸びる。親友を人質に取られ、人体改造されたスターティアは淫悦のふたなりプレイを強いられてしまう。そして、彼女の好敵手である魔剣士シルヴァリアもまた……。果たして彼女たちは苛辣なフタナリ調教地獄から逃れることができるのか!?

